

福島県文化財センター白河館 研究紀要

第18号

- 阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討
－上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して－
沼沢火山噴火の影響からみる縄文時代前期末葉と中期初頭の遺跡分布
福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）－会津地方－
まほろん文化財研修と文化財行政の現状
高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望－常設展示 みんなの研究ひろば－
今後のまほろんの団体利用について－小学校を中心に－
楢葉町馬場前遺跡採集資料の紹介－山内幹夫コレクション－
須賀川市高木遺跡の概要と出土金属製品について
福島県文化財センター白河館収蔵資料の紹介－楢葉町鍛冶屋遺跡出土 和鏡－
材質調査の成果（I）－資料の蛍光X線分析結果報告－

早瀬 亮介	1
三浦 武司	21
笠井 崇吉	37
山元 出 大山 孝正	69
三浦 武司	75
廣川 紀子	81
山内 幹夫 門脇 秀典	
三浦 武司	87
鶴見 諒平	103
阿部 知己	107
中尾 真梨子	109

公益財団法人福島県文化振興財団

序文

2001年に開館した福島県文化財センター白河館は、今年で19年目を迎えます。この間、研究紀要是、東日本大震災の起きた2011年に中断したもの、毎年継続発行し、本号で18冊目となりました。

ところで、『研究紀要』の表題につきましては、これまで実際の事業年度を西暦で付してまいりましたが、発行年との混同を解消すべく、この度『研究紀要 第18号』のように号数を表示することといたしました。

今回の研究紀要には、5か年にわたり当館とともに放射性炭素年代測定研究に協力いただいた（株）加速器分析研究所の早瀬亮介氏の論文を巻頭に、昨年度の企画展「はま・なか・あいづ再生史」及び「白河市天王山遺跡の時代」に関する論文を2編、最近の文化財保護法や学習指導要領の改定等をふまえて実施した研修・教育普及・展示業務等に関する博物館学的報告を3編、本館収蔵資料の再検討報告を3編、そして檜葉町馬場前遺跡の発掘調査成果を補完する個人蔵資料についての調査報告を1編収載しています。

これからも本館は、福島県を中心に、歴史と文化に関する日ごろの研究成果を広く発信し、文化財を通じた地域づくりに貢献していきたいと考えております。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

2020年3月吉日

公益財団法人福島県文化振興財団
福島県文化財センター白河館
館長 菊池 徹夫

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

早瀬 亮介

(株式会社加速器分析研究所取締役)

要 旨

阿武隈山地周辺における縄文土器の編年では、早期末葉から前期初頭に大畠G式、日向前B式、花積下層式が位置づけられている。大畠G式が古く、日向前B式が新しいとする見方が主流であったが、地域差とする見方もあり、また広野町上田郷VI遺跡ではその捉え方とは異なる出土状況が指摘されていた。さらに近年実施されたまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定は従来の見方に再考を促すものだった。本稿では、上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の年代測定結果を中心に関連する遺跡の土器を比較検討した。その結果、大畠G式、日向前B式とされる土器群には各々複数のグループがあり、年代差が認められること、2つの型式には併存する期間があること、さらに一部は花積下層式とも併存する可能性が示された。土器群の比較検討はなお不十分であり、今後土器の変遷を具体的に明らかにする必要がある。

キーワード

縄文土器 編年 大畠G式 日向前B式 花積下層式 放射性炭素年代測定

1 はじめに

福島県文化財センター白河館まほろんでは、平成26～30年度にかけて収蔵資料(土器付着炭化物)の放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比分析を行い、筆者はその受託分析機関の所属員として分析や結果の検討に関わる機会を得た。分析結果は実施年度ごとにまほろんの研究紀要に公表された((公財)福島県文化振興財団・(株)加速器分析研究所2016など)。また、測定対象となった土器の時期ごとに分析結果に対する検討も加えられ(三浦2016など)、最終年度には総括報告がまとめられた(三浦・(株)加速器分析研究所2019)。160点に及ぶ試料の測定により、多くの成果や様々な課題が指摘されたが、その中でも縄文時代早期末葉・前期初頭の土器編年と年代測定結果とのあり方が大きな課題として注目された。筆者はこれまで縄文時代前期の土器を研究してきたこともあり、この課題についてまほろんで講演する機会を与えられた(令和元年度まほろん文化財講演会、6月22日開催、企画展「時を測る」関連)。本稿はその講演内容をもとにしている。講演は一般市民も対象としていたため、概説的なまとめ方となつたが、本稿ではあらためて研究史を踏まえて現状と課題を整理した上で、上田郷VI遺跡第II群土器を中心に関連する土器群とその年代測定結果も比較検討し、阿武隈山地周辺における縄文

時代早期末葉・前期初頭の土器とその年代について考察する。

2 研究史と課題の整理

(1) 早期末葉・前期初頭土器編年の研究史

①阿武隈山地周辺における研究の開始まで(1960年代まで)

早期末葉・前期初頭縄文土器の研究は、日本における最古の土器が追求される中で調査・研究が進められた。山内清男は関東・東北地方における縄文土器の研究において、各地域で出土した縄文土器の特徴を明らかにするとともに、層位に基づいてそれらが縄文を含まない土器より古いことを指摘し(山内1929)、さらに追加の文献で各地の主要な遺跡の調査状況等を報告した(山内1930など)。山内をはじめとして各地の研究者によって進められたこれらの研究成果は、山内によって編年表にまとめられ、縄文時代早期から晩期の5大別という枠組みとともに示された(山内1937)。早期と前期の境界は、関東地方の茅山式と花積下層式の間、陸前地方の楢木2と室浜式の間に置かれている。

その後、関東地方では横須賀周辺の遺跡群の調査を中心に茅山式の細別、さらに東海・近畿地方の研究の進展で茅山式以後前期初頭までにいくつかの土器群の存在が想定された。それらの土器群は1970

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

年代までに打越式、神ノ木台式、下吉井式などの型式として変遷が捉えられていく。

仙台湾周辺では、山内清男や伊東信雄らが研究を進め、素山貝塚、楓木(松崎)貝塚、船入島貝塚、上川名貝塚等の調査成果をもとに伊東が編年を示した(伊東1957)。その後、林謙作がこの地域の資料を再検討し、関東地方の研究成果も参考しつつ、積極的に細別した編年案を提示した(林1965)。

阿武隈山地周辺の土器については、まず江坂輝弥がいわき市根本遺跡出土土器を早期後半の資料として紹介した(江坂1956)。この根本遺跡の土器を収集した永山亘は、類似した特徴を持ついわき市金坂遺跡の土器に着目し、第四回福島県考古学大会(1962年)において早期末の金坂式を提唱、その資料を福島県史第6巻で解説した(永山亘1964)。福島県史第6巻では、他に日向前遺跡B地点の土器(ここでは西堂ノ前遺跡と記載)など、この時期の重要な資料が紹介されている(福島県編1964)。続いて根本遺跡、金坂遺跡出土土器に類似した特徴を持ついわき市生木葉遺跡の土器を永山慎一が報告し、永山亘の了承を得て根本式と改称した(永山1966)。この金坂式、根本式は後に大畠G式とされる土器に近い特徴を持つ。

1960年代までに福島県内で得られた縄文土器の資料を中村五郎が検討し、その変遷を示した(中村1969)。この中で金坂遺跡の土器について、早期末ないし前期初頭と推定されると述べている。

②主要な土器群の提示と変遷観の検討(1970年代)

1970年代になると、各地の研究者が遺跡を精力的に踏査して収集された表採資料に加えて、開発に伴う発掘調査とその成果報告が本格化することで良好な資料の蓄積が進み、研究も進展した。

井上国雄は塙町南原遺跡や棚倉町日向前遺跡B地点など久慈川上流域の遺跡群で収集した早・前期を中心とする資料を提示し、主に関東地方の編年と対比する形で土器の変遷を考察した(井上1973・1977など)。井上(1977)は、南原遺跡の第6群土器について、a類(縦走縄文を地文とし平行沈線文の装飾を持つ。日向前遺跡B地点の『福島県史第6巻』に掲載された土器と同系統)が古く、b類(後述の大畠G式に類似)が新しい可能性を考えた。

中村五郎は岩越二郎、藤田定市が白河市周辺の遺跡で収集した資料を報告し、福島県南部で出土した縄文草創期から前期の土器の編年的位置づけを関東地方の編年と対比して示した(藤田・中村1979)。関東地方の茅山上層式以降、花積下層式前半までの土器として、上森屋段第1群土器(大畠G式)、日向前B遺跡出土土器などを挙げた。大畠G式は文様の構図が断片的に類似するとして花積下層式(前半)に併行する可能性を指摘し、日向前B遺跡出土土器などが後続するとした。

1970年代に報告されたこの時期の発掘調査資料としては、飯館村赤石沢遺跡、いわき市大畠貝塚、石川町上森屋段遺跡などがある。このうち、いわき市大畠貝塚では、G地点出土土器を標式に大畠G式が設定された(馬目ほか1975)。この地点では9ヶ所の土器密集地(住居跡の可能性が指摘されている)や土坑などが検出され、ほぼ1時期の一括資料として把握された。撫糸文、縄文、条痕、擦痕を地文とし、半截竹管の沈線文が施される纖維土器の特徴が詳細に検討された。編年的位置づけについては、関東や東北地方のこれまでに知られているどの土器型式とも異なる点が認められるが、口縁部の文様意匠の類似性から茅山上層式との関係を指摘し、早期末葉とした。また、類似する金坂式、根本式については、表採資料という制約もあり、大畠G式の一部が抽出されたものと考えた。

③主要な編年案の提示(1980～1990年代前半頃)

1980年代には中村五郎、山内幹夫、鈴鹿良一、佐藤典邦が編年案を示した。また、泉川遺跡、源平C遺跡、牡丹平遺跡、松ヶ平A遺跡、竹之内遺跡、龍門寺遺跡、青宮西遺跡など多くの重要な遺跡の資料が検討、報告された。また、この時期は関東や東北地方全体で資料の蓄積に伴い研究会も活発に開催され、広域での比較検討も進められた。以下、主要な研究について触れる。

中村五郎(1983)は、常世2式の編年位置づけを中心に、東北地方南部の早期後半の土器編年を論じた。この中で船入島下層式、早稻田5類などを早期終末とし、これに後続するのが大畠G式、次いで(仮称)日向前B期、その後に花積下層式を位置づけている。大畠G式は早稻田5類より新しいと考えられることから、前期初頭の可能性が高いとした。日

向前B期とされたのは、井上国雄(1977)が注目していた日向前遺跡B地点出土土器などに代表され、縦走縄文を地文とし、口縁に近い位置に沈線による横線、鋸歯文、連弧文、複合鋸歯文などの文様がめぐる尖底または丸底の纖維土器である。源平C遺跡の撫糸圧痕による連弧文の土器、長七谷地Ⅲ群Aa類も同時期とし、関東地方では高橋雄三の菊名下層式(1981)に併行する可能性を指摘した。また日向前B期の複合鋸歯文が幅を狭くして花積下層式の口縁部文様に引き継がれることを指摘している。

中村に相次いで山内幹夫(1983)は、須賀川市牡丹平遺跡で2群1類とした土器と関連し、器形や装飾などに共通点や系統関係が認められる土器群を比較して文様の系統的変遷を論じ、日向前B式を設定した。この型式に属する土器の形態、装飾等を詳細に説明し、口縁部文様の意匠構成には3つのグループを指摘した。第3のグループの上下に分かれた文様帶のうち、下段の文様が花積下層式の口縁部文様に引き継がれるという見解は中村(1983)と同様である。そして、この第1から第3のグループの土器をほぼ同時期と見なして日向前B式とし(神ノ木台式から下吉井式に併行とする)、大畠G式(梨木畠式に併行とする)に後続し、花積下層式に先行する前期初頭に位置づけた。このように、井上国雄(1977)が注目し、中村五郎(1983)、山内幹夫(1983)が検討して、現在日向前B式などの名称で呼ばれる土器群の基本的な特徴が把握された。

さらに中村五郎(1986)は、福島県内資料を対象に縄文草創期から前期初頭の土器編年を示した。この中で、早期と前期の境界について、菊名貝塚をめぐる学史を振り返り、花積下層式とそれより遡る土器を含む菊名貝塚出土土器をもって前期初頭とする立場を示した。菊名貝塚出土土器に関する高橋雄三(1981)の見解に基づき、神ノ木台式から前期初頭とする。この前期初頭は福島県内では大畠G式→岡橋期→日向前B期→源平C期→花積下層式という変遷をたどるとした。この変遷観は、地文の種類や施文される位置、文様の特徴の推移を考慮したものと見られる。さらに、関東地方との併行関係について東京都多聞寺前遺跡で1種の羽状縄文(大畠G式、岡橋期、日向前B期の土器に見られる)が神ノ木台式に伴うことを指摘、また魚骨回転文を通して県内の

松ヶ平A遺跡、岩手県崎山弁天遺跡、北海道元和A遺跡の前期初頭の土器の併行関係を指摘した。

鈴鹿良一は、真野川流域の当該期遺跡群の大規模な発掘調査で出土した豊富な資料を検討(鈴鹿ほか1987など)、さらに関連する県内資料を集成し、この時期の編年案を示した(鈴鹿1989)。鶴ガ島台式→茅山下層式→茅山上層式・素山2b式→梨木畠式・北前式(県北・中部)・大畠G式(県南部)→日向前B式→前期最初頭→花積下層式(古)→花積下層式(新)という変遷観である。日向前B式に関して、岡橋遺跡の土器は沈線の手法が大畠G式に共通することから古い段階に位置づけ、この点は中村(1986)の見解に近い。また、沈線文の土器とともに撫糸圧痕の土器が存在することを指摘しており、この点は山内(1983)と共通する。前期最初頭としたのは、羽状縄文、撫糸圧痕文、口縁直下の隆帯などで特徴づけられる羽白C遺跡などの土器群である。

佐藤典邦(1989)は、早期末葉の土器の変遷を大畠G式の4段階の変遷(日向前B式を含む)として捉えた。大畠G式の文様構成を連弧文、大形格子文、鋸歯文、縦位区画+重弧文の4つに分け、それらの系統の変遷過程や周辺地域の土器との系統関係から、従来の大畠G式を大畠G式の第1段階、それ後に後続し、日向前B式などとして捉えられていた土器群を大畠G式第2~4段階とした。また、松ヶ平A式(同遺跡の大形格子文の土器など)、北前式、田柄貝塚第I群土器などを大畠G式第1段階に併行すると見なした。そして東北北部から南部で文様意匠が共通する重要性を指摘した。

さらに佐藤(1994)は、佐藤1989の変遷観を基本的に踏襲しつつ(松ヶ平A式を北前式とするなど一部見解の修正あり)、研究史を整理し、1989年以後に公表された研究や出土事例の検討を加えた。前期初頭については、おおむね鈴鹿(1989)の編年案に従っている。そして、梨木畠式が入海II式、大畠G式第1~3段階が石山式から神ノ木台式に併行するとの指摘を行った。

このように、この時期には阿武隈山地周辺の当該期土器の主要な編年案が示された。研究者によって変遷観や細別の仕方などに違いはあるものの、大枠では大畠貝塚G地点に代表される土器群(大畠G式)→日向前遺跡B地点などに見られる土器群(日向前

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

B式、日向前B期など)→花積下層式という捉え方となっている。

これらの他に阿武隈山地周辺を必ずしも中心としない研究に触れる。

高橋雄三は花積下層式とその前後の土器群を広く取り上げている(1981)。論点は多岐にわたるが、阿武隈山地周辺に関わることとして、口縁部文様の手法の類似性から大畠G式と下吉井式が併行する可能性を指摘している。また、花積下層式について、関東地方においては直接その系統に属する先行型式ではなく、先行する他系統の土器型式から一部を受け継ぎ、新しい要素を加えて形成されたとの指摘を行っている。その後、神奈川考古のシンポジウム(神奈川考古同人会1984)においても東北地方の土器について発言している(1984)。

渋谷昌彦は、中部・関東地方を中心に当該期の土器について多くの業績があるが、特に阿武隈山地周辺の土器に関わるものに限ると、花積下層式の変遷を撚糸側面圧痕文に着目して論じる中で、松ヶ平A遺跡などの資料を検討している(渋谷1984)。また、福島県内における花積下層式の資料を詳細に検討しており(1995)、東北地方南部と関東地方の土器の関係を考える際に重要となる。

相原淳一は、仙台湾周辺におけるこの時期の土器について、研究史上の問題を詳しく検証しつつ、その編年案を示した(1985、1990など)。関東地方の茅山上層式併行以降を、吉田浜下層→素山上層・楓木上層式→梨木畠式→吉田浜上層(以上が早期、この後が前期)→上川名式(a～eのグループ)とした。吉田浜上層と下吉井式に大畠G式、日向前B式が併行すると捉えている。大畠G式と日向前B式は福島県内では前後関係に置かれるが、それを示す層位的出土は確認されていないことと、吉田浜上層土器を含めたこの時期の土器群に見られる地文の多様性の認識に基づき、時期差については検討の余地があるとしている(1990)。

④資料・研究のさらなる蓄積と編年を見直す試み (1990年代後半～現在)

1990年代後半以降も多くの研究、報告があるが、主要なものとしては中村五郎(1997)、広野町上田郷VI遺跡の調査報告(本間ほか1999、井ほか2001)、佐藤典邦(2001)、堤仙匡(2000aなど)などがある。

他にも重要な資料の報告が多い(堂田A遺跡(吉野・山元ほか2005)、西田H遺跡(山元ほか2005)、摺上川流域の遺跡群、荻原遺跡、赤柴遺跡、郡山市大槻八頭遺跡、いわき市中倉B遺跡(猪狩ほか1995)など)。

中村五郎(1997)は、研究史を踏まえて近年の研究の動向などについて様々な指摘を行った。早期末葉から前期初頭については、東海・関東地方の土器編年の成立過程を述べ、茅山上層式以降、花積下層式までに7段階の変遷が確かめられていることを前提に、福島県内の当該期編年においても細別を検討することを求めた。また、県内において出土した東海・関東地方と関係のある土器を具体的に挙げ、注意を喚起した。また口縁下に隆帯を持つ土器について、その成立に関わる東海・関東地方の土器として上ノ山式を指摘し、県内での変遷を論じた。

上田郷VI遺跡では早期末葉から前期初頭の遺構や遺物包含層が検出された。1次調査の報告(本間ほか1999)において本間宏は、その時期の第II群土器について従来の編年とは異なる点があることを指摘した。第II群土器は第2遺物包含層のL III a層を中心多く出土した。隆帯のないII A群(大畠G式とされる土器を含む)と隆帯を持つII B群(撚糸圧痕文などを持ち前期初頭に位置づけられるものを含む)に大別され、日向前B式とされるものは存在しないことが注意された。層位的に区分できる状態ではないため一括して大畠G式と前期初頭の土器の要素の共有関係が検討された。その上で、先行する土器群(常世2式→北前式→胡麻沢遺跡出土土器)に後続して大畠G式とII B群の一部が併行、第II群土器は断絶なく一連の変遷過程を持つと考えた。これは大畠G式→日向前B式→花積下層式という従来の変遷観を否定する問題提起となった。

上田郷VI遺跡の2次調査では、第2遺物包含層において分層発掘調査を行い、II群土器の層位的出土状況が検討された(井ほか2001)。II A群とII B群は各層を通じて出土すること、沈線文を持つII A群1・3類は下位の層に多い傾向があること、その中には1次調査で出土しなかった縦走縄文に沈線文が施される日向前B式とされる土器があり、大畠G式との共伴が確認されたことなどが指摘された。この成果は、1次調査に統いて従来の編年と異なる部分

を持ち、他方日向前B式の出土など1次調査の検討内容と一致しない点もある。

佐藤典邦(2001)は、遺構出土一括資料を重視して細別を行う考え方を示し、先稿(1989・1994)の後に報告されたいわき市中ノ内C遺跡、中倉B遺跡の住居跡出土土器をこれまでの編年案(一部修正)に基づいて整理した。その上で、上田郷VI遺跡の調査成果と問題提起について反論を展開した。第2遺物包含層で大畠G式と花積下層式が共伴したとする本間宏の見解に対して、同遺跡の住居跡では両者の共伴は認められないとした。また、本間による土器の要素の検討にも別の観点から疑問を呈した。

堤仙匡は、当該期の土器について多くの検討を行った。その主要なものを挙げると、堤(1998)では、大畠G式に見られる沈線文のモチーフを分類し、遺跡での組成や分布の偏りを指摘した。堤(2000a)では、大畠G式、日向前B式期とする土器の文様を検討し、大畠G式→岡橋期(中村1986を追認)→日向前B式期1段階→同2段階→同2段階新相という編年案を示した。堤(2000b)では、茨城県北部、福島県南部などの早期末・前期初頭の土器を考察した。堤(2001)では、中倉B遺跡などで出土した口縁部に重層する弧線文を持つ土器に注目し、下吉井式との関連を論じた。

また、堤仙匡(2004)も上田郷VI遺跡についてコメントしている。堤は、佐藤と同様に住居跡では大畠G式と隆帶のあるII B群が共伴しないことを重視している。またII B群には口縁部文様帶の幅や文様などから3段階程度の変遷を指摘した。大畠G式とそれに後続する土器とのつながりはいまだはっきりしないとし、日向前B式とされる土器の位置づけについては明言していない。

阿武隈山地周辺以外で注意される動向として、北関東の土器については、吹野富美夫(1993)、谷藤保彦(2007)による論文があり、福島県内の資料も取り上げられている。仙台湾周辺の土器については相原がこれまでに発表した論文をまとめ、前期最初頭の土器についてその後得られた資料に関する見解などを示している(相原2015)。前期初頭土器については、近年の資料などを加えて筆者がまとめている(早瀬2017)。

(2)研究史の総括と土器編年の課題の整理

①大畠G式と日向前式の一括資料による把握

大畠G式は、大畠貝塚G地点出土土器を基準資料とし、中でも詳しく検討された土器密集地の土器によって代表される。しかし、大畠G式には複数の文様の系統が考えられ(佐藤1989、堤2000aなど)、一部の文様だけがまとまる遺跡の存在も指摘されている(堤1998)。今後さらに大畠G式とされる土器群の中にある変異を一括資料の比較で明らかにし、その意味を検討する必要がある。

他方、日向前B式とされる土器群はよく共通する特徴を持っているが、型式や細別段階の基準となる一括資料が必ずしも明確ではない。捉え方が研究者によって異なる原因の一つがここにあると考えられる。良好な資料は多くないが、今後は一括資料を単位とした議論がより活発に行われる必要がある。

②大畠G式と日向前B式の時間的関係

これまでに示された中村五郎(1983、1986)、山内幹夫(1983)、鈴鹿良一(1989など)、佐藤典邦(1989など)、堤仙匡(2000aなど)の編年案は、その方法や着眼点、細別段階の内容など様々な相違点があるものの、大畠G式が古く、日向前B式とされる土器群が新しい、という前後関係を想定する点は共通していた。この捉え方は、日向前B式とされる土器群を特徴づける平行斜線が入り組んで鋸歯状を呈する文様が花積下層式の口縁部文様に引き継がれるという見方や、その他の文様の系統的変遷、および撲糸文、縄文(斜行縄文、縦走縄文、羽状縄文など)、条痕といった地文とその組成の連続的変遷などの解釈による部分が大きい。

しかし、相原淳一(1990)が指摘するように、この前後関係は層位的出土状況などに基づくものではない。土器群の前後関係を直接裏付ける証拠がない場合、他地域との併行関係を確認することによって傍証を得られる場合がある。この点では特に中村五郎が一貫して関東地方や東北地方北部との併行関係を重視して研究を行っており(1986、1997など)、佐藤典邦(1994)、堤仙匡(2001)らも広域での対比を試みている。このような研究が進めば、他地域での変遷過程(層位的根拠などを含め)と結び付けることで、より確実に編年を組み立てることが可能にな

ると期待される。しかし、大畠G式、日向前B式とも独自性が強いこともあり、上述の編年案をそのような形で裏付けるまでには至っていないのが現状と見られる。相原淳一(1990)は両者を地域差として捉え、また上田郷VI遺跡では両者の共伴が指摘されていることから、さらなる検討を要する。

③早期と前期の境界

この地域の早期末葉から前期初頭の編年案では、早期と前期の境界についていくつかの異なる見解が示されてきた。中村五郎は大畠G式→岡橋期→源平C期→花積下層式をすべて前期初頭に置き(1986)、細別段階等の変化はあるものの、一貫してこの考え方方に立っている。これは菊名貝塚の土器(桑山1980)をもって前期初頭とする学史的理解に基づく。鈴鹿良一(1989など)、佐藤典邦(1989など)、堤仙匡(2000aなど)は、大畠G式や日向前B式(大畠G式第2～4段階、日向前B式期)までを早期末葉に、それ以降の土器を花積下層式などとして前期初頭に位置づけている。これらは花積下層式とそれに併行する土器をもって前期初頭とし、菊名貝塚出土土器の全体を必ずしも前期としない関東地方の研究動向に沿うものとなっている。以下、この問題について整理する。

早期と前期の区分は、上述のように山内清男(1937)によって設定された。

関東地方では茅山式と花積下層式の間で区分され、茅山式の細別や、茅山式以後の土器群についてはこれより後に明らかになっていく。また、花積下層式は蓮田式の一部であり、蓮田式は山内が前期の定義に採用した広義の諸磯式に含まれる。このため、関東地方では花積下層式をもって前期とすることが基本的な考え方になっている。しかし、花積下層式をどのように捉えるかによって研究者により意見の相違がある。この問題については渋谷昌彦の論文(1983など)や神奈川考古のシンポジウム(神奈川考古同人会1984)、縄文セミナーの会での議論(縄文セミナーの会1994)などに詳しい。主要な論点の一つは菊名貝塚の土器(桑山龍進1980)の扱いで、阿武隈山地周辺のこの時期の土器の研究を中心的に進めた中村五郎は、上述の通り菊名貝塚の土器をもって前期初頭としている(中村1986など)。しかし、中村が指摘するように、関東地方での研究は必

ずしもそのようには進められず、菊名貝塚の土器に含まれるとされる神ノ木台式や下吉井式を花積下層式とは別に扱い、早期末とされることも多かった。また、下吉井式の位置づけにはいくつかの考え方があり、近年では渋谷昌彦(1983など)が主張してきた下吉井式と花積下層式が併行し、これらと神ノ木台式との間に前期と早期の境を置く見解が主流となっているようである(金子2008)。筆者の力量不足もあり、ここで関東地方の編年について論じることはできないが、この見解に至るまでの研究史も尊重される必要があり、一概に菊名貝塚を重視することもできないと考える。

他方、東北地方について検討すると、山内(1937)は陸前地方で楓木2と室浜式の間に早期と前期の境界を定めた。楓木2(楓木上層)については、関東の茅山式の場合と同様、後続する土器群が後に明らかになっている。また室浜式は山内が短い文章で説明したのみで(山内1930)、最近報告された山内の室浜貝塚資料(岡田2009)によてもその型式内容は十分明らかではない。このように東北地方の土器で早期と前期の境界を厳密に議論することは困難である。山内による室浜式の設定以後、仙台湾周辺では上川名貝塚の土器に基づき、伊東信雄が室浜式に相当するものとして上川名式を設定(伊東1957)、林謙作による細別(1965)などもあったが、相原淳一によって上川名式として捉え直され(1990、2015)、筆者もそれを基本的に引き継いでいる(早瀬2017)。相原や早瀬による上川名式の最初の段階の土器(相原の上川名式aグループ、早瀬の上川名式第1段階)は、福島県内の資料において渋谷昌彦(1995)や谷藤保彦(2007)によって花積下層I式とされた土器群や、鈴鹿良一(1989)による前期最初頭の土器とおおむね一致している。

以上より、研究史と現在の研究状況を踏まえると、関東地方の花積下層I式、仙台湾周辺の上川名式aグループ、第1段階をもって前期初頭とするのが妥当と考える。この時期の土器は非常に複雑で、今後も研究が進められる過程で早期と前期の境界が議論されていくことになると考えられる。

④放射性炭素年代測定結果の活用

放射性炭素年代測定は、その方法が確立されて間もなく縄文時代研究に導入されたが、様々な原因に

よって年代値のばらつきが大きい場合などもあり、積極的に活用する立場の研究者(芹沢長介など)と測定結果に疑問を持つ研究者(山内清男など)が縄文時代の年代について大きく異なる見解を示していた(いわゆる長期編年と短期編年)。福島県史(福島県編1969)でも両論が併記されている。

その後、測定方法では加速器質量分析(AMS)法の導入により微量で高精度の測定が可能になり、また年代値の算出方法では $\delta^{13}\text{C}$ 補正や暦年較正によってより実際の年代に近い値が得られるようになった。暦年較正は、年輪年代など異なる手法との整合性に基づいており、方法の信頼性は高まっている。海洋リザーバー効果など様々な課題があるものの、課題を含めて議論が深められ、測定結果に問題がある場合には具体的にその原因などを説明できることが多くなっている。縄文時代の土器編年と年代値の関係も整理され(小林2017など)、まほろん収蔵資料の年代測定結果もそれらに整合的なものが多い(三浦ほか2019)。今後も試料や方法に関わる課題について検討を続ける必要があるが、現状でも層位や遺構の重複関係などと合わせて考古資料の時間差や年代について検証する有力な証拠となり得ると考えられる。

なお、紙数の制約もあり説明や文献を省略したが、縄文時代研究に関わる年代測定の研究史は小林謙一(2017)などを参照されたい。

3 対象資料と研究の方法

(1) 土器の検討

この時期の編年について再考を促す契機となった上田郷VI遺跡出土第II群土器、とりわけ第2遺物包含層の分層地点における土器の出土状況を検討し、この遺跡での土器の変遷を明らかにする。その後、主に年代測定の対象となった他遺跡の土器と若干の比較検討を行う。

(2) 放射性年代測定結果の検討

まほろん収蔵資料の年代測定結果を中心に、他の発掘調査報告書などで報告された事例も合わせて整理し、当該期の年代について明らかにする。本稿で扱う試料の年代値などのデータは、まほろん収蔵

資料年代測定事業の報告((公財)福島県文化振興財団・(株)加速器分析研究所2016)や各遺跡発掘調査報告書掲載の年代測定報告などによっており、第1～3図や本文中に試料名、測定番号、年代値等を示した。放射性炭素年代はStuiver and Polach(1977)に従い、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正された年代値を扱う。暦年較正はIntCal13データベース(Reimer et al. 2013)に基づき、0xCal v4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を用いて較正年代を算出する。

4 上田郷VI遺跡第II群土器の検討

(1) 上田郷VI遺跡第II群土器の検討

① 遺跡の概要

上田郷VI遺跡は、福島県双葉郡広野町大字上北迫字上田郷に所在、現海岸線から約3km内陸に位置し、杉内川によって形成された2段の河岸段丘上に立地する。福島県教育委員会、(財)福島県文化センターによる第1～3次調査(1997～2000年)、広野町教育委員会による調査(2001年)が実施されている。ここで取り上げるのは多くの遺構、遺物包含層が調査され、多量の遺物が出土した福島県による第1、2次調査出土土器である(本間ほか1999、井ほか2001)。

これらの調査では、堅穴住居跡(早期末葉から前期初頭9軒)、土坑、溝跡、焼土遺構、遺物包含層等が検出された。特に第2遺物包含層では早期末葉から前期初頭の土器(第II群土器)が多量に出土しており、一部分層発掘調査も行われたため、主要な検討対象とする。

② 第2遺物包含層出土土器

この遺物包含層は、調査区中央東から北側、上位段丘の段丘崖とその下方斜面に形成されており、調査区南東から北東にかけての流路(7号溝跡)も含まれる。遺物が多く出土した堆積層L III aはL VIに似た褐色土層で、遺物とともに土砂が人為的に投棄され、さらに段丘崖縁辺からの土砂の流入もあわせて形成されたと見られている。

東側のI・J-15～17グリッド付近は、7号溝跡の流路が屈曲する窪地部分に当たる。ここでは遺物の出土が顕著で、土砂の投棄もあり、この地点特有の厚い堆積状況からL ①～⑫に分層可能だった。土

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

質、色調などが近似した層があり、L①～③、L④～⑧、L⑨～⑫に大別して捉えられる可能性が高いとされる。LⅢaとL①～⑫は、LV・VIをベースとした近似層で、時間差はほとんどないと考えられている。ただし、LⅢaの一部はL④より上位に当たる。

出土土器は早期から後期の縄文土器(I～V群)だが、II群が圧倒的に多い。

報告書では、第2次調査の分層発掘調査を重視し、その出土遺物を他と区別して層ごとに掲載し、各層の出土点数とともに分類ごとの出土量を記号で示している。筆者は報告書に図示された土器について報告書の情報と遺物を実見した所見を合わせて、報告書掲載土器の点数を加筆した表を作成した(表1)。

第II群土器は、口縁部を有する個体のうち、口縁部に隆帯を持たないものをIIA群、持つものをIIB群とし、隆帯の位置、口縁部文様帶の幅、装飾文様や地文の種類によって細別された。胴部資料はIIC群として地文で細別、底部資料はIID群とし、底部形態で細別された。分類基準は表1中に示した。

報告書での分類に従い、土器の層位的出土状況を検討する。以下の記述では、報告書で指摘された層の大別を参考にL①～③を上層、L④～⑧を中心層、L⑨～⑫を下層として扱う。また、土器の点数に触れるが、これは表1に「分類土器点数」として示したもので、報告書に掲載された個体数である。また第1図に1次調査、第2図に2次調査の第、遺物包含層等の出土土器を図示した。

第2遺物包含層分層地点の下層では、IIA群が比較的多いが(61点)、IIB群も一定量出土している(22点)。IIA群のうち、沈線や刺突による文様を持つものは27点と半数近くで、多くは撚糸文を地文とする。IIB群は口縁直下に隆帯を持つ2類と、隆帯で区画された口縁部に幅の狭い文様帶を持つ3類があり、1、4類は確認できない。II群全体の地文は、撚糸文が多く(297点)、縄文が少ない(108点)。比較的出土量の多いL⑨とL⑫の土器(L⑩・⑪含む)を第2図(16～27)に示した。L⑫出土の第2図22は、撚糸文を地文とし、半截竹管の沈線による区画内に弧線が施される。27は縦走縄文を地文とし、沈線文が施される。沈線は2条1組を基本

とするが、丸棒状工具で1条ずつ引かれる。横線で区画された口縁部から体部上位に斜線を菱形に組み合わせ、空間にさらに沈線を加える構成である。口縁端面には刻目が施される。23は撚糸文が外面と口縁部内面に施される。24は非結束羽状縄文が外面に施され、口縁端面にも縄文が見られる。26は口縁部に2条の隆帯が横にめぐり、間にLRとRLの撚糸圧痕が加えられる。L⑩・⑫出土の25は胴部破片で、外面に撚糸文が施され、上部に横位沈線文が認められる。L⑨出土の16は外面に撚糸文、口縁端面に刻目が施される。17も撚糸文が施されるが、渦巻状の部分がある。18は非結束羽状縄文が菱形に施される。19と20は隆帯がめぐり、狭い口縁部に文様(19は円形竹管の刺突文、20は角棒状工具の沈線文)が施される。21は口縁部に2条の隆帯がめぐり、以下非結束羽状縄文が菱形に施される。

中層では、IIA群が24点、IIB群が25点出土しているが、IIA群のうち、沈線や刺突による文様を持つものは3点と非常に少ない。IIB群は1～4類がすべて出土している(2類は報告書に図示されず)。II群全体の地文は、撚糸文が129点、縄文が156点で、縄文がやや多い。このうち、IIB群の地文は、1類を除いて多くは縄文(斜行縄文、羽状縄文)である。中層で最も出土量の多いL④を中心に図示した(第2図4～15)。15はL⑧出土の尖底の底部で、外面に縄文が施される。14はL⑥出土で隆帯の上下に羽状縄文、13はL⑤出土で隆帯の上下に撚糸文が施される。いずれもIIB群1類の例である。L④出土土器では、第2図4に撚糸文、5に縦走縄文、6に非結束羽状縄文が施される。7は口縁部の隆帯間にLRの撚糸圧痕が加えられる。8は波状を呈する口縁部が縦横の隆帯で区画され、中にLRの撚糸圧痕が加えられる。胴部上半にLR、下半にRL縄文が施される。9は隆帯を挟んで上下で縄文が羽状を呈し、隆帯上には円形竹管の刺突が加えられる。10は口縁部と胴部中位に2つの文様帶を持つ特異な土器である。口縁部は刻目が加えられた隆帯で上下を区画し、RLの撚糸圧痕による蕨手状と梯子状を組み合わせた意匠が展開する。撚糸圧痕の間には刺突(多截竹管または角棒)が加えられた部分がある。胴部中位の文様はRLの撚糸圧痕で上下を区画され、中に同じ撚糸圧痕で斜線を取り組ませ

表 1 上田郷VI遺跡第2遺物包含層分層地點における土器の層位的出土状況

		上層				中層				下層				合計		
		L①	L②	L③	小計	L④	L⑤	L⑥	L⑦	L⑧	小計	L⑨	L⑩	L⑪	L⑫	小計
I群		1	1△	1△	1	4	2	1△	3	1	8	4	4	1	13	22
II A群	1類 燃糸文地、沈線文・刺突文等	4△	1△	1△	2	1△	5	7○	1△	1△	1	6○	9○	10○	10○	25
口縁部	2類 燃糸文のみ										7	4△	6○	1△	10○	21
隆帯なし	3類 繩文地、沈線文・刺突文等	2△				2	12○	1△	2△	2△	2	6○	4△	2○	2○	4
II B群	4類 繩文のみ	1△				1	1○	1○	1○	1○	14	6○	4△	3○	13	29
口縁部	1類 横位隆帯、上下に燃糸文・繩文		1△	1△	1	1○	1○	1○	1○	1○	3	1△	3△	1△	1△	4
隆帯あり	2類 口縁直下に隆帯、以下燃糸文・繩文		2△			2	6○	1○			7	3△	1△	1△	1△	6
III群	3類 隆帯+幅狭の文様帶、以下燃糸文・繩文					3○					3					3
口縁部	4類 隆帯+幅広の文様帶、以下燃糸文・繩文					5○	△			7○	12	6○	2△	1△	3△	14
隆帯なし	5類 横位隆帯、口縁部文様不明					22	75○	17○	4○	5○	18○	119	78○	70○	5△	12
II C群	1類 燃糸文	11○	7○	4○	22	24	77○	13○	9○	6○	15○	120	48○	16○	1△	24
胸部片	2類 繩文	8○	10○	6○	24											385
II D群	1類 尖底															0
底部	2類 丸底															0
	3類 上底															0
	4類 平底															0
II E群	II A群2・4類(隆帯なし、文様なし)	6	1	1	7	19	2	1	2	1	21	10	10	1	13	34
口縁部	II A群1・3類(隆帯なし、文様あり)	1	3	4	15	1	2			7	25	10	6	1	5	62
文様構成	II B群(隆帯あり、文様あり)															32
II F群	1類 沈線文・刺突文			1		1					1	2				51
口縁部	2類 燃糸圧痕(1段)				4	3		1			3	5	1			3
文様	3類 燃糸圧痕(2段)						1		1		10	1	1			14
II G群	1類 燃糸文	15	8	6	29	84	18	4	5	18	129	91	86	6	114	297
地文	2類 繩文	11	13	6	30	104	13	14	6	19	156	63	23	1	21	294
分類土器点数		27	21	12	60	195	31	21	11	42	300	160	117	9	152	438
選出土器点数		27	21	12	60	205	32	21	11	42	311	160	117	9	154	440
出土土器点数		385	38	203	626	384	151	33	70	109	747	300	1000	24	195	1519
																2892

出土土器点数、選出土器点数、◎○△の記号は報告書(井ほか2001)の表2(p150)記載。◎はその層中で主体となるもの、△は数点出土したものと算定。
 分類土器点数は図示された土器(選出土器)について本文に記載された分類に従い、一部筆者の観察所見を加えて記載。同一個体の複数破片は1個体として算定。
 繩文としたものは、斜行繩文、羽状繩文、縦走繩文を含み、燃糸文を含まない。

た意匠を構成する。文様帶の外は非結束羽状縄文が菱形に施される。11は隆帯に刻目を加え、口縁部にLの撚糸圧痕で弧線を描く。12は隆帯間にLRとRLの撚糸圧痕文が施される。

上層では、II A群が9点、II B群が4点出土しているが、II A群のうち文様を持つものは2点と少ない。II B群は1~3類が確認される。II群全体の地文は、撚糸文が29点、縄文が30点で、ほぼ同量である。上層はやや出土量が少なく、小破片が多いため図示された資料が少ないとからその特徴を十分把握できないが、おおむね中層に近いと見られる。

分層地点全体では多様な文様が見られるが、沈線文や刺突文は主にII A群に施され、下層に多い。撚糸圧痕文の原体の撚りは1段と2段があるが、全体としてはほぼ同数で、下層では1段、中層では2段が多い。底部の形態は層に関わらず全て尖底である。

分層地点以外の第2遺物包含層出土土器は、分層地点の土器とおおむね特徴が共通するが、L III aから出土した底部には尖底以外に平底や上底が見られる点が異なる。上述の通り、L III aの一部は分層地点のL④より上位に当たるとされるため、平底等はII群土器の中で比較的新しい特徴である可能性がある。

第1図に分層地点以外の第2遺物包含層(L III a等)出土土器を図示した。1は撚糸文を地文とし、口縁部から胴部上位に半截竹管の沈線で方形の区画と上下に向かい合う弧線が施される。口縁部内面には鋸歯状の沈線文が認められる。5は1に似た文様構成だが、縦の区画が沈線ではなく刺突である。3、6は撚糸文、7は非結束羽状縄文のみで、3の口縁部は強く外に折れる。2は口縁直下に隆帯があり、その下に撚糸文を地文に半截竹管の沈線文が施される。円形竹管の刺突も加えられ、同一個体片(図示せず)から縦に連続することが窺われる。4は断面三角形の隆帯上下に撚糸文が施される。9は隆帯間に半截竹管の刺突、10は隆帯で区画された口縁部文様帶に半截竹管沈線文を菱形に施し、交点などに円形竹管の刺突を加える。11、12、14には蕨手状の撚糸圧痕が施され、12の撚糸圧痕間には刺突が見られる。13には弧状の撚糸圧痕、15、16には菱形の撚糸圧痕、円形竹管の刺突が施され、15は隆帯が縦横に、16は横位多段に施される。17は口縁

部に隆線による菱形、胴部に羽状縄文が菱形に展開し、円形竹管の刺突は口縁部から胴部に及ぶ。器形も特異である。

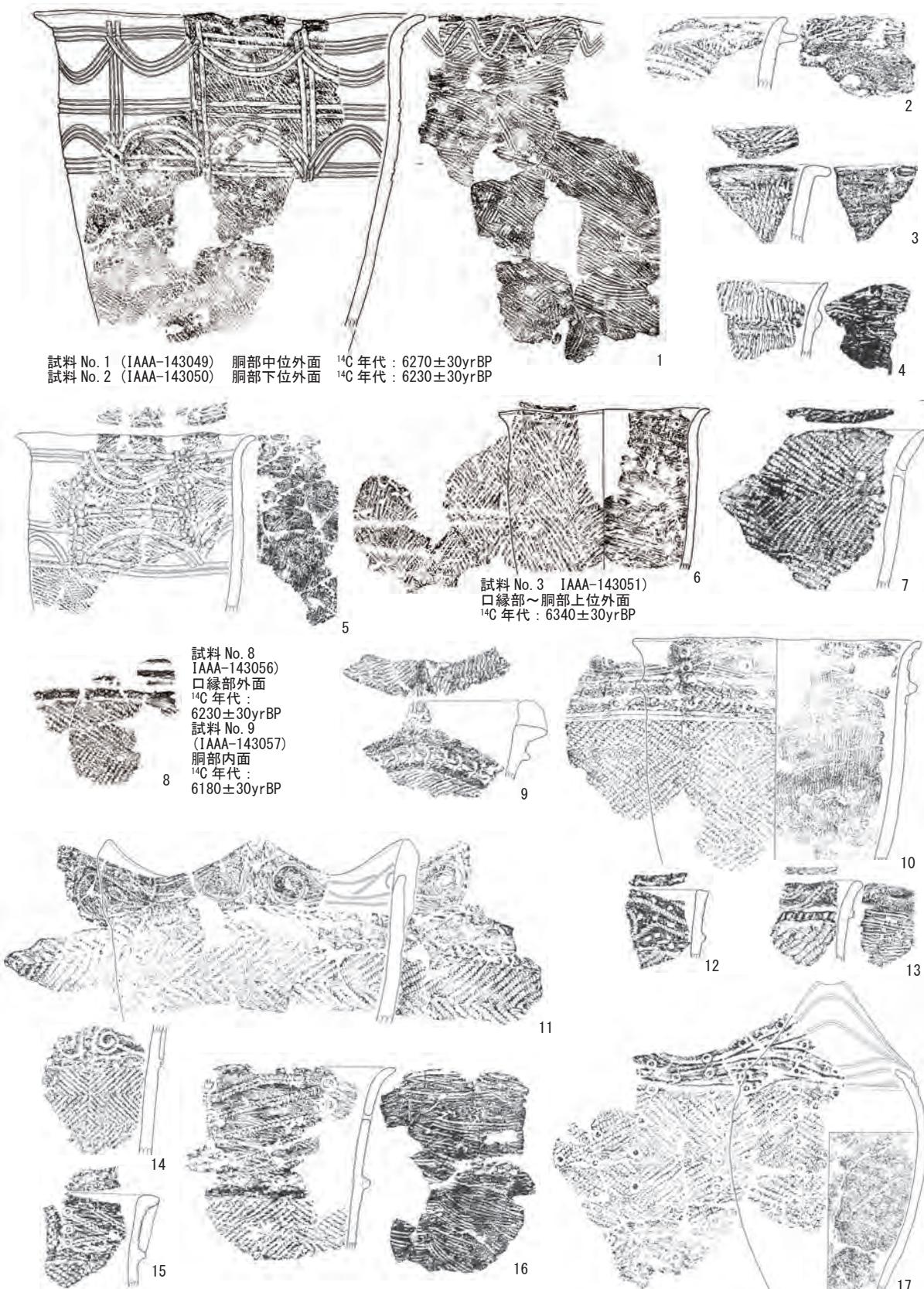
③他の遺構・遺物包含層出土土器

堅穴住居跡のうち、II群土器の時期に属するのは1~7、9号住居跡である。全体的に遺物の出土量は多くないが、比較的まとまった量が出土した4号、9号についてはII B群が目に付く。土坑では、24号土坑から良好な個体が出土している。第2図1は指頭押圧が加えられた隆帯で口縁部が上下から区画され、Lの撚糸圧痕で蕨手状文が施される。2は断面三角形の隆帯を挟んで縄文が羽状となり、全体としては菱形を呈する。3には隆帯とRの撚糸圧痕文が見られる。第1遺物包含層では、主にL IIIとL IVからII群土器が出土し、L IVの土器は第2遺物包含層分層地点下層、L IIIの土器は同中・上層の土器におおむね共通する特徴を持つ。第3遺物包含層ではII群とVI群(縄文時代晚期)の土器が出土している。

④第II群土器の特徴のまとめ

第2遺物包含層分層地点下層からは、撚糸文を地文とし、半截竹管による沈線文等が施される土器が比較的多く出土しており、文様のない土器の地文も撚糸文が多い。これらは大畑貝塚G地点で出土した大畑G式の特徴の一部と一致する(沈線文と刺突文の併用や地文の組成などの相違点もある)。また、L⑫からは縦走縄文を地文とし、沈線文が施され、口縁端部に刻目が施される土器が出土しており、日向前B式とされる土器の特徴を備えている。他方、量は多くないものの口縁直下に隆帯を持つものや、口縁部に隆帯で区画された幅の狭い文様帶を持ち、撚糸圧痕文等が施されるものが出土しており、これらの土器は鈴鹿良一(1989)による前期最初頭、渋谷昌彦(1995)、谷藤保彦(2007)による花積下層I式、早瀬(2017)による上川名式第1段階に相当すると見なされる。第1遺物包含層L IVの土器もおおむね同じ特徴を持つ。

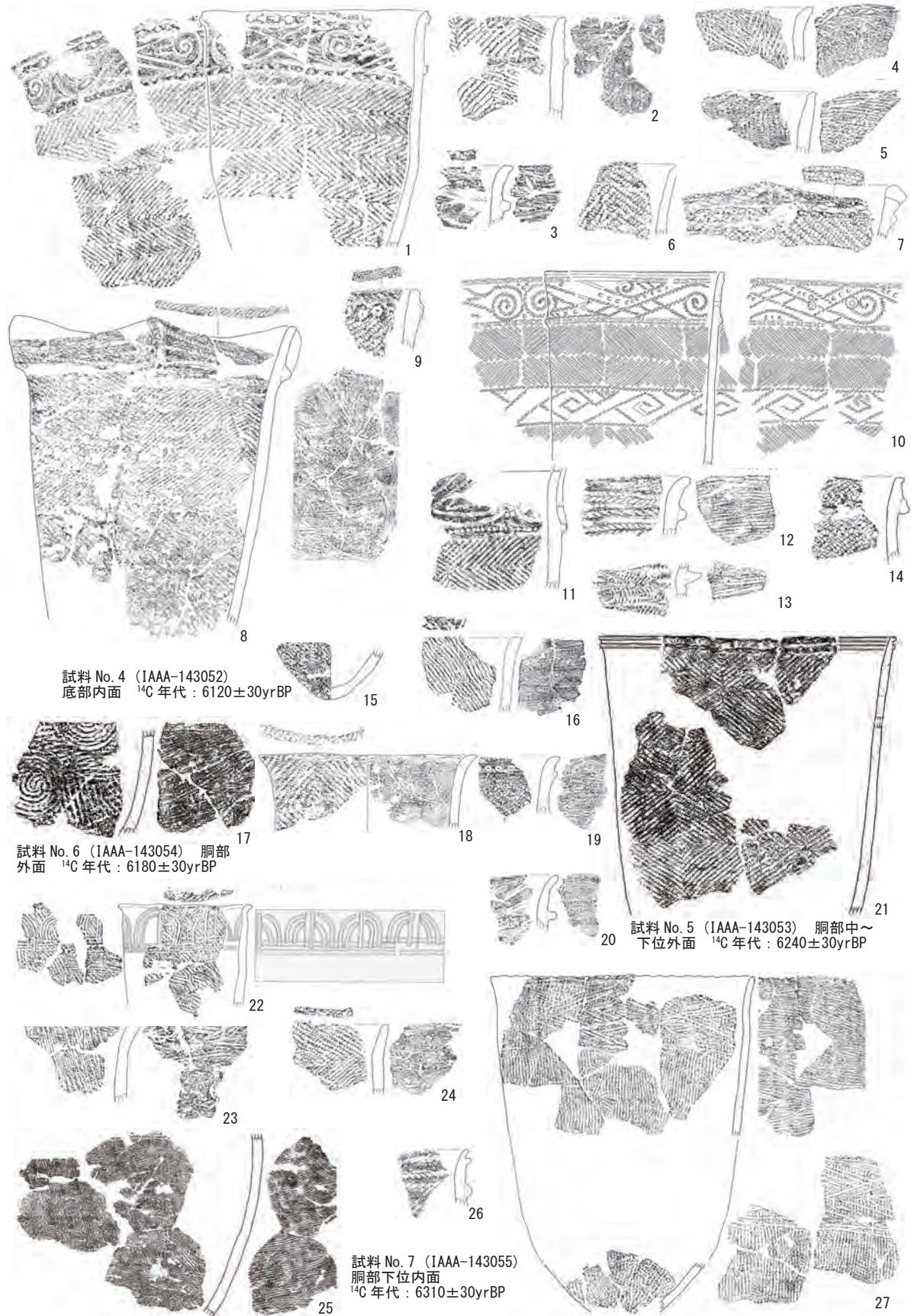
第2遺物包含層分層地点中・上層からは、大畑G式に相当する土器は少量の破片資料のみ確認される。多くは上述の前期最初頭、花積下層I式に相当する土器である(ただし一部の土器に花積下層II式の特徴も見られ、検討を要する)。口縁部の文様は



1～17 第2遺物包含層 (5・15 L I、2・9 L I・II、4 L IIIa 下部、他はL IIIa)
(S=1/4: 2～4, 12 S=1/5: 5～11, 13～17 S=1/8: 1)

第1図 上田郷VI遺跡（1次調査）出土土器と放射炭素年代測定結果

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討
—上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—



1 ~ 3 24号土坑②、4 ~ 27 第2遺物包含層 (4 ~ 12 L④、13 L⑤、14 L⑥、15 L⑧、16 ~ 21 L⑨、22 ~ 24・26・27 L⑫、25 L⑩・⑪) (S=1/5 : 2, 3, 5 ~ 7, 9, 12 ~ 15, 17, 19, 20, 23, 26 S=1/6 : 1, 4, 8, 10, 11, 16, 18, 21, 22, 24, 27 S=1/8 : 25)

第2図 上田郷VI遺跡(2次調査)出土土器と放射性炭素年代測定結果

極めて多様である。第1遺物包含層LⅢの土器もおむね同じ特徴を持つ。

以上の検討結果は、おおむね発掘調査報告書で指摘された内容を追認し、出土土器の個体数(掲載土器に限るが)によってより具体的に変遷を示した。このように、上田郷VI遺跡第Ⅱ群土器には、大畠G式、および少量だが日向前B式とされる土器と、花積下層I式の多様な特徴が含まれる。また、それら多様な土器の間に要素の共有関係が指摘されている(本間ほか1999)。しかし、このⅡ群土器を時期の異なる土器が混在した状態とする見方もある(佐藤2001)。いずれの見解も、関連する土器の他遺跡での出土状況や、年代測定結果などによって検証される必要がある。

(2) 上田郷VI遺跡における年代測定結果

上田郷VI遺跡では、まほろん収蔵資料の年代測定事業で9試料(同一個体の複数測定を含む7個体の土器)の土器付着炭化物が測定されている。試料が採取された土器の図と年代値等を第1・2図に示した。これら9点の試料について暦年較正のマルチプロット図を示す(第4図上段)。

第2遺物包含層分層地点では、L⑧出土(年代測定試料No.4)、L⑨出土(試料No.5・6)、L⑩・⑫出土(試料No.7)が測定された。これによると、7300～6900cal BP頃の範囲でL⑩・⑫からL⑧に向かって漸移的に年代が新しくなることが読み取れる。測定点数および対象となった層は限られるが、この分層地点での土器の層位的出土状況がおおむね時間的な前後関係を表すことを示唆する。

土器の特徴によって比較すると、大畠G式の特徴を良く備えた第1図1の土器の試料(No.1・2)、第2図25の試料(No.7)、大畠G式に属する可能性のある撚糸文の土器である第1図6の試料(No.3)、第2図17の試料(No.6)、隆帯を持ち前期初頭の土器の特徴を備える第2図21の試料(No.5)、第1図8の試料(No.8・9)などに分けて考えることができると、これらの間で明確な年代差は認められない。大畠G式に関連する試料の方が隆帯の試料よりも若干古い方に年代の確率分布が偏るようにも見えるが、事例を増やす必要がある。なお、同一個体に属する試料はおおむね年代値が一致している。

以上より、上田郷VI遺跡第Ⅱ群土器から採取された土器付着炭化物の年代値は、土器の層位的出土状況や漸移的な変化に矛盾しないものとなっている。また、大畠G式と花積下層I式に属する試料の年代値は重なり合っている。これは、時期の異なる土器が混在した状態を見る佐藤典邦(2001)の捉え方と一致しない。

5 その他の土器群との検討

阿武隈山地周辺の関連遺跡は多数に上り、本来ならばそれらの出土土器を詳細に検討すべきであるが、紙数の制約もあり、ここでは年代測定が行われた遺跡を中心に取り上げる。

(1) 出土土器と年代測定試料

①中平遺跡

福島県双葉郡浪江町大堀字中平に所在し、縄文時代早期後葉の竪穴住居跡や早期末葉の土坑などが検出されている(山内ほか1989)。

68号土坑から出土した深鉢(第3図3)に付着する炭化物が測定された(試料No.14・15)。この深鉢は、外面に縦走縄文が施され、口縁部から体部上半にかけて横線で区画された中に上弦の弧線を重疊させ、その下にも連弧文が施される。日向前B式とされる土器の特徴を備えている。

年代測定試料は、胴部中位外面(試料No.14)と胴部内面(試料No.15)から採取された。2点の¹⁴C年代値はおおむね近いが、No.15の方が若干古い。No.15の炭素含有率は18.5%とやや低いことが注意され、どちらかと言えばNo.14の方がこの土器の本来の年代に近い値を示している可能性がある。

②中ノ沢A遺跡

福島県郡山市熱海町中山字新田・越地に所在し、縄文時代早期後葉から末葉頃の遺構等が検出されている(本間ほか1989)。

4号住居跡では最下層の埋土⑤形成後に同時に廃棄されたとされる土器が2個体出土しており、そのうちの1個体(第3図5)の胴部中位外面に付着する炭化物が測定された(試料No.18)。

試料が採取された土器は、外面と口縁端面上に縄文が施され、外面の縄文は条が縦走する。日向前B式の一部の特徴を備えている。これに共伴した土器

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

は、外面と口縁端面に撚糸文が施される。

③鴨ヶ館跡

福島県田村郡小野町大字飯豊字館ノ腰・後口田に所在し、縄文時代早期後葉から末葉頃の遺構や遺物包含層等が検出されている(石本ほか1993)。

I 区遺物包含層 L III から出土した深鉢の口縁部破片(第3図7)の外面に付着する炭化物が測定された(試料 No. 38)。

試料が採取された土器は、外面に縦走縄文と斜行縄文が交互に施され、羽状縄文に似た効果が表されている。日向B式とされる土器群に特徴的な手法である。同じ遺物包含層では、関連する土器として縦走縄文を地文とし、口縁部から体部上位に横線で区画された中に斜線を充填する深鉢(報告書第20図1)などが出土している。

④西田H遺跡

福島県田村郡小野町大字菖蒲谷字西田に所在し、早期から前期の幅広い時期にわたる遺構や遺物包含層等が検出されている(山元ほか2005)。早期に属する多くの良好な資料が得られており、年代測定も多数行われているが、ここで取り上げるのは、9号住居跡から出土した深鉢(第3図4)の胴部下位内面から採取された炭化物(試料 No. 16)、遺物包含層で出土した第3図6の胴部外面から採取された炭化物(試料 No. 37)、第3図8の口縁部上位外面から採取された炭化物(試料 No. 39)、第3図9の口縁部～胴部上位外面から採取された炭化物(試料 No. 40)(以上はまほろん収蔵資料年代測定事業による)、第3図13の胴部内面から採取された炭化物(試料 ONNDH 5、報告書掲載の国立歴史民俗博物館による年代測定)である。

第3図4の土器は、報告書中のVIII群1類(いわゆる北前式に近い、とされる)に属する土器で、本稿の主要な検討対象ではないが、日向B式や大畠G式の年代値を評価する際の参考として示す。第3図6・13は外面に撚糸文が施され、報告書中のIX群1類(大畠G式)に属する。第3図8・9は縦走縄文を地文としており、8は上弦の弧線が重畠され、9は横線の区画内に斜線が充填される。これら2点は報告書中のIX群2類(日向B式)に属する。

⑤堂田A遺跡

福島県田村郡小野町大字菖蒲谷字堂田に所在し、

早期後葉から前期初頭頃の遺構や遺物包含層等が検出されている(吉野・山元ほか2005)。

まほろん収蔵資料年代測定事業の対象とはならなかったが、報告書に古環境研究所による年代測定結果が報告されている。第3図11、12は遺物包含層から出土した深鉢の胴部片で、各々内面に付着する炭化物が測定された(試料 No. 2・4)。第3図11は外面に撚糸文、12は非結束羽状縄文が施されている。遺物包含層からは早期後葉の土器のほか、撚糸文を地文とし、半截竹管による沈線文で格子目や弧線が施される大畠G式や、口縁部隆帯、撚糸圧痕文、非結束羽状縄文に特徴づけられる前期初頭の土器などが出土していることから、第3図11(試料 No. 2)は大畠G式、第3図12(試料 No. 4)は前期初頭に属する可能性が高い。また、大畠G式期に位置づけられている14号住居跡1層から出土した炭化物(試料 No. 3、Beta-188054)が測定され、 6420 ± 40 yrBP という¹⁴C 年代が示されている。

⑥仁井殿遺跡

福島県田村郡小野町大字雁股田字仁井殿に所在し、早期末葉頃の竪穴住居跡や遺物包含層等が検出されている(能登谷・國井ほか2004)。

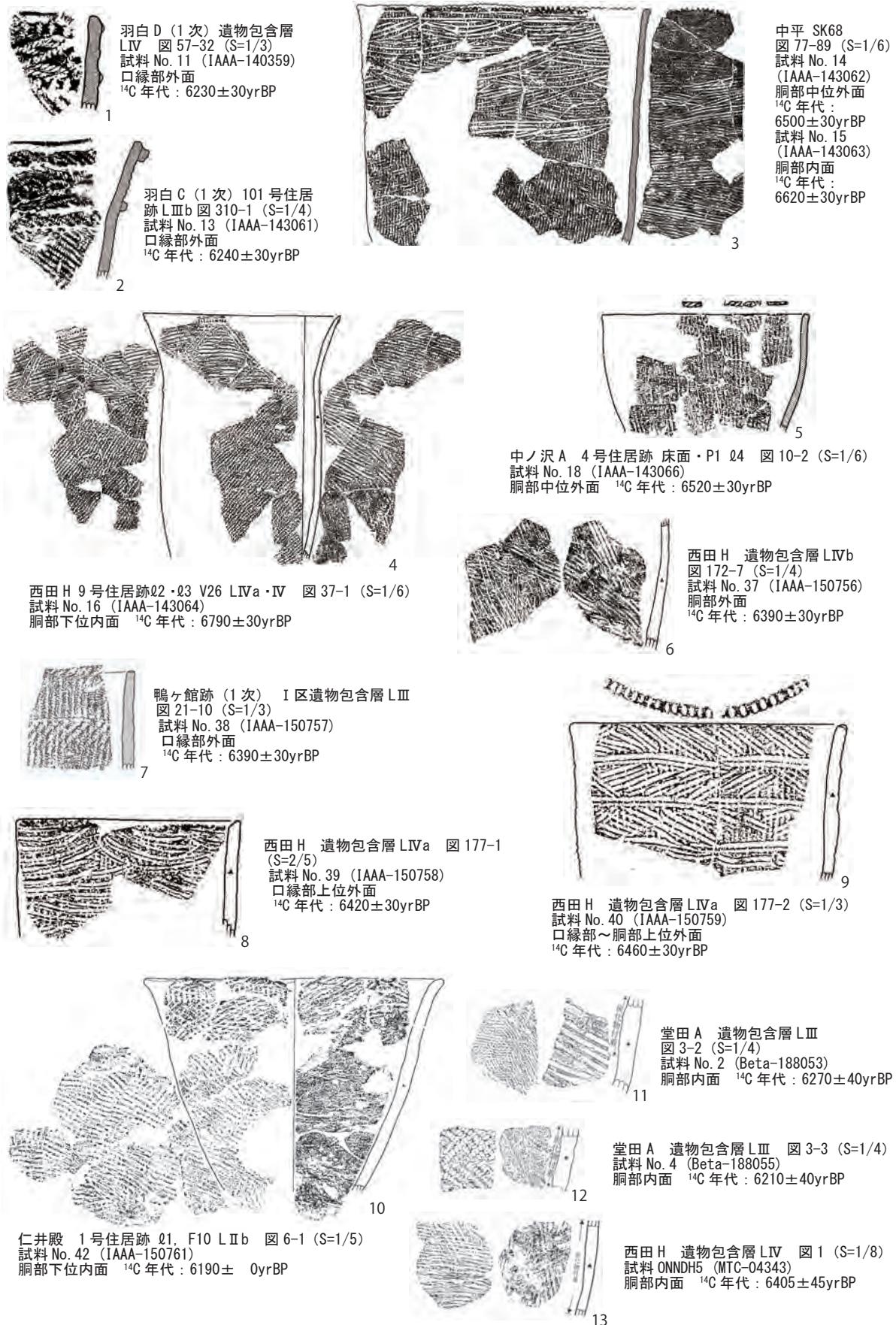
1号住居跡の①からまとまって出土した深鉢(第3図10)の胴部下位内面に付着する炭化物(試料 No. 42)が測定された。この土器の外面と口縁部内面には撚糸文が施される。同じ住居跡の①からは撚糸文を地文に半截竹管の沈線文が施される大畠G式に属する土器などが出土している。

また、この住居跡の床面直上から出土した炭化材と炭化種実の年代測定が行われている(発掘調査報告書掲載のパリノ・サーヴェイ報告)。炭化材は β 線計数法によるため年代値の誤差が大きく、また古木効果もあり得るため、ここでは触れない。AMS 法によって測定された炭化種実(試料 FB. A02・04、IAAA-11594)の¹⁴C 年代は 6190 ± 40 yrBP で、土器付着炭化物 No. 42 とほぼ同年代を示す。

⑦羽白C遺跡

福島県相馬郡飯舘村大倉字羽白に所在し、早期末葉から前期前葉の竪穴住居跡や遺物包含層等が検出されている(山内・松本ほか1988など)。

101号住居跡から出土した深鉢(第3図2)の口縁部外面に付着する炭化物が測定された(試料



第3図 阿武隈山地周辺遺跡出土土器付着炭化物の放射性炭素年代測定事例

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

No. 13)。この土器は横位隆帯で区画された口縁部に撚糸圧痕文が施される。蕨手状の部分や同一個体の破片(図示せず)には梯子状の意匠が確認され、前期初頭の花積下層II式に位置づけられる(澁谷1995)。羽白C遺跡ではほかにも前期初頭の試料が測定されている。

⑧羽白D遺跡

福島県相馬郡飯館村大倉字羽白に所在し、前期初頭頃の堅穴住居跡や遺物包含層等が検出されている(鈴鹿ほか1987など)。

1次調査の遺物包含層LIVから出土した深鉢(第3図1)の口縁部外面に付着する炭化物が測定された(試料No. 11)。この土器は口縁部の隆帯で区画された中に撚糸圧痕による蕨手状、梯子状の文様が施され、前期初頭の花積下層II式に位置づけられると見られる(澁谷1995)。羽白D遺跡ではほかにも前期初頭の試料が測定されている。

⑨土浮貝塚

宮城県角田市小坂字土浮に所在し、前期初頭の貝塚が調査された(須藤ほか編2008)。南区123層(第V層群)から出土した炭化材(DB93-123、Beta-102734)が測定され、 6040 ± 40 yrBPという¹⁴C年代が示されている。この試料は仙台湾周辺の上川名式第2段階に位置づけられ(早瀬2017)、花積下層III式(澁谷1995)に併行すると見られる。本来ならば阿武隈山地周辺の当該期試料を用いるべきだが、筆者自身が検討不十分のため、位置づけを確実に把握しているこの試料を用いる。

(2)年代測定結果と土器に関する検討

①日向前B式と大畠G式に関連する試料の年代

第4図中段は日向前B式と大畠G式に関連する試料を中心に較正年代を示している。従来の編年観では大畠G式が古く、日向前B式が新しいとされるが、ここに示した測定結果では全体的に日向前B式に関連する試料の方が古くなっている。日向前B式に関連する試料6点の年代値はおおむね近く、重なり合う範囲も見られるが、確率分布のピークが高い範囲で見ると、中平遺跡のNo. 14、15と中ノ沢A遺跡のNo. 18の3点(以上を較正年代の1群(7500~7300cal BP頃)とする。ただし上述の通り、中平遺跡のNo. 15は妥当でない可能性がある)と、鴨ヶ

館跡のNo. 38と西田H遺跡のNo. 39、40の3点(2群、7400~7250cal BP頃)に分かれる。大畠G式に関連する試料9点の較正年代は、全体的に近いとも言えるが、古いものと新しいものはほとんど重ならない。ピークの高い範囲で見ると、西田H遺跡のNo. 37とONNDH 5、堂田A遺跡のNo. 3の3点が日向前B式に関連する先の2群とほぼ同年代を示すため、合わせて2群とする。そして堂田A遺跡のNo. 2、上田郷VI遺跡のNo. 1~3の4点(3群、7300~7050cal BP頃、上田郷VI遺跡のNo. 7も含む)、仁井殿遺跡のNo. 42とFB. A02・04の2点(4群、7150~7000cal BP頃)に分かれる。非結束羽状縄文の堂田A遺跡No. 4も4群とほぼ同年代となっている。

②日向前B式関連試料の年代値と土器の特徴

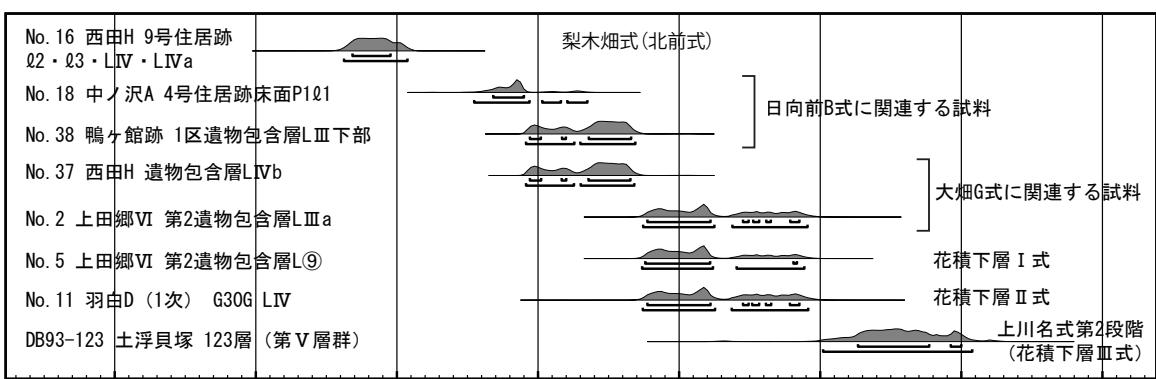
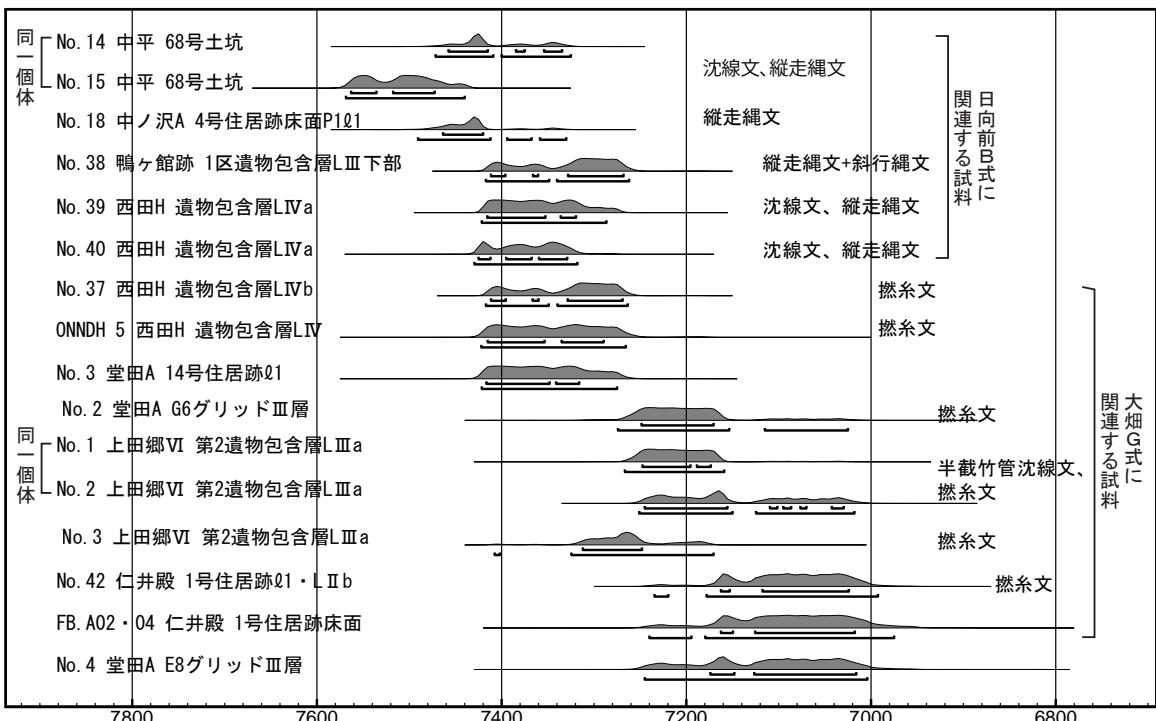
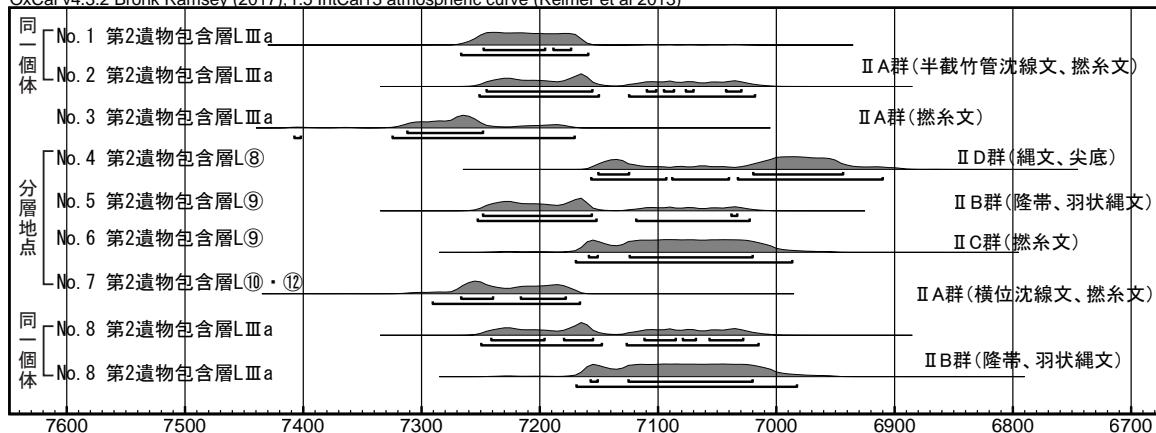
較正年代値で1群とした試料が採取された土器は、いずれも縦走縄文が施され、中平遺跡の第3図3には弧状の沈線文が加えられる。中平遺跡の土器は土坑から1個体がまとめて出土、中ノ沢A遺跡の方は住居跡から撚糸文の深鉢とともに出土している。個体数が少なく、土器群としての組成を検討するには限界のある資料である。

2群に属する3点の土器もすべて縦走縄文で、西田H遺跡の第3図8には弧状の沈線文が施され、中平遺跡の第3図3に共通する特徴を持つ。西田H遺跡で日向前B式として捉えられたIX群2類には、このような弧線の文様と、第3図9のように横線の区画に斜線を充填するもの、横線がなく、斜線を連続させるものなどがある。鴨ヶ館跡のI区遺物包含層でも、上述の通り横線の区画に斜線を充填する土器が出土している。

このように較正年代値の2群に属し、日向前B式に関連する土器群には共通点が認められる。1群とも共通点があり、これらを日向前B式とされる土器群の中の一つのまとまりとして把握できる可能性がある。

他方、日向前B式とされる土器群の中でこれらと異なる特徴を持つ資料は、日向前遺跡B地点の土器、上田郷VI遺跡第2遺物包含層L⑫の第2図27などがある。まとまりとしては捉えられないが、これらのうち上田郷VI遺跡の土器については、同じ遺物包含層の下層から出土し、考古学的には同時期と

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017): r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



Calibrated date (calBP)

上段：上田郷VI遺跡出土試料 中段：日向B式、大畠G式に関連する試料 下段：早期末葉・前期初頭（前後含む）の試料
試料ONNDH 5（西田H）、No. 3（堂田A）、FB. A02・04（仁井殿）DB93-123（土浮貝塚）は遺構や堆積層出土炭化物、他はすべて土器付着炭化物

第4図 阿武隈山地周辺遺跡における縹文時代早期末葉・前期初頭の放射性炭素年代測定事例

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

して捉えられる試料 No. 7 (第 2 図 25) などと同年代と見なせば、較正年代値の 3 群に相当し、西田 H 遺跡などの日向前 B 式とされる土器群よりも新しい可能性がある。他の土器も含め、日向前 B 式とされる土器には複数のグループが存在し、年代差があることが示唆される。

③大畠 G 式に関連する試料の年代値と土器の特徴

較正年代値で 2 群とした試料は、西田 H 遺跡の遺物包含層から出土した撚糸文の土器 2 点から採取された No. 37、ONNDH 5 と、堂田 A 遺跡の 14 号住居跡出土炭化物 No. 3 である。西田 H 遺跡の土器は IX 群 1 類 (大畠 G 式) に属し、同類の土器には半截竹管の沈線文で格子目や鋸歯状などの文様が施される。堂田 A 遺跡 14 号住居跡の土器は破片で特徴を把握しにくいが、半截竹管の沈線文による横線、縦線、斜線などが見られる。

較正年代値の 3 群の試料は、堂田 A 遺跡の遺物包含層で出土した撚糸文の土器から採取された No. 2 と、上田郷 VI 遺跡の撚糸文や半截竹管の沈線文の土器から採取された No. 1 ~ 3 ・ 7 である。上田郷 VI 遺跡では上述の通り大畠 G 式と花積下層 I 式に関連する土器群が一体となって推移する状況が見られるが、その中で大畠 G 式と共通点の多い土器の特徴を抽出すると、撚糸文を地文とし、半截竹管の沈線文で格子目や弧線が施され、刺突文も併用される。第 1 図 1、5 のように区画内で弧線を向かい合わせる意匠が目につく。堂田 A 遺跡の大畠 G 式に関連する土器群は、撚糸文を地文とするものが多いとされ、半截竹管の文様は格子目、鋸歯状、弧線などを組み合わせる。沈線文の意匠として方形の区画内に弧線を向かい合わせに配するものが見られ (報告書第 48 図 1)、上田郷 VI 遺跡と共に通する。この意匠は、西田 H 遺跡の IX 群 1 類には少量のみ認められ、大畠貝塚 G 地点では明確には認められない。

較正年代値の 4 群とした試料は、仁井殿遺跡 1 号住居跡から出土しており、同じ住居跡から出土した破片には半截竹管の縦線、弧線等が見られる。また、遺物包含層では方形区画に弧線や X 字状の沈線が加えられる土器などが出土している。

このように、大畠 G 式に関連する土器群には西田 H 遺跡や大畠貝塚 G 地点などの土器群と、上田郷 VI 遺跡などの土器群の間に、不十分ながら異なる特徴

を指摘することができ、年代差がある可能性がある。

④早期末葉・前期初頭土器群の変遷に関する予察

上述①～③の議論をまとめ、それらの代表的な試料に前後の時期の試料を加えた較正年代のマルチプロット図を第 4 図下段に示す。

日向前 B 式や大畠 G 式に先行する土器群としては諸説あるが、ここでは常世 2 式、梨木畠式、北前式とされる土器群が少なくとも併行する時期のあるものとして捉える。北前式に近いとされる西田 H 遺跡の VII 群 1 類に属する土器 (第 3 図 4) から採取された試料 No. 16 の年代値は、今回取り上げた日向前 B 式や大畠 G 式に関連する試料よりも明らかに古い。いずれの土器群もその年代幅を捉えるには測定事例が不足しており、ここに見られる年代差にどのような土器群が対応するのか現状では不明である。

日向前 B 式とされる土器群の中には複数のグループがあり、その中で中平遺跡、西田 H 遺跡、鴨ヶ館跡などの土器群が一つのまとまりとして捉えられることが示唆された。これらが日向前 B 式に関連する土器群の中で現状では古い様相を持つグループと考えられる。これらとは異なる特徴を持つ上田郷 VI 遺跡の土器は、より新しい様相を示す可能性が高い。しかし、なお年代値に結び付けられないグループがあり、全体像は不明である。

大畠 G 式とされる土器群についても、文様意匠等から少なくとも 2 つのグループの存在を指摘できる。西田 H 遺跡や大畠貝塚 G 地点などのグループは、この土器群の中では古く、年代的には西田 H 遺跡などの日向前 B 式に関連する土器群と同時期と見なされる。上田郷 VI 遺跡の土器群はそれより新しいと考えられ、花積下層 I 式と併存する。仁井殿遺跡の試料も上田郷 VI 遺跡と同等か、やや新しい年代を示した。これらの土器群の差異について、ここでは断片的な指摘に留まっており、上田郷 VI 遺跡と他遺跡の関係など、検討を深める必要がある。

6 まとめ

ここまで、研究史を振り返って課題を指摘した後、年代測定結果によって示唆された土器の年代差を手掛かりに、不十分ながら土器の変遷を検討した。以下、成果と課題をまとめる。

(1) 上田郷VI遺跡第II群土器の位置づけ

土器の間に見られる要素の共有関係や、第2遺物包含層での層位的出土状況、さらに年代測定の結果により、第II群土器の漸移的な変遷が明らかになった。層位によっておおよそ2段階に分けて捉えられ、その前半では大畠G式とされる土器群が主体となるが、日向前B式の特徴を持つ土器も少量伴い、さらに花積下層I式に属するものも併存する。後半には花積下層I式(II式を含む可能性あり)に属する土器が主体となり、非常に多様な要素とその組み合せが見られる。

この土器群については、時期の異なる土器が混在した状況と捉える見解(佐藤2001)もあるが、後述する大畠G式と日向前B式の関係からも、II群土器を従来の型式の枠組みで区分して捉えることには問題がある。

漸移的に変遷し、複雑な内容を持つこの土器群の編年的位置づけについては、なお検討の余地があるが、花積下層I式という新しい様相の出現を重視しここでは第II群土器全体を前期初頭と捉える。大畠G式、日向前B式とされる土器群が前期初頭まで継続する場合があると見なされる。

(2) 大畠G式と日向前B式の関係

両者の関係については、大畠G式が古く、日向前B式が新しいとする編年観がこの地域では主流であった(中村1983・1986、山内1983、鈴鹿1989、佐藤1989、堤2000aなど)。この考え方は、先に述べたように当時得られていた資料を吟味し、合理的に変遷を理解した結果であったが、他方で別の着眼点から両者の関係を地域差と見なす見解も示されていた(相原1990)。

この時期の資料には良好な一括資料が限られるという制約もあるが、年代測定結果という新たな証拠を盛り込んで現在得られている資料を整理すると、大畠G式と日向前B式には各々複数のグループが存在し、それらの時間幅の中で両者がかなりの期間併行する可能性が示された。

この場合、併行すると見なす2種類の土器群が各遺跡で必ずしも一定の形で共伴しないという点が問題となる。本稿では土器の検討がかなり断片的なも

のにとどまっており、この問題には答えられていない。今後各遺跡の土器の特徴、出土状況、遺跡の分布などを検討する中で具体的に論じたい。

謝辞

本稿は、福島県文化財センター白河館まほろんにおける収蔵資料年代測定事業の成果に基づき、同館の方々が抱いた土器編年に関する問題意識が出発点となっている。この取り組みを主導された同館の本間宏氏、年代測定事業を一貫して担当された三浦武司氏をはじめとする職員の皆様、そして会社での年代測定業務を通じて本研究を支えて下さった株式会社加速器分析研究所の方々に感謝申し上げる。

【引用参考文献】

- 山内清男 1929 「関東北に於ける織維土器」『史前学雑誌』 1 - 2 pp. 1-30
山内清男 1930 「織維土器に就いて 追加第二」『史前学雑誌』 2 - 1 pp. 73-75
山内清男 1937 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』 1 - 1 pp. 29-32
江坂輝弥 1956 「III 各地域の縄文式土器 東北」『日本考古学講座3 縄文文化』 河出書房 pp. 91-124
伊東信雄 1957 「古代史 第一章 縄文式文化時代」『宮城県史1 (古代史・中世史)』財団法人宮城県史刊行会 pp. 3-51
永山亘 1964 「金坂遺跡」 福島県編『福島県史 第6巻 考古資料』福島県 p22
福島県編 1964 『福島県史 第6巻 考古資料』福島県
林謙作 1965 「II 縄文文化の発展と地域性 2 東北」『日本の考古学II 縄文時代』 河出書房新社 pp. 64-96
永山慎一 1966 「いわき市好間町榊小屋字生木葉遺跡発見の早期縄文式遺物について」『考古』 14 pp. 1-7
中村五郎 1969 「第二章 縄文時代 第二節 遺跡と遺物 二 遺物」福島県編『福島県史 第1巻 原始・古代・中世』福島県 pp. 51-118
福島県編 1969 『福島県史 第1巻 原始・古代・中世』福島県
井上国雄 1973 「福島県塙町南原遺跡とその出土遺物」『福島考古』 14 pp. 86-96
馬目順一・原川雄二・山内幹夫 1975 『大畠貝塚調査報告』いわき市教育委員会
井上国雄 1977 「久慈川上流域における縄文時代早期後半の土器編年」『福島考古』 18 pp. 1-19
藤田定興・中村五郎 1979 「白河地方の古式縄文土器」『福島考古』 20 pp. 25-42
桑山龍進 1980 『菊名貝塚の研究』
高橋雄三 1981 「花積下層式土器の研究 一関東・東北南部における縄文前期社会の成立」『考古学研究』 28-1 pp. 30-54
渋谷昌彦 1983 「神ノ木台・下吉井式土器の研究 ーその型式内容と編年的位置についてー」『小田原考古学研究会報』 11 pp. 1-45
中村五郎 1983 「東北地方南部の縄文早期後半の土器編年試論」『福島考古』 24 pp. 131-140
山内幹夫 1983 「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について 一牡丹平2群1類土器を中心としてー」『しのぶ考古』 8 pp. 3-20
神奈川考古同人会 1984 『神奈川考古』 18 (シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題)
渋谷昌彦 1984 「花積下層式土器の研究 一側面圧痕文土器を中心としてー」『丘陵』 11 pp. 1-25

阿武隈山地周辺における早期末葉・前期初頭縄文土器編年の再検討 —上田郷VI遺跡出土土器とまほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定を通して—

- 相原淳一 1985「縄文条痕土器群の諸段階について 一特に、花積下層一上川名上層式の成立をめぐる層位学的再検討ー」『赤い本』2 pp. 23-45
- 中村五郎 1986「東北地方の古式縄紋土器の編年 一福島県内の資料を中心にー」『福島の研究1 地質考古篇』清文堂 pp. 115-142
- 鈴鹿良一ほか 1987「羽白D遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告X（福島県文化財調査報告書第183集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp. 137-314
- 山内幹夫・松本茂ほか 1988「羽白C遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII（福島県文化財調査報告書第194集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp. 1-48
- 佐藤典邦 1989「大畑G式以後（上）」『踏査』8 pp. 5-13
- 鈴鹿良一 1989「福島県の早期後半から前期初頭の土器群について」『第4回縄文文化検討会』
- 本間宏ほか 1989「東北横断自動車道遺跡調査報告4 中ノ沢A遺跡（福島県文化財調査報告書第218集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 山内幹夫ほか 1989「国當請戸川農業水利事業遺跡調査報告 中平遺跡（福島県文化財調査報告書第208集）』福島県教育委員会
- 相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心として」『考古学雑誌』76-1 pp. 1-65
- 石本弘ほか 1993「鴨ヶ館跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告21（福島県文化財調査報告書第292集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp. 130-283
- 吹野富美夫 1993「茨城県における縄文時代早期終末から前期初頭土器群について 遠下遺跡第5群土器の再検討ー」『研究ノート』3 財団法人茨城県教育財団 pp. 107-118
- 佐藤典邦 1994「福島県の早期終末から前期初頭の様相」『第7回縄文セミナー 早期終末から前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会 pp. 375-421
- 縄文セミナーの会編 1994『第7回縄文セミナー 早期末葉・前期初頭の諸様相』
- 猪狩忠雄ほか 1995「中倉B遺跡」『東北横断自動車道関連遺跡I（いわき市埋蔵文化財調査報告第40冊）』いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団 pp. 9-150
- 瀧谷昌彦 1995「花積下層式土器研究史と福島県内資料の型式分類」『みちのく発掘 一菅原文也先生還暦記念論集ー』同論集刊行会 pp. 79-119
- 中村五郎 1997「福島県の縄文早期土器研究の諸問題」『福島考古』38 pp. 15-32
- 堤仙匡 1998「『大畑G式土器』の再検討 一福島県における縄文早期末土器編年確立への予察ー」『いわき地方史研究』35 pp. 1-7
- 本間宏ほか 1999「上田郷VI遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告18（福島県文化財調査報告書第356集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp. 95-236
- 堤仙匡 2000a「『日向B式期』土器の検討」『—和田文夫先生頌寿記念献呈論文集— 民俗と考古の世界』和田文夫先生頌寿記念論文集刊行会 pp. 107-134
- 堤仙匡 2000b「東関東における縄文早期末葉から前期初頭の土器 一特に茨城県北部の資料“隆帯を持つ土器”を中心としてー」『史峰』27 pp. 1-10
- 井憲治ほか 2001「上田郷VI遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告22（福島県文化財調査報告書第375集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター pp. 65-210
- 佐藤典邦 2001「大畑G式土器研究へのコメント」『史峰』28 pp. 21-33
- 堤仙匡 2001「重層弧文について 一縄文早期末葉土器に関する側面ー」『いわき地方史研究』38 pp. 1-12
- 堤仙匡 2004「上田郷VI遺跡出土縄文早期から前期の土器について」『いわき地方史研究』41 pp. 1-8
- 能登谷宣康・国井秀紀ほか 2004「仁井殿遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17（福島県文化財調査報告書第416集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団 pp. 17-82
- 山元出ほか 2005「西田H遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告3（福島県文化財調査報告書第424集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団 pp. 103-420
- 吉野滋夫・山元出ほか 2005「堂田A遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告3（福島県文化財調査報告書第424集）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団 pp. 11-102
- 谷藤保彦 2007「茨城県における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学の深層 一瓦吹堅先生還暦記念論文集ー』同論文集刊行会 pp. 19-28
- 金子直行 2008「条痕文系土器」小林達雄編『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp. 138-145
- 須藤隆・富岡直人・早瀬亮介編 2008「阿武隈川流域における縄文貝塚の研究 一土浮貝塚ー」（角田市文化財調査報告書第33集）東北大学大学院文学研究科考古学研究室・角田市教育委員会
- 岡田康博 2009「宮城県室浜貝塚の資料」『宮城県室浜貝塚資料・宮城県福浦島貝塚資料・宮城県橋本町貝塚資料 山内清男考古資料17（奈良文化財研究所史料第84冊）』奈良文化財研究所 pp. 6-42
- 相原淳一 2015「東北地方における最古の土器の追究 1914.1.28-2011.3.11』纂修堂
- （公財）福島県文化振興財団・（株）加速器分析研究所 2016「まほろん収蔵資料のAMS年代測定結果報告（平成26・27年度分）」『福島県文化財センター白河館研究紀要2015』 pp. 21-42
- 三浦武司 2016「縄文時代早期から羽状縄文土器成立期の¹⁴C年代測定 一福島県文化財センター白河館収蔵資料からー」『福島県文化財センター白河館研究紀要2015』 pp. 43-56
- 小林謙一 2017「縄文時代の実年代 一土器型式編年と炭素14年代ー」同成社
- 早瀬亮介 2017「仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異」『物質文化』97 pp. 35-57
- 三浦武司・（株）加速器分析研究所 2019「まほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定及び窒素・窒素安定同位体比分析の5か年の総括報告」『福島県文化財センター白河館研究紀要2018』 pp. 13-58
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon, 19-3, pp. 355-363
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon, 51-1 pp. 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon, 55-4, pp. 1869-1887

沼沢火山噴火の影響からみる 縄文時代前期末葉と中期初頭の遺跡分布

三浦 武司

要 旨

本論は、縄文時代前期末葉に噴火した沼沢火山が会津地域の縄文人に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。地質学や火山学の研究成果を援用し、沼沢火山噴火のメカニズムや噴火が及ぼす地域環境への影響を通して、縄文時代前期末葉から中期初頭の会津地域の遺跡の増減や分布を明らかにした。その結果、沼沢火山噴火後には、火碎流到達地域を含め、会津地域一帯で遺跡の減少が確認できた。

また、これまであまり検討されてこなかった沼沢火山噴火で形成された堰止湖の越流と決壊に伴うラハールなどの噴火後のイベントが遺跡に与えた影響についても考察した。その結果、堰止湖の決壊による段丘および平坦面の形成と氾濫地域の環境回復により、中期初頭には遺跡の増加が認められるなど、中期中葉の大規模集落へ発展する萌芽が見て取れた。

キーワード

縄文時代前期末葉～中期初頭 会津地方 沼沢火山噴出物

1 はじめに

2018年度に当館で開催した企画展「はま・なか・あいづ再生史」では、津波・洪水・火山災害などの自然災害に遭った古代の人々が、地域をそして自らの生活をいかに再生してきたのかを文化財を通して読み解き、歴史に学ぶことの大切さと、文化財を後世に伝える意味を問う展示を開催した。その企画展において、縄文時代前期末葉に起こった沼沢火山^{註1}による火山災害が会津地域に及ぼした影響を紹介するコーナーを設けた。この展示では、沼沢火山噴出物^{註2}と遺跡との関係性が良好に認められた会津美里町鹿島遺跡(福島県文化センター1991a)と、磐梯町・猪苗代町に広がる法正尻遺跡(福島県文化センター1991b)を取り上げた。鹿島遺跡は火碎流堆積物^{註3}によって飲み込まれた遺跡である。一方、法正尻遺跡は火碎流の直撃は受けずに、軽石や火山灰の降下が認められたのみの遺跡である。

鹿島遺跡は、会津美里町を北流する宮川の左岸、標高330mに立地する。沼沢火山から直線距離で約21km離れている。遺跡は、40～280cmの火碎流堆積物層(LIV)に覆われている(写真1・2)。火碎流堆積物で埋没した住居内からは、大木6式土器が出土している。発掘調査の結果、鹿島遺跡に住んでいた縄文人は、沼沢火山噴火時にはすでにムラを遺棄し

ていたことがわかっている。噴火により、豊かな森林は灰燼に帰し、森林植生はもちろん、河川の水質や動物を含めた生態系への影響は甚大だったはずで



写真1 鹿島遺跡4号住居跡断面



写真2 鹿島遺跡土層断面

ある。以後、鹿島遺跡では大木8b式期までのおよそ500年間にわたって、人間活動の痕跡は認められない。

法正尻遺跡は、約5万年前の磐梯山の噴火に伴う山体崩壊によりできた岩なだれ地形上の標高580mに立地する遺跡である。沼沢火山から直線距離にして、約40km離れている。そのため、沼沢火山噴火の軽石・火山灰の降下のみが認められた遺跡で、前期から中期末葉まで連綿と続いた福島県を代表する集落遺跡である。

この展示の企画は、火山噴火の影響が、遺跡の立地や距離といかなる関係があったのかを考える機会となった。そして、沼沢火山噴火の前後でどのように遺跡数が変化し、どの地域でどの時期から人間の活動痕跡が再び認められるのかなどの新たな課題が見えてきた。

本論は、それらの課題を解明すべく論じたものである。沼沢火山の噴火イベントを通して、縄文時代前期末葉から中期初頭の会津地域の遺跡の増減や分布を概観する。また、縄文社会に与えた影響については、火碎流堆積物による直接的な影響と、火碎流堆積物によって形成された堰止湖の越流と決壊が引

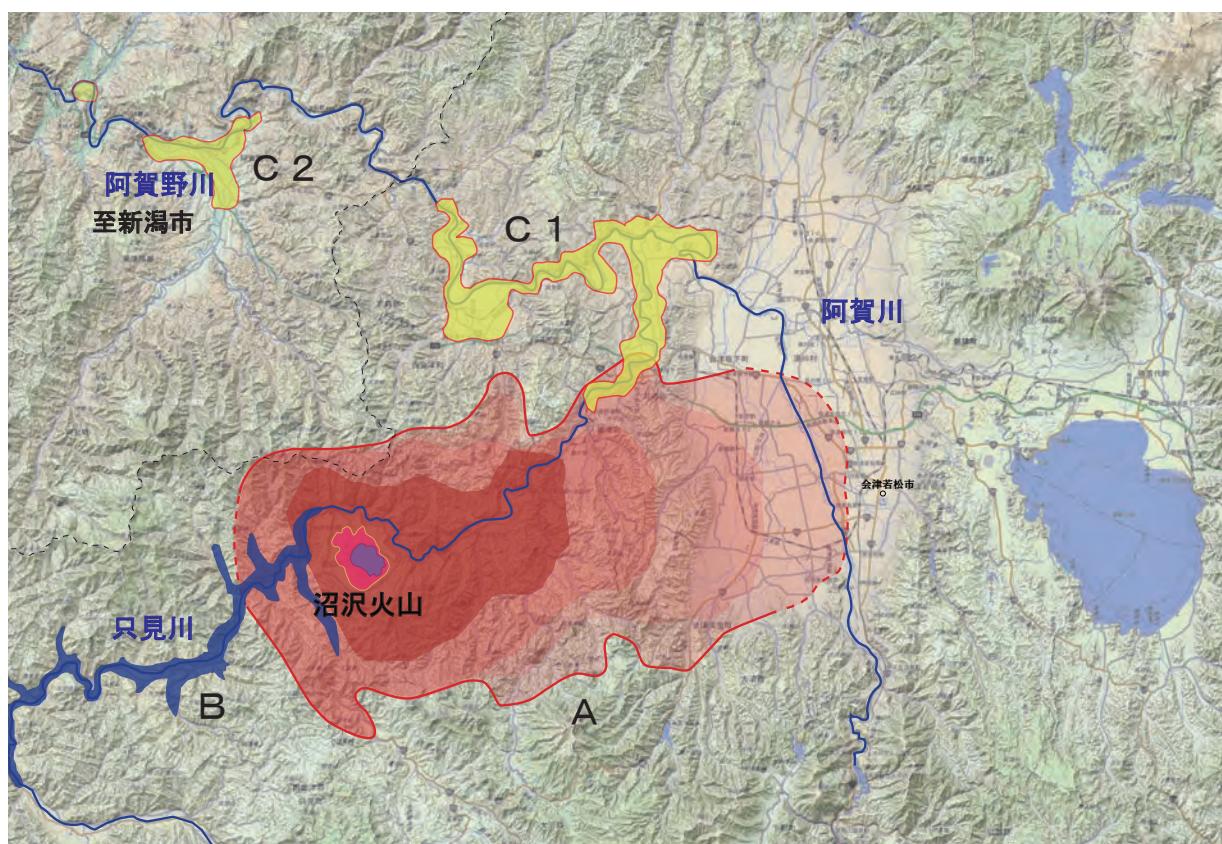


写真3 法正尻遺跡全景
き起こす洪水による火山噴火の間接的な影響について、地質学や火山学の研究成果を援用し考察する。

2 沼沢火山の概要

日本列島は「火山列島」でもある。日本では2017年の時点での111の活火山^{註4}が火山予知連絡会および気象庁により定められている。県内には5つの活火山^{註5}が存在する。沼沢火山は、その1つにあたる。沼沢火山は、福島県大沼郡金山町の会津盆地の南西山地に位置する。

沼沢火山の噴火口の現況は、水を貯めたカルデラ湖となっている。沼沢火山のカルデラは、直径約2km、湖面標高475m、深さ96mを測る。火口の周囲



第1図 沼沢火山火碎流・堰止湖・洪水範囲想定図

には、4万3千年前の噴火による溶岩ドームが外輪山を形成し、火碎流起源の台地が分布する。沼沢火山の形成は、約11万年前に遡るとされ、火山堆積物の層序から大きく7回^{註6}の噴火痕跡が認められている(山元2003)。

直近の噴火は、縄文時代前期の終わり頃で沼沢湖火碎物を形成したイベントである。この噴火による沼沢湖火碎物については、その構成物の特徴と堆積構造を基に、4つの噴火ユニットが把握されている(山元1995)。山元の論考をもとに、このユニットについて以下に簡潔にまとめた。

ユニットI：広域拡散型の流速100m/sを超えるような火碎流を噴出した火碎流堆積物である。第1図には、地質調査をもとにした山元の推定範囲を利用して作成したものを図示した。第1図でAとした範囲は、火碎流堆積物が堆積した想定範囲を示す。火碎流堆積物は、屹立する1,000m前後の山々を越えて、または谷筋を縫うようにして、会津盆地南半を覆っている。さらに、噴火口から約30km離れた阿賀川流域付近まで達したと考えられている。また、火碎流は近接する只見川を堰き止め、只見川上流域に堰止湖(第1図B)を発生させた。

ユニットII：軽石・火山灰が広範囲に降下した降下軽石堆積物である。発泡した軽石は、沼沢火山より北東方向に広がり、只見川中流域を覆い尽くし



写真4 沼沢湖全景

た。主に東方に拡散し、中通り地方を超えて浜通り地方、さらには太平洋にまで達していることが確認されている(澤井2010)。

ユニットIII：マグマ水蒸気爆発による小規模な噴火が連続発生して形成された、マグマ水蒸気噴火堆積物である。

ユニットIV：降下スコリア堆積物からなり、この噴火を最後に火山活動は終息し、現在に至る。

火山噴火の規模については、噴出物の総堆積量に基づく火山爆発度指数(Volcanic Explosivity Index=VEI) (Newhall, C. G. and Self, S 1982)で表すことができる。VEI^{註7}は、1回の噴火におけるマグマの噴出量に着目して噴火規模を推定するものであり、0～8までの9段階に区分されている(第2

VEI	0	1	2	3	4	5	6	7	8
噴出量	$<10^4 \text{ m}^3$	$10^4 \sim 10^6$	$10^6 \sim 10^7$	$10^7 \sim 10^8$	$10^{8 \sim 9}$ = 0.1~1 km ³	$10^{9 \sim 10}$ = 1~10 km ³	$10^{10 \sim 11}$ = 10~100 km ³	$10^{11 \sim 12}$ = 100~1000 km ³	$10^{12 \sim}$ = 1000~ km ³
噴煙高度	$< 0.1 \text{ km}$	$0.1 \sim 1 \text{ km}$	$1 \sim 5 \text{ km}$	$3 \sim 15 \text{ km}$	$10 \sim 25 \text{ km}$	$> 25 \text{ km}$			
継続時間			$< 1 \text{ 時間}$		$12 \sim \text{ 時間}$				
表現	非爆発的	小さな	中ぐらいの	中～大きな	大きな	極めて大きな			
定性的表現	穏やかな・流出を伴う		爆発的な		巨大な・劇的な				
				激しい・凄まじい					
噴出様式	ストロンボリ式		プリニー式						
	ハワイ式		ブルカノ式		ウルトラプリニー式				
噴出形態	溶岩流	爆発・火碎流		水蒸気爆発					
		溶岩ドーム・泥流							
対流圏への注入	無視できる	若干	中ぐらい	かなり					
成層圏への注入			なし	あり得る	確実に	相当量			

Newhall, C. G., and S. Self (1982), The volcanic explosivity index (VEI) an estimate of explosive magnitude for historical volcanism, J. Geophys. Res., 87(C2), 1231-1238.

第2図 火山爆発指数

図)。縄文時代前期末の沼沢火山の噴火のVEI レベルは、VEI 5に位置付けされている^{註8}。このレベルの噴火は看過できない規模であり、会津地域に暮らしていた縄文人にとって大きな影響を及ぼした自然災害であったはずである。

3 沼沢火山噴火前後の遺跡分布

本章では、沼沢火山の噴火イベントの中でも火砕流を伴ったユニット I を形成した噴火イベントが引き起こした縄文人への影響について考える。この火山噴火は、会津地域の縄文人の生活にどのような影響を及ぼしたのだろうか。沼沢火山噴出物との関係性が明瞭な遺跡で、かつ噴火以前の土器型式である大木 6 式土器の前半期の遺跡から、その影響について捉えていきたい。

本論では、大木 6 式土器の細分編年を利用し、沼沢火山の噴火の年代観を考える指標とする。大木 6 式土器の研究は、松田光太郎 (2003)、今村啓爾 (2006 a) らにより細分案が示されている。また、今村編年をベースとして、東北地方の該期の編年案を組み上げた小林圭一 (2017)、相原淳一 (2018) の論考もある。今村編年では、大木 6 式土器を概期の中部地方細分編年に對比させつつ 5 期に細分している。松田編年においても大木 6 式土器を古・中・新段階に分け、中段階はさらに古相と新相を分けた案を示している。両氏の細分案は、おおむね類似するが、今村編年の 5 期の一部は、松田編年においては大木 7 a 式に含まれている。本論では、大木 6 式土器の細分について、今村編年を主に利用する。

(1) 噴火以前に利用された大木 6 式土器

火砕流堆積物に覆われた痕跡が認められた会津盆地西縁の 3 つの遺跡（上道上 B 遺跡、油田遺跡、鹿島遺跡）、軽石や火山灰の降下は認められるが火砕流の影響を受けなかった 1 遺跡（法正尻遺跡）から出土した土器について概観する。第 3 図には、沼沢火山噴火以前に利用されていた大木 6 式 1 ~ 2 期の土器の一部を図示した。

①上道上 B 遺跡出土土器

第 3 図 1 ~ 7 には、会津美里町上道上 B 遺跡（会津高田町教育委員会 1983）出土土器を図示した。上道上 B 遺跡は、宮川によってできた扇状地の緩斜

面に立地する。沼沢火山から直線距離で約 21km 離れて位置する。基本土層IV層が同遺跡の火砕流堆積物と考えられ、IV層を取り除いた V 層上面より図示した 7 個体の土器がまとめて出土している。鉢形の器形 (2・3・4・7)、深鉢形の器形 (1・5・6) がある。3 は器形や文様の特徴から大木 5 式の特徴を有している過渡的な土器と今村は指摘している (今村 2006b・2006c)。口縁部は双頭状の波状口縁をもつもの (1・3) や、波頂部が 5 単位となるもの (4)、平縁であるが部分的に小波状となるもの (5) がある。波底部にも粘土粒を貼付するもの (3)、棒状工具による刻みを施文するもの (1) がある。口縁部と胴部の境には、刻みを入れた隆帯が横位に巡るもの (2・5・7) が見られる。文様は、口縁部の上半のみで、口縁部下半は無文となる。

これらの土器群は、火砕流堆積物である IV 層の下よりまとめて出土した状況から、一括資料と報告されている。今村編年の大木 6 式 1 期に含まれる土器群である。

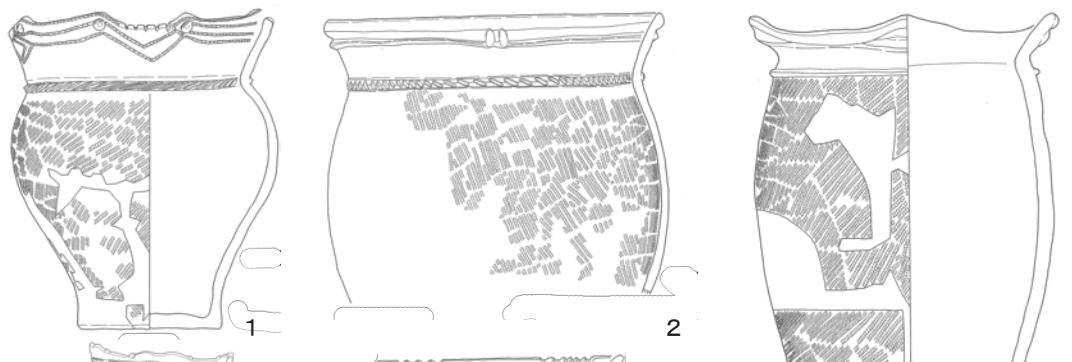
②油田遺跡出土土器

第 3 図 8 は、油田遺跡（会津美里町教育委員会 2007a）出土土器である。油田遺跡は、宮川の左岸河岸段丘上標高 220 m 付近に立地する。沼沢火山から直線距離にして約 23km 離れている。VI 層が火砕流堆積物であり、圃場整備の際に一部削平されているが、遺跡全域に及んでいたと考えられている。火砕流堆積物の最も厚い地区では、30 cm の厚さが残る。49 軒の縄文時代に比定できる竪穴住居跡の内、3 軒 (79・80・119 号) が縄文時代前期末葉大木 6 式期の住居跡と確認できた。すべての住居跡中央にレンズ状に火砕流堆積物が堆積している。住居跡の埋没状況から、本住居跡廃絶後に自然堆積が進行し、くぼ地となった中央部に火砕流堆積物が堆積している状況を示している。これら 3 軒の住居跡はすべて同様の堆積状況を示すことから、同一時期に存在したと推定できる。

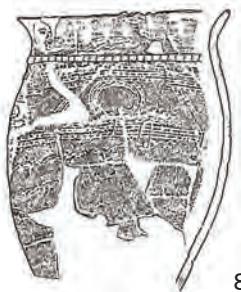
8 は炉の直上からつぶれた状態で出土した、胴部が膨らむ深鉢形土器である。口縁部には横位の縄压痕文が施文され、胴部上半には押し引き文により渦巻文が描かれる。大木 6 式 1 ~ 2 期の土器であろう。

③鹿島遺跡出土土器

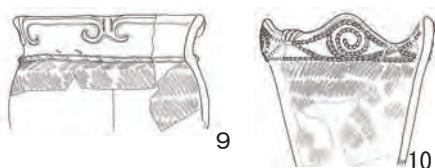
第 3 図 9 ~ 14 は、鹿島遺跡出土土器である。9



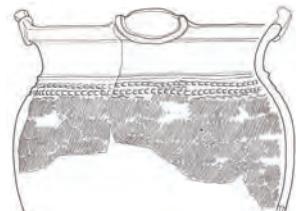
上道上B遺跡(会津美里町)



油田遺跡(会津美里町)



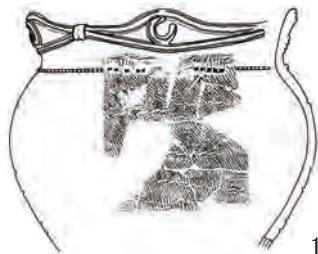
鹿島遺跡(会津美里町)



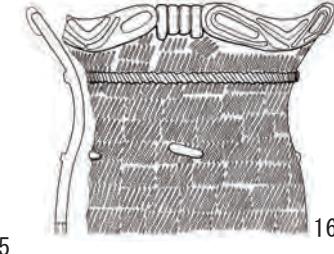
12



14



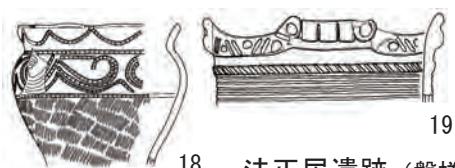
15



16

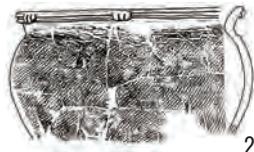


17

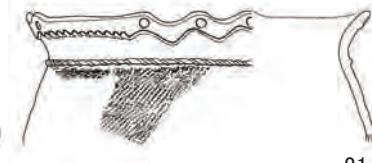


18

法正尻遺跡(磐梯町・猪苗代町)



20



21



第3図 沼沢火山噴火以前の大木6式土器

～12は、火碎流堆積物である基本土層IV層に覆われた4号住居跡から出土した一括性が高い資料である。胴部下半から底部にかけて破損しているが、鉢形の器形となるもの(9・11)、深鉢形となるもの(10・12)が出土している。口縁部文様帶には、肥厚した口縁部に双頭渦文状の隆帶を貼付するもの(9)、半截竹管工具による渦文などを施文するもの(10)、波状の粘土紐が貼付するもの(12)がある。すべて口縁部と胴部境を隆帶で分割している。中でも口縁部文様帶下半が無文になるもの(9・11・12)が目立つ。遺物包含層からも、器形が復元できた大木6式土器が出土している13・14に図示した。13は、いわゆる金魚鉢形の器形である。5単位の波頂部をもち、波頂部や波底部下位の側面には大小の円形貼り付け文が付く。口縁部と体部上半には、半截竹管工具による刻みを施した細隆起線を貼付し三角形や菱形を描く。深鉢形土器である14の口縁部と頸部には、刻みのある粘土紐が貼り付けされる。

これら鹿島遺跡出土土器は、大木6式2期の良好な資料である。住居跡の埋没状況の類似性より、前述した油田遺跡の3軒の住居とほぼ同時期に存在していた可能性が高い。住居やムラ(遺跡)を廃棄した後、ユニットI堆積層を形成した沼沢火山の噴火イベントが起ったことがうかがえる。

④法正尻遺跡出土土器

第3図15～21には、古い特徴をもった法正尻遺跡出土大木6式土器を図示した。基本土層III層が縄文時代の遺物包含層である。土質の違いから、さらにIIIa～IIIc層に3区分している。IIIc層は、軽石・火山灰堆積物は混入しないことから沼沢噴火以前の層である。遺物はほとんど出土しない。IIIB層は、暗褐色土で、軽石・火山灰堆積物を多量に含んだ層であることから、沼沢火山噴火のユニットII堆積層にあたると想定される。軽石・火山灰堆積物が部分的に認められ、一次堆積であると報告されている。主に大木6～8a式土器が出土している。IIIa層は、黒色土でユニットII由来の軽石・火山灰堆積物を多量に含んだ層である。この層からは、大木7b・8a式土器が主体的に出土していることから、再堆積層の可能性が高い層である。

また、台地上から出土した土器群と西向き斜面部から出土した土器群は、出土地点の違いおよび法正

尻遺跡と他遺跡の層位的所見や文様の特徴から、同報告ではこれを時期差と捉えている。出土地点や文様から大木6式土器を新旧に分類している。軽石・火山灰堆積物の上層からは、新しい特徴を持った大木6式土器が出土している(第4図)。

鉢形の器形となるもの(15・17・18・20・21)、深鉢形となるもの(16・19)、図示しなかつたが金魚鉢形となるものがある。口縁部と胴部または体部境には、刻みを入れた隆帶(15～17・19・21)、半截竹管工具による刻みで区分するもの(18)、綾繩文により区分するもの(20)がある。双頭状の口縁部をもつもの(16・19)や平縁(17・18・20)、波状となる(15・21)ものがある。図示した土器は、概ね大木6式2期に相当する。

これら、沼沢火山噴火以前に用いられた大木6式の土器群は、大木6式1～2期に比定される。その特徴は、器形は深鉢形土器・鉢形土器が多く、稀に金魚鉢形土器が含まれる。多くは口縁部文様帶と胴部文様帶に分かれ、これらを区分するように隆帶などが頸部に巡る。また、口縁部文様帶下半が無文部となるものが多く、文様は口縁部文様帶上半に集約される。胴部まで文様が施文されるものは少ない。粘土紐や刻みを施した粘土紐、押し引き文などにより円文、波状文、幾何学文を描くシンプルなものが多い。

会津地域においては、大木6式1～2期の土器が出土する遺跡は多く、また器形が復元できる土器が多い。

(2) 噴火以降に使用された大木6式土器

沼沢火山噴火以後に用いられた可能性の高い大木6式土器が出土した7遺跡から出土した土器について概観する。これらの土器を出土した遺跡では、沼沢火山堆積物に関する事実報告は少なく、文様の特徴から選出したものも含まれている。小破片資料が多く判然としないものが多いが、器形がわかるものについて図示した(第4図)。火碎流が到達した想定範囲に位置する1遺跡(大村新田遺跡)、近接地域にまで火碎流が到達したと考えられる3遺跡(次郎坂遺跡・次郎坂古墳群・経塚遺跡)、軽石・火山灰が降下したのみの3遺跡(下平遺跡・桜川南遺跡・法正尻遺跡)の出土土器について図示した。

①大村新田遺跡出土土器

大村新田遺跡（福島県文化センター 1989b、会津坂下町教育委員会 1986a・1997・1995）は、会津坂下町の丘陵地から東に向かって広がる標高約 220 m の扇状地上に立地する遺跡である。沼沢火山から直線距離で 20 km ほどである。第 4 図 1～6 に示した土器は、小破片ばかりであり明確でないものも存在するが、大木 6 式 3 期以降に認められる細い浮線文を施す資料（3）が出土している。橢円状突起の口縁部破片（4～6）、肥厚する口縁部資料（2・3）もあり、大木 6 式 2～3 期に相当すると考えられる。

火碎流到達想定範囲の会津盆地西縁で確認された大木 6 式後半期の土器は、現在のところ大村新田遺跡から出土したもののみである。

②次郎坂遺跡・次郎坂古墳群出土土器

次郎坂遺跡（会津坂下町教育委員会 2008）は、会津盆地西縁山地の標高 230 m ほどの丘陵平坦面に位置する。沼沢火山から直線距離にして 27 km を測る。本遺跡と次郎坂古墳群は同一の遺跡であるが、報告書の記載に合わせて各々で図示した。次郎坂遺跡出土土器は、第 4 図 7～21 に図示した。次郎坂遺跡では、沼沢火山噴出物が検出できなかつたと報告されている。7・8 は口縁部から胴部下半近くまで出土し、器形がわかる資料である。7 は、口縁部に 4 単位の橢円状突起が付き、胴部には横走する結節縄文が施文される。8 の口縁部文様帶には、2 または 3 条の縄圧痕文が施文され、波頂部直下には盲孔が施される。頸部には幅狭の無文帯をもち、頸部から胴部上位には刻みを持つ粘土紐を巡らすなど、2 期に近い要素を残す。9・10、11～13 は、それぞれ同一個体と判断している鉢形土器の口縁部資料である。波頂部直下にそれぞれ渦文を施文する。口縁部文様帶には、縄圧痕文（8・17）、有節無節の浮線文（11～13）、沈線文（14・16）が施文されるものが認められる。刻みを入れた隆帯を頸部に有する資料（8・16・17～20）も出土している。これらは、おおむね大木 6 式 3 期に比定される。

次郎坂古墳群出土土器は、周溝や墳丘サブトレチからの出土であり、原位置を保っていない。図示した 22～25 は同一個体と考えられている。沈線による円形や平行沈線文を描く。

③経塚遺跡出土土器

経塚遺跡（会津坂下町教育委員会 1992）は、会津盆地西縁山地の標高 195 m の水無川が形成した扇状地に立地する遺跡である。沼沢火山から、直線距離で 23 km を測る。図示した土器は、墳丘内や周溝内堆積から出土したものでいずれも小破片であり、原位置は保たれていない。口縁部が肥厚した口縁部資料（26・27）、有節浮線文が施文された資料（28・29）が出土している。大木 6 式 3 期に相当する。

④下平遺跡出土土器

下平遺跡（下郷町教育委員会 2013）は、会津地方南部にある下郷町に位置する。阿賀川流域の段丘上の標高約 500 m に立地する。沼沢火山から直線距離で 33 km を測る。第 4 図 30 は、沼沢火山噴出物を掘り込んで造られた土器埋設遺構から出土した。底部を意図的に欠損させた筒状の深鉢形土器である。刺突文を施した凹線によって渦巻文と方形区画文を施文する。微細な連続刺突の技法から、大木 6 式 3 期の土器と想定される。

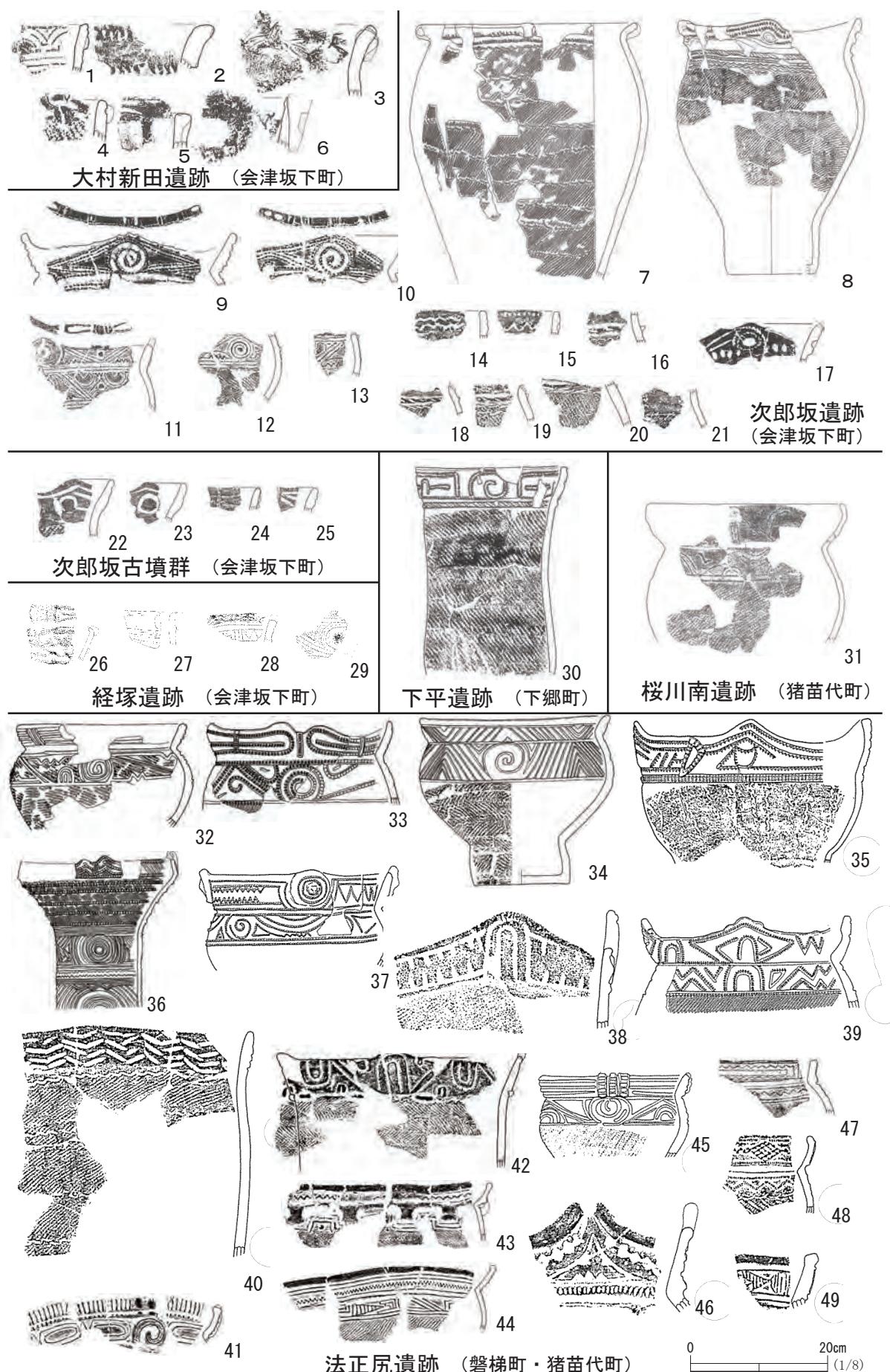
⑤桜川南遺跡出土土器

桜川南遺跡（猪苗代町教育委員会 1998）は、磐梯山南麓に位置する遺跡で、岩なだれ地形上の標高約 510 m に立地する。沼沢火山から直線距離で 44 km を測る。第 4 図 31 は、口縁部文様帶と胴部上半部には、浮線文により円弧文、三角形文、直線文を描く。大木 6 式 3 期に相当する。

⑥法正尻遺跡出土土器

第 4 図 32～49 には、大木 6 式 3 期以降の土器群の一部を示した。大木 6 式 3 期（32～35）、4 期（37～45）、3～4 期（36）、5 期（46～50）に相当する。他の遺跡と比べ、器形が復元できるものが多くあり、大木 6 式後半期のあらゆる特徴を持った資料が充実している。

深鉢形（36・38・40・42・46）、鉢形のもの（32～35・37・39・41・43～45・47～50）がある。深鉢形土器は、口縁部文様帶にのみ施文されるようになる（38・40・42）。金魚鉢形の土器は、ほぼすべて口縁部と体部上半に施文される。文様は、沈線文に押し引き文を施文するもの（33・39・42）、沈線でモチーフを描くもの（32・34・38・45）、ソーメン状の細い粘土紐でモチーフを描くもの（41・43・44・49）、ソーメン状の細い粘土紐に押し引き



第4図 沼沢火山噴火以後の大木6式土器

文を施文するもの（36・37・47・43）がある。描かれる文様モチーフは、渦状文（32～34・36・37・41・45）やU字状文（38・39・42）、連続山形文（34・37・39・47・48）や幾何学文（35・41・44・48・49）がある。36・44・47・48は、施文技法や文様モチーフから関東地方の十三菩提式に類する資料である。さらに36のモチーフは、北陸地方の鍋屋町式と関連性の高い土器である。

大木6式3期の土器群は、東北地方の様相が色濃く残る土器が多い。4期以降になると他地域の特徴をもった土器が増加することが見て取れた。

（3）沼沢火山噴火前後の遺跡分布

第5図には、縄文時代前期末葉の大木6式期の土器が確認できた会津地域の遺跡の分布を図示した。上段には、沼沢火山の噴火以前に利用されていた大木6式1～2期が出土した遺跡、下段は噴火以後に利用されていたと想定される大木6式3期以降の土器が出土した遺跡をプロットした。また、分布図のNo.と表No.は一致している。

①沼沢火山噴火以前

第4図上段の沼沢火山噴火以前である大木6式1～2期の土器が出土した遺跡は、33遺跡（No.1～33）を数える。以下、会津盆地・磐梯山麓・南会津地区の3区分して概観する。

【会津盆地】会津盆地を囲むように西縁部や北部、東部に分布している。特に西縁部の宮川流域には集中して遺跡が認められる（No.1～15）。また、阿賀川中流域（No.17）や支流の一ノ戸川流域（No.16）にも分布している。会津盆地東縁の阿賀川上流域にも散見される（No.32・33）。

【磐梯山麓】磐梯山南麓には、標高530～600m付近に集中して見られる（No.19～25）。

【南会津地区】阿賀川上流域の段丘上に立地して認められる（26・27・30）。

②沼沢火山噴火以後

大木6式3期以降の遺跡分布を示した下段の図では、沼沢火山噴火後の遺跡数は、会津地域全体で大きく減少し12遺跡を数えるのみである。特に噴火以前に会津盆地西縁南部に存在していた遺跡は、継続していない。この地域は、火碎流到達範囲に位置していることに起因するのであろう。また、他の地

域においても、沼沢火山噴火の影響によるものであろうか、会津盆地北部や磐梯山麓、南会津地区を含めた阿賀川流域においても遺跡数が減少していることがわかる。一方、この時期に新たに人間の痕跡が認められた遺跡も存在する。喜多方市廻戸遺跡（山都町教育委員会1991）（No.34）と猪苗代町桜川南遺跡（猪苗代町教育委員会1998）（No.35）である。いずれの遺跡も火碎流到達範囲から離れた地域に立地する。この2遺跡の増加については、周辺の遺跡が減少していることから、近隣遺跡からの移動とも考えられる。

【会津盆地】会津盆地西縁では、前述した会津坂下町の次郎坂遺跡と次郎坂古墳群、経塚遺跡、大村新田遺跡で、小破片の3期以降の大木6式土器が出土した。他にも、会津盆地北部の喜多方市上ノ台遺跡（福島県教育委員会1978、山都町教育委員会1983）、会津盆地中央の下川原遺跡（湯川村教育委員会1994）でも3期以降の土器片が出土している。

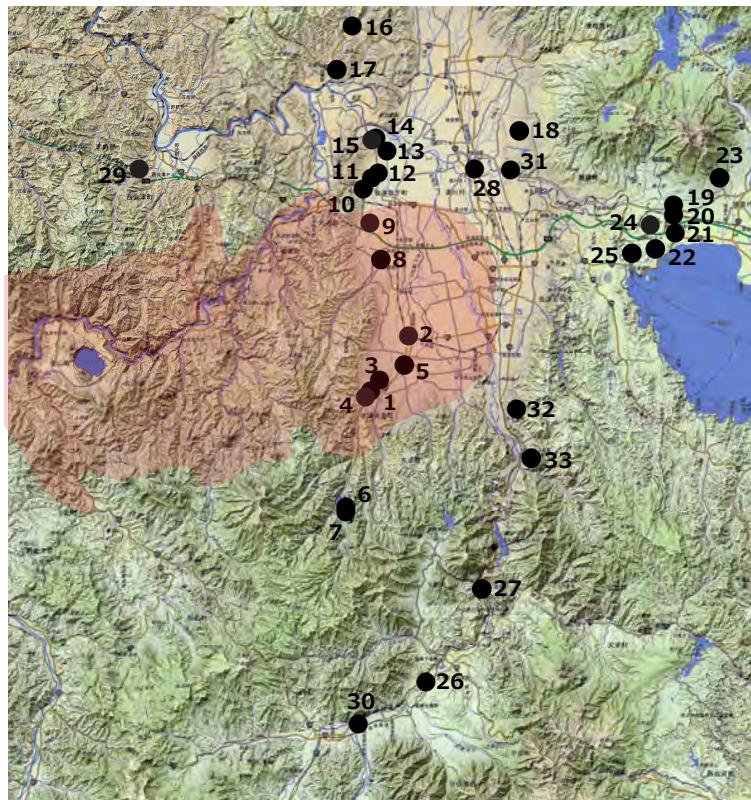
【磐梯山麓】噴火以前に7遺跡あったのが、2遺跡へと減少している。火碎流との直接的な影響は受けていない地域においても、遺跡の減少傾向は確認できた。小さなムラとして存在していたものが、火山噴火降灰の適応戦略の1つとして集中してムラを維持することになったのであろうか。

【南会津地区】阿賀川流域の南会津地区の遺跡にも減少が見られる。

これらの分布は、土器が出土した遺跡であるために、必ずしも集落分布を示したものではないが、沼沢火山噴火の前後で分布傾向が異なることは注目したい。特に火碎流が到達したと想定されている会津盆地西縁の遺跡数の変化は顕著であり、衝撃的ですらある。

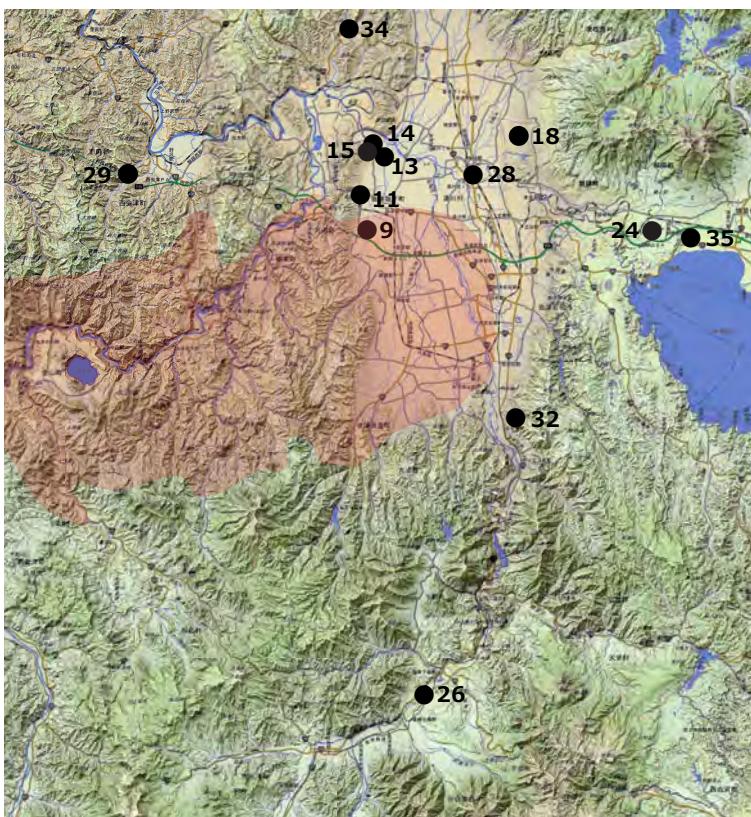
沼沢火山噴火の前後でも人間の痕跡が認められた遺跡は、会津坂下町大村新田遺跡（No.9）・経塚遺跡（No.11）・次郎坂遺跡（No.13）・次郎坂古墳群（No.14）、喜多方市上ノ台遺跡（No.18）、湯川村下川原遺跡（No.28）、西会津町塩喰岩陰遺跡（No.29）、会津若松市上雨屋遺跡（No.32）、磐梯町と猪苗代町にまたがる法正尻遺跡（No.24）の9遺跡のみであった。法正尻遺跡と上ノ台遺跡以外は、小破片が出土したのみであり、生活痕跡としては希薄である。

沼沢火山噴火の影響からみる縄文時代前期末葉と中期初頭の遺跡分布



噴火以前の大木6式土器出土遺跡分布

No.	市町村	遺跡名	標高
1	会津美里町	上道上B遺跡	3 2 0 m
2	会津美里町	油田遺跡	2 2 0 m
3	会津美里町	鹿島遺跡	3 3 0 m
4	会津美里町	冴宮西遺跡	3 3 4 m
5	会津美里町	中丸遺跡	2 5 0 m
6	会津美里町	下谷ヶ地平A遺跡	4 9 0 m
7	会津美里町	下谷ヶ地平C遺跡	4 8 0 m
8	会津美里町	木留場遺跡	2 2 0 m
9	会津坂下町	大村新田遺跡	2 1 0 m
10	会津坂下町	盜人沢遺跡	2 1 0 m
11	会津坂下町	経塚遺跡	2 0 0 m
12	会津坂下町	出崎山遺跡	2 2 0 m
13	会津坂下町	陣が峯城跡	1 9 0 m
14	会津坂下町	次郎坂遺跡	2 5 0 m
15	会津坂下町	次郎坂古墳群	2 4 0 m
16	喜多方市	藤沢遺跡	2 2 3 m
17	喜多方市	上ノ原遺跡	1 9 0 m
18	喜多方市	上ノ台遺跡	2 3 0 m
19	猪苗代町	大神B遺跡(大神)	5 3 0 m
20	猪苗代町	大神東遺跡	5 3 0 m
21	猪苗代町	笠森C遺跡	5 5 5 m
22	猪苗代町	大林遺跡	5 6 0 m
23	猪苗代町	くるみ沢西A遺跡 (くるみ沢西)	6 0 0 m
24	磐梯町・猪苗代町	法正尻遺跡	5 8 0 m
25	磐梯町	角間遺跡	5 7 0 m
26	下郷町	下平遺跡	5 0 0 m
27	下郷町	湯野上遺跡	4 3 0 m
28	湯川村	下川原遺跡	1 8 0 m
29	西会津町	塩喰岩陰遺跡	2 0 0 m
30	南会津町	折橋C遺跡	5 4 0 m
31	会津若松市	戸波遺跡	1 9 0 m
32	会津若松市	上雨屋遺跡	2 6 0 m
33	会津若松市	本能原遺跡	3 1 0 m
34	喜多方市	廻戸遺跡	2 9 0 m
35	猪苗代町	桜川南遺跡	5 3 0 m



噴火以後の大木6式土器出土遺跡分布



第5図 沼沢火山噴火前後の遺跡分布図

(4) 縄文時代中期初頭の会津地域

では、沼沢火山噴火後いつから会津盆地西縁では、人類の痕跡が認められるのであろうか。上道上B遺跡の北100mに小谷を挟んで隣接する三十刈遺跡(会津高田町教育委員会1983)では、縄文時代中期前葉の五領ヶ台式土器が火碎流堆積物の上層から出土している。また、油田遺跡では、縄文時代中期初頭から前葉にかけての27軒の堅穴住居跡が検出されている。このことは、火碎流到達想定範囲においても大木7a式以後には、豊かな森に依存する縄文人の生活が営める環境にまで、火碎流のダメージから回復したことを示している。

第6図のように、中期初頭の土器型式である大木7a式の時期には、遺跡数が増加する。大木6式3～5期には13遺跡であったが、大木7a式期には28遺跡へと増加した。これら遺跡内から見つかった大木7a式土器は、資料数も少なく小破片が多い。大木6式5期の浮線文を沈線文に置換したモチーフをもつ大木7a式古段階の土器は、第7図に示した遺跡でしか現在のところ認められていない。

噴火以前に見られた火碎流到達範囲である会津盆地西縁や只見川中流域にも遺跡が回復してきた。さらには、大木6式期には遺跡が確認できなかった只見川流域の南会津地区、只見川上流域、また阿賀川流域においても遺跡が見られるようになった。

【会津盆地】火碎流到達範囲の会津盆地西縁部では、勝負沢遺跡(会津坂下町1986b)(第6図1～9)を始めとして遺跡(No.1～4・6・18)が認められるようになる。前時期と同様に宮川流域に遺跡が形成されている。

【磐梯山麓】連綿と続いている法正尻遺跡の他にも、遺跡の増加が認められる(No.24・26～28)。

【南会津地区】大木6式期にも遺跡が位置していた阿賀川上流域(No.20・23)のみならず、只見川支流の伊南川流域(No.22)、さらには館岩川と湯ノ岐川の合流部(No.23)にも遺跡が出現している。

【只見川中・下流域】大木6式期には遺跡が認められなかった只見川中流域においても、新たに銭森遺跡(三島町教育委員会1975)(No.7)(第6図10・11)や石生前遺跡(柳津町教育委員会1991)(No.12)において縄文人の活動が見られるようになる。

4 堰止湖の決壊の影響

(1) 只見川と堰止湖

この噴火では、堰止湖の形成と決壊によるラハール^{註9}が起こっている。火碎流堆積物による堰止湖とラハール氾濫による縄文人への影響について論述したい。只見川中・下流域に位置する縄文時代中期初頭の遺跡は、堰止湖の越流と決壊によって形成された上位段丘平坦面に立地する。阿賀川流域においても、堰止湖の決壊により野沢盆地が形成され、段丘平坦面が遺跡として利用され、芝草・小屋田遺跡(西会津町教育委員会2002)や上小島A遺跡(西会津町教育委員会2003)、上小島C遺跡(西会津町教育委員会1997)として痕跡が認められるに至る。

沼沢火碎流堆積物は、只見川とその支流に堆積したと想定される(第1図A)。それにより沼沢火山南方の只見川流域を堰き止め、現在の只見町や田子倉湖まで含めた巨大な堰止湖(第1図B)を出現させた。この堰止湖は、沼沢火山から南方の標高およそ400m以下の只見川流域を水没させた。その後、豪雪地帯に源を発する豊富な雪解け水や降雨などにより、大規模な河川氾濫が起こったと推測されている(Kataoka et al 2008)。

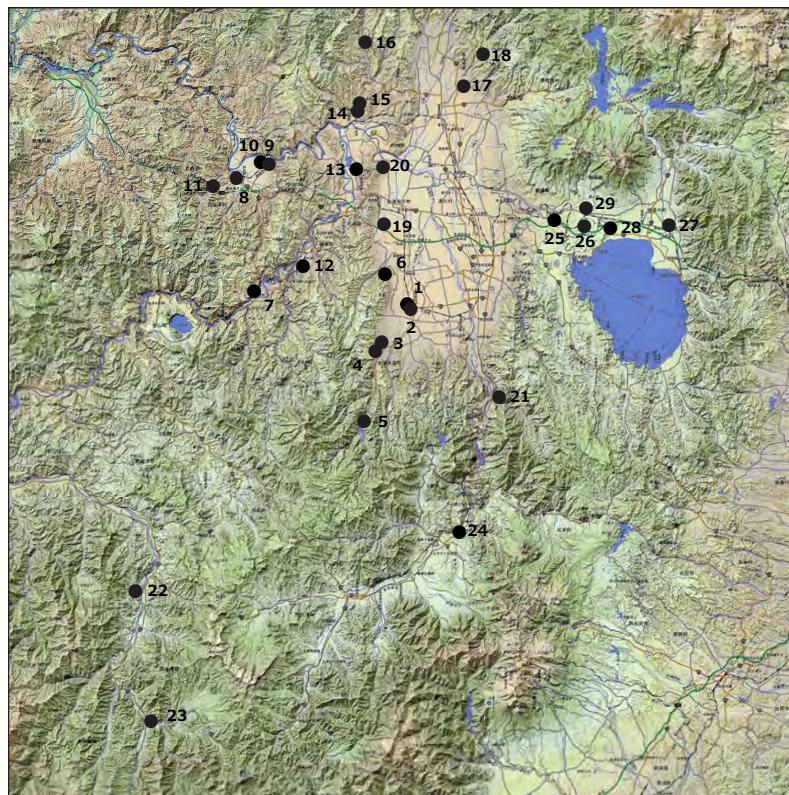
只見川は、尾瀬沼に源を発し、福島・新潟県境を北流し、喜多方市山都町で阿賀川に合流する一級河川である。沼沢火山の周辺では、沼沢火山西側を南から北に時計回りで半周するように北流する。沼沢火山はこの只見川の中流域に位置する火山である。河川の中流域に位置する火山は稀であり、この火山と河川との位置関係が火山噴出物による河川の堰き止めを誘引し、上流域に堰止湖を出現させた。後に、土石流やhyperconcentrated flow(以下、HCFと略す)^{註10}堆積物が、県内を流れる只見川や阿賀川流域に及ぼす、阿賀野川流域や新潟平野にまで、被害をもたらす要因となっている。

堰止湖をつくり出した沼沢火山噴出物は、浸透と越流によって決壊し、約1.6km³の水量と毎秒30,000～50,000m³以上のピーク流量をもつ洪水を発生させた。この洪水堆積物は、只見川・阿賀川流域にかけて数m～数10mの厚さで広く分布し、段丘地形を形成したとされる(kataoka ut al 2008)。

沼沢火山噴火の影響からみる縄文時代前期末葉と中期初頭の遺跡分布

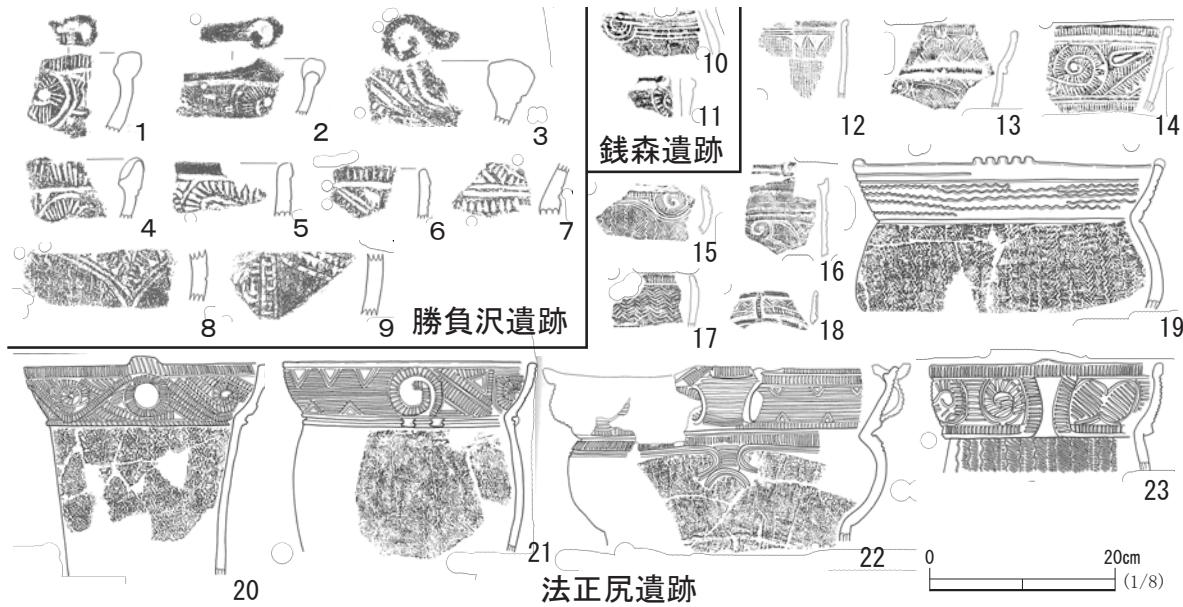
この洪水決壊堆積物によって、約 0.8 km³以上の堆積物が再堆積した。この堆積物は、層厚を変化させながら約 150 km 下流の新潟平野まで到達し、新潟平野の地層の一部を形成している (kataoka et al

2009、ト部他 2001)。沼沢火山周辺や只見川流域での堆積物の観察から、二次堆積物による作用は 3 つのステージに区分できるとされている (kataoka et al 2008)。この堆積作用は只見川、阿賀川、阿賀野



第 6 図 縄文時代中期初頭の遺跡分布図

No.	市町村	遺跡名	標高
1	会津美里町	沼の上遺跡	219 m
2	会津美里町	油田遺跡	220 m
3	会津美里町	三十刈遺跡	320 m
4	会津美里町	冴宮西遺跡	334 m
5	会津美里町	道上遺跡	470 m
6	会津美里町	中江聖の宮遺跡	270 m
7	三島町	錢森遺跡	330 m
8	西会津町	芝草・小屋田遺跡	160 m
9	西会津町	上小島 A 遺跡	152 m
10	西会津町	上小島 C 遺跡	151 m
11	西会津町	塩喰岩陰遺跡	200 m
12	柳津村	石生前遺跡	280 m
13	喜多方市	博毛遺跡	190 m
14	喜多方市	上林遺跡	190 m
15	喜多方市	日照田遺跡	200 m
16	喜多方市	廻戸遺跡	290 m
17	喜多方市	大沢遺跡 (大沢北)	260 m
18	喜多方市	治里南遺跡	340 m
19	会津坂下町	大村新田遺跡	210 m
20	会津坂下町	勝負沢遺跡	220 m
21	会津若松市	本能原遺跡	310 m
22	南会津町	久川城跡	600 m
23	南会津町	松戸ヶ原遺跡	690 m
24	下郷町	栗林遺跡	470 m
25	磐梯町	天光遺跡	460 m
26	磐梯町・猪苗代町	法正尻遺跡	580 m
27	猪苗代町	白津遺跡	530 m
28	猪苗代町	桜川遺跡	520 m
29	猪苗代町	五十軒遺跡	530 m



第 7 図 縄文時代中期初頭の大木 7 a 式土器

川流域に堆積し、河岸段丘上に堆積する大規模なものであった。以下、片岡の論考を参考に簡潔にまとめる。

【ステージ1】初期の二次堆積で、堰止湖の決壊前にあたる。火碎流堆積面上や火碎流堆積物下流域での堆積作用による。層厚は5～20m程度と想定される。堆積物は、土石流やHCFによる火碎流が再堆積したものである。このような堆積物の認定は、膨大な堆積物と水が流下していた根拠となる。

【ステージ2】堰止湖の洪水が決壊した事象である。上流域では径1～3mの巨礫などにより構成される礫質堆積物が堆積する。下流域では、層厚2m以上の洪水決壊堆積物が堆積している。決壊洪水の継続時間は、堰止湖の貯水量より18～30時間と推定されている。

【ステージ3】洪水堆積物で形成された平坦面の一部を削り込んで軽石礫と基盤岩起源の礫が混在する堆積物からなる。決壊洪水の収束時間以降に形成されるものである。

(2) 洪水堆積物と遺跡の関係

沼沢火山由来のラハール堆積物は、黄白色または淡褐色を呈す、平行葉理が発達する淘汰の良い砂層である。以下、この堆積物が形成した段丘と遺跡との関係を記す。

①只見川中・下流域

銭森遺跡（No.7）は標高330mの西方居平段丘の一部に沢田川が形成する扇状地上に立地する。石生前遺跡（No.12）は、標高280mの郷戸段丘上に立地する。地元では、郷戸原と呼称され、柳津町で最も広い平坦地を形成している。喜多方市高郷村博毛遺跡（No.13）（高郷村教育委員会1985）は、慶徳町や山都町付近に形成された広大な段丘面の南に位置する。ステージ2と3に対応した標高190mほどの段丘地形が形成されている。

また、大木6式1期の土器が出土した喜多方市山都町上ノ原遺跡（第5図No.17）（山都町教育委員会1983）は、80cm程のラハール堆積物によって、埋没した遺跡であることがわかっている。

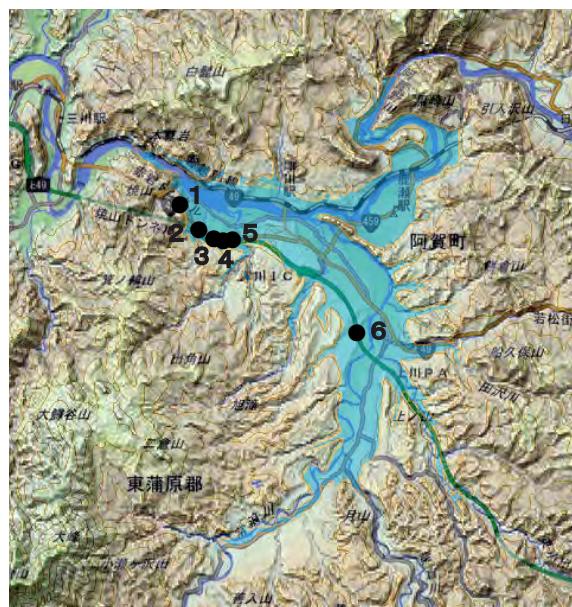
②西会津町野沢地区（第1図C1）

野沢地区の阿賀川流域の河岸段丘は、7つの段丘面に区分される（稻葉1976）。標高160～165mに

位置する野沢段丘は、沼沢火山のラハール堆積物に被われる。野沢地区では最大25cmの軽石礫を含む。また、その下位の新田段丘は、野沢段丘に形成したラハール堆積物が10mほど侵食されてできた侵食段丘である。このラハール堆積部で形成された広い段丘面に芝草・小屋田遺跡（No.8）、上小島A遺跡（No.9）、上小島C遺跡（No.10）が立地する。ステージ2に対応した段丘地形が形成されている。

③新潟県阿賀津川盆地町（第1図C2）

新潟県阿賀町の津川盆地内の阿賀野川流域や常浪川流域においても、沼沢火山噴出物の存在が認められている（新潟県教育委員会1995・2005・2006）。津川盆地の河岸段丘は、5つの段丘面に区分されている。その内、西山II段丘面が沼沢火山由来のラハール堆積物によって構成されている。津川盆地における堆積状況には、少量の礫を含むがほとんどは軽石と火山灰物質による。ステージ2に起因した豊富な水量と堆積物含有量の多い流れから堆積作用を示す構造である。阿賀町の段丘で観察される沼沢火山噴出物は、堰き止めではなく流下しながら、流速の減衰に応じて堆積したHCFによる状況を示していると推測されている（kataoka et al 2008）。



No.	遺跡名	標高
1	現明嶺遺跡	219 m
2	上野東遺跡	220 m
3	中棚遺跡	320 m
4	猿額遺跡	334 m
5	大坂上道遺跡	470 m
6	北野遺跡	270 m

第8図 阿賀町津川盆地の浸水範囲と縄文時代前期末葉の遺跡分布

5 今後の課題

猿額遺跡（新潟県教育委員会 1995・2008）、現明嶽遺跡（新潟県教育委員会 2006）や中棚遺跡（新潟県教育委員会 1995）出土の土器の一部に、大木 6 式 3 期の土器が見られる。これらの遺跡では、ラハール堆積物である鹿瀬輕石層^{註11}から、大木 6 式 3 期の土器が出土している。大木 6 式 3 期中に噴火が起ったことを示す証左とも推測できるが、福島県内においてはこの時期の資料も少なく、大木 6 式土器 3 期の資料と沼沢火山火碎流堆積物やラハール堆積物との関係が明瞭な遺跡は現在のところ見つかっていない。

噴火年代とラハールによる二次堆積年代にどのくらいの時間差があるのか、阿賀川流域の各堰き止め箇所におけるラハールの時間差が、課題となってくる。また、各狭窄箇所での堰き止め時間や二次堆積継続時間については、地質学や地形学との連携を深めながら考えていく課題である。

(1) 放射性炭素年代測定からみた噴火年代

これらの考古学的所見から、少なくとも沼沢火山噴火は、大木 6 式 2 期または大木 6 式 3 期中に起ったイベントであると考えられる。これまでの放射性炭素年代測定事例について、地質学・考古学両面で行われた年代値を参考にあげる。

まほろんでは、鹿島遺跡・中江聖の宮遺跡・法正尻遺跡出土の土器付着炭化物について、放射性炭素年代測定を実施している（（公財）福島県文化

振興財団・株式会社分析研究所 2017・2019、三浦 2017）。さらに会津坂下町盗人沢遺跡出土土器付着炭化物の放射性炭素年代測定を含めた測定値を第 9 図に示した。沼沢火山噴火以前の大木 6 式土器の年代と大木 7 a 式新段階の測定年代は、概ねまとまった値で整合的である。猿額遺跡 IV 層直下から検出した 4 箇所の炭化物集中地点の放射性炭素年代測定値は 3770 – 3530 calBC の範囲にまとまる。これらの年代値は、まほろん収蔵資料と盗人沢遺跡出土土器付着炭化物の測定値と整合的である。

ラハール堆積物中の炭化自然木片の放射性炭素年代測定値では、4950 ± 130 yrBP、5030 ± 100 yrBP（只見川第四紀研究グループ 1965・1966）で、暦年較正值に換算すると上記と近い値になる。

地質学・考古学両面の測定事例によると、測定年代に大きな齟齬はない。今後、大木 6 式 3 期以降の土器群や大木 7 式古段階の資料について、沼沢火山堆積物との関連性が良好な資料の増加に期待する。

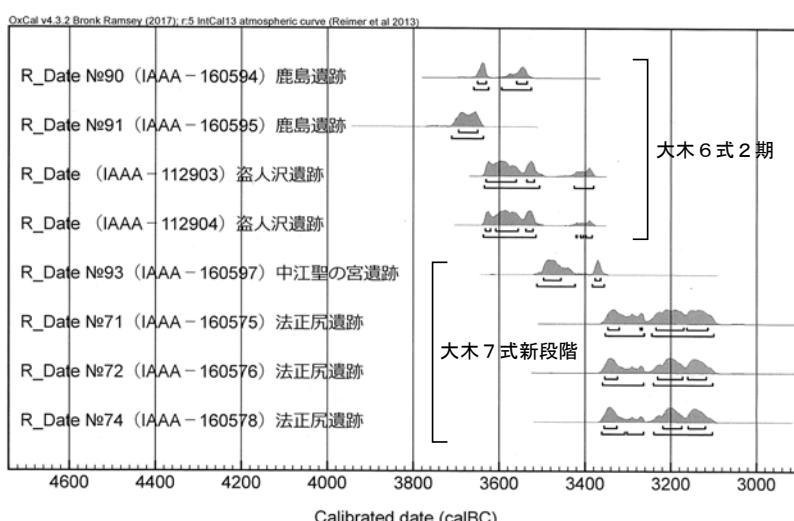
(2) まとめ

沼沢火山噴火以前の大木 6 式 1 ~ 2 期には、会津盆地周縁部や磐梯山南麓に集落が認められ、器形が残る土器も多く出土した。一方、沼沢火山噴火以後には、土器が出土する遺跡が大きく減少し、生活痕跡が希薄となった。火碎流堆積物到達想定範囲の会津盆地西縁では、遺跡はほぼ認められなくなり、また火碎流の直接的な災害を被っていない磐梯山南麓においても、遺跡が減少したことが明らかとなった。

縄文時代中期初頭の大木 7 a 式古段階・五領ヶ台

I 式期においても、出土土器は小片でわずかであり、この時期の会津地域の様相はよくわからない。しかし、ラハールによる段丘面の形成作用によってつくられた新たな平坦面が、遺跡として利用されていることがわかった。

大木 7 a 式新段階・五領ヶ台 II 式期になると、さらに会津地域で該期の土器が出現する遺跡が増加する。特に、ラハール氾濫を受けた只見川流域、阿賀川流域、阿賀野川流域で顕著である。これら



第 9 図 縄文時代前期末葉から中期初頭の放射性炭素年代測定結果と事例

の地域では、大木 7 b 式期になると集落が大規模化する。只見川流域の石生前遺跡、野沢盆地内の芝草・小屋田遺跡や上小島 A・C 遺跡などである。これは、ラハール堆積物による広い平坦地形が形成されたことによるものであろう。集落が拡大できる土地が、ラハールによって確保できたことが要因である。さらに、沼沢火山噴火とそれに伴うラハール氾濫からの環境回復が重なったことも重要である。このラハールが、会津地域の縄文時代中期中葉以降の大集落の発展を遂げた遠因となったことを指摘しておく。

大木 6 式 3 期以降の生活痕跡の希薄さに関しては、該期（諸磯 c 式・十三菩提式期）の関東地方においても、同様の指摘がなされている（今村 2006a・2006b）。さらに、安斎は 5.8ka の寒冷化ボンドイベントの影響による環境回復の遅れが縄文社会に残っていたことも理由の一つと考えている（2015）。会津地域においては、これらの要因に加えて追い打ちをかけるかのように沼沢火山が噴火した。沼沢火山の噴火は、狩猟採集を生業とする縄文人にとって、食料資源採集領域や生活環境範囲の変化を余儀なくさせるものであったはずである。これらの複合的要因が、会津地域における該期の生活痕跡の希薄さとして表出したと考えられる。

土器の変化は、本論で捉えたように大木 6 式 3 期以降、特に 4・5 期には前期末葉の関東地方の十三菩提式土器や中期初頭の関東地方の五領ヶ台式土器の出土が注目される。また、南会津地域の阿賀野川水系や只見川水系で遺跡が増加することは、関東系土器の出現とあわせて、関東地方からの縄文人の流入の証跡であるとも考えられる。今村が指摘する（2006a・2006b）ように、日本海側の秋田県や山形県内で認められる土器群の系統変化は、大木 6 式 3 期以降の土器群の変化の傍証となるであろう。

（3）おわりに

これまで、地質学・火山学を援用して論じてきたが、概念や用語に誤用があるかもしれない。筆者の浅学によるものであり、ご容赦いただきたい。

本論をまとめるにあたり、新潟大学災害・復興科学研究所准教授卜部厚志氏には、火碎流・堰止湖範囲想定図などの御指導をいただいた。また、阿賀町

教育委員会阿部泰之氏には、資料の閲覧と阿賀野川流域の遺跡についてご教示いただいた。また、当館職員の門脇秀典氏には、第 1 図の作成・助言をいただいた。末筆ながら感謝申し上げる。

【註】

註 1 火山の名称として、気象庁は沼沢と記載しているが、本論では便宜的に沼沢火山と呼称することとする。

註 2 本論において、縄文時代前期末葉に沼沢火山から噴出した物質すべての呼称とする。

註 3 本論では、沼沢火山噴出物の中でも、最も初期の噴火によって、噴出した火碎流によって運ばれてきた堆積物を指す。

註 4 2003（平成 15）年に火山噴火予知連絡会により、「概ね過去 1 万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」を活火山と定義したことにより、111 山が活火山に含まれた。

註 5 沼沢火山、燧ヶ岳、安達太良山、吾妻山、磐梯山の 5 山である。この内、安達太良山・吾妻山・磐梯山の 3 山は、常時観測火山に指定されている。

註 6 下位から尻吹崎火碎物、木冷沢溶岩、水沼火碎物、惣山溶岩、沼御前火碎物、前山溶岩、沼沢湖火碎物からなる。

註 7 VEI は、詳細な噴火内容を理解するのが難しい有史以前の噴火規模を表すことができる。VEI レベルの高いものほど発生頻度は低いが、自然環境と人間社会に与える影響は甚大となる。

註 8 レベル 7 は約 3 万年前の始良 Tn 噴火、約 7,300 年前の鬼界アカホヤを伴う噴火とされる。レベル 5 は 6 世紀前半の榛名二ツ岳伊香保噴火、1707（宝永 4）年の富士宝永噴火が位置づけられている。

註 9： 研究者や年代、研究分野によって定義は異なる。本論においてラハールとは、火山泥流・土石流と同義語で使用している。また、本論中のラハール氾濫は、火山堆積物が雨などにより二次的に誘発されて発生したものである。

註 10： ラハールの 1 種とされる。火山由来の土石流と河川流の中間ほど。大きい巨礫も含むが例外的であり、土石流ほどではない。堆積物はある程度淘汰されて、分級が土石流よりも進んでいる状態を指す。

註 11： 沼沢火山噴出物の二次堆積層の地域名である。火碎流堆積物が堰止湖の崩壊とともに流出し、堆積したものである。

註 12： 較正曲線は IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）、較正プログラムは OxCalv4.2 (Bronk Ramsey 2009) を使用した。

【引用参考文献】

- 三島町教育委員会 1975「錢森遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書 II』
稻葉明ほか 1976「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県研究センター研究報告』第 9 号
福島県教育委員会 1978『福島県塙川町 上ノ台遺跡発掘調査概報』
会津高田町教育委員会 1983「上道上 A・B 遺跡」『会津高田町遺跡試掘調査報告』
山都町教育委員会 1983『上ノ原遺跡』
新鶴村教育委員会 1983「中江聖の宮遺跡」『新鶴村遺跡試掘調査報告』
会津高田町教育委員会 1983「三十刈遺跡」「上道上 A・B 遺跡」『会津高田町遺跡試掘調査報告』
山都町教育委員会 1983『上ノ原遺跡』
会津高田町教育委員会 1984『冴宮西遺跡』
今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年：その細分および東北地方との関係を中心に」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4 卷
芳賀英一 1985「大木 5 式土器と東部関東との関係」『古代』80 号
早稲田大学考古学会
館岩村教育委員会 1985『会津館岩村の縄文時代』
高郷村教育委員会 1985『博毛遺跡』
山都町教育委員会 1985『日照田遺跡』
福島県文化センター 1985「道上遺跡」「下谷ヶ地平 A 遺跡(第 2 次)」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告 III』
会津坂下町教育委員会 1986a「大村新田遺跡」『若宮地区分布調査報告書 (II)』

沼沢火山噴火の影響からみる縄文時代前期末葉と中期初頭の遺跡分布

- 会津坂下町 1986b『勝負沢遺跡発掘調査報告書』
庄司貞雄・安藤豊 1987「会津盆地の土壤」『URBAN KUBOTA』No. 26
増子正三 1989「安田町六野瀬遺跡の縄文前期の土器」『北越考古学』第2号
福島県文化センター 1989a「天光遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告5』
福島県文化センター 1989b「大村新田遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告7』
福島県文化センター 1990「青宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告8』
福島県文化センター 1991a「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告X I』
福島県文化センター 1991b「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』
伊南村教育委員会 1991『久川城跡発掘調査報告書(III)』
山都町教育委員会 1991「廻戸遺跡」『山都町遺跡分布調査報告(III)』
柳津町教育委員会 1991『石生前遺跡発掘調査報告書』
会津坂下町教育委員会 1992『経塚古墳』
猪苗代町教育委員会 1992「白津遺跡」「五十軒遺跡」「桜川遺跡」『町内遺跡群詳細分布調査報告書V』
湯川村教育委員会 1994『湯川村史』第三巻 通史
会津坂下町教育委員会 1995『会津宮川地区遺跡調査報告書 大村新田遺跡』
新潟県教育委員会 1995「大坂上道遺跡」「猿額遺跡」「中棚遺跡」「磐越自動車道関係発掘調査報告書」
山元孝広 1995「沼沢火山における火碎流噴火の多様性：沼沢湖および水沼火碎堆積物の層序」『火山』第40巻第2号
会津坂下町教育委員会 1997『大村新田遺跡』
西会津町史刊行委員会 1997「上小島C遺跡」『西会津町史 別巻2』
猪苗代町教育委員会 1998「桜川南遺跡」『磐根地区発掘調査報告I』
沼沢団体研究グループ 1999「沼沢火山の地質と岩石」『地球科学』vol. 53
山都町教育委員会 1999『上林遺跡』
会津若松市 2001『本能原遺跡』
ト部厚志・高濱信行 2002「越後平野における沖積層の沈降と約5,000年前の指標火山灰」『新潟大災害年報』第24号
会津高田町教育委員会 2002「沼ノ上遺跡」『福島県営ほ場整備事業高田中央地区遺跡試掘調査報告書2』
西会津町教育委員会 2002『芝草・小屋田遺跡』
松田光太郎 2003「大木6式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』39
新潟県教育委員会 2003「北野遺跡I(下層)」『磐越自動車道関連遺跡発掘調査報告書』
西会津町教育委員会 2003『上小島A遺跡』
山元孝弘 2003「東北日本、沼沢火山の形成史：噴出物層序、噴火年代及びマグマ噴出量の再検討」『地質調査研究報告』vol. 54
山元孝弘・駒澤正夫 2004「宮山地域の地質」『地域地質研究報告』独立行政法人産業技術研究所地質調査総合センター
今村啓爾 2006 a「大木6式土器の緒系統と変遷過程」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要20』
今村啓爾 2006 b「縄文時代前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き(上)」『考古学雑誌』90巻3号
今村啓爾 2006 c「縄文時代前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き(下)」『考古学雑誌』90巻4号
新潟県教育委員会 2006「現明嶽遺跡」『一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書I』
会津美里町教育委員会 2007 a『油田遺跡』
会津美里町教育委員会 2007 b『沼ノ上遺跡』
会津坂下町教育委員会 2008『陣が峯城跡 町内遺跡(陣が峯城跡・周辺遺跡)範囲内容確認調査報告II』
新潟県教育委員会 2008「大坂上道遺跡II」「猿額遺跡II」「一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書II』
澤井祐紀 2010「福島県富岡町仏浜周辺の海岸低地における掘削調査」『活断層・古地震研究報告』第10号 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
会津坂下町教育委員会 2011『盜人沢遺跡』
ト部厚志・藤本裕介・片岡香子 2011「越後平野の沖積層形成における火山性洪水イベントの影響」『地質学雑誌』第117巻第9号
会津坂下町教育委員会 2013『盜人沢遺跡II』
下郷町教育委員会 2013「下平遺跡(1次調査)」『平成21~24年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
片岡香子・長橋良隆 2014「テフラ学(第3回)：テフラの再堆積」『第四紀研究』53巻3号
相原淳一 2015「宮城県登米市糠塚貝塚の縄文土器－興野義一コレクションの調査－」『東北歴史博物館研究紀要』16
安斎正人 2015『縄文人の生活世界』敬文社
小林圭一 2016a「会津地方の大木6式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15 東北芸術工科大学東北文化研究センター
小林圭一 2016b「宮城県七ヶ宿小梁川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要』第8号 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
(公財)福島県文化振興財団・㈱加速器分析研究所 2017「まほろん収蔵資料のAMS年代測定結果報告(平成28年度分)」『福島県文化財センター研究紀要 2016』福島県文化財センター白河館
三浦武司 2017「縄文時代前期後葉から中期後葉の14C年代測定－福島県文化財センター白河館収蔵資料から－」『福島県文化財センター研究紀要 2016』
小林圭一 2017「縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』16
ト部厚志 2018「縄文時代前期末における沼沢火山の噴火について」『新潟県考古学会 第30回大会 研究発表要旨』新潟県考古学会
相原淳一 2018「縄文時代前期末葉から中期初頭の土器編年」『東北歴史博物館研究紀要』19
栢畑光博編 2019『季刊 考古学 特集火山災害考古学の展開』第146号 雄山閣
(公財)福島県文化振興財団・㈱加速器分析研究所 2019『福島県文化財センター研究紀要 2018』福島県文化財センター白河館
Newhall, C.G and Self, S 1982 The Volcanic Explosivity Index(VEI) : an estimate of explosive magnitude for historical volcanism. J. Geophys. Res., 87
Kataoka, K., U. rabe, A. Manville, V., Kajiyama, A. 2008Breakout flood from an ignimbrite-dammed valley after the 5ka Numazawako eruption, northeast Japan. Geological Society of America, Bulletin, 120

【図】

- 図1・5・6・8 カシミール3Dをベース地図として使用し、山元1995図4・5、山元・駒澤2004図6・7を参考に作図。
図2 Newhall, C.G and Self, S 1982から抜粋一部改変。
図3 会津高田町教育委員会 1983「上道上A・B遺跡」『会津高田町遺跡試掘調査報告』第12~15図、会津美里町教育委員会 2007『油田遺跡』図430、福島県文化センター 1991「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告X I』図34・36・54・55・56、福島県文化センター 1991b「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』図647~649から抜粋一部改変。
図4 会津坂下町教育委員会 1995『会津宮川地区遺跡調査報告書 大村新田遺跡』第7図、会津坂下町教育委員会 2008「次郎坂遺跡」『陣が峯城跡 町内遺跡(陣が峯城跡・周辺遺跡)範囲内容確認調査報告II』第6・7・9・12・13図、会津坂下町教育委員会 2008「次郎坂古墳群」『陣が峯城跡 町内遺跡(陣が峯城跡・周辺遺跡)範囲内容確認調査報告II』第17図、会津坂下町教育委員会 1992『経塚古墳』第55・70図、下郷町教育委員会 2013「下平遺跡(1次調査)」『平成21~24年度埋蔵文化財発掘調査報告書』図14、猪苗代町教育委員会 1998「桜川南遺跡」『磐根地区発掘調査報告I』第12図、福島県文化センター 1991b「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』図506・507・646・648・649・660・663~666・669から抜粋一部改変。
図7 三島町教育委員会 1975「銭森遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書II』第31図、会津坂下町 1986「勝負沢遺跡発掘調査報告書』第19図、福島県文化センター 1991b「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』図506・507・670・671・673・674から抜粋一部改変。
図9 筆者が作成。

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2） —会津地方—

笠井 崇吉

要 旨

会津地方における弥生時代後期の遺跡分布を、前代の弥生時代中期後葉、後代の古墳時代前期と比較し、弥生時代後期の遺跡の立地や数がどのように変化していったかを確認する。

キーワード

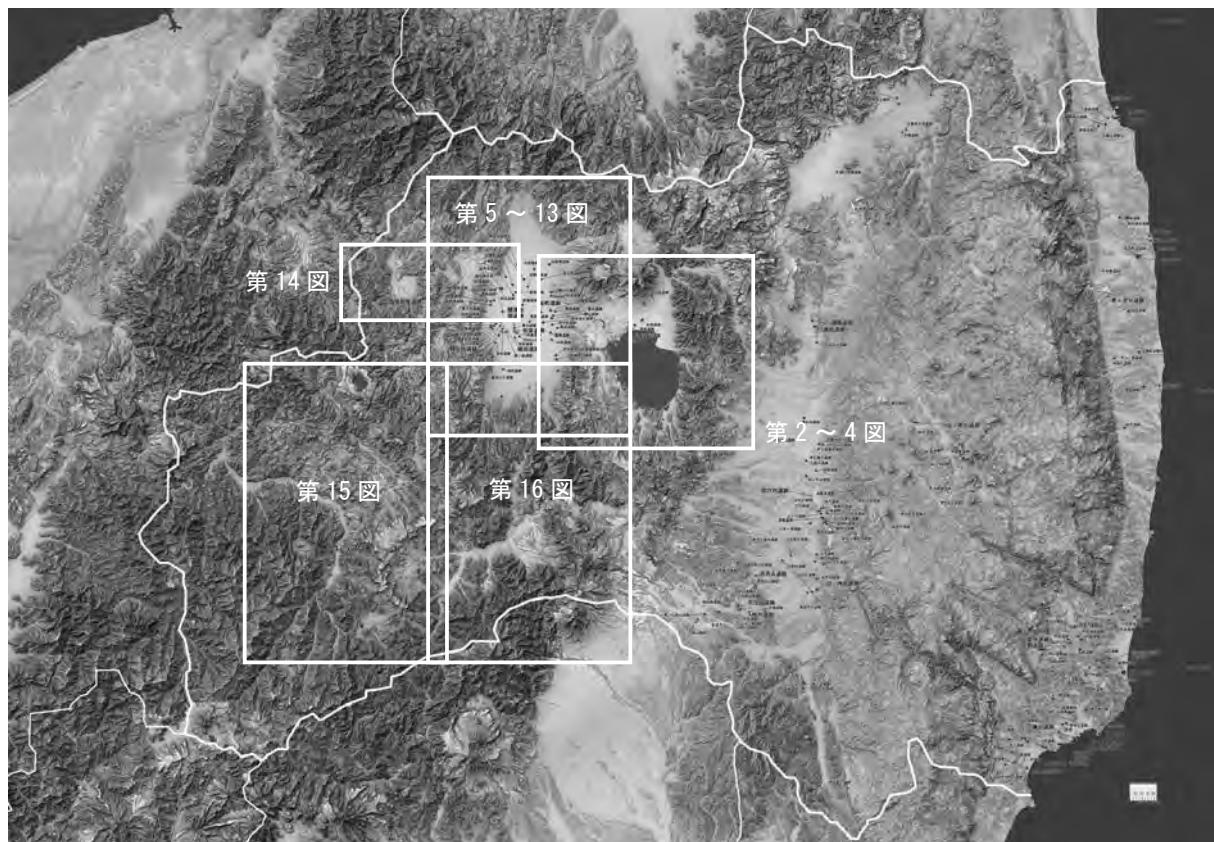
会津地方 弥生時代後期 天王山式系 平行沈線・櫛描文系 北陸系

1 はじめに

平成30年度の指定文化財展「白河市天王山遺跡の時代」は、福島県指定重要文化財の「天王山遺跡出土品」の公開を展示の主目的とし、福島県域の弥生時代後期をテーマに、当該期の遺物を集めて構成した企画展で、県内外から多くの観覧者を迎えることができた。この企画展の展示パネルの一つとして作成したのが、「福島県弥生時代後期土器出土遺跡分布図」（図1）である。平成12年に東日本埋蔵文化財研究会と福島県立博物館主催で行われたシンポジウム「東日本弥生時代後期の土器編年」の資料集

所収の遺跡に、近年の発掘調査事例を追加したもので、福島県内の弥生時代後期の土器が出土した遺跡の位置と遺跡名を企画展観覧者に確認してもらうことを目的として作成した。しかし、図の完成が企画展会期半ばまでかかり、観覧者への公開が遅れたことと、同分布図を企画展のみならず福島県の弥生時代研究に供したいとの思いから、関連文献を含む遺跡一覧を加えて館の紀要に掲載することとした。

なお、本稿は3回シリーズの2回目で、会津地方を扱う。浜通り地方については、（1）として『研究紀要2018』に掲載しており、（3）となる中通り地方は、次号以降にて掲載予定である。



第1図 福島県弥生時代後期土器出土遺跡分布図

2 遺跡一覧について

本稿では、分布図に表示した弥生時代後期の所産と考えられる遺物が出土している遺跡について、一覧を作成している。

遺跡番号は、（1）浜通り地方からの通し番号としているため、今回は90番から開始しており、192番までの103遺跡を収録している。遺跡の所在地に関しては、平成の大合併後の地名表記に改めて記載した。遺跡の立地と標高については、報告書の記載と国土地理院地理院地図の地形分類を勘案して表記した。比高については、報告書に記載がある場合はそれを使用し、ない場合は、遺跡の標高と周囲の沖積地や河川の標高から割り出した値である。

3 対象範囲と土器群分類について

分布図および一覧で、弥生時代後期として扱っている範囲は、壺形・甕形土器の形態差があいまいになり、口縁部が肥厚ないし複合化する油田Y期土器の時期から、天王山式の伝統が残る縄文施文土器が伴い、小型精製土器群が出揃う前の白江式期（漆町5・6群）までとした。

土器群の分類は、浜通り地方と同様に、広く普及している土器型式がある場合には、それを用い、無い場合は代表的な資料のある遺跡名で表記している。以下、遺跡一覧で使用した土器群について認定基準を示す。

油田Y期（油田Y期土器。線幅の狭い2本同時施文具により口縁部から肩部にかけて上開きの連弧文を重ねる文様帶を持つ平行沈線文系の広口壺、やや受口状の複合口縁の外面に横線や刺突列を施し、頸部が円筒状になるプレ天王山系の広口壺、口縁部に刻み目を持つ隆帯が巡る甕などから構成される。会津美里町油田遺跡出土資料を典型とする。）

伊勢林前（伊勢林前式。無文地に線幅の狭い2本同時施文具で対向する連弧文を描く広口壺が特徴。いわき市伊勢林前遺跡住居跡出土資料を典型とするが、会津地方では、破片でしか出土していない。「油田Y期」及び「天王山」の古い段階に併行すると考えている。）

天王山（狭義の天王山式。白河市天王山遺跡出土資料の内、平行沈線・櫛描文系土器群、縄文原体を

口縁部に押圧する土器群、P号地出土の撚糸文施文土器を省いた土器群で、受口状の複合口縁、筒状の頸部、交互刺突文、磨消繩文、文様帶下端の下開き連弧文などの特徴があるが、個体差が大きい。地文の縦走・横走する縄文も特徴であるが、会津地方では、横走縄文が卓越する。天王山遺跡出土資料は、時間幅があるようで、会津地方では、会津坂下町能登遺跡遺物包含層出土資料が古い部分、同町細田遺跡出土資料が新しい部分と理解している。）

屋敷（狭義の天王山式に後続する土器群を代表させた。浜通りで使用した「明戸」に対応する。天王山式と比較すると、口縁部は幅が広くなり直線的になる。意匠文を持つ土器において、頸部の文様帶施文部位の幅が広がり、モチーフは退化・多段化する。沈線が太くなり、文様の起点に凹点文や浮文が付加される。地文に付加条縄文が増える。交互刺突文は減り、刺突・押圧文が多くなる。会津若松市屋敷遺跡4・12号周溝状遺構出土資料、湯川村桜町遺跡9号周溝墓・93号土坑を典型とし、「十王台」、「月影」と併行すると考えている。）

稻荷塚（「屋敷」に後続する縄文施文土器群を代表させた。浜通り地方の「平窪諸荷」に対応する。この時期、甕・高杯は北陸系のものに置き換わっており、壺のみが天王山の名残を残す。意匠文は、ほぼ見られなくなり、口縁部及び肩部以下に縄文か羽状の撚糸文が施される。口縁部は直線的に開くか外反し、概ね幅広で複合部の段は低めである。会津坂下町稻荷塚遺跡4a・4b・6号住居跡出土資料を典型とし、ほぼ「館ノ内」、「白江」に併行すると考えている。）

十王台（十王台式とその影響を受けた櫛描文系土器群を代表させた。会津地方では、変容したものが多い。口縁部に多段の刻み目隆帯を持つ資料が多く、頸部文様帶は縦区画充填波状文よりも斜格子文が多く認められる。地文は付加条第2種が多いため、地文のみの破片の場合は本群としている。ほぼ「屋敷」、「月影」に併行すると考えている。猪苗代町三城潟家北遺跡1号溝跡出土資料を典型とし、「屋敷」、「月影」に併行すると考えている。）

樽（樽式の搬入品と考えられる。ラッパ状に開く口縁部は、受口状ないし複合口縁で、波高の低い細かい櫛描波状文が施される。頸部には、櫛描簾状文

が施される。すべて破片資料であり、「屋敷」に併行すると考えている。)

館ノ内(十王台式に後続する土器群を代表させた。浜通り地方の「元屋敷古墳群」に対応する。口縁部は幅広の単純口縁で、外反して開く。口縁部と頸部の境に、弱い段か刺突列がある。地文は細かい羽状の撚糸文で、稻荷塚と区別しにくいため、地文のみの破片の場合は、本群に含めた。喜多方市館ノ内遺跡2号周溝墓出土資料を典型とし、「稻荷塚」・「白江」と併行すると考えている。)

月影(月影式・漆町3群に併行する資料及び前代の法仏式も含む北陸系土器群を代表させた。甕については、「5の字口縁」の崩れた複合口縁を持つ資料、高杯については、有稜高杯の杯部が浅く中空柱状脚で相対的に大型の資料について本群とした。本群は、「屋敷」・「十王台」に併行するものと考えている。)

白江(白江式・漆町4~6群に併行する土器群を代表させた。甕は、口縁部が強く外反して開き、端

部が明瞭に面取りされているものについて本群とした。有稜高杯は杯部が深く、脚端部が開く資料や御経塚ツカダ型式、小型器台、東海系の瓢壺などを本群とした。この段階では、壺の一部以外は、北陸および東海系由来の器種で占められるようになる。本群は、「稻荷塚」・「館ノ内」に併行するものと考えている。)

4 分布図上の遺跡記号について

分布図の作成にあたっては、以上の土器分類に従い、最大公約数的に弥生時代後期を前半と後半に分けて表示した。前半期は、「油田Y期」・「天王山」、後半期は、「屋敷」・「十王台」・「樽」・「月影」と「稻荷塚」・「館ノ内」・「白江」である。遺跡記号の表記は、記号を横位に分割し、上半分を前半期、下半分を後半期とし、当該期の資料がある場合は白塗り、無い場合は黒塗りとし、ともに黒い丸については、当該期の土器が出土していないものの、アメリカ式



第2図 猪苗代湖周辺弥生時代後期の遺物出土遺跡分布

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2） —会津地方—

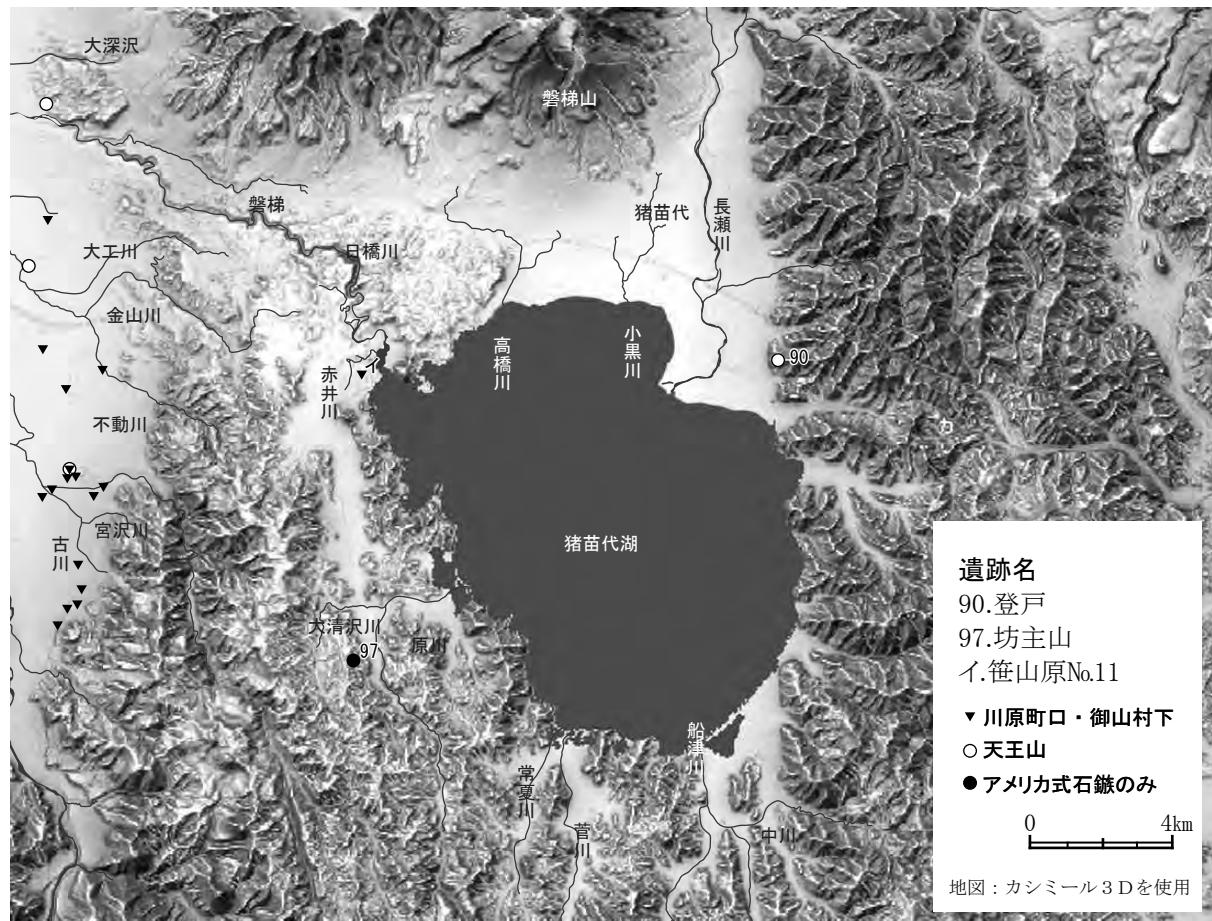
石鏃が出土している遺跡とした。土器群の系統について、在地の土器群として天王山式系の縄文施文土器群（「天王山」、「屋敷」、「稻荷塚」）を○、外来の土器群として、平行沈線・櫛描文系の土器群（「油田Y期」、「伊勢林前」、「十王台」、「館ノ内」）と北陸系土器群（「月影」、「白江」）を□で表し、両者を含む場合は重ねて表記した。また、弥生時代後期の前後で遺跡の数および立地がどのように変化しているか比較するため、弥生時代中期後葉の川原町口式および御山村下式が出土した遺跡を▼、古墳時代前期で概ね塩釜式の範疇で理解されている土師器が出土している遺跡を◆で表記した。

5 猪苗代湖周辺の弥生後期の遺跡

猪苗代湖周辺で確認できた弥生時代後期の遺物が出土した遺跡は、登戸遺跡（90）、くるみ沢西B遺跡（91）、水抜遺跡（92）、惣座遺跡（93）、三城潟家北遺跡（94）、桜川南遺跡（95）、笠森A遺跡（96）の7遺跡である。坊主山遺跡（97）は、弥生時代後期の土器が出土しているわけではないが、後期の遺

跡に伴うことの多いアメリカ式石鏃が出土しており、これを加えると8遺跡となる（第2図）。

この内、水抜遺跡、惣座遺跡、三城潟家北遺跡は、猪苗代湖北岸を流れる高橋川東部の自然堤防と考えられる標高517～519m、沖積地との比高差がほとんどない微高地上に立地しており、桜川南遺跡および笠森A遺跡は高橋川を見下ろす火山性堆積物で構成された丘陵地に立地する。桜川南遺跡に関しては、丘陵中の谷底に立地することから、沖積地との比高差が3m程度、やや奥まった立地の笠森A遺跡では、30～40mの比高差となる。これら5遺跡は、3km程度の範囲に集中して分布しており、いずれも弥生時代後半の「屋敷」段階に位置付けられことから、この時期沖積地への進出が行われたものと考えられる。またこれらの遺跡では、櫛描文系土器群及び北陸系の土器群も認められ、人の移動が盛んにおこなわれていたことが推察される。三城潟家北遺跡を除く4遺跡では、古墳時代前期の土師器が出土しており、継続して人々が居住していた可能性がある（第4図）。



第3図 猪苗代湖周辺弥生時代中期後葉～後期前半の遺物出土遺跡分布



第4図 猪苗代湖周辺弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物出土遺跡分布

このほか、「屋敷」期のくるみ沢西B遺跡が標高559～566m、低地との比高差40mを測る磐梯山麓に位置しており、この時期になると次代まで継続しないまでも猪苗代湖北岸地帯の広い範囲に人々が住み始めたことがわかる。

弥生時代中期後葉については、猪苗代湖北岸の標高520～530m程度の丘陵内を流れる赤井川北岸に笛山原No.11遺跡が確認できる。御山村下式の土器片が出土しており、弥生時代中期後葉としては、唯一の例である。この時期は、丘陵地を流れる小河川沿いに人々が細々と生活していたものと考えられる。続く弥生時代後期前半は、「天王山」期でも古い可能性がある縄文施文土器の小型甕が見つかっている登戸遺跡がある。猪苗代盆地東部の標高550～584m、比高差40m程度の斜面地に立地する。丘陵中の浅い谷を利用しているような立地であり中期後葉と似たような状況と考えられる。この時期までは、沖積地への進出が図られていないようである。(第3図)。

古墳時代前期に関しては、先にも述べたように、

猪苗代湖北岸の低地部とそれに隣接する丘陵地で、弥生時代後期後半からの遺跡がそのまま継続する傾向があり、また、角間遺跡(a)のように新たに出現するものもあるようである。

猪苗代湖の北岸以外は、広い沖積地が存在せず、丘陵も湖際まで迫っていることから、未だ確実な弥生時代後期の遺跡は確認されていない。標高531m、低地との比高差1mを測る段丘裾部に立地する坊主山遺跡では先述のようにアメリカ式石鏃が出土している。

6 会津盆地北部の弥生後期の遺跡

会津盆地は遺跡数が多いことから、北部・南東部・南西部の3地域に分割して説明する。盆地北部は、日橋川及び阿賀川よりも北側の範囲で、旧山都町域を除いた喜多方市域にあたる(第5図)。

会津盆地北部で確認できた弥生時代後期の遺跡は、13遺跡であり、土器が出土していないため確実ではないが、アメリカ式石鏃が出土している龍泉寺遺跡(98)、鶴塚遺跡(110)を加えると15遺跡

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）
—会津地方—

表1 福島県弥生時代後期遺跡一覧（猪苗代湖周辺）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
90	登戸遺跡	猪苗代町大字関戸字登戸	扇状地斜面	550～584 m	40 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団 1988『東北横断自動車道遺跡調査報告3』「登戸遺跡」
91	くるみ沢西B遺跡	猪苗代町字八ノ木沢・字古川谷	山麓斜面	559～566 m	40m	遺構外から土器片（屋敷）出土。	猪苗代町教育委員会 1993『猪苗代町文化財調査報告書第18集』「くるみ沢西遺跡」
92	水抜遺跡	猪苗代町大字長田字水抜	沖積地中の微高地	519 m	0 m	集落跡？溝跡・遺構外から土器片（館ノ内）出土。	福島県会津若松農地事務所・猪苗代町教育委員会 1998『水抜遺跡 惣座遺跡』「水抜遺跡」
93	惣座遺跡	猪苗代町大字三ツ和字惣佐・長田字村北・字西真行	沖積地中の微高地	519 m	0 m	集落跡？井戸・溝跡・遺構外から土器片（屋敷・館ノ内・白江）出土。	福島県会津若松農地事務所・猪苗代町教育委員会 1993『水抜遺跡 惣座遺跡』「惣座遺跡」 1994『惣座遺跡』
94	三城潟家北遺跡	猪苗代町大字三ツ和字家北	沖積地中の微高地	517～518 m	1m	集落跡？土坑4（月影・十王台・屋敷）。	猪苗代町教育委員会 1995『三城潟家北遺跡』
95	桜川南遺跡	猪苗代町大字磐根字烏帽子石	丘陵裾部緩斜面	517～520 m	3 m	遺構外から土器片（屋敷）出土。	猪苗代町教育委員会 1998『磐根地区発掘調査報告I』「桜川南遺跡」
96	笠森A遺跡	猪苗代町大字磐根字笠森	丘陵中腹緩斜面	560～565 m	30～40 m	遺構外から土器片（屋敷）出土。	大和ハウス工業株式会社・猪苗代町教育委員会 2001『岩根地区発掘調査報告書III 笠森A遺跡』
97	坊主山遺跡	会津若松市湊町原	段丘裾部緩斜面	531m	1m	遺構外からアメ鎌出土。	会津若松市教育委員会 2005『原地区試掘調査報告書』「坊主山遺跡」

を確認できた。

会津盆地北部では、西流する日橋川と阿賀川に向かって、東から境見川、大塩川、姥堂川、田付川、濁川が北東から南西へ向かって流れている。これらの河川流域に注目して弥生時代後期の遺跡立地を確認していく。

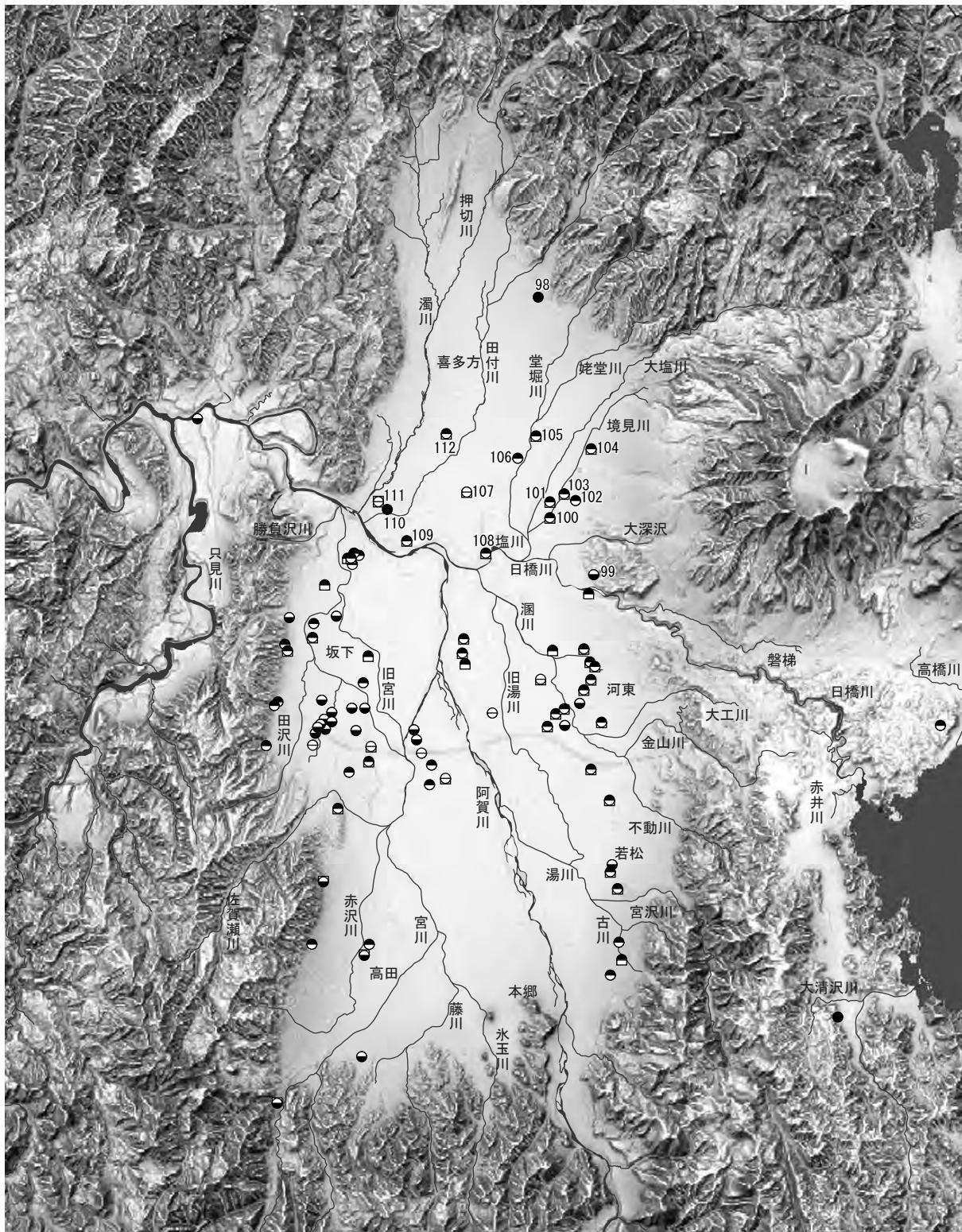
当該地域において、弥生時代後期前半の遺跡は、日橋川が会津盆地に入つてすぐの位置にある八幡山古墳群（99）、姥堂川と田付川の間に形成された低位段丘上に位置する館ノ内遺跡（107）、田付川と濁川に挟まれた低地部の自然堤防上に位置する古屋敷遺跡（111）の3遺跡が認められる。それぞれの遺跡は密集することなく、4km程度の距離を置いて分布する。遺跡の立地は多様で、八幡山古墳群は、

標高211m、比高差14mの丘陵上、館ノ内遺跡は低地部と比高差が段丘頂部の平坦面、古屋敷遺跡は、低地部との比高差3～4mの自然堤防上に立地しており、低地部への進出が認められる。

それぞれ「天王山」に比定される土器片が少量出土しており、古屋敷遺跡では、「伊勢林前」に比定される土器片、八幡山古墳群ではアメリカ式石鎌が出土している。

遺構は、八幡山古墳群で土坑が確認できる他は明瞭な例が認められない。

丘陵上に位置する八幡山古墳群は後期前半のみで、後半へ継続しないが、これに対し低地部の館ノ内遺跡及び古屋敷遺跡では、後期後半まで遺跡が存続している可能性がある。



遺跡名

98.龍泉寺 99.八幡山古墳群 100.遠谷田 101.中谷地
102.野田B 103.家西 104.羽黒森 105.東上川原
106.太田館跡 107.館ノ内 108.荒屋敷 109.内屋敷
110.鶴塚 111.古屋敷 112.塚田A

●天王山

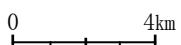
■伊勢林前・油田Y期

●屋敷・稻荷塚

■十王台・樽・館ノ内
月影・白江

●アメリカ式石鎚のみ

地図：カシミール3Dを使用



第5図 会津盆地北部弥生時代後期の遺物出土遺跡分布

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2） —会津地方—

それでは、次に後期の遺跡を確認していく。会津盆地北部で後期後半の土器群が出土する遺跡は、11遺跡である。この内、日橋川及び阿賀川の北岸には、荒屋敷遺跡（108）と内屋敷遺跡（109）の2遺跡が所在する。荒屋敷遺跡は、会津盆地の中央付近で日橋川と溷川の合流点からやや上流に位置する自然堤防上、内屋敷遺跡は日橋川と阿賀川の合流点のやや下流に位置する河岸段丘頂部に立地する。土器は荒屋敷遺跡がやや古く、「屋敷」、「十王台」、「月影」が出土している。方形周溝墓が調査されており、墓地の遺跡と考えられる。内屋敷遺跡は、「白江」が出土する住居跡があるため、集落であろう。

盆地の東側で日橋川に注ぐ境見川流域では、下流域の雄国山麓の扇状地末端付近に、遠谷田遺跡（100）、中谷地遺跡（101）、野田B遺跡（102）、家西遺跡（103）といった遺跡が、2kmほどの範囲に分布する。いずれの遺跡も低地との比高差がほとんど認められない微高地に立地している。遠谷田遺跡と野田B遺跡で「屋敷」が出土しており野田B遺跡では「十王台」が伴う。中谷地遺跡と家西遺跡では「白江」を主体にして、中谷地で「館ノ内」、家西遺跡で「稻荷塚」が伴っている。また、家西遺跡では、

方形周溝墓が確認できる。

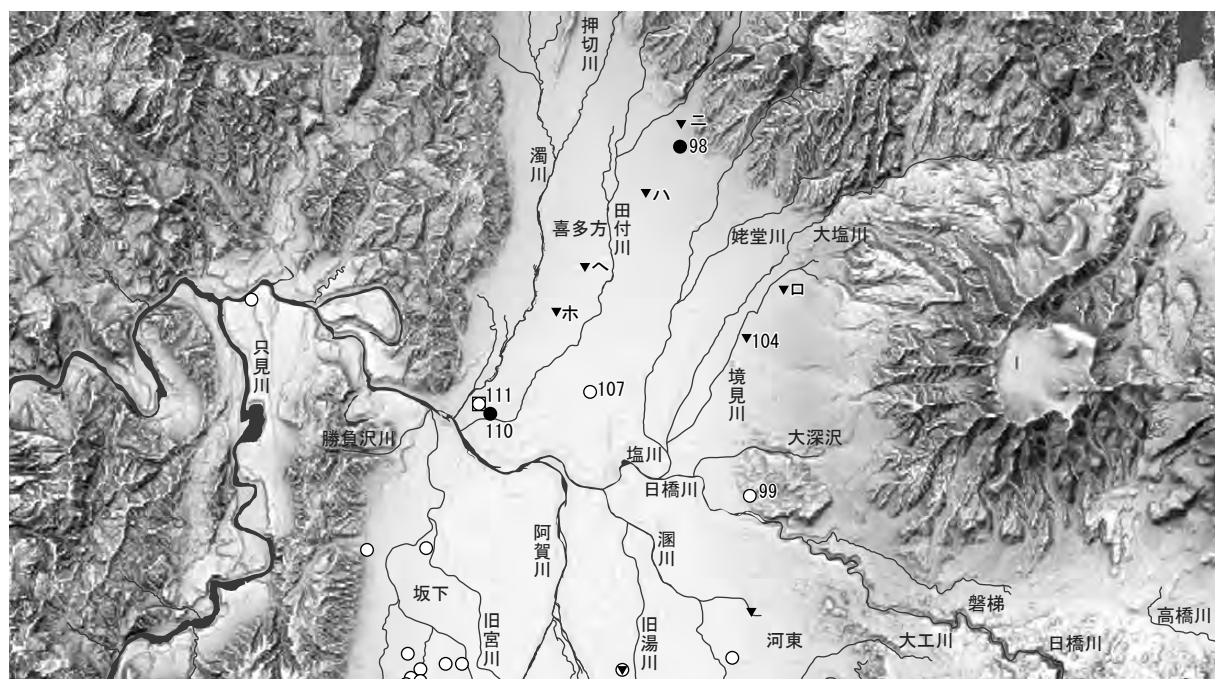
境見川を遡った中流域の扇状地上には、羽黒森遺跡（104）が所在する。「屋敷」とともに、櫛描波状文をもつ土器片が出土している。

境見川の西側を平行して流れる姥堂川の中流域には、東上川原遺跡（105）、太田館跡（106）の2遺跡が所在する。東上川原遺跡は自然堤防上、太田館跡は低位段丘の頂部に立地しており、比高差は2～3mを測る。共に「屋敷」が出土する遺跡で、東上川原遺跡では、「十王台」が伴う。太田館跡では、土坑と平地式住居跡のある方形周溝状遺構が調査されている。

弥生時代後期前半の土器が出土している館ノ内遺跡では「白江」と「館ノ内」が出土する方形周溝墓群が認められ、後期後半にあっては、墓地であったと考えられる。同じく後期前半の土器が出土した古屋敷遺跡（111）では、遺構外からであるが、「屋敷」、「十王台」が出土している。

田付川中流域西岸の高位段丘上には、塚田A遺跡(112)が所在する。複数の住居跡が調査されており、「屋敷」、「十王台」、「月影」が出土する。

会津盆地北部では弥生時代前半の遺跡は、日橋川



遺跡名
98.龍泉寺 99.八幡山古墳群 104.羽黒森 107.館ノ内
110.鶴塚 111.古屋敷
口.諏訪ノ宮 八.馬場 二.大沢 亦.村前 亥.長内

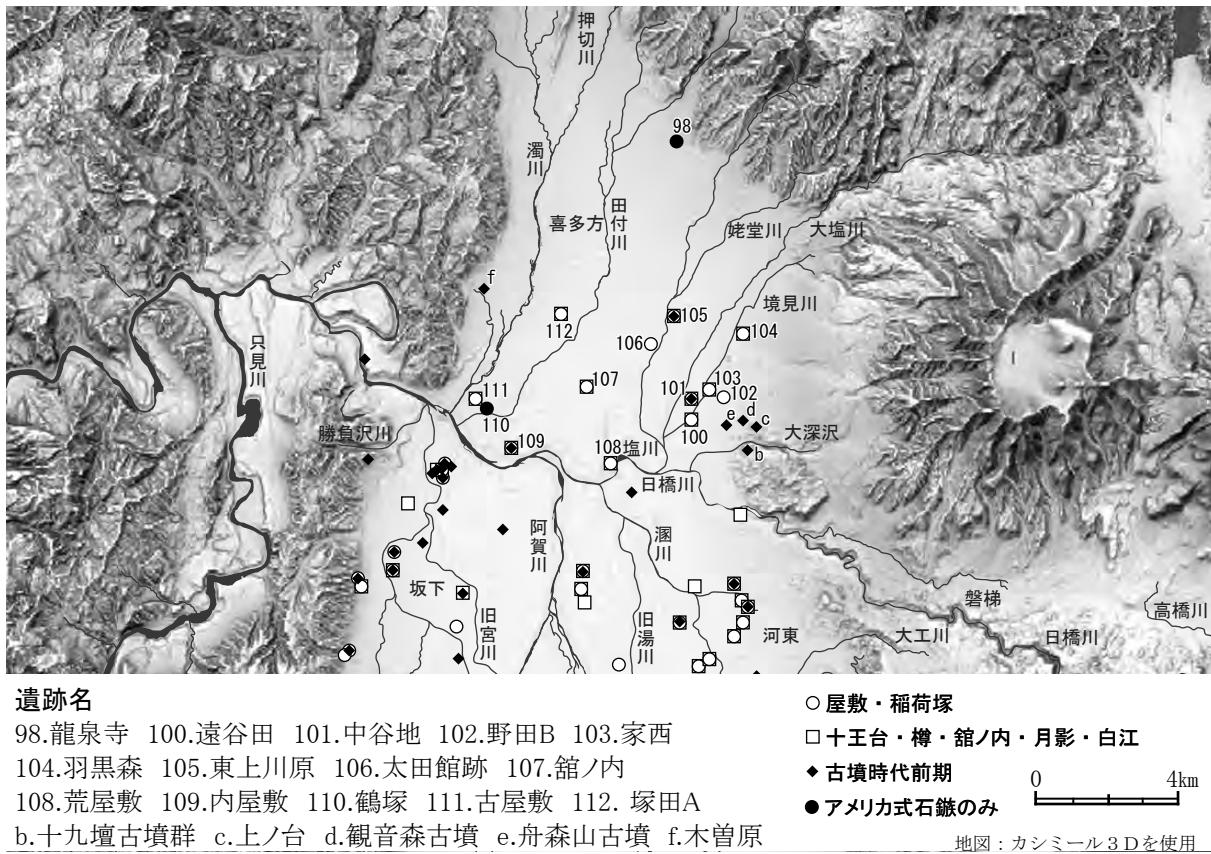
○ 天王山 ▼ 川原町口・御山村下
 □ 伊勢林前・油田×期 ● アメリカ式石鎚のみ

□ 伊勢林前・油田 Y期 ● アメリカ式石鎌のみ

4km

地図：カシミール3Dを使用

第6図 会津盆地北部弥生時代中期後葉～後期前半の遺物出土遺跡分布



第7図 会津盆地北部弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物出土遺跡分布

や阿賀川に近い側に位置する傾向があり、立地は低地部と丘陵部の双方が認められる。後期後半では、境見川沿いに遺跡の集中が認められ、河川の下流域から、中流域まで分布範囲が広がる。この時期の遺跡の立地は、周囲の低地部との比高差が少ない地形に多い傾向がある。

それでは、会津盆地北部の弥生時代後期以前はどのような遺跡立地だったのだろうか。第6図には、会津盆地北部の弥生時代中期後葉の遺跡と弥生時代後期前半の遺跡を示した。

中期の遺跡は、境見川沿いと田付川沿いに分布が集中する。境見川沿いでは中流域に、後期後半の土器が出土している羽黒森遺跡があり、さらに上流域の扇状地には、アメリカ式石鏃が出土している諏訪ノ宮遺跡(口)がある。田付川流域では、最下流に古屋敷遺跡が位置し、中流域西岸の高位段丘上には、村前遺跡(ホ)、長内遺跡(ヘ)、上流域東岸の丘陵裾部から扇状地にかけて馬場遺跡(ハ)、大沢遺跡(ニ)が所在する。中期後葉の遺跡は、盆地中央の低地部に立地せず、扇状地上や高位段丘上に立地する傾向がある。また、会津盆地北部では、中期後葉

から後期前半に継続する遺跡は認められない。

次に、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての遺跡分布について、第7図を見ながら確認していく。先述したように会津盆地北部の弥生時代後期後半の遺跡は11遺跡あるが、この内、境見川中流域の中谷地遺跡(101)、姥堂川中流域の東上川原遺跡(105)、阿賀川北岸の内屋敷遺跡(109)の3遺跡は古墳時代前期にも継続する。この他、新たに雄国山麓の丘陵地に十九塙古墳群(b)、観音森古墳(d)、舟森山古墳(e)、上ノ台遺跡(c)が営まれ、盆地西部では、木曾原遺跡(f)が見つかっている。弥生後期に盆地中央の低地部に進出が認められたが、古墳時代前期には盆地縁辺の丘陵地や扇状地に遺跡が移っているのがわかる。

7 会津盆地南東部の弥生後期の遺跡

会津盆地南東部は北が日橋川、西が阿賀川を境とした範囲で、概ね会津若松市及び湯川村の範囲である。盆地南東部の弥生時代後期の遺跡は、25遺跡を確認した。

会津盆地南東部では、東から潤川、旧湯川が阿賀

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—

表2 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地北部1）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
98	龍泉寺遺跡	喜多方市 岩月町宮津字中田付	丘陵裾部	255 m	2 m	散布地。アメ鎌出土。	喜多方市史編纂委員会 1995『喜多方市史第四巻 考古・古代・中世資料編 I』
99	八幡山古墳群	喜多方市 塩川町金橋字八幡山	丘陵頂部	211 m	14 m	土坑覆土から土器片（天王山？）出土。 遺構外からアメ鎌出土。	喜多方市教育委員会 2010『県営かんがい排水事業（一般型）駒形地区発掘調査報告書 八幡山古墳群2号墳』
100	遠谷田遺跡	喜多方市 塩川町五合字金森	扇状地末端の微高地	182 m	0 m	溝跡から土器片（屋敷）出土。	喜多方市教育委員会 福島県会津農林事務所 2016『県営経営体育成基盤整備事業駒形第二地区発掘調査報告3 遠谷田遺跡 宮腰遺跡（2次）野田A遺跡』「遠谷田遺跡」
101	中谷地遺跡	喜多方市 塩川町窪字中谷地	低位段丘頂部平坦面	183 m	0 m	河川跡から土器片（館ノ内・白江）出土。	喜多方市教育委員会 2010『県営経営体育成基盤整備事業駒形第一地区発掘調査報告書 中谷地遺跡 宮ノ前遺跡』「中谷地遺跡」
102	野田B遺跡	喜多方市 塩川町五合字野田	扇状地中の微高地	191 m	0 m	溝跡から土器片（十王台）出土。表土から土器片（屋敷）出土。	喜多方市教育委員会 福島県会津農林事務所 2017『県営経営体育成基盤整備事業駒形第二地区発掘調査報告4 野田B遺跡（1次）』
103	家西遺跡	喜多方市 塩川町五合字金森	扇状地末端の微高地	187～189 m	0 m	墓域。周溝墓9基（白江・稻荷塚）。	喜多方市教育委員会 福島県会津農林事務所 2014『県営経営体育成基盤整備事業駒形第二地区発掘調査報告1 家西遺跡（1次）』
104	羽黒森遺跡	喜多方市 熊倉町字辻	扇状地中の独立小丘陵上	220 m	10m	散布地。土器片（屋敷・十王台？）出土。	芳賀英一 1979「会津盆地東北部出土の弥生式土器」『福島考古第20号』福島県考古学会
105	東上川原遺跡	喜多方市 豊川町高堂太字東上川原	自然堤防上	195～196 m	2 m	河川跡から壺・甕（屋敷）、土器片（十王台）出土。	喜多方市教育委員会 福島県会津農林事務所 2000『高堂太地区遺跡発掘調査報告書I』「東上川原遺跡」
106	太田館跡	喜多方市 豊川町高堂太字西前田	低位段丘上	191 m	3 m	集落？土坑・住居跡の可能性がある方形周溝状遺構（屋敷）。	喜多方市教育委員会 福島県会津農林事務所 2001『高堂太地区遺跡発掘調査報告書II』「太田館跡1」
107	館ノ内遺跡	喜多方市 塩川町吉沖字館ノ内	低位段丘頂部平坦面	182 m	0 m	墓域。方形周溝墓2基（白江・館ノ内）。遺構外から土器片（天王山・屋敷）出土。	塩川町教育委員会 1998『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書3 館ノ内遺跡』

表3 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地北部2）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
108	荒屋敷遺跡	喜多方市塩川町遠田字荒屋敷	自然堤防上	175～178 m	3～5 m	墓域。周溝状遺構・遺構外から土器（屋敷・十王台・月影）出土。	福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所 2003『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2』「荒屋敷遺跡」 2005『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5』「荒屋敷遺跡（4次）」
109	内屋敷遺跡	喜多方市塩川町会知字内屋敷・堀込	段丘頂部平坦面	175 m	3 m	集落跡。住居跡1軒（白江）。	塩川町教育委員会 2004 『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書7 内屋敷遺跡』
110	鶴塚遺跡	喜多方市塩川町大木字鶴塚・下屋敷	低丘陵上	174 m	3 m	遺構外からアメ鎌出土。	塩川町教育委員会 1994『鶴塚遺跡発掘調査報告書』
111	古屋敷遺跡	喜多方市塩川町大田字古屋敷	自然堤防上	175 m	3～4 m	遺構外から土器片（伊勢林前・天王山・屋敷・十王台）出土。	塩川町教育委員会 1999『塩川西部地区遺跡発掘調査報告4 古屋敷遺跡』 喜多方市教育委員会 2016『平成27年度市内遺跡発掘調査報告書』「古屋敷遺跡内容確認調査」 2017『平成28年度市内遺跡発掘調査報告書』「古屋敷遺跡内容確認調査」
112	塙田A遺跡	喜多方市豊川町沢部字塙田	高位段丘頂部	191 m	0 m	集落跡。住居4軒（屋敷・十王台・月影）。土坑からアメ鎌出土。	喜多方市教育委員会 1997『県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業 綾金・長尾地区遺跡発掘調査報告I』「塙田A・B遺跡」

川に併行して南東から北西方向へ流れている。遺跡の分布は、溷川中流域と旧湯川下流域、湯川上流域に纏まりが認められる。

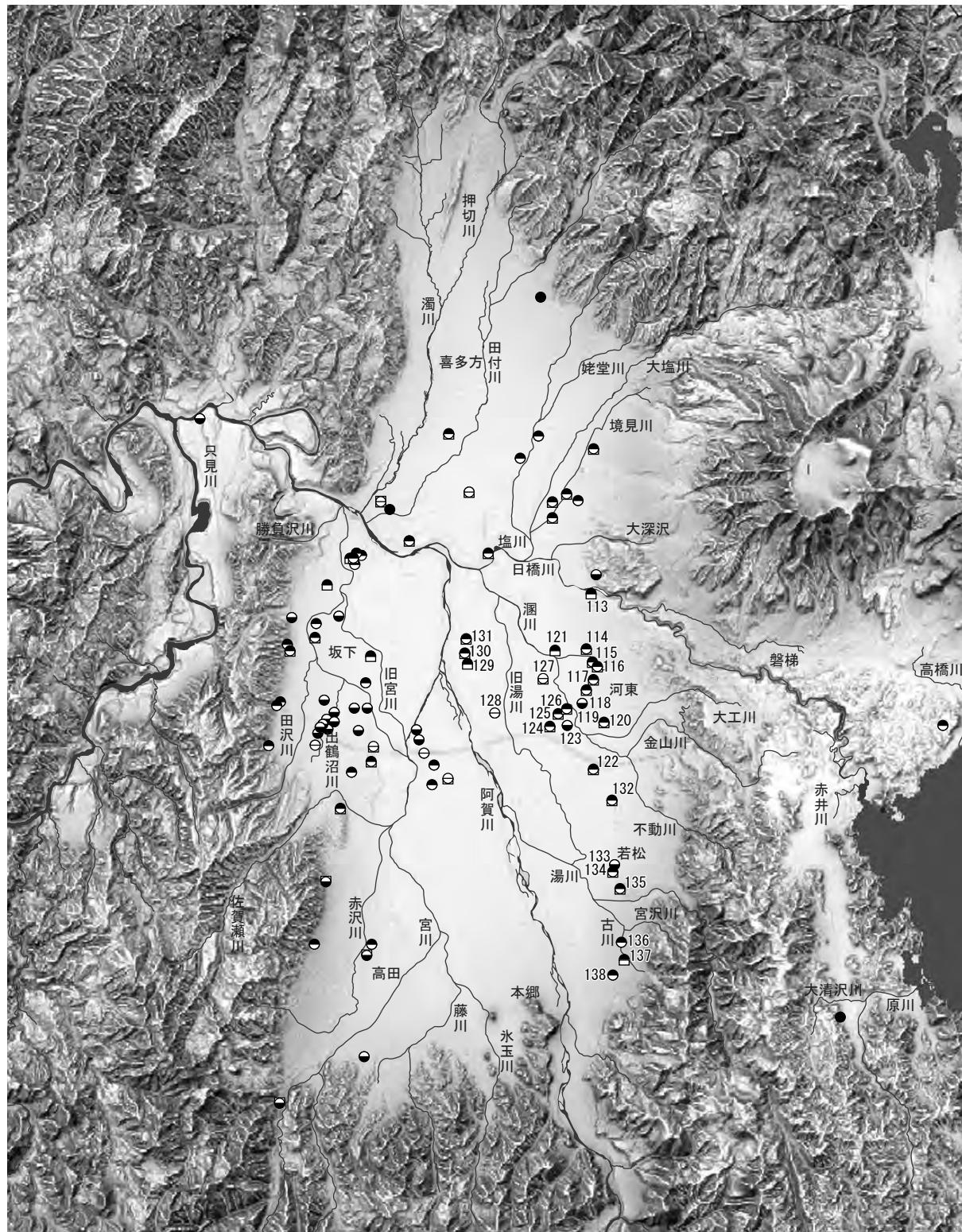
弥生時代後期前半の遺跡は、溷川中流東岸の低位段丘上に立地する木流堂北遺跡（119）、溷川中流西岸の沖積地に立地する鶴沼B遺跡（123）、同自然堤防上に立地する桜町遺跡（127）、旧湯川中流西岸の河岸段丘上の東高久遺跡（128）、旧湯川上流東岸の扇状地に位置する若松城郭内武家屋敷跡の内、築瀬監物邸跡（133）の5遺跡である。会津盆地北部と比較すると、会津盆地南東部の後期前半の遺跡は、箭瀬監物邸跡を除くと、周囲2kmの比較的狭い範囲

内に纏まる傾向が認められる。低地との比高差は桜町遺跡が3mとやや大きいものの、残りの遺跡は0～1m程度と小さい傾向がある。

木流堂北遺跡は、会津若松市登録の遺跡ではないが、古墳か塙の墳丘下の炭化物層から比較的多くの「天王山」の破片が採集された。鶴沼B遺跡からは、埋没河川跡から、「天王山」が出土している。桜町遺跡や東高久遺跡では土坑から当該期の土器が出土している。築瀬監物邸では、遺構外から当該期の土器片が出土している。

これらの内、弥生時代後期後半の土器が出土している遺跡は、遺構を伴う桜町遺跡及び東高久遺跡で

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2） —会津地方—



遺跡名

- 113.戸波 114.古屋敷 115.横江 116.南原 117.金屋 118.郡山
119.木流堂北 120.宮ノ越 121.五百丱 122.屋敷 123.鶴沼B
124.下高野A 125.西木流A 126.西木流D 127.桜町 128.東高久
129.五丁目・宮前 130.村南 131.堂後 132.村西 133.築瀬邸跡
134.松本・飯沼邸跡 135.若松城跡 136.御山村下 137.御山村中
138.堤沢北村

● 天王山

■ 伊勢林前・油田Y期

● 屋敷・稻荷塚

■十王台・樽・館ノ内

月影·白江

● アメリカ式石鎌のみ

地図：カシミール3Dを使用

第8図 会津盆地南東部弥生時代後期の遺物出土遺跡分布

ある。これらの遺跡については、比較的長い期間存続していた可能性がある。

会津盆地南東部では、弥生時代後期後半の遺跡は、急激に増えて 23 遺跡を数える。

戸波遺跡（113）は、日橋川南岸の河岸段丘に立地する遺跡で、日橋川の対岸の丘陵には、八幡山古墳群が所在する。遺構外から「十王台」が出土している。

溷川中流東岸の台地および河岸段丘上には、五百苅遺跡（121）、古屋敷遺跡（114）、横江遺跡（115）、南原遺跡（116）、金屋遺跡（117）、郡山遺跡（118）、宮ノ越遺跡（120）の 7 遺跡が確認できる。これらの遺跡では、遺跡から低地までの比高差は、0～5 m程度で、やはり比高差の小さい遺跡が多い。

これらの内、明確に遺構を伴う遺跡は、土坑及び溝跡が調査されている郡山遺跡だけで、郡山遺跡では、「屋敷」、「月影」、「十王台」から、「稻荷塚」、「白江」の時期まで継続して遺物が出土している。

その他の遺跡では、横江遺跡、南原遺跡、五百苅遺跡で「屋敷」あるいは「十王台」の資料が出土ないし採集されている。

また、古屋敷遺跡、金屋遺跡、宮ノ越遺跡では、「屋敷」等に後続する「白江」、「稻荷塚」、「館ノ内」の時期の資料が出土している。また、かつて田中原遺跡と呼ばれていた宮ノ越遺跡では、当該期を含む淡水産貝類の貝層が調査されている。

溷川中流西岸は、氾濫原として沖積地がひろがっているが、その中の微高地や自然堤防上にも当該期の遺跡が点在する。

「天王山」の土坑が調査された桜町遺跡（127）では、「屋敷」、「十王台」、「月影」、「樽」から「稻荷塚」、「白江」までの比較的まとまった資料や、北陸系・北関東系・東北系が混じりあったようなキメラ土器、土製紡錘車やアメリカ式石鎌、木製の鋤先や掘り棒など、多様な遺物が出土している。また、平地式住居跡や井戸、方形周溝墓などの多数の遺構が見つかり、弥生時代後期後半の集落と墓域の姿が明らかになった。

その他、下高野 A 遺跡（124）で「屋敷」、西木流 A 遺跡（125）、西木流 D 遺跡（126）から「白江」、「館ノ内」が出土しており、西木流 D 遺跡からは土器棺と推定される大型の土器も出土している。

溷川上流西岸の低位段丘上には、屋敷遺跡（122）、

村西遺跡（132）が立地する。遺跡と低地部の比高差は 2～5 m 程度で、両遺跡から、「屋敷」、「十王台」が出土している。また、屋敷遺跡では、北陸系の「月影」や後続する「白江」とともに「稻荷塚」、「館ノ内」も出土している。遺構も多く平地式の住居跡や井戸、方形周溝墓など、桜町遺跡に類似した内容を持つ遺跡である。

旧湯川下流と阿賀川に挟まれた低位段丘から低地にかけては、堂後遺跡（131）、村南遺跡（130）、五丁ノ目・宮前遺跡（129）、東高久遺跡（128）で、「屋敷」、「十王台」が認められる。さらに、堂後遺跡では、「月影」やアメリカ式石鎌の出土もある。なお、湯川町史第 3 卷には、南オダン遺跡、餅田遺跡で表採された「屋敷」、「十王台」、「白江」に比定される土器が掲載されている。旧湯川下流域近辺に所在する遺跡と考えられるが、遺跡位置と所在地が特定できなかったため、本稿の分布図および遺跡一覧には掲載していない。

湯川上流域は、会津盆地南東部の扇状地に、松本市之丞・飯沼時衛邸跡（134）、若松城跡（135）、御山村下（136）、御山村中（137）、堤沢北村（138）の 5 遺跡が認められる。

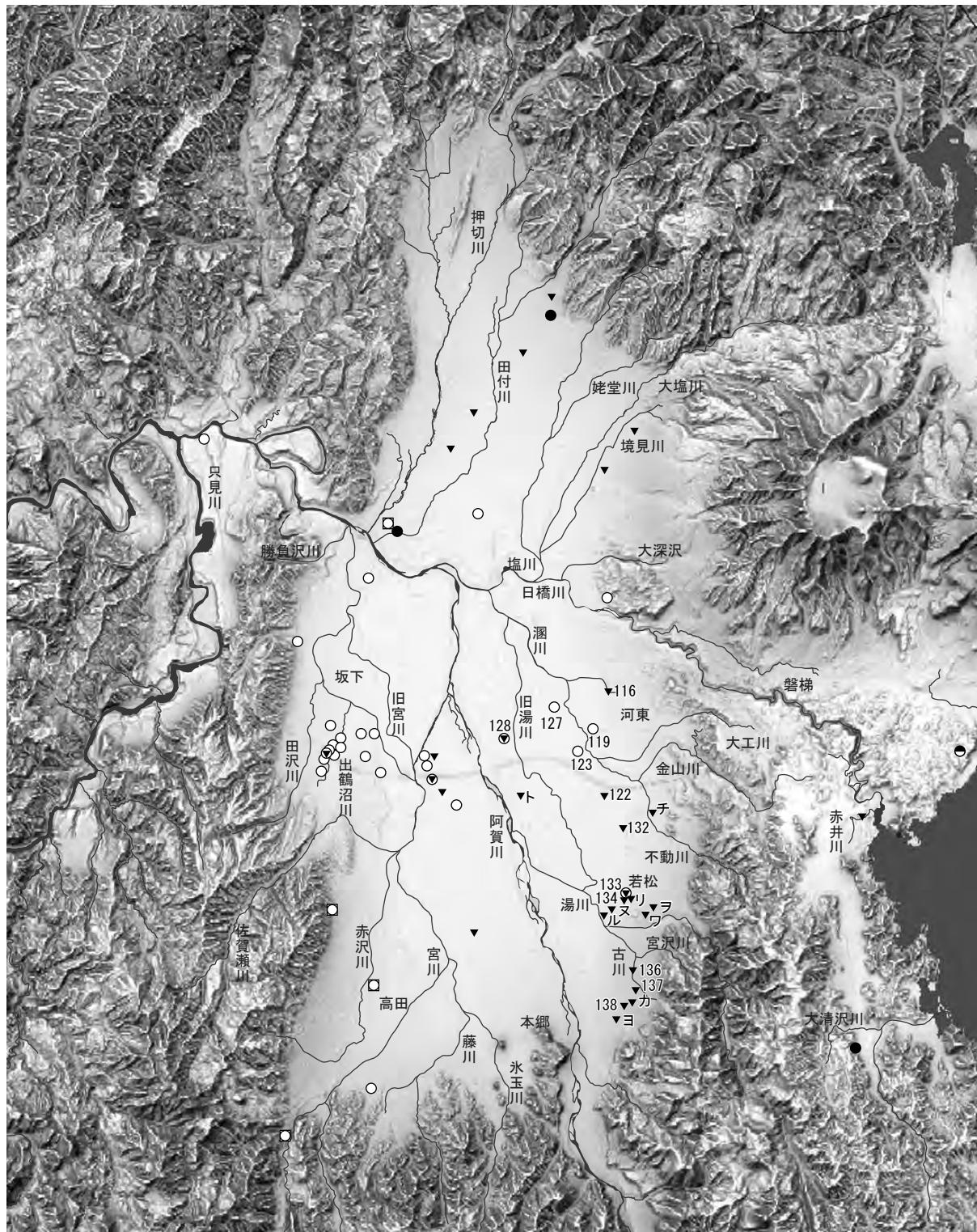
会津若松市街地の松本市之丞・飯沼時衛邸跡（134）は、遺跡名としては、若松城郭内武家屋敷跡が正式な名称である。この遺跡は、範囲が広いため、本稿では屋敷名を使用した。若松城跡では、天守閣下の帶廓から当該期の堅穴住居跡が見つかっている。両遺跡ともに「白江」を主体とする。

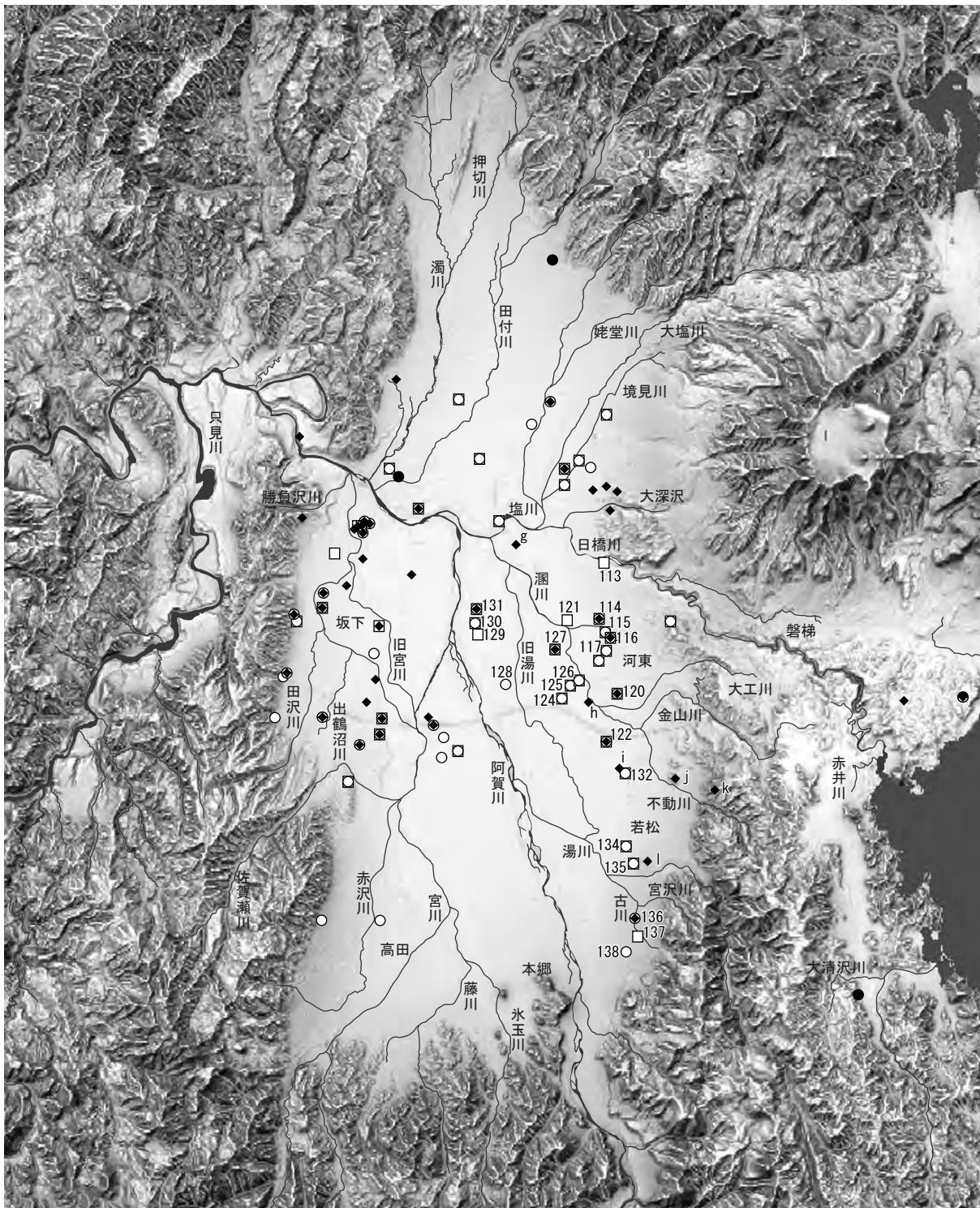
門田地区の御山村下、御山村中、堤沢北村は、広大な門田条里制跡に含まれるため、遺跡名では無く字名で表記した。御山村下と堤沢北村では、「屋敷」、御山村中では「十王台」が確認できる。

次に、会津盆地南東部の弥生時代後期の遺跡と弥生時代中期後葉の遺跡の分布には、どのような変化があるのか、第 9 図を見ながら確認する。

会津盆地南東部の弥生時代中期後葉の遺跡は、旧湯川中流西岸の東高久遺跡、イタミ七堂遺跡（ト）、溷川上流西岸の屋敷遺跡、村西遺跡を除くと、会津盆地東縁丘陵から西へ広がる扇状地上に立地していることがわかる。纏まりがあるのは、会津若松市街地と門田地区で、会津若松市街地の松本市之丞・飯沼時衛邸跡（134）、高橋外記・長谷川五郎左衛門・

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）
—会津地方—





遺跡名

113.戸波 114.古屋敷 115.横江 116.南原 117.金屋 120.宮ノ越 121.五百苑
 122.屋敷 124.下高野A 125.西木流A 126.西木流D 127.桜町 128.東高久
 129.五丁目・宮前 130.村南 131.堂後 132.村西 134.松本・飯沼邸跡
 135.若松城跡 136.御山村下 137.御山村中 138.堤沢北村

g.沼ノ上 h.鶴沼C i.宮下 j.会津大塚山古墳 k.堂ヶ作山古墳
 l.若松城三の丸跡

- 屋敷・稻荷塚
- 十王台・櫛・館ノ内
月影・白江
- アメリカ式石鎚のみ
- ◆ 古墳時代前期

0 4km

地図：カシミール3Dを使用

第10図 会津盆地南東部弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物出土遺跡分布

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—

表4 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南東部1）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
113	戸波遺跡	会津若松市河東町福島字戸波	河岸段丘上緩斜面	185～187 m	1 m	遺構外から土器片（十王台）出土。	会津若松市教育委員会・福島県喜多方建設事務所 2007『戸波遺跡 嶋村館跡』「戸波遺跡」
114	古屋敷遺跡	会津若松市河東町熊野堂字櫓	台地頂部平坦面	185～190 m	0m	河川跡・土坑2基から土器片（館ノ内・白江）出土。	河東町教育委員会 2001『古屋敷遺跡』
115	横江遺跡	会津若松市河東町熊野堂字横江	河岸段丘頂部平坦面	194 m	5 m	散布地。土器片（十王台・屋敷）出土。	河東町史編さん委員会 1979『河東町史上巻』
116	南原遺跡	会津若松市河東町大字熊野堂字南原	台地頂部平坦面	195 m	5 m	遺構外から土器片（屋敷式・十王台）出土。	河東町教育委員会 1979『南原遺跡』
117	金屋遺跡	会津若松市河東町郡山字村北	台地頂部平坦面	187～188 m	0 m	遺構外から土器片（稻荷塚・白江）出土。	河東町教育委員会 1977『明石塚館跡』「金屋遺跡」 会津若松市教育委員会 2006『金屋遺跡 郡山遺跡II』
118	郡山遺跡	会津若松市河東町郡山字神明台・古宮・二本杉・村北	台地頂部平坦面	187～188 m	0 m	集落跡？。土坑・溝跡（屋敷・月影・十王台・稻荷塚・白江）。	河東町教育委員会 2004『郡山遺跡I』 会津若松市教育委員会 2006『金屋遺跡 郡山遺跡II』 2008『郡山遺跡IV』 2009『郡山遺跡V』 2014『郡山遺跡IX』 2016『郡山遺跡XI』
119	木流堂北遺跡	会津若松市高野町橋本木流	低位段丘頂部平坦面	190 m	1m	炭層から土器片（天王山）。	河東町史編さん委員会 1979『河東町史上巻』
120	宮ノ越遺跡（田中原遺跡）	会津若松市河東町広田字宮越	低位河岸段丘上の残丘	200 m	2 m	遺物包含層から土器片（稻荷塚・館ノ内）出土。	藤崎富雄 1977「河東村田中原遺跡」『福島考古』第18号
121	五百苅遺跡（杉ノ沢遺跡）	会津若松市河東町代田字代田	河岸段丘頂部平坦面	181 m	1m	散布地。土器片（十王台）出土。	河東町史編さん委員会 1979『河東町史上巻』
122	屋敷遺跡	会津若松市町北町大字始字屋敷	低位沖積段丘面上	195～197 m	2～4 m	集落・墓域。住跡・周溝墓・井戸跡土坑・溝跡（屋敷・十王台・月影・稻荷塚・館ノ内・白江）。	福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター、日本道路公団 1991『東北横断自動車道遺跡調査報告12』「屋敷遺跡」 会津若松市教育委員会・福島県会津若松建設事務所 1993『国道121号線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書』「屋敷遺跡」 会津若松市教育委員会 2004『屋敷遺跡』

表5 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南東部2）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
123	鶴沼B遺跡	会津若松市高野町大字中沼字鶴沼	沖積地	189 m	0 m	河川跡から土器片（天王山）出土。	福島県教育委員会・公益財団法人福島県文化振興財団・国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所 2014『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14』「鶴沼B遺跡（1次）」
124	下高野A遺跡	会津若松市高野町柳川字下高野	沖積地中の微高地	190 m	1 m	散布地。土器片（屋敷）出土。	福島県会津農林事務所・会津若松市教育委員会 2000『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書II』「下高野A遺跡」
125	西木流A遺跡	会津若松市高野町柳川字下高野	沖積地中の微高地	189 m	0 m	集落？。土坑・溝跡（白江・館ノ内）。	福島県会津農林事務所・会津若松市教育委員会 2000『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書II』「西木流A遺跡」
126	西木流D遺跡	会津若松市高野町大字木流字木流	沖積地	188 m	0 m	河川跡から土器棺（稻荷塚？）、土器（白江・館ノ内）出土。	福島県教育委員会・公益財団法人福島県文化振興財団・国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所 2016『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告16』「西木流D遺跡（2次）」
127	桜町遺跡	湯川村大字桜町字中町・千苅・来光・窪田・高橋・八日	自然堤防上	184～185 m	3 m	集落・墓域。住居跡・周溝墓・井戸跡土坑・溝跡（天王山・屋敷・十王台・樽・月影・稻荷塚・白江）。アメ鎌・紡錘車・掘り棒、鍬、梯子等出土。	湯川村教育委員会 2006『桜町遺跡発掘調査報告』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務 2005『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5』「桜町遺跡（1次）」 2011『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10』「桜町遺跡（2次）」 2011『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告11』「桜町遺跡（3次）」 2012『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12』「桜町遺跡（4次）」
128	東高久遺跡	会津若松市神指町大字高久	河岸段丘頂部平坦面	187 m	2 m	集落・墓域。土坑・井戸跡・周溝状遺構・溝跡・ピット（天王山・屋敷）。	福島県会津農林事務所・会津若松市教育委員会 2000『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書II』「東高久遺跡」 2005『東高久遺跡』
129	五丁ノ目・宮前遺跡	湯川村大字佐野目字宮前	低位段丘から低地	183 m	0 m	散布地。土器片（十王台）出土。	湯川村教育委員会 1995 『湯川村史第三巻通史 原始・古代・中世・近世』
130	村南遺跡	湯川村勝常字村南	低位段丘から低地	182 m	0 m	散布地。土器片（屋敷・十王台）出土。	福島県1964『福島県史』第6巻（資料編1考古資料）

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—

表6 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南東部3）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
131	堂後遺跡	湯川村大字勝常寺西・堂後	阿賀川東岸の低位段丘から低地	180 m	0 m	集落。住居跡・井戸・溝跡から土器片（屋敷・十王台・月影）出土。アメ鎌出土。	湯川村教育委員会 2012『平成22・23年度 村内遺跡発掘調査報告書』「平成22・23年度 堂後遺跡範囲確認調査」「平成22年度 勝常寺境内試掘調査」 2013『平成24年度 村内遺跡発掘調査報告書』「堂後遺跡範囲確認調査」 2014『平成25年度村内遺跡発掘調査報告書』「堂後遺跡範囲確認調査」 2015『平成26年度 村内遺跡発掘調査報告書』「堂後遺跡範囲確認調査」
132	村西遺跡	会津若松市北町荒久田字村西	低位段丘末端部	206 m	3～5 m	遺構外から土器片（屋敷・十王台）出土。	福島県立博物館 1993『会津若松市村西遺跡発掘調査報告書』
133	築瀬監物邸跡（若松城郭内武家屋敷跡）	会津若松市西栄町	扇状地緩斜面	219 m	0 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	会津若松建設事務所・会津若松教育委員会 2003『若松城郭内武家屋敷跡II』「築瀬監物邸跡」
134	松本市之丞・飯沼時衛邸跡（若松城郭内武家屋敷跡）	会津若松市西栄町	扇状地緩斜面	219 m	0 m	集落。住居1軒（白江）。	会津若松建設事務所・会津若松教育委員会 2004『若松城郭内武家屋敷跡III』「江戸時代以前の遺構・遺物」
135	若松城跡	会津若松市追手町	扇状地中の残丘	228 m	7 m	集落。住居1軒（白江・館ノ内）。	会津若松市教育委員会 1999『史跡若松城III』
136	御山村下（門田条里制跡）	会津若松市門田町大字御山字村下	扇状地平坦面	220 m	0 m	遺構外から土器片（屋敷）出土。	会津若松建設事務所・会津若松市教育委員会 1990『門田条里制跡発掘調査報告書II』
137	御山村中（門田条里制跡）	会津若松市門田町大字御山字村中	扇状地緩斜面	227～232 m	0 m	遺構外から土器片（十王台）出土。	会津若松建設事務所・会津若松市教育委員会 1994『門田条里制跡発掘調査報告書IV』
138	堤沢北村（門田条里制跡）	会津若松市門田町大字堤沢字北村	扇状地緩斜面	233～239 m	0 m	遺構外から土器片（屋敷？）出土。	会津若松市教育委員会 1991『会津総合運動公園発掘調査概報I』

梶原主馬邸跡（リ）、黒河内伝八・横山伝蔵邸跡（ヌ）、岩田市右衛門邸跡（ヲ）、郷之原遺跡（チ）、川原町口遺跡（ル）、若松城三の丸跡（ワ）、門田条里制跡の中の御山村下（136）、御山村中（137）、御山村上（カ）、堤沢北村（138）と社田A遺跡（ヨ）が知られる。

この内、弥生時代後期前半までの土器が確認できる遺跡は、東高久遺跡と松本市之亟・飯沼時衛邸跡の2遺跡であり、弥生時代後期に遺跡が密集する溷川中流域への進出は見られない。全体的には会津盆地南東縁の丘陵や扇状地にかけて弥生時代中期の遺跡が分布するのに対し、後期前半には、河川中流域の低位段丘や低地部への進出傾向が見て取れる。

弥生時代後期後半から古墳時代へは、どうであろうか。第10図で確認する。会津盆地南東部で確認できる古墳時代前期の遺跡は、日橋川と阿賀川の合流点にほど近い沼ノ上遺跡（g）、溷川中流域の古屋敷遺跡（114）、南原遺跡（116）、桜町遺跡（127）、宮ノ越遺跡（120）鶴沼C遺跡（h）、溷川上流域の屋敷遺跡（122）、宮下遺跡（i）、会津大塚山古墳（j）、堂ヶ作山古墳（k）、旧湯川下流域の堂後遺跡（131）、湯川上流域の若松城三の丸跡（l）、御山村下（136）の12遺跡である。

この内、弥生時代後期後半の遺物が出土する遺跡は、古屋敷遺跡、南原遺跡、桜町遺跡、宮ノ越遺跡、屋敷遺跡、堂後遺跡、御山村下の7遺跡で、古墳である会津大塚山古墳や堂ヶ作山古墳を除くと基本的に遺跡分布が重なっている。

のことから、会津盆地南東部の弥生時代後期後半から古墳時代前期へは遺跡が継続する傾向が指摘できる。

8 会津盆地南西部の弥生後期の遺跡

会津盆地南西部は北と東を阿賀川で境とした範囲で、概ね会津坂下町と会津美里町の町域にあたる。この範囲で確認した弥生時代後期の遺跡は、44遺跡を数え、会津盆地では最も多い。

会津盆地南東部で遺跡が集中するのは、旧宮川（鶴沼川）下流域東岸、田沢川流域、出鶴沼川流域、旧宮川中流域西岸、旧宮川中流域東岸、佐賀瀬川流域、赤沢川流域、宮川上流域である。

この地域で弥生時代後期前半の土器が確認できる遺跡は、23遺跡である。

田沢川流域では、東館遺跡（150）と経塚遺跡（171）がある。東館遺跡は、旧宮川と田沢川の合流点にほど近い沖積地中の自然堤防上に立地する。「天王山」の土坑がある。経塚遺跡は、田代川西岸の丘陵裾部に位置する遺跡で、古墳の墳丘および周溝から「天王山」が出土している。

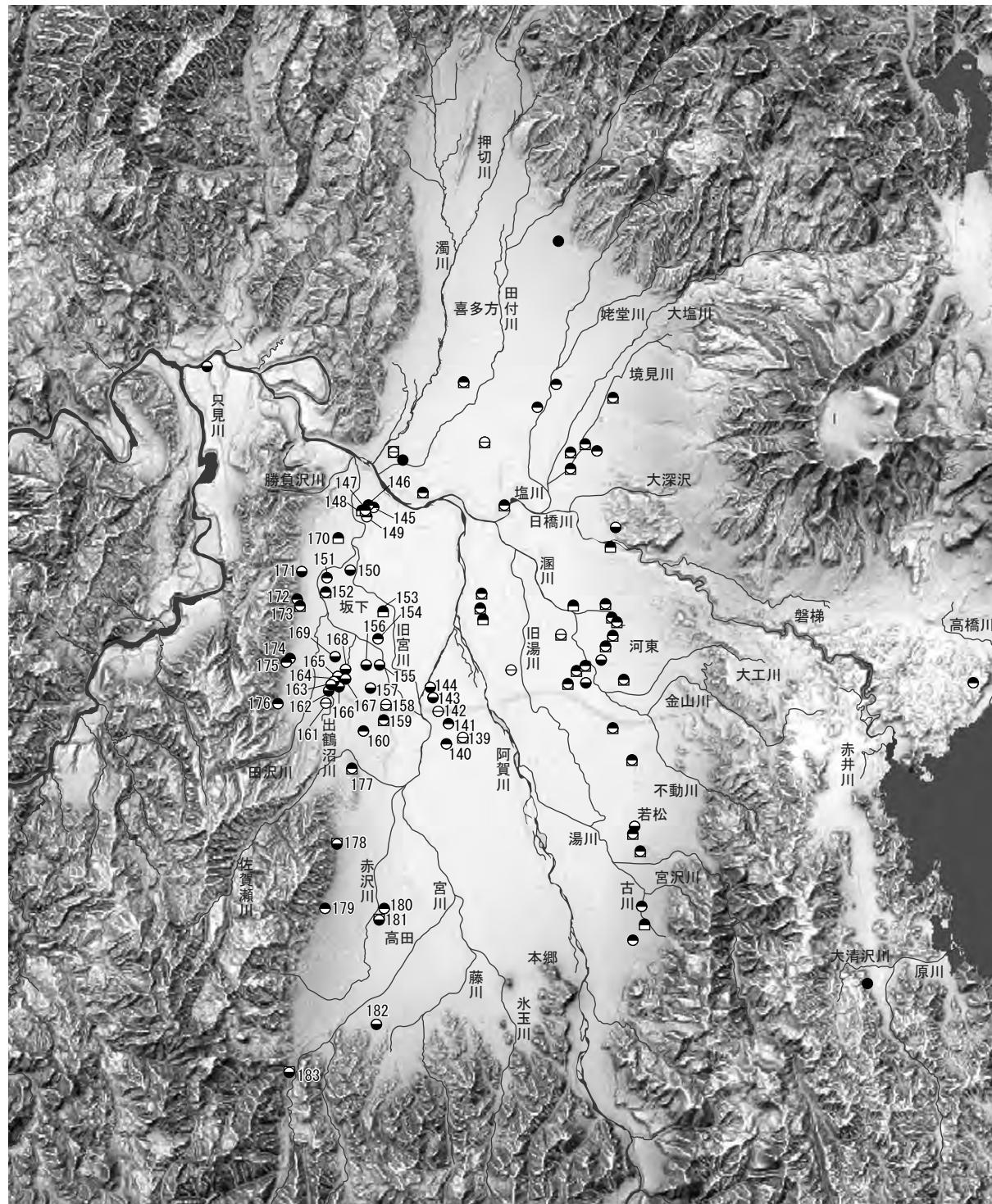
出鶴沼川流域の両岸に形成された低地部との比高差3～10m程の河岸段丘上には、「天王山」が出土する多くの遺跡が分布している。樋渡台畠遺跡（161）、松無遺跡（162）、能登遺跡（163）、能登B遺跡（164）、能登A遺跡（165）、大豆田B遺跡（166）、竹原遺跡（167）、寿の宮遺跡（168）、四百刈遺跡（169）の8遺跡がそれである。この内、能登遺跡では、当該期の良好な遺物包含層が調査されており、会津地方の代表的な天王山式の資料となっているほか、土製紡錘車や匙形土製品、アメリカ式石鏃、独鉛石、各種石器類が出土している。能登遺跡の南側には、松無塚遺跡が隣接するが、一体の遺跡であることが確実なので、本稿では、能登遺跡に含めている。

旧宮川中流域西岸の河岸段丘上には、館ノ北遺跡（156）、細田遺跡（155）、村北遺跡（157）、館ノ内遺跡（158）の4遺跡が認められる。遺跡と低地との比高差は1～5mを測り、いずれの遺跡でも「天王山」が出土しているが、特に細田遺跡と館ノ内遺跡では、竪穴住居跡が見つかっていることから、集落跡と考えられる。館ノ内遺跡からは、新潟県域の砂山式の口縁部片が出土している。なお、館ノ内遺跡は会津坂下町の遺跡名で、南接する会津美里町の館ノ越遺跡と同一遺跡であることが確実なため、本稿では、館ノ内遺跡に含めて表記している。

旧宮川中流域西岸の沖積地中には、開津台畠遺跡（144）、舞台遺跡（143）、和泉遺跡（142）、田村山古墳（139）の4遺跡が確認できる。遺跡は、概ね自然堤防上に立地しており、低地部との比高差はほぼ無い。すべて「天王山」が出土している。和泉遺跡では、当該期の住居跡や遺物包含層が調査されていることから、集落跡と考えられ、「天王山」のほかに「油田Y期」、「伊勢林前」が出土し

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—



遺跡名

- 139. 田村山古墳 140. 深田 141. 下和泉 142. 和泉 143. 舞台
- 144. 開津台畑 145. 鎮守森古墳 146. 男壇 147. 中西 148. 宮東
- 149. 雨沼 150. 東館 151. 森前 152. 稲荷塚 153. 上窪道北
- 154. 柳ノ内 155. 細田 156. 館ノ北 157. 村北 158. 館ノ内 159. 東台
- 160. 北大門B 161. 桶渡台畑 162. 松無 163. 能登 164. 能登B
- 165. 能登A 166. 大豆田B 167. 竹原 168. 寿の宮 169. 四百刈
- 170. 八日沢館ノ内 171. 経塚 172. 盜人沢 173. 薬王寺 174. 大村新田
- 175. 大村 176. 鬼渡A 177. 東四十八 178. 驚沢道南 179. 権現山下
- 180. 沼ノ上 181. 油田 182. 下堀際 183. 上冴A

● 天王山

□ 伊勢林前・油田 Y期

● 屋敷・稻荷塚

■ 十王台・樽・館ノ内
月影・白江

● アメリカ式石鎚のみ



地図：カシミール 3D を使用

第11図 会津盆地南西部弥生時代後期の遺物出土遺跡分布

ている。

赤沢川流域では、西岸の河岸段丘上に鷺沢道南遺跡(178)、東岸の自然堤防上に油田遺跡(181)がある。いずれの遺跡でも遺構外から「天王山」と「油田Y期」が出土している。

宮川上流域では、東岸の扇状地に下堀際遺跡(182)、さらに上流の河岸段丘斜面に上冴A遺跡(183)がある。下堀際遺跡では、炉跡と考えられる焼土遺構が見つかっており、集落跡の可能性がある。両遺跡で「天王山」が出土しており、上冴A遺跡では、「油田Y期」が加わる。

会津盆地南西部の弥生時代後期前半の遺跡は、標高185～195m程度の河岸段丘上に立地するが多く、特に出鶴沼川と宮川中流域東岸に集中する傾向がある。また、会津美里町域の赤沢川流域や宮川上流域では、「油田Y期」が伴う。

次に後期後半の遺跡を見ていく。旧宮川と阿賀川の合流点近くの旧宮川東岸の河岸段丘上には、鎮守森古墳(145)、男壇遺跡(146)、中西遺跡(147)、宮東遺跡(148)、雨沼遺跡(149)が隣り合うように所在する。遺構を伴うのは、中西遺跡及び宮東遺跡で、土坑が見つかっており、「白江」、「館ノ内」が伴う。鎮守森遺跡、男壇遺跡、雨沼遺跡では、溝跡や遺構外から「屋敷」の土器片が出土している。

田沢川流域には、旧宮川の合流点近くの西岸沖積地中の微高地に八日沢館ノ内遺跡(170)、下流東岸の河岸段丘上に森前遺跡(151)、稻荷塚遺跡(152)、西岸の河岸段丘から山地山腹にかけて盗人沢遺跡(172)、薬王寺遺跡(173)、大村新田遺跡(174)、大村遺跡(175)、鬼渡A遺跡(176)が並ぶ。沖積地に位置する八日沢館ノ内遺跡では、遺構外から「館ノ内」が出土しており、山際に位置する盗人沢遺跡、薬王寺遺跡、大村新田遺跡、大村遺跡、鬼渡A遺跡では、「屋敷」が出土している。河岸段丘上の森北遺跡と稻荷塚遺跡からも、「屋敷」が出土しているほか、当該期の竪穴住居跡や方形周溝墓が調査されている稻荷塚遺跡では、「白江」、「稻荷塚」、「館ノ内」が出土している。

旧宮川中流域西岸の河岸段丘上には、上窪道北遺跡(153)、柳ノ内遺跡(154)、館ノ内遺跡(158)、東台遺跡(159)が所在する。館ノ内遺跡を除くと遺跡と低地部の比高差が2m以内であり、段丘上で

あるが、低地部に近い地形である。上窪道北遺跡はかつて古坂下遺跡と呼ばれていた遺跡で、「月影」、「十王台」、「館ノ内」が出土している。柳ノ内遺跡は散布地で、「屋敷」が採集されている。館ノ内遺跡は、後期前半から続く遺跡で、後期後半では、遺構外から「屋敷」、「十王台」、「月影」、「館ノ内」、「樽」などの土器や石斧、土製紡錘車が出土している。東台遺跡では試掘調査が行われており、「屋敷」、「館ノ内」のほか「樽」が出土している。

旧宮川中流域東岸では、低地部との比高差の少ない段丘や自然堤防上に和泉遺跡(142)、下和泉遺跡(141)、深田遺跡(140)、田村山古墳(139)が確認できる。田村山古墳を除く遺跡からは、「屋敷」が出土しており、和泉遺跡では「十王台」も出土している。田村山古墳は、內行花文鏡の出土で有名であるが、弥生時代後期後半では、東海地方の山中式との関係がうかがわれる山形文と棒状浮文が施文された壺の口縁部片が出土している。

後期前半の遺跡が多かった出鶴沼川流域では、遺跡数が激減し、最上流の樋渡台畑遺跡のみとなる。同遺跡からは、遺構外から「屋敷」が出土している。

佐賀瀬川流域では、北岸と南岸の扇状地に北大門B遺跡(160)と東四十八遺跡(177)が立地する。両遺跡からは「屋敷」が出土しているほか、東四十八遺跡では、「樽」が認められる。

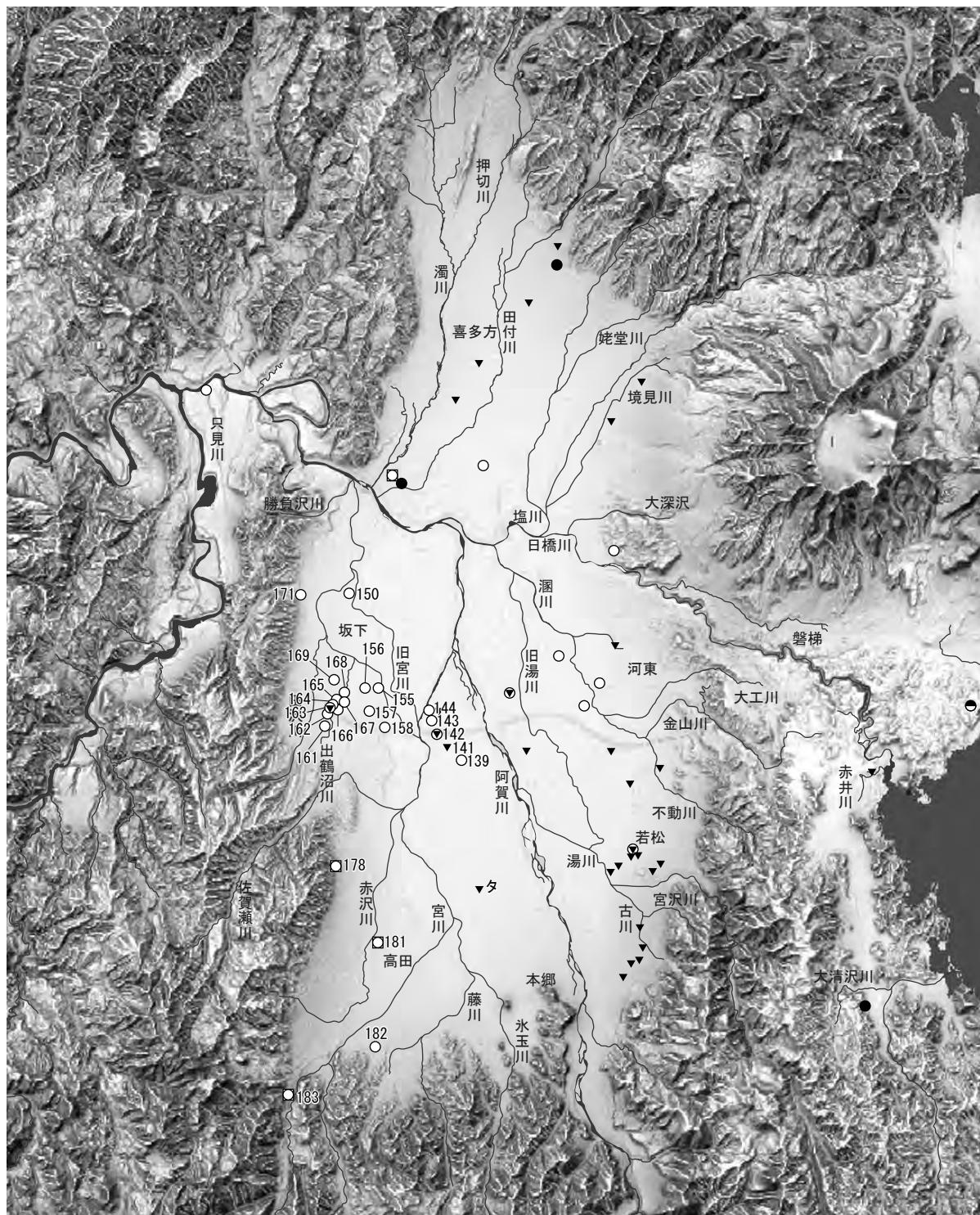
赤沢川流域では、西岸に権現山下遺跡(179)、東岸に沼ノ上遺跡(189)が確認できる。権現山下遺跡は扇状地に立地し、沼ノ上遺跡は、沖積地中の自然堤防上に立地する。

会津盆地南西部の弥生時代後期後半の遺跡は、後期前半に遺跡が確認できなかった旧宮川下流域東岸や旧宮川中流左岸、田沢川西岸の山際などに分布を広げる他、後期前半の中心地ともいえる出鶴沼川流域や旧宮川中流域西岸では激減する傾向がある。

次に、当該範囲での弥生時代中期後葉と後期前半ではどのような動きがあったのか、第12図で確認していく。

会津盆地南東部の弥生時代中期後葉の土器が見つかっている遺跡は、出鶴沼川流域の河岸段丘上に立地する能登遺跡(163)、旧宮川中流域東岸の自然堤防上に立地する和泉遺跡(142)、下泉遺跡(141)、宮川東岸の河岸段丘上に立地する西麻生遺跡(タ)

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）
—会津地方—



遺跡名

139.田村山古墳 141.下和泉 142.和泉 143.舞台 144.開津台畠 150.東館
155.細田 156.館ノ北 157.村北 158.館ノ内 161.樋渡台畠 162.松無
163.能登 164.能登B 165.能登A 166.大豆田B 167.竹原 168.寿の宮
169.四百刈 171.経塚 178.鷺沢道南 181.油田 182下堀際 183.上脣A

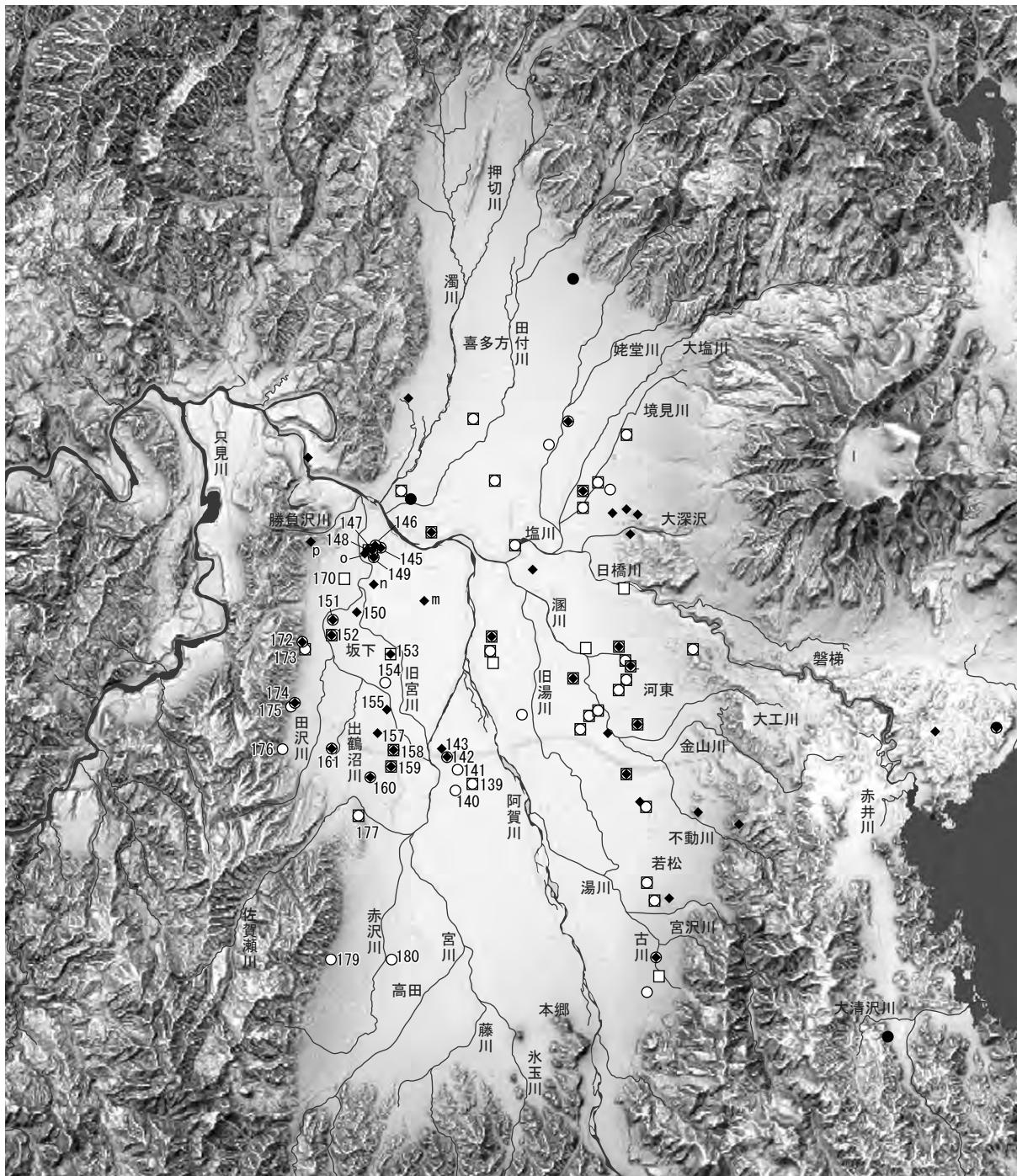
- 天王山
- 伊勢林前・油田Y期
- ▼ 川原町口・御山村下
- アメリカ式石鎌のみ

タ.西麻生

0 4km

地図：カシミール3Dを使用

第12図 会津盆地南西部弥生時代中期後葉～後期前半の遺物出土遺跡分布



遺跡名

- 139.田村山古墳 140.深田 141.下和泉 142.和泉
 143.舞台 145.鎮守森古墳 146.男壇 147.中西 148.宮東
 149.雨沼 150.東館 151.森前 152.稻荷塚 153.上窪道北
 154.柳ノ内 155.細田 157.村北 158.館ノ内 159.東台 160.北大門B
 161.樋渡台畑 170.八日沢館ノ内 171.経塚 172.盗人沢 173.薬王寺
 174.大村新田 175.大村 176.鬼渡A 177.東四十八
 179.権現山下 180.沼ノ上
 m.御池田山ノ神 n.宮ノ北 o.丈助橋 p.森北古墳群

○屋敷・稻荷塚
 □十王台・樽・館ノ内
 月影・白江
 ●アメリカ式石鎚のみ
 ◆古墳時代前期

0 4km

地図：カシミール3Dを使用

第13図 会津盆地南西部弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物出土遺跡分布

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—

表7 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南西部1）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
139	田村山古墳	会津若松市北会津町和合字塚の越	扇状地末端の平坦地	192 m	0 m	トレンチから土器片（天王山）	田村山古墳周溝調査報告刊行会 1981『会津田村山古墳』
140	深田遺跡	会津若松市北会津町出尻	段丘頂部平坦面	193 m	0 m	散布地。土器片（屋敷）出土。	中村五郎 1981「第IV章4節北会津村北部地区出土の弥生土器」 『会津田村山古墳』田村山古墳周溝調査報告刊行会
141	下和泉遺跡	会津若松市北会津町和泉字中分	自然堤防上	189m	0 m	散布地。土器片（屋敷）出土。	中村五郎 1981「第IV章4節北会津村北部地区出土の弥生土器」 『会津田村山古墳』田村山古墳周溝調査報告刊行会
142	和泉遺跡	会津若松市北会津町和泉字原山	自然堤防上	188 m	0 m	集落・墓域。住居跡2軒（天王山）。土器棺墓（天王山）。遺物包含層・遺構外から土器（天王山・油田Y期・伊勢林前・屋敷・十王台）出土。	福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団 1991『東北横断自動車道遺跡調査報告13』「和泉遺跡」
143	舞台遺跡	会津坂下町大字開津字舞台	沖積地	186 m	0 m	トレンチから土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1980『開津地区遺跡調査報告〔範囲確認調査〕』
144	開津台畠遺跡 (中開津遺跡)	会津坂下町大字開津字台畠・天神宮・油湖	自然堤防上	185 m	0 m	集落？溝跡（天王山）。トレンチおよび遺構外から土器（天王山）、匙形土製品出土。	井関敬嗣・中村五郎 1960「中開津遺蹟の土器」『福島考古』第3号 福島県考古学会 会津坂下町教育委員会 1980『開津地区遺跡調査報告〔範囲確認調査〕』台畠遺跡 会津坂下町史編さん委員会 2017『会津坂下町史』第四巻資料編I 考古
145	鎮守森古墳	会津坂下町大字青津字男壇・中西・館ノ腰	河岸段丘頂部平坦面	173～174 m	4 m	トレンチから土器片（屋敷？）出土。	会津坂下町教育委員会 1998『鎮守森古墳』
146	男壇遺跡	会津坂下町大字青津字男壇	河岸段丘頂部平坦面	175 m	5 m	周溝墓から土器片（屋敷？）	会津坂下町教育委員会 1990『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』「男壇遺跡」
147	中西遺跡	会津坂下町大字青津字中西	河岸段丘頂部平坦面	175 m	3 m	集落？土坑2基（白江・館ノ内）	会津坂下町教育委員会 1990『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』
148	宮東遺跡	会津坂下町大字合川字宮東	河岸段丘頂部平坦面	175 m	3 m	集落？土坑2基（白江）。	会津坂下町教育委員会 1990『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』「宮東遺跡」

表8 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南西部2）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
149	雨沼遺跡	会津坂下町 大字青津字 雨沼	河岸段丘 頂部平坦 面	176 m	1 m	溝・遺構外から 土器片（屋敷）	会津坂下町教育委員会 1989『阿 賀川地区遺跡発掘調査報告書 雨沼遺跡』
150	東館遺跡	会津坂下町 大字新館字 東館	自然堤防 上	174 ~ 177 m	3 m	集落？土坑（天 王山）。溝跡から 土器片（天王山） 出土。	会津坂下町教育委員会 1994『坂 下北部地区遺跡発掘調査報告 書』東館遺跡
151	森前遺跡（臼 ガ森古墳）	会津坂下町 大字新館字 森前	河岸段丘 頂部平坦 面	176 m	0 m	古墳周溝から土 器片（屋敷）出 土。	会津坂下町教育委員会 1993『坂 下北部地区遺跡発掘調査報告書 臼ガ森古墳 森前遺跡』
152	稻荷塚遺跡 (杵ガ森古墳)	会津坂下町 字稻荷塚	河岸段丘 頂部平坦 面	178 m	1 m	集落・墓域。住 居・周溝墓（屋 敷・稻荷塚・館 ノ内・白江）	会津坂下町教育委員会 1995『杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡 発掘調査報告書』
153	上窪道北遺跡 (古坂下遺跡)	会津坂下町 字上窪道北 乙	河岸段丘 頂部平坦 面	178 m	2 m	遺構外から土器 (月影・十王台・ 館ノ内)出土。	古川利意 1990「会津坂下町古坂 下遺跡の古式土師器について」 『福島考古』第31号福島県考古 学会 会津坂下町教育委員会 2008『上 窪道北遺跡試掘調査報告書』
154	柳ノ内遺跡	会津坂下町 大字羽林字 柳ノ内	沖積地中 の微高地	180 m	0 m	散布地。土器(屋 敷)出土	会津坂下町教育委員会 1987『会 津坂下町分布調査報告書(III)』 「第7節 分布調査」
155	細田遺跡	会津坂下町 大字大沖字 切作	宮川西岸 の河岸段 丘頂部	186 m	1 m	集落。住居跡・ 土坑（天王山） 遺構外から土器 片（天王山）、 アメ鑓出土。	会津坂下町教育委員会 1985『若宮地区分布調査報告書』 「細田遺跡」 1988『館ノ内遺跡 細田遺跡』「細 田遺跡」
156	館ノ北遺跡	会津坂下町 大字大沖字 館ノ北	河岸段丘 頂部平坦 面	189 m	5 m	散布地？土坑・ 溝跡から土器片 (天王山)出土。	会津坂下町教育委員会 1993『会津坂下町若宮地区遺跡 発掘調査報告書』「館ノ北遺跡」
157	村北遺跡	会津坂下町 大字五ノ併字 村北	河岸段丘 頂部平坦 面	192 m	1m	土坑・河川跡か ら土器片（天王 山）出土。	会津坂下町教育委員会 1993『若宮地区遺跡発掘調査報 告書』「村北遺跡」
158	館ノ内遺跡 (館ノ越遺跡)	会津坂下町 大字五ノ併字 館ノ内・会津 美里町和田 目字館ノ越	扇状地末 端の河岸 段丘頂部	192 m	5 m	集落。住居跡(天 王山)。溝跡・ ピット・遺構外か ら土器（天王山・ 屋敷・樽・十王 台・月影・館ノ内・ 十王台)、打製 石斧、土製紡錘 車出土。	会津坂下町教育委員会 1988『館ノ内遺跡 細田遺跡』 1992『若宮地区遺跡発掘調査報 告書』「館ノ内遺跡」 新鶴村教育委員会 1990『館ノ越遺跡』
159	東台遺跡	会津美里町 和田目字東 台	扇状地末 端の微高 地上	190 m	2 m	トレンチから土器 片（屋敷・樽・ 館ノ内)出土。	新鶴村教育委員会 1983『新鶴村遺跡試掘調査報告』 「東台遺跡」 1990『東台遺跡』

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）

—会津地方—

表9 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南西部3）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
160	北大門B遺跡	会津美里町和田目字北大門	扇状地末端の平坦地	210 m	0 m	トレンチから土器片（屋敷）出土	新鶴村教育委員会 1983『新鶴村遺跡試掘調査報告』「北大門B遺跡」
161	樋渡台畠遺跡	会津坂下町大字樋島字台畠	河岸段丘頂部緩斜面	204～207 m	10 m	遺構外から土器片（天王山・屋敷）出土。	会津坂下町教育委員会 1990『若宮地区遺跡発掘調査報告書』「樋渡台畠遺跡」
162	松無遺跡	会津坂下町大字勝大字松無	河岸段丘頂部平坦面	200 m	10 m	古墳周溝から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1986『若宮地区分布調査報告書（II）』「松無遺跡」
163	能登遺跡 (松無塚遺跡)	会津坂下町大字勝大字能登・松無	河岸段丘頂部から斜面	196～200 m	7 m	集落。包含層から土器（天王山）、紡錘車・土製匙・アメ鑓・独鉛石出土。	福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団 1990『東北横断自動車道遺跡調査報告10』「能登遺跡」 会津坂下町教育委員会 1992『若宮地区遺跡発掘調査報告書』「松無塚遺跡」
164	能登B遺跡	会津坂下町大字勝大字能登	河岸段丘頂部平坦面	196 m	4 m	トレンチから土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1986『若宮地区分布調査報告書（II）』「能登B遺跡」
165	能登A遺跡	会津坂下町大字勝大字能登	河岸段丘頂部平坦面	195 m	3 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1986『若宮地区分布調査報告書（II）』「能登A遺跡」
166	大豆田B遺跡	会津坂下町大字樋島字小豆田	河岸段丘頂部平坦面	199 m	2 m	溝跡から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1992『若宮地区遺跡発掘調査報告書』
167	竹原遺跡	会津坂下町大字大沖字竹原	河岸段丘頂部平坦面	195 m	5 m	土坑・遺構外から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1992『若宮・坂下北部地区遺跡発掘調査報告書 竹原遺跡的場館遺跡』「大豆田B遺跡」
168	寿の宮遺跡	会津坂下町大字牛川字寿の宮	河岸段丘頂部平坦面	193 m	5 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1986『若宮地区分布調査報告書（II）』「寿の宮遺跡」
169	四百刈遺跡	会津坂下町大字白狐字四百刈	河岸段丘頂部平坦面	190 m	1 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1993『若宮地区遺跡発掘調査報告書』「四百刈遺跡」
170	八日沢館ノ内遺跡	会津坂下町大字八日沢字館ノ内	沖積地中の微高地	175 m	1 m	トレンチから土器（館ノ内）出土。	会津坂下町教育委員会 1987『会津坂下町分布調査報告書（III）』「館ノ内遺跡」
171	経塚遺跡	会津坂下町大字塔寺字経塚	丘陵裾部の緩斜面	193～196 m	6 m	墳丘および周溝から土器片（天王山）出土。	会津坂下町教育委員会 1992『経塚古墳 経塚遺跡発掘調査報告書』
172	盗人沢遺跡	会津坂下町大字船杉字盗人沢	山地中腹斜面	202～213 m	20 m	溝跡。遺構外から土器片（屋敷）出土。	会津坂下町教育委員会 2011『盗人沢遺跡』

表 10 福島県弥生時代後期遺跡一覧（会津盆地南西部4）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
173	薬王寺遺跡	会津坂下町 大字船杉字 北杉大道上乙、南杉乙	山地中腹 斜面	195～ 200 m	15m	遺構外から土器 片（屋敷）出土。	会津坂下町教育委員会 2009『薬 王寺遺跡III』
174	大村新田遺跡	会津坂下町 大字勝大字 山下・上ノ台・ 寺西	扇状地緩 斜面	223～ 224 m	50 m	包含層から土器 片（屋敷？）出 土。	会津坂下町教育委員会 1995『会津宮川地区遺跡調査報 告書』「大村新田遺跡」
175	大村遺跡 (大村古墳群)	会津坂下町 大字勝大字 草山・水林	山地中腹 の尾根筋	244～ 246 m	50 m	周溝・遺構外か ら土器片（屋敷） 出土。	福島県教育委員会・財団法人福 島県文化センター・日本道路公 団 1990『東北横断自動車道遺跡 調査報告 10』「大村古墳群」
176	鬼渡A遺跡	会津坂下町 大字勝大字 鬼渡	河岸段丘 頂部平坦 面	241 m	4 m	土坑から土器片 (屋敷)出土。	会津坂下町教育委員会 1989『中丸遺跡 鬼渡りA遺跡』
177	東四十八遺跡	会津美里町 立石田字東 四十八・鶴 沼辺字狸壇	扇状地斜 面	210～ 240 m	30 m	トレンチから土器 片（屋敷・樽） 出土。	新鶴村教育委員会 1995『新鶴村 試掘調査報告書 東四十八番遺 跡』
178	鷺沢道南遺跡	会津美里町 雀林字鷺沢 道南	高位沖積 段丘面上 の緩斜面	230～ 250 m	10 m	遺構外から土器 片（天王山・ 油田Y期）出 土。	福島県教育委員会 1992『国営会 津農業水利事業関連遺跡調査報 告XIV』「鷺沢道南遺跡」
179	権現山下遺跡	会津美里町 八木沢字権 現山下・登 呂婦・上野	扇状地斜 面	260～ 270 m	30 m	遺構外から土器 屋敷式片（屋敷） 出土。	会津高田町教育委員会 1998『高 田西部地区遺跡発掘調査報告 書』「権現山下遺跡」
180	沼ノ上遺跡	会津美里町 沼ノ上	自然堤防 上	220 m	1m	トレンチから土器 片（屋敷？）出 土。	会津高田町教育委員会 2002『高田中央地区遺跡試掘調 査報告2』「沼ノ上遺跡」
181	油田遺跡	会津美里町 沼の上・油 田	自然堤防 上	220～ 222 m	1m	遺構外から土器 片（油田Y期・ 天王山）出土。	福島県会津農林事務所・会津美 里町教育委員会 2007『油田遺跡』 中村五郎・阿部健太郎・梶原文 子 2011『油田Y期土器とそのそ の周辺－会津地方の天王山式以 前の諸段階』『福島考古』第53 号福島県考古学会
182	下堀際遺跡	会津美里町 旭三寄字下 堀際・西勝 屋敷材	扇状地緩 斜面	262～ 263 m	2 m	集落？焼土遺 構・遺構外から 土器片（天王山） 出土。	福島県教育委員会 1983『国営会 津農業水利事業関連遺跡調査報 告I』「下堀際遺跡」
183	上冓 A 遺跡	会津美里町 西本字上冓	低位～中 位河岸段 丘頂部平 坦面から 斜面	318～ 323 m	7 m	遺構外から土器 片（天王山・油 田Y期）出土。	福島県教育委員会 1990『国営会 津農業水利事業関連遺跡調査報 告VIII』「上冓 A 遺跡」

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2） —会津地方—

の4遺跡である。この内、弥生時代後期前半の土器が出土している遺跡は、能登遺跡、和泉遺跡の2遺跡であるが、後期前半の遺跡が集中する範囲内にあることから、分布範囲としては、継続性があると判断できる。会津盆地南西部では、弥生時代後期後葉の遺跡が少ないため断定はできないが、弥生時代中期後葉の遺跡を母体に後期前半の遺跡群が形成されている可能性がある。

次に弥生時代後期後葉から古墳時代前期についてはどうであろうか、第13図で確認していく。

会津盆地南東部で古墳時代前期の土器が出土する遺跡は23か所確認できる。河川流域の小地域ごとに整理すると次のようになる。

旧宮川下流域東岸では、鎮守森古墳（145）、男壇遺跡（146）、中西遺跡（147）、宮東遺跡（148）、丈介橋遺跡（o）、雨沼遺跡（149）、宮ノ北遺跡（n）の7遺跡。

田沢川流域の東館遺跡（150）、森前遺跡（151）、稻荷塚遺跡（152）、盗人沢遺跡（172）、大村新田遺跡（174）の5遺跡。

出鶴沼川流域の樋渡台畑遺跡（161）。

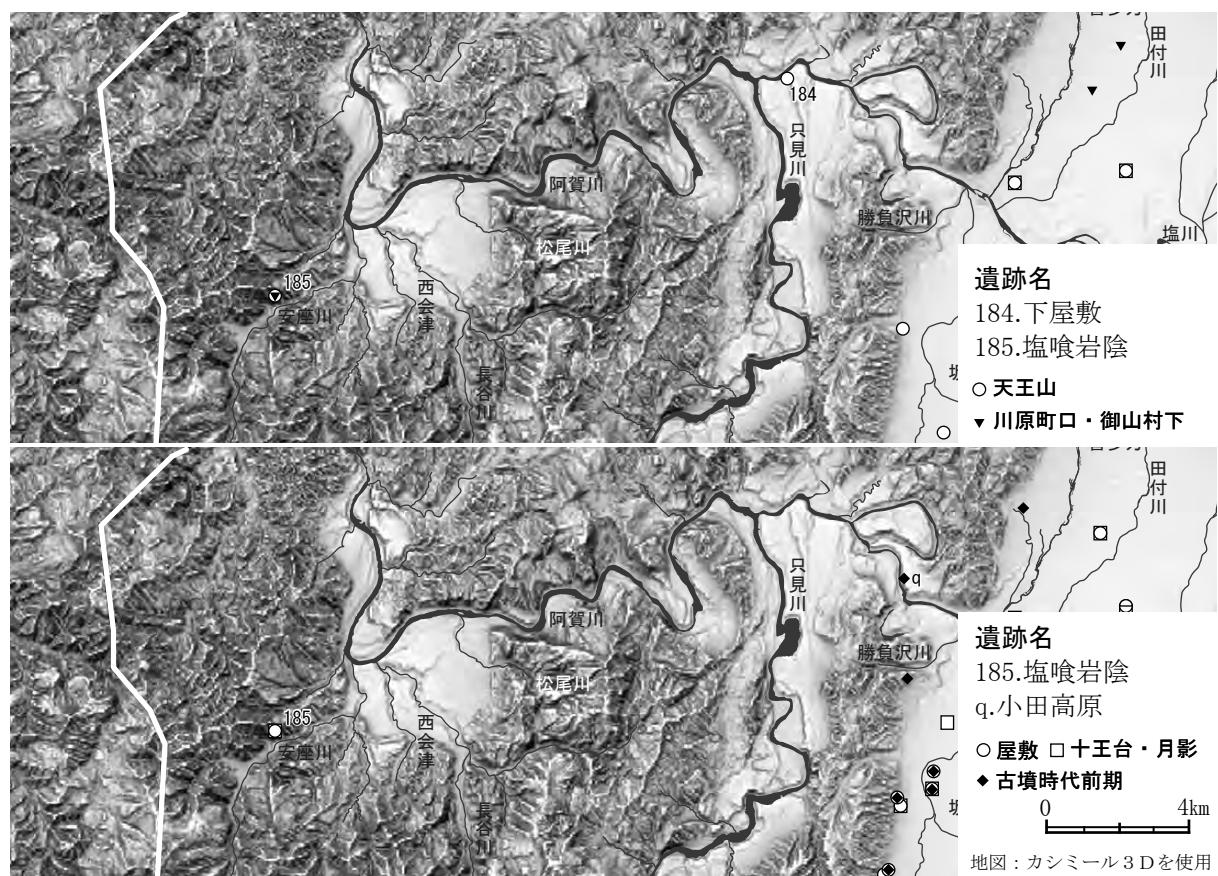
旧宮川中流域西岸の上窪道北遺跡（153）、細田遺跡（155）、村北遺跡（157）、館ノ内遺跡（158）、東台遺跡（159）の5遺跡。

旧宮川中流域東岸の舞台遺跡（143）、和泉遺跡（142）の2遺跡。

佐賀瀬川流域の北大門B遺跡。

この他に、弥生時代後期を通して遺跡の確認されていない阿賀川西岸の沖積地に立地する御池田山ノ神遺跡（m）、勝負沢川流域の山地尾根部に立地する森北古墳群（p）が認められる。

これらの古墳時代前期の遺跡と、弥生時代後期後半の遺跡立地を比較すると。旧宮川下流域東岸、田沢川流域、出鶴沼川流域、旧宮川中流域左岸では、かなりの遺跡で分布が重なることから、これらの地域では、弥生時代後期後半から古墳時代前期へ遺跡が継続していることが指摘できる。また、赤沢川流域や宮川上流域では古墳時代の遺跡が確認できなくなるとともに、全体的に阿賀川寄りに遺跡が纏まる傾向が指摘できる。



第14図 西会津の弥生時代中期後葉～古墳時代前期の遺物出土遺跡分布

9 西会津の弥生後期の遺跡

会津盆地の西側の阿賀川沿いの地域である。この地域には、弥生時代後期だけでなく、弥生時代から古墳時代の遺跡自体が極端に少ない。

今回確認できたのは、旧山都町の下屋敷遺跡(184)と西会津町の塩喰岩陰遺跡(185)のみである。

下屋敷遺跡は、阿賀川南岸の河岸段丘上に立地する。この場所は、阿賀川と只見川の合流点のやや手前にあたる。遺構外から、弥生時代後期前半の「天王山」が出土している。遺跡は後期後半まで継続しないようである。

塩喰岩陰遺跡は、阿賀川が只見川と合流した後、

表11 福島県弥生時代後期遺跡一覧（西会津）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
184	下屋敷遺跡	喜多方市山都町三津合字下屋敷	河岸段丘頂部平坦面	172 m	17 m	遺構外から土器片（天王山）出土。	山都町教育委員会 2000『下屋敷遺跡』
185	塩喰岩陰遺跡	西会津町大字野沢字塩喰家ノ上・雨沼	河岸段丘と山地の境界	195 m	20 m	包含層から土器片（天王山・屋敷・月影・十王台）	福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団 1991『東北横断自動車道遺跡調査報告25』「塩喰岩陰遺跡」

10 南会津の弥生後期の遺跡

会津盆地の西側と南側には、広大な山岳地帯があり、山間を縫うように、只見川、伊南川、阿賀川といった大河川が流れしており、それら河川沿いの狭隘な河岸段丘は、古来から人々の生活の場となってきた。

弥生時代後期の遺跡は、伊南川沿いと阿賀川の上流域で少数ながら確認できることから、これらを南会津としてまとめて紹介する。

伊南川沿いでは、七十苅遺跡(186)と鵜ノ瀬遺跡(187)で弥生時代後期の土器が見つかっている（第15図）。

七十苅遺跡は、伊南川と只見川の合流点から15kmほど東の伊南川北岸に位置する。標高444mの河岸段丘上に立地しており、伊南川の水面からは、7mの比高差があるが、周囲の低地部との比高差は1m程度である。ここからは、「十王台」が採集されている。

鵜ノ瀬遺跡は、伊南川中流域東岸の沖積地に立地

蛇行しながら西流し、大きく北へ流れを変える地点から支流の安座川を南西方向に遡った位置にある。安座川北岸の山地と河岸段丘の境界に立地する。

岩陰遺跡という性格上、縄文時代以降様々な時期の遺物が出土している。弥生時代中期後葉から後期後半まで連続するようである。弥生時代後期前半は「天王山」、後期後半は「屋敷」、「十王台」、「月影」が確認できる。アメリカ式石鏃が多数出土している。

この地域の古墳時代前期の遺跡としては、阿賀川が会津盆地を出てすぐに位置する小田高原遺跡がある。阿賀川東岸の河岸段丘上に立地しており、塩釜式に比定される土師器が出土している。

する。遺跡の標高は540mを測るが、伊南川の水面とは1m程度の比高差しかない。ここから、「天王山」と考えられる縄文施文の壺と頸部に鋸歯文を持つ広口壺のほか、無文の壺が出土している。

伊南川沿いでは、このほか、弥生時代中期後葉の遺跡として、鵜ノ瀬遺跡から5kmほど上流の東岸沖積地中に白沢遺跡（レ）がある。また、七十苅遺跡と鵜ノ瀬遺跡の中間あたりで、伊南川が北から西へ大きく方向を変えるあたりの西岸段丘上に古墳時代前期の集落遺跡と考えれる森居坂遺跡（r）が所在する。伊南川流域では、弥生時代中期後葉から古墳時代前期までの遺跡が見つかっているものの、それぞれが離れていることから、時期ごとの遺跡の動態はつかみにくい。

阿賀川上流域では、上ノ原遺跡(188)、菅ノ沢口遺跡(189)、油燈遺跡(190)、折橋B遺跡(191)、曾根崎遺跡(192)で弥生時代後期の土器が出土している（第16図）。

上ノ原遺跡と菅ノ沢口遺跡は最上流に位置し、上

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）
—会津地方—



第15図 南会津の弥生時代中期後葉～古墳時代前期の遺跡分布



第16図 南会津の弥生時代中期後葉・後期後半の遺跡分布

福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（2）
—会津地方—

表 12 福島県弥生時代後期遺跡一覧（南会津）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
186	七十苅遺跡	只見町大字小林字七十苅	伊南川北岸の河岸段丘面	444 m	1m	散布地。土器片（十王台）表採。	只見町史編さん委員会 2010『只見町史 第4巻 資料編1原始・古代・中世・近世』
187	鵜ノ瀬遺跡	南会津町大新田字鵜ノ瀬	伊南川東岸の沖積地	540 m	1m	散布地。土器（天王山？）出土。	安藤正教 1967「南郷村臼久保遺跡の弥生式土器」『福島考古』第8号福島県考古学会 南郷村史編さん委員会 1985『南郷村史』第2巻 自然・考古・中世・近世
188	上ノ原遺跡	南会津町糸沢字上ノ原	河岸段丘頂部平坦面	680 m	28 m	散布地。土器片（屋敷？）表採。	田島町史編纂委員会 1981『田島町史』第5巻 自然・原始・古代・中世史料』
189	菅ノ沢口遺跡	南会津町藤生字菅ノ沢口	扇状地緩斜面	630 m	3m	散布地。土器片（屋敷？）表採。	田島町史編纂委員会 1981『田島町史』第5巻 自然・原始・古代・中世史料』
190	油燈遺跡	南会津町中荒井字大石本	中位河岸段丘頂部緩斜面	570 m	6 m	散布地。土器片（十王台）表採。	樋口弘一 1976「南会津郡東部の弥生式土器資料」『福島考古』第17号福島県考古学会
191	折橋B遺跡	南会津町折橋	中位河岸段丘頂部平坦面	539 m	8m	散布地。土器片（十王台）表採。	田島町史編纂委員会 1981『田島町史』第5巻 自然・原始・古代・中世史料』
192	曾根崎遺跡	南会津町長野字曾根崎	低丘陵上	540 m	30 m	散布地。土器片（十王台）出土。	田島町史編纂委員会 1981『田島町史』第5巻 自然・原始・古代・中世史料』

ノ原遺跡が阿賀川東岸の水面から比高差 30 m 近くで、標高 680 m を測る河岸段丘上、菅ノ沢口遺跡は、阿賀川西岸の支流沿いに発達した標高 630 m の小扇状地に立地する。ともに「屋敷」の可能性のある土器片が採集されている。

油燈遺跡、折橋B遺跡、曾根崎遺跡は、阿賀川右岸の河岸段丘及び低丘陵上に立地する。標高は、油燈遺跡が 570 m、折橋B遺跡が 539 m、曾根崎遺跡が 540 m で、付近の低地との比高差は 6 ~ 30 m と比較的大きい。いずれの遺跡からも「十王台」の破片が見つかっている。

阿賀川上流域の弥生時代後期の遺跡はいずれも後期後半のもので、田島付近では、「十王台」より上流では、「屋敷」が出土する傾向がある。この地域では、古墳時代前期の遺跡を確認できないが、弥生時代中期後葉の土器が出土する遺跡は多数確認できる。「十王台」が出土している折橋B遺跡とその周辺の折橋A遺跡（ツ）、折橋C遺跡（ナ）、折橋D遺

跡（ネ）、寺前遺跡（ソ）、「十王台」が出土している曾根崎遺跡、阿賀川が下郷町に入つてすぐの西岸河岸段丘上に分布する下平遺跡（ラ）、明神遺跡（ム）、中井遺跡（ウ）、檜原館跡（ヰ）、さらに下流の段丘及び支流沿いに点在する塩生遺跡（ノ）、栗林遺跡（オ）、瀧ノ入遺跡（ク）、五百地遺跡（ヤ）、御靈平A遺跡（マ）で川原町口式や御山村下式が見つかっている。田島町から下郷町にかけての阿賀川沿いの地域は、県内でも弥生時代中期後葉の遺跡が多い地域と言え、後期になると遺跡数が激減しているのがわかる。

以上が、会津地方の弥生時代後期を中心とした遺跡の動態である。資料を探しきれず、抜けている遺跡もあるものと思われる。また時期の特定も怪しい部分が多くあるが、弥生時代研究を進める研究者にこの分布図と遺跡一覧を役立ててもらえば幸いである。

まほろん文化財研修と文化財行政の現状

山元 出 大山 孝正

要 旨

福島県文化財センター白河館（まほろん）において実施している文化財研修について、令和元年度は、市町村文化財担当者が集い、日常的に抱えている課題を議論し、情報を交換するスタイルを試みた。この報告では、研修参加者から提示された意見に基づいて、市町村文化財行政の現状を取りまとめ、文化財行政の現状と課題について検討する。

キーワード

文化財研修 文化財保護法改定 情報共有 広域連携

1 はじめに

福島県文化財センター白河館では、「福島県文化財センター白河館条例第3条の5」に基づいて、文化財研修を実施している。研修対象者は、県内の自治体や団体等の職員・教職員等であり、文化財保護を実施するうえで必要な知識や技能の習得を目的としている。

令和元年度は、自治体の文化財担当者が集い、実務上の課題や悩みについて情報を交換し、相互に助言し合う形式の研修を開催した。

この報告では、これまでと異なる研修形式を企画するに至った経緯や、研修の結果見えてきた課題などを総括する。まず、過年度までの研修事業の状況を報告し、次に今年度実施した研修の概要を記すこととする。それを踏まえ、今年度実施した研修において各自治体の担当者から出された意見を集約し、市町村文化財行政が抱える問題を整理することとする。

なお、本報告の文責については1～3章が山元、4・5章が大山である。

2 過年度の文化財研修

白河館では、平成13年の開館以来、「基礎研修」、「専門研修」、「特別研修」の3種の文化財研修を実施してきた。

基礎研修については、資料の取り扱いや理解のしかたを学び、これを地方史の資料として生かすための「地方史研修」や「考古資料研修」、文化財の調査・保管・活用等に関する基礎知識・技能を習得する「文化財保護・活用研修」のほか、「教職員等発掘体験研

修」、「無形の文化財研修」などを実施してきた。

専門研修については、最新の専門的知見や手法を学ぶ「考古学専門研修」、保存処理や各種科学分析等の知識を深める「文化財と関連科学研修」、文化財保護・活用に関する専門的知識・技術を習得する「文化財保護・活用専門研修」のほか、市町村文化財保護審議会委員等を対象とする「文化財保護指導者研修会」などを実施してきた。

そのほか、「特別研修」として自治体等の要望に応じて、館内・外で臨時の開催する研修も実施してきた。

研修内容は、白河館の性質上、開館以来、考古学及び埋蔵文化財に関するものが主となっていた。その後、東日本大震災とともに文化財レスキュー事業にともない、文化財保全に関する研修も実施したが、埋蔵文化財を主な対象とする方向性は堅持してきた。

しかし、平成30年に予定していた「遺物観察・実測図作成実習」、「教職員等発掘体験研修」の2件の研修については、参加者の応募がなかったため中止とする事態となった。このことは、自治体担当者のニーズが、埋蔵文化財の調査技術や出土品の整理方法といったところにはないことを示していた。この状況を鑑み、令和元年度の研修課程については、次項に示す改案を加えることとした。

3 令和元年度の実施概要

令和元年度は、基礎研修に「文化財保護行政実務者研修」と題する課程を設置し、2回開催した。文化財の保護・活用における実務をテーマとし、各参加者が発言可能な懇談形式とした。また、参加者の

募集を各自治体の文化財担当部局に限定し、開催日を公務出張ができるよう平日に設定した。

このような研修を企画した理由には、自治体担当者の研修ニーズに適切に対応し、白河館の今後の研修事業の指針を導き出すという目論見があった。

第1回は7月5日（金）に開催した。各自治体における悩みを共有し、課題解決への道を探るアドバイザーとして元福島県教育庁文化財課長・福島県考古学会長である玉川一郎氏を招いた。

当館参事兼学芸課長本間宏の現状調査報告の後に、昼休憩を挟み、午後から参加者によりディスカッションを行った。ディスカッションにおいては、事前に各参加者から話題としたい内容を提出してもらい、これらを幾つかのテーマに分けて議論を行つた。参加者数は12市町村16名に上った。

第2回は8月9日（金）に開催した。テーマを「歴史的風致維持向上計画及び歴史文化基本構想の県内先行事例と文化財保護行政の現実的課題」とした。先行事例報告者として白河市建設部鈴木功氏、三島町教育委員会川合正裕氏、大玉村教育委員会戸田伸夫氏、石川町教育委員会角田学氏を招いた。事例報告の後に質疑応答とディスカッションを行い、事例報告者への質問や、自治体間による情報交換などがなされた。参加者数は、17市町村22名であった。

両回には、従来の文化財研修には参加することのなかった行政職採用の自治体担当者が多く参加した。



写真1 第2回文化財保護行政実務者研修風景

4 研修上で示された市町村の現状

2018年6月に文化財保護法が一部改定され、市町村における文化財保存活用地域計画の策定が可能になるなど、市町村が果たすべき役割はますます増加している。一方で、急激に進行する少子高齢化や過疎化など、文化財をめぐる環境は年々厳しくなつてきている。令和元年度における研修では、法改定にともなう市町村の悩みが赤裸々に語られた。

以下、参加した市町村の文化財担当者から提起された問題に基づき、市町村の文化財保護をめぐる現状を記すこととする。

(1)体制に関する問題

上記の2回の研修では、参加した市町村文化財担当者が自由に発言できるディスカッションの場を設け、それぞれが抱えている課題をありのまま話してもらうようにした。

その中でもっとも目立ったのは、文化財保護のための人員もしくは人材が不足している市町村が多いという現状であった。このことは、福島大学の阿部浩一教授が2018年2月から4月にかけて、県内市町村を対象に実施したアンケート調査^{註1}でも浮き彫りになっている。同調査では、文化財担当の職員の人数と、その中で学芸員資格を持っている人数についての設問がある。市町村からの回答結果によると、担当者が1名しかいないところが全体の45%にのぼり、学芸員資格を有する担当者が0名というところも15自治体あったという。また、2019年8月から9月にかけて福島県教育委員会が全市町村を対象に行った調査でも、県内59市町村のうち23町村で学芸員などの文化財に関する専門職がいないことが明らかになっている^{註2}。

文化財の担当者もしくは専門職員の配置に関する問題は、市町村の人口や予算規模とも少なからず関係している。実際に担当者が5名以上配置されていて、博物館等の文化財関連施設を有するなど、学芸員資格を有する職員が複数いるのは、県内でも比較的規模の大きな市に限られている。一方で、いわき市と桧枝岐村を比較すると、約600倍に及ぶ人口の開きがある。「市町村」と一口に言っても、その規模にこれだけの開きがある以上、担当者の人数や

表1 第1回・第2回文化財保護行政実務者研修のディスカッションで提示された主な意見

(1) 文化財保護体制に関する問題
<ul style="list-style-type: none"> 文化財の担当職員が少ない。 専門職がない（少ない）。 他の業務と兼任。抱えている業務量が多すぎて処理しきれない。 役場内の文化財に対する意識が低い。文化財が後回しになる。 保存活用や地域計画も考えなければならないが、マンパワーの不足を痛感している。 城跡の国指定を目指して発掘調査と報告書の作成を進めているが、教育委員会の動きが町を挙げた動きにつながらない。
(2) 収蔵・整理・保管等の問題
<ul style="list-style-type: none"> 公民館や廃校等に古文書が置かれたまま、ほとんど未整理状態である。整理に積極的に取り組んでいる自治体から方法を教わりたい。 古文書についてはデジタル撮影の有効性が増してきている。 民具の整理作業に、地元の高齢者のボランティアの協力をいただき、民具の使い方や記憶等の聞き取り調査をした。 昭和の頃に住民から寄贈された民具等が長年放置され、確認作業が必要。活用の方針も定まっていない。 廃校利用を含めて、収蔵場所が各所に分散しており、統一的な管理が課題になっている。 廃校利用や、地元の古文書研究会等との連携を進めている。 資料館の建設要望が以前からあり、学校空き校舎を収蔵庫にするための改修を進めているが、公開施設にするかは未定。 歴史資料のデジタル化が課題。
(3) 文化財保存活用等の問題
<ul style="list-style-type: none"> 近代和風建築調査の対象となった古民家の所有者から維持管理できないと寄贈の申し出があったが、判断が下せないでいる。 民家を登録文化財にしたいという要望があったが、事務手続きに関する理解が申請者から得られず、対応に苦慮している。 民家の取り壊しが決まり、お別れ見学会を実施したところ反響が大きく、所有者の意向が変化して、国の登録有形文化財となった。 天然記念物の指定を目指しているが、価値判断ができる専門家を紹介してもらいたい。 村指定の天然記念物について、現状で天然記念物に値するか再検討が必要になっているが、専門的な判断を下せない。 史跡に隣接する場所に文化観光施設の建設計画があり発掘調査をしている。期間が延長しても一般財源でやらざるを得ず、補助金があるとありがたい。 「遠野遺産」をイメージした独自の「○○遺産」の構想があったが、ストップがかかった。文化財に対する住民の認知度も進んでいない。
(4) 文化財保存活用地域計画等の問題
<ul style="list-style-type: none"> 歴史的風致維持向上計画はまとめたが、歴史文化基本構想の策定のために内容を再構築しなければならない。担当者も異動してきたばかりで慣れていない。 歴史まちづくりで、個人所有の建物の持ち主の意向をどのように確認しているかを知りたい。 歴史まちづくり計画の説明をする中では、建物の改修時に補助金が出ることなどを話して、所有者の理解を求めている。 後世に残すといつても子や孫の世代が大変だという話も出てきて、無理強いはできない。あくまでお願いしかできない。 委員会には地元の企業、文化財とは直接関係のない住民にも入ってもらうようにした。 歴史文化基本構想には手がつけられていない。 文化財保存活用地域計画の策定に向けて準備を始めており、あわせて地方文化芸術推進基本計画も進めている。 歴史文化基本構想を策定した当時（平成22年度）は、関連文化財群などの文化庁からの指導は、現在ほど厳しくなかったと思われる。 歴史文化基本構想の策定では、文化庁が指導する書き方の規格に合わせるように求められた。 歴史文化基本構想の策定では、文化庁の担当者からの指導を直接受けに来るよう強く求められた。 国指定の要件など文化庁の発言を重視した方がよい。費用と年数の目算をして、具体的な目標を立てて、首長を説得していくしかない。 以前から保護に力を注いだ大きな遺跡があるが、文化財保護法の改正を受けての大きな動きはまだ出でていない。
(5) その他の問題
<ul style="list-style-type: none"> 震災遺産や震災資料の保全・保管で（千羽鶴など）、非常に難しい判断を強いられている。無形民俗文化財の継承が困難になっている。 文化財ボランティアが始まって20年以上になるが、高齢化が進み、新しい会員が増えない。 文化財の業務は歴史民俗資料館でやっているが、住民の無関心さが課題。広報や住民へのアピールで他の市町村のやり方を知りたい。 原発事故で役場ごと町外に避難していたが、役場が町内に戻り、町に残された文化的資源の確認がようやく始められるようになった。 避難している町民に会ったときに「古い物はないですか？」と意識的に聞いている。震災前を町の記録を残すことが目下の課題。 学校教育の中で「郷土かるた」などの取り組みをしているが、大人世代への効果は薄い。 町史学習会、古文書教室、シンポジウムなど、住民の関心を高めていく取り組みをしている。 地域探検など、学習をする子どもたちだけでなく、教える側の古老が子ども世代に伝えるために、自分たちで調べることによる再発見もある。 自分の地区を盛り上げたいと、集落誌をつくる動きもある。住民主体だと個人情報の壁があまりなく、行政でできない記録作成ができる。 資料館の展示を堅苦しくない内容にする努力をしている。 様々な講座を開催しているが、町の景観という切り口で対象となる町内会に集まつたり、子ども、大人向けなど、対象を工夫している。 民俗芸能の継承を総合的学習の時間でやっている。解説書を作成して、子どもも読めるように、すべてルビを振っている。

専門職員の有無を同一の指標で論じること自体に無理がある。

そもそも、人員不足と人材不足では、問題の性質が異なる。文化財関連の業務を処理できる能力を「マンパワー」として評価するには、単純に担当職員の人数や専門職員の有無だけでは論じられない。また、福島県では東日本大震災と原発事故から復興途上の地域が多いなど、市町村が置かれている状況も多種多様である。当該市町村が直面している文化財の保護と活用のために必要な業務量を推し量るにしても、それぞれの市町村が抱える事情を個々に考慮する必要がある。

研修に参加した市町村の担当者から提起された意見は、人員・人材の不足に関しても、その市町村に特有の事情が反映している現状を如実にうかがわせるものであった。例えば、生涯学習や社会教育等の他の業務と兼任しているために、抱える業務量が多くて処理しきれないという意見が、特に文化財の所管課が独立していない町村の担当者から複数出された。これには、担当者が一般行政職のところもあつたが、学芸員資格を有する職員がいる町村もあつた。このうち一つは原発事故後に全町避難を強いられた町である。市町村においては、災害等の外的な要因により、学芸員等の専門性のある職員が文化財関連業務に専念できなくなることが多い。逆に、担当者が一人だけでも多くの成果を上げているところもある。このように、人員・人材の不足といつても、そうした複雑な事情が影響していることから、単純に人数や専門性の有無だけで評価できない実情がある。

これについては、各市町村に最低1名は、学芸員等の専門職員を置くべきだとの意見もあったが、特に予算規模の小さな市町村ではそれが難しいというのも現実である。また、首長はじめ自治体の中核部や、住民の文化財保護に対する理解度、認知度が不足しているという意見も参加者から多く出された。文化財保護法の改定施行を受け、市町村の役割がますます重要性を増している中で、こうした個々の自治体が抱えている複雑な事情が、文化財の保護活用の成果の偏差に如実に反映してしまう。今回の文化財保護法改定は、文化財保護行政における市町村格差をこれまで以上に拡大させる可能性が高い。

この問題を解決する方策として、しばしば話題に上るのが、自治体の枠を超えた文化財保護の広域連携の枠組みである。ごみ収集や消防・救急、火葬場の運営等の業務で、小規模自治体が単独で担いきれない業務を、一部事務組合や広域連合などで対応している例が全国にある。これを文化財保護にも応用しようという考え方である。ただ、自治体同士が独自に連携協議を進めるだけでは、ただでさえ兼務多忙な職員に、さらに過重な負担となるであろう。国及び都道府県による環境整備支援が望まれる。

(2) 収蔵・整理・保管等の問題

研修参加自治体からの発言で次に目立ったのは、文化財の収蔵・展示施設や資料管理体制の整備が困難であり、容易に進められないというものであった。

この問題には、先に述べた人員・人材の不足の問題と共通した背景があると思われる。予算規模の小さい自治体は、文化財の収蔵・展示施設を独自に整備したり、その中で資料を適切に管理できる体制を揃えることが非常に困難である。仮に、国庫等の補助制度を使って予算措置を講じるにしても、書類作成等の膨大な業務をこなさなければならず、人員・人材が不足している自治体ほどそれが困難になる。

博物館や歴史民俗資料館等のいわゆる「箱もの」を独自に整備して、学芸員等の常駐の専門職員を配置できる市町村も、自ずと人口規模の多い自治体が多いのが現状である。ただし、これも人口や予算規模だけでは単純に比較できない要素がある。文化財に対する自治体中枢の理解度、住民の理解などが少なからず影響している。一方で、人員が限られても、事務処理能力の高い担当職員が、学校の空き校舎等の既存施設を活用して、文化財の収蔵・展示施設としてオープンにこぎつけた例もある。

このように、市町村における収蔵・展示施設等や資料管理体制の未整備もしくは不完全という問題も、それぞれの自治体の特性や様々な事情に大いに左右されているのが現実である。

(3) 文化財保存活用等の問題

研修の参加者からは、それぞれの市町村で直面している指定・未指定の文化財の保存と活用に関連した具体的な報告も相次いだ。

特に、第1回文化財保護行政実務者の参加者から、事前に寄せられたものを含めて問題提起として出された内容で目立ったのは、建造物に関する事である。所有者の意向で市に寄贈の申し出があったが、判断が下せないでいるという報告があった。また、古い民家を登録文化財にしたいという要望が、文化財担当部署に寄せられたが、調査や事務手続きなどで、要望を寄せた当事者の理解が得られず、対応に苦慮しているという報告もあった。

こうした古い民家等の建造物に関する問題が市町村担当者に多く寄せられるようになっている背景には、近年、加速度的に進行する少子高齢化や過疎化等の問題も影響していると思われる。すなわち、歴史的価値の高い建造物も、所有者が高齢化し、後継ぎもなく無住になるなどして、維持管理が困難になり解体される恐れが生じているのである。

高齢化と過疎化が進む中では、民家の母屋や蔵などで保管していた古文書や民具等の個人資料の廃棄も一気に進んでいる。特に、東日本大震災と原発事故以降に、この問題は各地で顕在化しており、被災地の個人資料をどこまで保全するか、その文化財的価値をどう評価すべきかといったように、現場レベルでの苦悶が起きているのが現状である。

こうした個人資料とは別に、過去に住民から自治体に寄贈され、自治体所有となっている未指定の文化財の保存活用に関する問題も、多くの研修参加者から寄せられた。内容も、民具、古文書、映像記録など、実に多岐にわたっている。多くの自治体では大量に保管するこれらの資料を破棄することもできず、少ない人員で、継続的な整理作業や劣化防止措置、収蔵施設の維持管理等も、ますます困難になってきているのが現状である。

(4) 文化財保存活用地域計画等の問題

第2回文化財保護行政実務者研修は、歴史的風致維持向上計画や歴史文化基本構想などの策定などの実績のある4市町村の事例に学ぶ内容とした。

しかし、研修を受講した自治体からは、文化財担当者が短期間で異動するため、こうした計画策定事務に着手できないという発言も出された。また、事例報告を担当した4市町村においても、文化財所有者等の理解を得るために様々な努力が必要だったこ

とが語られた。

こうした中で、直近の1、2年で歴史文化基本構想の策定を終えた市町村の担当者から、構想のまとめ方や策定に必要な手続き等に関して、文化庁から細かな指導があったとの発言もあった。比較的早い時期に策定を終えた自治体からは、現在ほど厳しい指導は行われなかったとの発言もあった。

2020年3月には、福島県文化財保存活用大綱がまとめられ、これに基づいて県内の市町村でも文化財保存活用地域計画の策定を進めることができるようになるが、これに先行する形で行われた歴史文化基本構想の策定経過に関する情報は、未策定の市町村にとっても有益なものとなった。

(5) その他の問題

最後に、今回の文化財保護法改定の大きな背景の一つにもなっている過疎化・少子化に関する問題、東日本大震災と原発事故後の対応、その他、文化財に対する住民理解の向上等に関する発言を簡単にまとめておきたい。

かねて言っていたように、過疎化・少子化の影響をもっとも直接的に受けているのは、地域の祭りや民俗芸能などの無形民俗文化財である。ディスカッションでは、無形民俗文化財に関する発言も相次いだが、建造物や古文書・民具等の個人資料でも明らかなように、過疎化・少子化の影響は、文化財の全般に及んでいる。

その一方で、担い手不足により文化財の維持・継承が困難になりつつある中でも、地域の埋もれた歴史文化遺産の掘り起こしを、住民主体で行っている事例等も報告された。

5 おわりに

ここまで、令和元年度に実施した第1回と第2回の文化財保護行政実務者研修で提起された問題を中心に、県内の自治体での文化財保護をめぐる現状等について見てきた。

今回、参加対象を自治体の文化財担当者に絞ったにも関わらず、参加者数は例年に比べて多かった。この1点だけを見ても、現場レベルの課題を共有する場が求められていたことが浮き彫りになった。参加者からの発言に示された課題が非常に多岐にわ

まほろん文化財研修と文化財行政の現状

たっており、その解決策を議論し、共有しあうための「文化財センター」としての役割を再認識することとなった。

【註】

註1 このアンケート調査は、「震災後7年が経過したことに加え、2018年6月に国会で文化財保護法の一部改正が成立し、2019年4月から施行されることをうけて、自治体と民間の双方の立場から、地域の歴史・文化遺産の保全と継承をめぐる現状をあらためて把握しておく」(阿部2018)ことを目的に、福島県内の自治体と歴史・文化団体を対象に行われたものである。

註2 福島県教育委員会では2020年3月をめどに福島県文化財保存活用大綱を作成するに先立って、全市町村を対象に調査を実施し、全市町村が回答したが、このことに触れた新聞報道（令和元年12月10日付『福島民報』「論説」）によると、「県内59市町村のうち23町村は、学芸員などの文化財に関する専門職がない」という。

【引用参考文献】

阿部浩一 2018「福島県の文化財をめぐる現状と課題—自治体と歴史・文化団体へのアンケート調査を通じて—」『行政社会論集』第31巻第2号、福島大学行政社会学会

【写真・表】

写真1 当館職員が撮影した。

表1 執筆者が作成した。

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示 みんなの研究ひろば—

三浦 武司

要 旨

福島県文化財センター白河館常設展示室の一角で、高校生の研究成果を紹介するミニ展示を2か年にわたって行った。高校生の研究成果は、地域に根差した研究が多く、郷土への愛着を醸成するものであった。

本論では、その中で見えてきた高校生の郷土研究・地域研究を行う文化系部活動の衰退や、社会環境の変化に起因する課題を取り上げた。日本社会が内包する課題も多いが、高校生の研究活動を後押しするような取り組みが官民いすれからも行われ始めた。また、文化財保護法の改定により、これまで以上に地域史が注目されつつある。地道な郷土研究や地域研究を行っている高校生の活力は、より重要性を増し、地域づくりや地域起こしに一役買うことが期待できる。今後のまほろんの取り組みとして、研究発表の場を創出していくなど、高校生の活動を盛り上げていきたい。

キーワード

常設展示 みんなの研究ひろば 郷土研究・地域研究 高校生の研究発表

1 はじめに

福島県文化財センター白河館(以下、まほろんという)では、企画展「被災地の文化財 双葉高校史学部の歩み」を2017年12月16日(土)から2018年3月18日(日)まで開催した。この企画展は、郷土の歴史を掘り起こしてきた高校生の活動を紹介するとともに、東日本大震災に起因する原子力災害によって長期的避難を余儀なくされている双葉郡の人々が、郷土の歴史を再認識し、歴史と文化を未来につなぐあり方を考える機会となる展示であった。

この展示から着想を広げ、常設展示室に既設されている「みんなの研究ひろば」コーナーにおいて、現在の高校生が行っている郷土研究・地域研究の活動を紹介する新たな試みを企画した。この高校生の研究活動を紹介するミニ展示は、2018年度から実施している。2018年度に2校、2019年度には1校の研究活動を紹介した。また、各校の展示期間中には、まほろんに生徒を招いて研究報告会を行っている。この報告会は、館長講演会の時間の枠内でゲスト報告という形で30分程度の報告会を行い、報告を聴いた館長と報告者および顧問教員とが対談を行うというものであった。その中で、研究の苦労話とともに、社会情勢に起因する現在の高校生の活動が抱える課題が見えてきた。

本論では、この2か年間に行った高校生の展示や

報告会の概要を紹介するとともに、展示を通して見えてきた郷土研究・地域研究を行う高校生ならではの課題について述べる。さらには、福島県の文化財の教育普及という重要な役割を担うまほろんが、これら高校生の活動を含めた郷土研究・地域研究を通じた地域づくりの人材育成に果たすべき役割について、今後の活動の展望を記してまとめとする。

2 まほろんでの高校生の活動

(1) 2018(平成30)年度

①福島県立新地高等学校おもひの木プロジェクト 地理歴史班「大津波伝承の研究」

7月20日(金)から9月30日(日)の期間で、新地町の大津波に関する伝承と、東日本大震災での経験



写真1 新地高等学校の展示風景

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示 みんなの研究ひろば—

を含めた語り部活動に関する展示を行った。大津波伝承の研究は、津波に関連した地名や神社の立地を調査し、東日本大震災での津波到達地点とこれらの関係を調査した研究であった。この研究は、奈良大学で開催された2017年度第11回地歴甲子園全国高校生歴史フォーラムで、優秀賞・学長賞に選ばれている。過去の事実を正確に未来につないでいくことの大切さをテーマとした研究は、実体験をもとにした被災体験を後世に伝える語り部活動にまで発展している。その活動範囲は、福島県内にとどまらず、南海トラフ地震による津波被害が想定されている地域などにも及んでいる。

津波伝承の研究成果とともに、地歴甲子園全国高校生歴史フォーラムで受賞したトロフィーや賞状、生徒が行った語り部活動を紹介した冊子などを展示了(写真1)。

また、来館者がこの展示を見て感じたことを木の葉形の付箋に記して、パネルに貼って作り上げてい



写真2 参加型展示パネル「おもひの木」



写真3 まほろんでの新地高校生の研究報告風景

く参加型の展示も行った(写真2)。

展示期間中の9月29日(土)には、生徒2名による、東日本大震災の津波被害の実体験と、大津波伝承の研究、徳島県で行った語り部活動についての報告が行われた(写真3)。

②福島県立福島高等学校SSH「『鐵・刀・日本の文化』の研究」

10月2日(火)から12月2日(日)の期間で、SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)における取り組みのひとつとして行われた福島高校の研究成果を紹介した。この研究は、福島県の古代製鉄技術について探究し、製鉄技術の粋とも言える日本刀の技術を通して、日本文化について考えるという内容であった。生徒は校内での製鉄実験や日本刀の鍛錬体験を経験し、さらには刀匠や製鉄遺跡の発掘調査関係者との対話を通して、福島県内の鉄の文化に理解を深めたようであった。

展示室には、校内の製鉄実験でできた海綿鉄を展示了。体験活動時の写真や校内文化祭で報告したパネルなども紹介した。あわせて、当館収蔵の製鉄関連資料や製鉄実験資料も展示した(写真4)。



写真4 福島高等学校展示風景

(2) 2019(令和元)年度

①福島県立相馬高等学校郷土部「相馬高校郷土部のキセキ」

9月25日(火)～12月8日(日)の期間で、相馬高等学校郷土部の活動を紹介し、郷土部所蔵資料の一部を展示了。終戦直後の昭和21年に創部した県内で最も古い部のひとつである郷土部は、日本考古学史に残る多くの遺跡の発掘調査に参加している。この展示では、現在の郷土部の活動を紹介しつつ、

当時の郷土部生の活動についても顕彰する内容とした。

現在の郷土部生は、5月19日に開催された一般社団法人日本考古学協会第85回(2019年度)総会内の高校生ポスターセッションに参加し、8月4日開催の九州国立博物館主催「全国高等学校歴史学フォーラム2019」においても野馬土手に関する研究発表を行っている。まほろんでは、現在の郷土部生のこれらの活動を、パネル展示で紹介した(写真5)。



写真5 相馬高等学校のパネル展示風景

この他、郷土部所蔵の三貫地貝塚出土土面や縄文土器、成田藤堂塚遺跡出土の弥生土器、丸塚古墳出土の人物埴輪、福迫横穴出土の須恵器と玉類、高松古墳群1号墳出土の玉類などの考古資料、さらに当時の遺物実測図面や発掘調査日誌、発掘届などの諸手続きに關わる公文書なども含めて展示した(写真6)。遺物実測図や発掘調査報告書の手書き原稿、発掘調査日誌などは、当時の高校生の活動記録として貴重な資料であり、かつ成果報告としても秀抜であった。『真野古墳発掘書類綴』としてまとめられた史料は、「埋蔵文化財発掘届」や「土地所有者への



写真6 相馬高等学校の展示風景

学術調査承諾書」、「埋蔵文化財発見届」、「埋蔵文化財現物譲与願」などの発掘関係書類とともに、「郷土部保護者への発掘合宿のための承諾書」に至るまで綴られている。学生や学校を含めた地域全体が、文化財や郷土の歴史について高い意識を共有していたことが垣間見えた史料であった。戦前の皇国史觀に基づいた歴史認識から、考古学の手法で郷土の歴史を明らかにしていく気運が盛り上がった時代背景が浮かび上がる。また、生徒が手書きした発掘調査報告書の下書き原稿には、顧問の教員による修正箇所も見て取れ、推敲を重ねた当時の郷土部生の息づかいが感じられるものであった。

会期中の9月28日(土)には、生徒2名による郷土部の活動の歴史と所蔵資料の紹介、現在の郷土部の活動内容についての報告があった(写真7)。



写真7 相馬高校生の報告風景

3 見えてきた諸課題

これらの展示を通して、活動を行っている学生や顧問の教員と話をする機会があった。その中で見えてきたのが、学校を取り巻く社会的環境の変化と文化系部活動の衰退であった。以下、郷土研究や地域研究を志す高校生の活動について、見えてきた課題を挙げていこう。

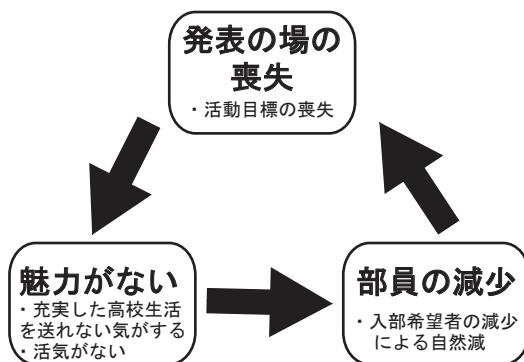
(1) 活動発表の場の喪失

1つ目として、郷土研究や地域研究を行う文化系高校生の活動発表の場が非常に少ないとあげられる。福島県高等学校文化連盟が主催する福島県高等学校総合文化祭においても、郷土研究や地域などの発表機会がないのが実情である。全国的に見ても、主な発表の場としては、奈良大学と奈良県主催の高校生歴史フォーラム^{註1}や九州国立博物館が主

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示 みんなの研究ひろば—

催する全国高等学校歴史学フォーラム、一般社団法人日本考古学協会・福島県考古学会主催の高校生ボスターセッション等に限られるようである。

研究成果を発表できる場の喪失は、研究を行っている生徒の活動目標が設けにくく、文化系部活動の入部希望者の減少につながっていくという負のスパイラルにつながる(第1図)。そのため、休部状態の部活動を含めて、福島県高等学校文化連盟に登録されている県内高校の歴史部は4校、郷土部は4校であると御教示いただいた。^{註2}



第1図 負のスパイラル相関図

(2)学校現場におけるリスクマネジメント

2つ目の要因として、生徒によるフィールドワークが限定されてしまうという社会環境がある。昭和50年代頃まで各学校で盛んに行われていた夏休みなどをを利用しての合宿や発掘調査などのフィールドワークは、安全管理や責任問題などが厳しく問われる今日では、より制限され、難しくなっている。

(3)教員の働き方改革

3つ目の課題として、部活動や授業の一環として研究活動が行われているという高等学校ならではの問題がある。高校生の活動の内容は、どうしても顧問の教員などの熱意に支えられている面が大きい。熱心な顧問の教員が指導していても異動があり、活動の継続は困難となってしまう可能性がある。

また近年、教員の働き方に関する意識の高まりがある。以前の学校指導要領や中央教育審議会の働き方改革答申では、部活動は教育課程外に実施される教育活動の一つであり、顧問の就任は業務命令ではなく、依頼であるという認識であった。しかし、2019年1月に公開された「公立学校の教師の勤務時

間の上限に関するガイドライン」では、教員の勤務時間に関わる基本的な考え方については、教員が校内に在校している時間を勤務時間とすることとし、授業・学級運営準備と部活動時間と含めて45時間を超えないようにすることと規程された。これにより、活動の時間は教員の勤務時間や開校時間に限られ、活動の場は主に校内が中心とならざるをえないことが多くなる。また、教員によっては、複数の部活動を担当する例もあり、過密な勤務となっている例も散見される。教員の忙しい勤務実態が垣間見える。

(4)少子化・縮小化

4つ目の課題として、人口減少があげられる。総務省統計局によると、令和元年8月1日現在で日本の総人口は1億2621万9千人と推定されている。2008年の1億2808万人をピークに減少傾向にある。国立社会保障・人口問題研究所が公表している将来人口統計では、2053年には1億人を割って9,924万人となるものと推計されている。

まほろんには、多くの小学生や中学生が来館する。学校の統廃合や学級数の減少という形で、少子化の実情を折に触れ実感している。このことは高校にとっても例外ではなく、生徒自体の減少による部活動の統廃合が検討され、また実際に実施されている。生徒が少なく、学校自体の部活動の維持・存続が困難になっているようである。部員が少ない部活動や、あまり活動が活発でない部活動は、統廃合の対象となっているようだ。また、2023年度までに県立高校自体を統合再編^{註3}する計画が発表されるなど、少子化に伴う影響は加速するものと思われる。

これらの諸課題のうち、上記に示した(2)～(4)の課題は、現在の学校や社会が抱える問題から派生したものであり、一朝一夕に解消できるものではない。一方、(1)活動発表の場の喪失については、好転する糸口が見えてきた。次章では、その展望について考えることとする。

4 これから展望

まほろんで紹介した高校生の研究活動を含めて、高校生の活動は、地域に根差した研究が多い。近年、高校生の活動を後押しするような取り組みが、官民

両者から始まっている。再び、地域や郷土に関する興味関心が高まっているようだ。

(1)新しい取り組み

2003年から認定がはじまった日本遺産^{註4}は、地域の歴史的魅力の掘り起こしによる、地域活性化を目指した取り組みである。この日本遺産として、地域研究に焦点を当てる取り組みは、高校生の活動にも波及している。

國學院大學では、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストを2005年から実施している。この取り組みは、同大学と高校生新聞社が共同主催し、高校生が住む地域あるいは通学する高等学校の所在地域などに伝わる昔話・伝説や祭り、伝統行事、郷土料理、方言などの文化の調査研究に目をむけ、地域文化がもつ意味を考え学ぶ趣旨のもとに行われている。

また、今年度開催した第43回全国高等学校総合文化祭佐賀大会では、協賛部門として郷土研究部門が特設された。北海道から沖縄県までの21校の研究発表が行われた。古墳群の研究や地域景観の調査、鉄道の廃線調査、外国人へのアンケート調査など、多様な活動の取り組みが報告された。

さらに、官民連携の事業も実施されている。クールジャパン官民連携プラットフォーム(事務局は、内閣府知的財産戦略推進事務局)では、2018年に「クールジャパン高校生ストーリーコンテスト」を開催した。このコンテストは、高校生が自分の住む地域や日本ならではのクールジャパン^{註5}資源を発掘し、その魅力を外国人に伝えるための「ストーリー」を考えるものである。地域に伝わるお菓子の歴史や文化的な背景についての研究や、地域の景観を巡るツアー構想などがプレゼンテーションされた。

このような取り組みからは、郷土研究や地域研究の盛り上がりの萌芽が見て取れる。地域資源の掘り起こしへつながっていくことが期待される。

(2)文化財保護法の改定による波及効果

さらに今年度、改定された文化財保護法が施行され、地域の文化財の総合的保存活用を促進する内容となつた。過疎化や少子高齢化に起因する文化財の滅失や散逸等を防止する目的で、未指定を含めた文

化財を地域住民総がかりで継承していく取り組みを推奨する内容である。県が策定する文化財保存活用大綱を受けて、市町村は文化財保存活用地域計画を作成することができる。

文化財保存活用地域計画に関する文化審議会の答申には、「文化財やその所有者に最も身近な行政主体である市町村の単位で、地域住民と緊密に連携しながら、消滅の危機にある文化財の掘り起こしを含め、文化財を総合的に把握し、ここから多様な発想を得て地域一体で計画的に保存・活用に取り組んでいくことが極めて重要である。」、さらに「歴史文化基本構想を構想にとどまらず、関係者がパートナーシップを結び具体的なアクションにつなげるマスターplanとして発展させ、国・都道府県・市町村間の連携強化のみならず、地域住民や民間団体等の主体的参加や協力も得ながら、地域社会全体で、未指定も含めた多様な文化財を次世代へ確実に継承していくことが必要である。」と記されている。

官民の盛り上がりに加えて、文化財保護法の改定による法整備が進んだことにより、今後ますます地域史の掘り起こしが注目されるようになる。

(3)まほろんの取り組み

前述したように、まほろんでは、過去2か年にわたり、高校生の活動を紹介する取り組みを行ってきた。高校生の取り組みは地域に根ざした研究であり、地域史・郷土史を再発見する内容であった。まほろんでは、次年度以降も高校生の活動を紹介する展示を継続する予定である。文化財に限らず、幅広く郷土研究を行っている高校生の活動を定期的に紹介していきたい。これらの取り組みを通して、郷土の文化財を守り、未来に伝えていく人材の育成に寄与したいと考えている。

また、2020年度には、新学習指導要領が改訂される。これを受けて、教育現場では様々な取り組みが始まると想定される。日本史A・世界史Aに代わり設置される、「歴史総合」は、現代的な諸課題と歴史を学び、近代化・大衆化・グローバル化に着目する内容となっている。また、世界史的視野に立った歴史を学んだのちに日本の動向を学ぶ構成となつていて。その目的は、歴史の大きな変化に着目して理解の深化をはかり、歴史的な見方・考え方に基づ

高校生の研究活動展から見えてきた課題と展望 —常設展示「みんなの研究ひろば」—

き、社会的事象を考察する力、構想する力、議論する力を養うというものである。現行教育課程でも求められていた資料の活用については、「歴史総合」でもより重視されており、新学習指導要領「内容の取扱い」では、「年表や地図、その他の資料を積極的に活用し、文化遺産、博物館や公文書館、その他資料館などを調査・見学したりするなど、具体的に学ぶよう指導を工夫すること」を求めている。

これらは、「見て・触れて・考え・学ぶ」をメインテーマに掲げているまほろんの設置目的に合致する。文化財を活用することで、地域の文化に興味をもち、感動して文化財を守る心を醸成していく機会となる。また、まほろんの常設展示の「食」・「住」を際立たせた特色ある展示は、年代や地域を超えて見学者が共感を覚えるものとなっている。ますますの活用促進を願うものである。

まほろんで企画した高校生の活動の展示は、生徒の成長を促す教育活動でもある。この取り組みの意義に賛同し、これを積極的に利用する教育関係者が増えることを期待したい。

5 おわりに

高校生の研究発表は、内容や完成度という点では、未熟な部分もあるであろう。しかし、筆者は、地域を元気にする人材としての高校生の可能性を大事にしたい。高校生の関心を地域に向かせるためには、教員が抱える課題やニーズを理解しつつ、高校生や教育関係者との関わり方を、地域側も検討する時期に来ていると考えられる。

高校生が郷土や地域と関わることにより、以下の可能性が生まれると考えている。

①大人世代の「気づき」や変化を促す

新地高校おもひの木プロジェクト地理歴史班による研究は、地域住民が東日本大震災が起きるまで忘れてしまっていた地名や伝承などを掘り起こした研究であった。さらに、多様な世代に発信する語り部活動を通して、津波被害の伝承や被災経験に基づく「気づき」を与えていている。

②地域への愛着の醸成

相馬高校郷土部の展示資料は、当時の高校生が自らの手で、地域の歴史を掘り起こした貴重な資料であった。当時の高校生がそうだったように、自分が

住んでいる地域に関心をもち、その魅力を知ることで地域への愛着も高まるであろう。

このような可能性を秘めた高校生に、まほろんは研究発表の場を創設することで、郷土や地域を思う人材の育成に寄与したい。

田中敏は、「子供たちに自分たちの地域を見直してもらう」ことを重要視して展示解説したいと述べている(田中2008)。筆者は、この「子供たち」という言葉については、「高校生」または「大人たち」とも読み換えられるものもあると考える。自分たちが住んでいる地域に、先人が残した文化が存在することを改めて見直す契機ではないかと考えている。

さいごに、福島県民は、東日本大震災とそれに伴う原子力災害により、好むと好まざるとにかかわらず改めて地域と郷土を見直すきっかけを得ることになった。「地域とは」「郷土とは」「文化とは」を自らに問い合わせた結果となりたのである。今こそ、我々福島県民は、これを生かさない手はないのではないか。

【註】

註1 2018年度より、高校生歴史フォーラムに名称変更している。

註2 福島県高等学校文化連盟の難波氏の御教示による。2019年8月時点での休部も含む数字である。

註3 県立高校96校が81校に統合されることとなる。

註4 県内の日本遺産は、「会津の三十三観音めぐり～巡礼を通じて観た往時の会津の文化～」、「未来を拓いた「一本の水路」～大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡 郡山・猪苗代～」の2つが認定されている。

註5 クールジャパンとは、世界から「クール（かっこいい）」と捉えられる日本の魅力を世界に発信する内閣府が主体となる戦略事業。

【引用参考文献】

福島県立新地高等学校 2019『おもひの木プロジェクト活動報告書(201803～201902)』

田中敏 2008「子供たちに学ぶ楽しさを～まほろんでの取り組みと今後の展望～」『福島県文化財センター白河館研究紀要2007』

【図・写真】

図1 筆者が作図した。

写真1～7 当館職員が撮影した。

今後のまほろんの団体利用について 一小学校を中心に

廣川 紀子

要旨

まほろんでは、小学校の校外学習での利用が多く、事前予約制を取り、ご希望の内容に合わせて対応させていただいている。開館以来、体験活動を通した歴史学習の提供に努めており、来館する小学校のほとんどが展示見学とあわせた体験活動を希望されている。小学校では、2020（令和2）年度から改訂された学習指導要領が全面実施となる。その改訂について概観しながら、まほろんの役割や効果を再整理し、今年度から加わった団体利用での体験活動プログラムに触れながら、小学校向けの体験活動を中心とした方向性を考えてみたい。

キーワード

団体利用 小学校 体験活動 学習指導要領の改訂 アクティブ・ラーニング

1 はじめに

福島県文化財センター白河館（以下、まほろん）では、小学校をはじめとする学校関係や公民館などの生涯学習施設、社会福祉施設など、まとまった人数での利用が見込まれるお客様に対して、『団体利用』として事前の予約をお薦めしている。希望に合わせて職員がつき、施設の案内や、常設展示や野外展示などの解説、団体向けに用意される各種体験活動プログラムについて指導や補助に当たっている。

団体利用で来館されるお客様は全来館者の3割を占め、そのうち小学校の校外学習での利用が過半数を超える。小学校関係での利用は、年度が替わるごとに新小学6年生の歴史学習に合わせた予約が増え、遠足や宿泊学習などの各学年の校外学習での体験活動や休日に企画される学年単位での親子行事など、それぞれの目的に応じて利用されている。

来年度以降、小学校では2017（平成29）年に改訂された学習指導要領が全面実施となる。学習指導要領には子供たちの『生きる力』を育むべく体験活動が重視されており、まほろんでもその一端を担うべく体験活動を通した歴史学習の提供に取り組んでいる。そこで、今回の学習指導要領の改訂を機に、まほろんへ期待される役割について再整理し、今後の団体利用に向けたプログラムの充実やその効果の可能性について小学校を中心に私見を述べたい。

2 まほろんでの団体利用

（1）近年の団体利用の傾向

まほろんでは団体利用の体制を整えていて、事前の問い合わせに対して担当職員が窓口になり、お客様の来館日や時間帯を考慮しながら希望に合わせた内容を提案している。また、予約いただいたお客様には時間割を作成して、その内容に合わせて職員を配置している。

開館以来、まほろんでは「見て・触れて・考え・学ぶ体験型フィールドミュージアム」として来館者の体験活動の導入に積極的に取り組んでおり、団体利用についても展示見学のみならず、団体利用者向けの各種体験プログラムの充実に努めている。体験プログラムの詳細についてはホームページ上から確認でき、それぞれ未就学児、学校、一般向けに用意されている。実際、事前に団体利用の申し込みをされるお客様の多くが、常設・野外展示の見学と合わせ、滞在時間の中で1～2の体験を希望している。

それら団体利用の傾向として、過年度3か年分となる2016（平成28）年度から2018（平成30）年度の利用状況を表1にまとめた。来館者数の全体的な傾向

表1 団体利用〈小学生〉の推移

	平成28年	平成29年	平成30年
来館者数	29,341人	28,102人	26,731人
団体利用数	234団体	207団体	211団体
団体利用者数	8,821人	7,611人	7,854人
団体利用者数 / 来館者数	30%	27%	29%
小学校利用数	89校	85校	82校
小学校利用数 / 団体利用数	38%	41%	39%
小学校利用者数	4,690人	4,434人	4,275人

としては少子化の影響もあって減少が続いているが、年間で約3万人の来館があり、そのうちの団体利用数が約210団体、団体利用者数が約8,000人で、来館者数の3割が団体利用である。そして、そのうちの小学校での利用が約85校、4,000人を超える、団体利用全体としては団体数の約4割、人数では過半数を数える。それらには小学生が主体となる、小学校の親子行事や公民館の子供向け教室、地区の子供会等での参加は含まれないため、そのような関係団体を含めると小学生の利用はさらに増えることとなる。開館以来、この傾向に大きな変化は認められず、まほろんが小学校関係の利用者の期待に応じて一定の役割を果たしてきた成果と評価したい。

(2) 小学校の動向

毎年、年間を通した小学校の学校単位での利用には、学年ごとの学習カリキュラムや学校行事が反映されることから、概ね同様の傾向がみられる。

表2は、2018(平成30)年度の小学校の団体利用について、月ごとに学年と地域を分けたものである。2018(平成30)年度の来館者数は全体で26,731人、団体利用者数が7,854人で、そのうちの小学校の利用が82校、4,275人である。月ごとの利用状況では、夏休み期間となる8月、学年が切り替わり

春休みに入る年度末の3月の利用がみられない。県内の小学校では夏休みに入る前の1学期中に全体の7割の利用があり、4~6月の3か月に集中している。そして、2学期に入ると気候が安定している10月まで(県外の小学校では秋休み前まで)を一区切りとし、12月以降の利用は全体の1割強にとどまる。11月は学習発表会などの他の学校行事と重なるためか利用が一時途切れるようである。

まほろんを利用する学校の目的は、6学年の社会科の授業での歴史学習、5学年を主体とした宿泊学習、3学年の社会科での昔のくらしの調べ学習の大きく3つが挙げられる。それらは表2の月ごとの利用状況にも顕著に表れている。6学年の利用は、歴史学習の導入部分に合わせて4月から6月ごろにかけて集中している。白河市内をはじめ、日帰りの校外学習での利用が可能な県南地区の小学校での利用が目立つが、県中地区や、近年では隣接する栃木県側の自治体からの利用も増えている。5学年の利用は、6月ごろから本格化する国立那須甲子青少年自然の家などの近隣の宿泊施設を利用した宿泊学習で、そのカリキュラムに追加するような形でまほろんの体験プログラムが検討されている。また、次年度の歴史学習に向けた事前学習としての効果も期待されているようである。自然体験を中心とした宿泊

表2 平成30年度の〈小学校〉での年間の利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利用校数(校)	20	12	25	2	0	7	5	0	2	6	3	0
団体利用全体 の中での割合	24%	17%	30%	2%	—	9%	6%	—	2%	7%	4%	—
利用者数(人)	861	305	1,644	73	0	501	523	0	42	205	121	0
団体利用全体 の中での割合	20%	7%	38%	2%	0%	12%	12%	0%	1%	5%	3%	0%
〔利用内訳〕												
県北												
	1(5・6)											
		2(5)										
県中	5(6)	2(6)	1(6)	1(6)								
	3(5・6)	3(5・6)										
		5(5)				5(5)	4(5)					
		1(4・5)				1(4・5)						
		1(4)					1(4)					
		1(3・4)										
		1(2)										
県南	5(6)	3(6)	3(6)						1(5・6)			
			1(3)							5(3)	3(3)	
											1(2)	
白河市内	5(6)	3(6)										
	2(4)											
	1(3)		1(3)									
県内その他						1(5)						
県外	2(6)		4(6)	1(4)						1(6)		

〔利用内訳〕の数字は、利用校数、()内は利用学年を表す

学習ということで、やや離れた県中、県北地区の学校から宿泊施設への道中に利用されている。3学年の利用は、3学期の始めごろに多く、近隣の県南地区の小学校での短時間の利用に限られている。

3 学習指導要領の改訂

(1) 2017(平成29)年度の学習指導要領改訂

『学習指導要領』は、学校教育法に規定される学校(小学校、中学校、高等学校など)において、一定水準の教育課程が保てるように各教科の内容を学校教育法施行規則の規定を根拠に定めたものである。指導要領は全般にわたる配慮事項や授業時間数を「総則」に定め、各教科の取り扱いについて規定されている。そのうえで、法的根拠はないが文部科学省では『学習指導要領解説』により詳細な事項を記載したものを発行しており、特に公立校においては影響力が高いといわれている。

指導要領は、文部科学大臣により中央教育審議会で審議され、社会の変化を見据えながらおよそ10年ごとに改訂されており、戦後9度目の改訂となる2017(平成29年)度改訂版されたものが2020(令和2)年度以降に完全実施となる運びである。今回の改訂では、これまで同様に学びを通して「生きる力」を育むことを目標に、学び方として「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」の視点が重視されていることが大きな特徴である。具体的な中身としては、小学校では6年間の授業数が140コマ増えて5,785コマとなり、3・4学年からの外国語活動やプログラミング教育の導入が特色である。

(2) 小学校での団体利用への影響

ゆとり教育の反省から、授業時間数は前回の改訂に続いて増加しており、週休二日制が導入される以前の約20年前のコマ数に戻っている。その状況において、外国語活動などの教科数が増えることから、校外学習を確保することがますます難しい状況となることが予想される。まほろんの団体利用が、移動時間や移動費用を伴う校外学習の選択肢のひとつに加わるには、学校側の期待する学習内容や効果をどのくらい提供できているのかに関わってくる。その評価は、容赦なく今後の利用数に反映されるこ

とになるものとみられる。

しかしながら、従来の指導要領の内容が大幅に変更されてはおらず、引き続き体験活動を通した学習の場の提供や、日本の季節行事や伝統文化に関わる教育に重きが置かれており、博物館や資料館の活用、地域や専門家との連携などが促進されている。それらについては、これまでのまほろんの取り組みに通じるものである。改訂される指導要領では、全般を通して指導方法にアクティブラーニングの「主体的」、「対話的」、「深い学び」の視点が貫かれている。まほろんとしては、さらに学校カリキュラムの中に組み入れられるよう、その視点に立って現有の団体利用での展示見学や体験プログラムを見直し、今後の展開の契機とすべきと考える。

4 まほろんでの新しい取り組み

今年度より、団体利用の体験活動プログラムには、「グループで考えよう(うつわ・はもの)」と「まほろんお仕事見学」とが新しく加えられた。どちらも主に小学校の団体利用を対象としている。前者は、改訂される学習指導要領のアクティブラーニングの視点に立つものであり、後者は地域の身近な施設としてのさらなる活用を考えてのものである。

昨年度、「はもの」のうつりかわりをテーマに取り上げ、グループごとに素材や技術の違いによって新旧関係を考えてもらった。その試行期間を経て、今年度より「うつわ」の資料を追加し、新6年生の歴史学習の始まりに合わせて準備したものである。もともと収蔵資料を活用した体験としては、『土器・石器を観察しよう』という収蔵庫見学と土器・石器の観察とを合わせたプログラムが存在していたが、それとは別に、一方向的な職員からの解説ではなく、実際に実物資料に触れ、観察することを目的とした体験である。児童一人一人が参加しやすい、同じテーマを少人数の仲間どうしで話し合うことができるグループ学習の形態を採用している。また、小学校での利用としては、常設・野外展示の見学と合わせての体験を想定している。

体験の流れは上記の通りであるが、特に職員の働きかけの重点的なポイントに★をつけた。まずは導入部分★1では、文化財を直接扱うことになることから、資料の取り扱い方法を徹底させることが体験

(1)『グループで考えよう(うつわ・はもの)』

内容：「うつわ」または「はもの」の歴史について、グループごとに考えてもらう。

所要時間：約60分 体験料：無料 対象：学校

【体験の流れ】

〔準備〕 資料の準備

- ・5～6人のグループごとに同様の資料を準備する。

「はもの」…旧石器時代の石器(実物資料)、縄文時代の石器(実物資料)、古代の刀子(復元品)、カッターナイフを用意。

「うつわ」…破片資料であるがすべて実物資料の縄文土器[緑]、弥生土器[白]、土師器[赤]、須恵器[黄]、施釉陶器[青]を用意。[]は資料に目印として付けられたシールの色。

〔1〕 資料の紹介とその取り扱いについて

- ・文化財の意味や重要性に触れ、資料の取り扱いについて注意喚起する。★1

〔2〕 テーマ設定

例1)古いものから新しいものに並べよう。

例2)いくつかの仲間にわけてみよう。

例3)使い方(用途)のちがいでわけてみよう。

- ・ワークシートを準備し、資料を観察して気づいた点と、そこから導かれて答えた理由について、グループごとにまとめ、発表してもらうことを確認する。★2

〔3〕 グループでの話し合い

- ・一人ずつ資料を観察し、自分の考えをまとめる。(消極的な児童には、模様、色、素材などの見方のポイントを示し、会場によっては収蔵資料や展示資料との比較を提案する。)★3

- ・グループ内で意見を交換する。(リーダーや記録係を決めるなど、グループ内を調整する。)★4

- ・資料を並べ替えるなどして、グループごとの意見をまとめる。(時間を制限する。)

〔4〕 グループごとの発表

- ・グループの代表者あるいはグループ全員で資料を紹介しながら発表する。

- ・グループごとの理由や着眼点を整理する。(ホワイトボードなどを用意し、回答や理由を掲示する。)★5

〔5〕 まとめ

- ・新旧関係など正答のあるテーマについては答え合わせを行い、可能な限り発表内容に合わせながら、それぞれの資料の詳細について解説する。

- ・グループごとの発表について評価する。★6



写真1 「うつわ」の発表のようす

の前提となる。テーマの共有とともに、★2では正答ではなく、考え方のプロセスを重視することを強調する。次にグループでの活動に移るが、話し合いで一人一人の意見が求められる。★3では児童の様子を見ながら適切な(押しつけ過ぎない)働きかけを行い、場合によっては個々の児童の特性を知る担当教諭に協力を仰ぐことも必要である。★4も同様で、グループの話し合いの円滑化を図る。事前に、すでに人間関係ができあがっている学校での生活班など、学校側にグループ編成をお願いすると進めやすい。そして、締めくくりとなるグループごとの発

表★5とその評価★6の対応によっては、児童たちの達成感や充足感が大きく異なり、このプログラムの真価が問われることになる。職員には、それぞれの意見を尊重し、その着眼点やアプローチの仕方を適切に評価し、フォローできる専門性と指導力が要求されることになる。

このプログラムを通して、児童たちの型通りでない新鮮な発想は興味深く、担当する職員が刺激を受

けることも少なくなかった。また、グループ学習は学習内容を深めるために様々な教育の場面で導入されているが、その効果を実感することもできる。しかし、その指導方法には職員のスキルが大きく問われることになる。職員の働きかけによっては進歩や児童たちの充足感に大きな差が生じることから、今後の展開としては、担当職員がプログラム全体をコーディネートする能力が大きな鍵となる。

〈体験事例1〉

県南地区 小学校6学年 1クラス14名

グループ分け：4～5人ずつの3グループ（生活班）

テーマ：古いものから新しいものにならべてみよう（※縄文土器、弥生土器、土師器、施釉陶器の4点）

正 答：緑（縄文時代）→白（弥生時代）→赤（古代）→青（近世）

緑と白、縄文土器と弥生土器とで前後したグループもあったが、近くに比較資料があるため、ほとんどのグループが正答であった。

回答理由例：①展示している土器と似ている模様を探して並べた。 ②青（施釉陶器）は今のお茶碗に似ているから新しい。

③ツルツルしているものが新しい。 ④黒っぽいものが古い？ ⑤厚いものが古くて、薄いものが新しい。

〈体験事例2〉

県南地区 小学校6学年 2クラス40名

グループ分け：6～7人ずつの6グループ（生活班）

テーマ：2つの仲間にわけてよう（※縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、施釉陶器の5点）

回答例と理由：①A…白（弥生土器）・緑（縄文土器）B…青（陶器）・赤（土師器）・黄（須恵器）さわりごこちで分けた。Bはツルツル。

②A…緑・赤・黄 B…青・白は模様や縄（原体による施文？）。Bはツルツル。線の模様。

③A…赤・白・緑・黄 B…青 さわった感じと厚みで分けた。Bが薄い。

④A…青・黄 B…緑・赤・白 Aはでこぼこしていない。Bはでこぼこする。

⑤A…白・緑・赤 B…黄・青 Aは模様があつて土っぽい。Bは模様がなくて石みたい。

⑥A…黄・青 B…赤・緑・白 Aは模様なし。Bは模様あり。

回答の印象：正答のないテーマで自由な話し合いを期待したが、新旧関係など踏み込んだ設定のほうがテーマの共有がしやすいようである。

展示室での新旧順の資料の並びに影響され、時間軸の中での分類が目立った。

（2）「まほろんお仕事見学」

内容：まほろんの役割や職員の仕事内容に触れながら、展示室や収蔵庫などのバックヤードを案内する。

所要時間：約30～60分

体験料：無料

対 象：学校・一般

【見学の流れ】

〔1〕プロムナードギャラリーからバックヤードまでの移動

- ・まほろんの施設や仕事内容を概説し、バックヤードでの注意事項を確認。

〔2〕展示準備室

- ・大型プリンターでのポスター、垂れ幕、展示パネルやチラシなどの作成、印刷などを紹介。

〔3〕撮影室

- ・一眼レフカメラやストロボなどが置かれ、展示パネルや図録などの写真を撮影することを紹介。

〔4〕荷解き室・搬入庫

- ・収蔵資料や企画展示での資料の搬出入やイベント、体験事業関連の準備などを紹介。

〔5〕一般収蔵庫・特別収蔵庫

- ・文化財が収蔵・保管されるそれぞれの収蔵庫の役割と、文化財が収蔵されるまでの流れについて解説。

- ・一般収蔵庫で収蔵資料数や収蔵庫の構造、場合によっては収蔵資料の検索システムや梱包なども紹介。

上記の見学の流れはバックヤードを中心とした30分程度のものである。滞在時間によっては時間調整ができ、別な導線としてはフロント側から、ショップ→事務室→常設展示室→企画展示室→体験活動室→図書室→電気窯の案内も可能である。さらに今年度から、木製品や金属製品などの脆弱遺物の劣化防止や保存処理の業務を行っており、その部分についての紹介も検討中である。この新しい役割も含めて、まほろんと文化財に理解できる機会として、大人の社会科見学のような内容としても一定の需要があるようと考える。実際、夏休み期間中の特別体験で実施した際には、子供たちの付き添いで訪れた大人の方々に好評であった。

小学校の団体利用については、6学年を中心とした歴史学習に関わるもの以外に、学校カリキュラムの中の下記の点での見学や体験活動を検討している。県南地区の学校で採用される東京書籍が発行する生活・社会科の教科書を参考すると、2学年では身近な公共施設としての利用に、3学年ではまほろん職員の仕事の内容に、4学年では文化財の防災への関りや文化・歴史の継承の場にと、学年ごとに学校周辺の身近な施設としてのまほろんの活用を考えられる。今後の課題としては、学年ごとの目的に応じた職員の細やかな対応と、この取り組みと目的についての学校側への周知である。白河市内や近隣町村の小学校にご協力いただいて、モデルケースとして実践することなどを検討したい。



写真2 撮影室での見学のようす

4 まほろんでの体験活動について

まほろんは2021年に、開館20周年を迎える。開館以来、他の類似施設に先駆けて体験活動を通した歴史学習の提供に取り組んできた。すっかり定番となった火おこし体験や勾玉づくりをはじめ、物づくり

りの体験を中心に、個人利用や団体利用、事前募集を行っての講座など、それぞれの参加形態にあわせた体験プログラムを提供している。まほろんでの体験活動は基本的には「直接体験」といわれるもので、自分の体を通して、対象に働きかけ、関わりあいながら、実際に経験する活動である。まほろんの開館以降、多くの教育現場で体験活動の重要性が唱えられており、学習のみならず人間形成の様々な場面においても有意義であることが実証されている。そのような社会の認識と要請の中で、まほろんでは体験活動に関わる取り組みを継続して行っている。

体験活動といつても、近年ではインターネットやテレビなどの情報ツールを介しての間接的な体験や、シュミレーションや模型などを通しての疑似的な体験が主流となりつつある。まほろんに来館する小学生の多くも、物や人に直接働きかける経験が少なくなってきたことがうかがえる。そのような風潮の中で、まほろんでの体験活動の社会的な意義は大きい。特に小学校の団体利用では、学校のカリキュラムの中で自分の意思に関わらず来館する不特定多数の児童たちが対象である。そのようなご利用が増え、まほろんでの体験が何かしらの発見や気づきとなれば幸いである。

【引用参考文献】

- 公益財団法人福島県文化振興財団 2017『福島県文化財センター白河館 年報～平成28年度実績～』
公益財団法人福島県文化振興財団 2018『福島県文化財センター白河館 年報～平成29年度実績～』
公益財団法人福島県文化振興財団 2019『福島県文化財センター白河館 年報～平成30年度実績～』
文部科学省 2017『小学校学習指導要領（平成29年告示）』
文部科学省 2017『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則』
文部科学省 2017『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会』
文部科学省 2012『用語集』

【図・写真】

表1・2 筆者が作成した。

写真1・2 当館職員が撮影した。

檜葉町馬場前遺跡採集資料の紹介

—山内幹夫コレクション—

山内 幹夫 門脇 秀典 三浦 武司
(前 福島県文化財センター白河館職員)

要旨

福島県文化財センター白河館に勤務していた山内幹夫が高校生時代に檜葉町馬場前遺跡で採集した資料を紹介する。この山内コレクションは、令和元年度にまほろん常設展示室「みんなの研究ひろば」コーナーにて展示した資料群である。また、檜葉町においても移動展を行っている。資料採集の経緯については、山内自身の執筆によるものである。

コレクションの概要については、主に石鏃を中心として写真と観察表をもとに紹介した。浜通り地域でも最大級の縄文時代中期の集落跡である馬場前遺跡の資料の一端を明らかにする。

キーワード

表採資料 馬場前遺跡 山内コレクション

1 はじめに

(1) はじめに

山内が採集した馬場前遺跡コレクション(以下、「山内コレクション」と略称する)は、檜葉町馬場前遺跡から表面採集した縄文時代中期の石器資料を中心とするものである。このコレクションは、山内が高校生時代に馬場前遺跡に足繁く通い、採取した石器類を保管していたものである。

福島県文化財センター白河館(以下、「まほろん」という)では、山内コレクションを紹介する目的で、『郷土史を愛する心—山内幹夫コレクション』展を山内の許可を得て常設展示「みんなの研究ひろば」コーナーにて開催した(写真1)。展示期間は、令和元年5月22日(水)～9月24日(火)である。

この展示を開催したことで、山内コレクションの

重要性をあらためて認識し、本論にて紹介することとした。

本報告では、馬場前遺跡での表面採集の経緯を山内が執筆した。山内少年の考古学にかける熱い思いと、当時の高校生の学問を探究する気風が読み取れるものである。

石器の概要については門脇が、その他については三浦が執筆を担当した。(三浦)

(2) 資料採集の経緯

今回、資料紹介する馬場前遺跡における石器採集の経緯について、個人的所感も含め、記憶していることをできるだけ記しておきたい。

考古学への関心

私が檜葉町内の遺跡を歩いて石器などを採集するようになったのは、高校2年生の頃からであった。きっかけは、昭和44年に檜葉郷土史研究会の活動で山所布遺跡や井出代遺跡の踏査を行い、石鏃をはじめとするさまざまな石器や縄文土器を手にして観察できたためであった。その後、石器の魅力にとりつかれ、一人でも遺跡を訪ね歩いては、石器探しなどをを行うようになった。

高校3年になり進学の目標を考古学専攻に定めてからは、本気になって檜葉町内の遺跡を歩き回るようになってしまった。檜葉町公民館を訪ねては、当時の社会教育主事であった松本松寿氏のご厚意で町内埋蔵文化財包蔵地一覧表などを見せていただき、それを参考に踏査を行った。当時の檜葉町埋蔵文化財包蔵地



写真1 まほろん常設展示での展示風景

一覧表は、檜葉北小学校山所分校に勤務されていた檜野照武先生が町内を踏査して作成されたものであった。檜葉町公民館には檜野照武先生が町内から採集された石器や土器が収蔵・展示されていた。私は、公民館に足を運んでそれらの考古資料を観察することも楽しみの一つであった。また、当時の檜葉町教育長であった宇佐神正文先生(木戸八幡神社宮司)とも親しくさせていただき、遺跡や郷土史の話などを聞かせていただいた。

町内の遺跡踏査とは言いながら、当時の私は主に石器に興味を持っており、その実際は「石器拾い」であった。私は、精巧に剥離された石鏃や石匙などに魅力を感じたものである。石器を手にして縄文文化に思いを馳せることが無上の喜びであった。自転車を漕いで井出代遺跡や向ノ内遺跡、北門上遺跡、天神原遺跡、女平遺跡、台東遺跡、大坂遺跡などを巡ったものである。

馬場前遺跡へ立つ

昭和46年の12月、私は檜葉町埋蔵文化財包蔵地一覧表に記載されていた馬場前遺跡や鍛冶屋遺跡のことが気になり、その地図をたよりに現地に赴くと、畑一面に膨大な数の石器や土器が散布していることに驚き、すっかり馬場前遺跡の虜となってしまった。当時の遺跡の現況は、大部分は畑で耕作土が広く露わとなり、そこに石器や土器が密に散布していた。地権者の許可をいただき、畑を歩かせていただいたことも幸いして、踏査に行くたびに数多くの石器を採集することができた。雨天の翌日などは黒い畑土に無数の石器が現れ、心躍らせた記憶がある。採集できた石器は、石鏃や石鏃未成品が多く、石錐や石匙、削器、搔器も拾えた。さらに、縄文時代中期の土器や土錐、土器片錐、石錐なども手にし



写真3 およそ50年前の馬場前遺跡全景（2）

た。とにかく、馬場前遺跡から鍛冶屋遺跡にかけての上小塙の段丘面をくまなく、繰り返し踏査したことを覚えている。踏査には、檜葉郷土史研究会の先輩である大和田智氏も時折参加され、私も大和田氏が運転するバイクの後部座席に乗せられて遺跡に向かったことが楽しく思い出される。採集した石器の石質は流紋岩が最も多く、鉄石英や頁岩、チャートも多く見られた。他に玉髓や石英、珪化木などもあった。採集した石器をのちに分類したところ、剥片や石器未成品が目立って多かったため、ここで石器の製作が行われていたのではないかと考えたものである。発掘調査を行えば、石器製作跡が検出できるのではないかと、本気で考えていた。大学に進学してからも馬場前遺跡通いは続き、昭和47年5月3日の午後と記憶しているが、玦状耳飾りの完形品を拾えた喜びはひとしおであった。採集したこの玦状耳飾りは、寄託資料として、現在は福島県立博物館に収蔵されている。

「熱い時代」当時の背景

私は、高校生の頃から檜葉町内の遺跡踏査というフィールドワークを重ねたことにより、遺跡が立地する地形を覚え、遺跡を見つける勘というものが養われたように思える。

この時代は、高校生のフィールドワークが本当に活発な時代であった。私も参加した富岡町小浜代遺跡の発掘調査には、磐城高校や双葉高校、原町高校から学生が参加した。この頃は、磐城高校や磐城女子高(現 磐城桜ヶ丘高等学校)、双葉高校、原町高校、相馬高校の史学部や郷土部の部員たちが、分布・発掘調査に参加したり、郷土史調査や民俗調査、民話聞き取り調査などのフィールドワークを活発に行っていた時代であった。檜葉中学校卒業の高校生たちが集まって檜葉郷土史研究会(佐藤和良会長)が



写真2 およそ50年前の馬場前遺跡全景（1）

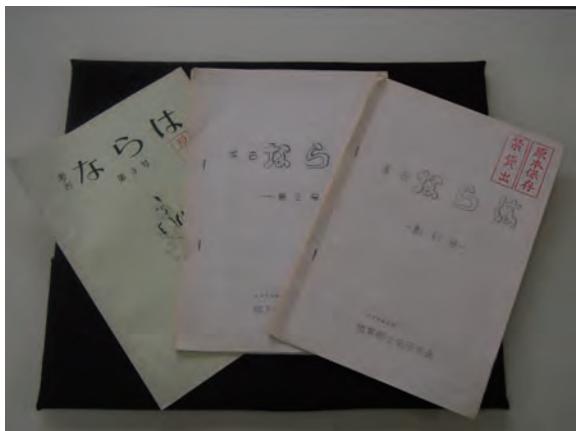


写真4 檜葉郷土研究会『考古ならは』

結成されたのもこの頃であった。研究会では、天神山城跡や館の沢館跡の測量調査、山所布遺跡や井出代遺跡の踏査も行った。当時、梅宮茂先生や馬目順一先生、渡辺一雄先生、松本友之先生、菅原文也先生、西徹雄先生たちが発掘調査を指導する姿がとても印象的であった。小浜代遺跡の調査時には、東北大学の伊東信雄教授や多賀城跡研究所の先生方のお姿を見て感動したものである。

高校3年の頃、通学途中に常磐線四ツ倉駅で途中下車し、四倉史学館^{註1}に何度も足を運んだことが忘れられない。そこに収蔵されていた化石や石器・土器に心を躍らせたものであった。四倉史学館に詰めておられた小檜山元先生は新第三紀中新世の新種ホタテガイ化石 *Patinopecten kobiyamai* Kamada, 1954 を発見された方で、石器にも造詣が深く、いわき市北部の山中に立地する遺跡から数多くの流紋岩(石英粗面岩)の石器や剥片、石核を採集されていて、それが展示されていた。この資料については小檜山元先生が『四倉史学会会報』に報告されている。当時、小檜山先生からお聞きしたところによれば、いわき市久之浜から双葉郡広野町にかけての山中に石器の材料になる流紋岩が産出する地層があるとのことであった。史学館に収蔵・展示してある石器や剥片、石核は、その露頭の近くの遺跡から採集したことであった。檜葉町の遺跡から採集できた石器の石質には、流紋岩製がかなり多かったことから、小檜山先生のお話しさかなり重要なご教示を感じた。この時、現地踏査できなかつたことが残念であった。今考えると、新第三系湯長谷層群の露頭のことを、先生はご指摘されたのかと推測している。高校時代の地学の恩師である柳澤一郎先生に

は、井出代遺跡や馬場前遺跡で拾った石器の石質を鑑定してもらうために、昼休みや放課後の時間に職員室に石器を持ち込んで教えをいただいたことが、昨日のことのように思い出される。

今考えると、この時代は、考古学のみならず地学や植物学、動物学、史学そして民俗学と、フィールドワーク全盛の「熱い時代」だったようと思える。

再び、馬場前遺跡へ

話を馬場前遺跡が立地する上小塙の段丘に戻そう。私は、高校生から大学生時代にかけて馬場前遺跡や鍛冶屋遺跡の踏査を繰り返していたが、1977(昭和52年)、財団法人福島県文化センター(現 公益財団法人福島県文化振興財団)に勤務すると、馬場前遺跡への足は遠のいてしまった。

しかし、その馬場前遺跡が、常磐自動車道建設のために発掘調査されることとなり、1999(平成11)年、私は再び遺跡の上に立つことになった。

その他にも檜葉町内の常緑広葉樹の調査で、2007(平成19)年1~3月に再び訪れ踏査を繰り返した。山田浜から上小塙の段丘に移動して東側斜面を詳しく踏査していた時にヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* の亜高木を見つけることができた。その後、馬場前遺跡の踏査をしていた時と同じ執拗さで、徹底的に踏査を実施した。その結果、上小塙段丘に低木層・亜高木層・高木層あわせて200株以上のヤブニッケイが自生していることを確認した。さらに馬場前遺跡から鍛冶屋遺跡にかけての屋敷林にも数多くのヤブニッケイの高木が認められた。ヤブニッケイはクスノキ科で、北限は富岡町の子安觀音裏の樹叢に自生する数株のことである^{註2}。福島県のレッドデータブックでは、準絶滅危惧種に指定されている。上記のことからすると、上小塙の段丘上のヤブニッケイの群落は、北限にごく近い貴重な保存すべき群落ということになるであろう。段丘斜面の自生群落に低木層が占める割合が高いということは、安定してヤブニッケイの群落が更新され続けていることにもなる。

檜葉町の未来へ

馬場前遺跡の石器コレクションのいきさつから、当時のフィールドワークについての思い出、そして馬場前遺跡が立地する段丘で確認した貴重な自然のことまで、長述してしまった。1971(昭和46)年以

来、馬場前遺跡の踏査を繰り返し、36年後の2007(平成19)年には貴重なヤブニッケイの群落を確認するに至るまで、私はこの上小塙の段丘に縁があったように思える。この一帯は、考古学的にも歴史学的にも、そして自然誌的にも貴重な存在であると言えよう。こここの遺跡と集落景観と自然が今後も保全されていくことを願うものである。(山内)

(3) 山内コレクションの公開

まほろんで開催した『郷土史を愛する心－山内幹夫コレクション』では、石器資料以外にも、山内の高校生時代のメモ帳を展示した。展示名となった『郷土史を愛する心』は、山内のメモ帳に記載されていた言葉である。山内少年の考古学・郷土を思う強い意志が現れた表現として、展示名に用いた。

また、1月23日(木)～2月3日(月)の期間には、檜葉町と福島県文化財センター白河館の共催事業として、『郷土史を愛する心－山内幹夫コレクション－』移動展を開催した。檜葉町コミュニティーセンターハウスで開催し、多くの町民が見学に訪れた。また、展示期間内の1月25日(日)には、山内

による講演も開催され、好評を博した。

2 馬場前遺跡の位置と概要

馬場前遺跡は、福島県浜通り地方南部の双葉郡檜葉町に所在する。町内では、古くから知られた遺跡であった。遺跡は標高約50mの木戸川南岸の中位Ⅱ段丘面に立地している。西から東へのびる段丘面は、木戸川流域では最大級の面積を有する。このような立地から、馬場前遺跡が位置する上小塙の段丘上では、縄文時代・古代・中世・近世と拠点的な集落が営まれてきた。遺跡の面積は115,000km²と推定されている(福島県教育委員会1996)。

馬場前遺跡は、複数回にわたり発掘調査が実施されている。常磐自動車道の建設に伴い、1999(平成11)年から2001(平成13)年にかけて、福島県教育委員会の委託を受けて財団法人福島県文化振興事業団(現 公益財団法人福島県文化振興財団)が発掘調査を実施している(福島県教育委員会2001・2002・2003)。

本遺跡から見つかった最も古い人類の痕跡は、後期旧石器時代にまで遡る。ナイフ形石器や搔器が見



第1図 馬場前遺跡の位置と地形



写真5 馬場前遺跡遺構集中地区（平成13年調査区）
つかっている。その後、縄文時代早期後葉、前期末葉の痕跡が断片的に認められるが希少である。縄文時代中期中葉から末葉頃が、本遺跡が最も盛行した時期にあたる。堅穴住居と貯蔵穴が多数確認でき、土器や石器が多く出土した。該期における浜通り地方の拠点的な集落と考えられる。縄文時代後期後半以降、古墳時代前期に至るまで遺構や遺物は確認されていない。再び集落として利用されるようになるのは、奈良・平安時代である。堅穴住居跡が散在し、小規模な集落が形成されていたものと考えられる。10世紀前半には、遺構・遺物が減少していくことから、集落が衰退したものと推測される。中世末期には、再び建物が構築されており、小規模な集落が存在していたと推測できる。続いて近世には、L字状の区画溝と多数の建物が構築されている。この建物群は、複数回の建て替えを繰り返しながら、17～19世紀に至るまで存続していたと考えられる。隣接する木戸八幡神社に関連する施設であった可能性も想定できる。

檜葉町は、2011（平成23）年3月11日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故の影響により、町域の多くが警戒区域に指定された。2012（平成24）年8月10日には、立ち入り可能、宿泊不可の避難指示解除準備区域に変更された。2015（平成27）年9月5日に避難指示が解除されている。町は生活インフラなどの整備が概ね進み、震災前の活気が戻りつつある。（三浦）

3 コレクションの概要

（1）利用石材と採取可能地

山内が馬場前遺跡で採集した石器・石製品の総数は258点で、剥片石器・剥片・磨製石器・石製品に大別される。この内、剥片石器・剥片では黒曜石・安山岩・流紋岩・蛇紋岩・珪質凝灰岩・珪質頁岩・チャート・石英・玉髓・メノウ・鉄石英が利用されている。磨製石器の石材では、蛇紋岩・砂岩・珪質頁岩・粘板岩が用いられている。玦状耳飾などの石製品では、粘板岩・透綠閃石の石材が用いられている。石材別の点数と割合は、表1に示した。

本遺跡では、在地色の強い石材として剥片石器類ではチャート・磨製石器では砂岩・粘板岩がある。本遺跡から直線距離で約1kmのところにある木戸川で採集可能な石材であることから（門脇2019）、日常的な行動領域内で採取可能な石材と位置づけてもよいだろう。

一方、浜通り南部地域特有の石材としては流紋岩と鉄石英がある。これらは本遺跡より約2kmの大谷上ノ原遺跡の基盤の段丘礫層中に含まれていることが確認され（門脇2019）、おおむね日常の行動圏の範囲内でまかなうことができた石材と考えていいだろう。

このような在地色や地

表1 石材別点数

石材名	点数	(%)
黒曜石	5	1.9%
安山岩	4	1.6%
流紋岩	38	14.7%
蛇紋岩	2	0.8%
珪質凝灰岩	1	0.4%
珪質頁岩	45	17.4%
鉄石英	68	26.4%
粘板岩	2	0.8%
砂岩	1	0.4%
チャート	79	30.6%
石英	4	1.6%
玉髓	3	1.2%
メノウ	5	1.9%
透綠閃石	1	0.4%
計	258	

（2）採集資料について

採集資料のうち、石器を中心に石製品や土製品など233点を写真掲載した。石器内訳については、表2に示した。狩猟・漁具では石槍や石鏃、石錘があ

る。加工・調理具では石匙や石錐、搔器や削器などがある。その他の石製品では石刀や玦状耳飾がある。資料の大半は縄文時代の所産と考えられるが、一部、旧石器時代のものも含まれる。

①尖頭器・石槍（写真 12・13）

写真 12-1 は流紋岩製の両面調整尖頭器で、横断面形は薄身の凸レンズ状をなす。風化の度合いから後期旧石器時代後半期の所産の可能性がある。

写真 13-2 は、チャート製の石槍で、横断面形が丸みを帯びた菱形をなす。左右非対称で、基部はやや丸みを帯びる。

②石 鏃（写真 6～11）

石鏃は、その未成品と判断された例も含め 168 点を写真で掲載した。以下、形態別に述べる。

【I 群】 有茎鏃である。4類に分類される。いずれも縄文時代後・晚期に属すると考えられる。

I-1類 鏃身部が長く、木葉形を呈するもの（写真 6-21、写真 10-2・3）。斜め方向の整った調整剥離で仕上げられ、鏃身部は薄い。

I-2類 鏃身部が二等辺三角形を呈するもの（写真 6-1～4、写真 10-1・4）。茎部は、太く長い写真 6-1、写真 10-1 と細く短い写真 6-2・4 の違いがある。石材は珪質頁岩やチャートなど良質なものが多い。

I-3類 鏃身部が二等辺三角形を呈し、側辺が内湾するもの（写真 6-5・6）。2類に類似するが、側辺の形状の他、若干小型である点から区別して考えた。いずれも良質なチャートを用いている。写真 6-5 は石器の軸線が右にずれているが、調整の状態から使用に耐えうると判断した。

I-4類 鏃身部が正三角形に近い形状を呈するもの（写真 6-7～11）。長さと幅の比がほぼ等しい一群で、1～3類と比較するとずんぐりした印象を受ける。I群のなかでは小型である。茎部は明瞭に作出されており、茎部末端は尖銳である。

【II 群】 側辺が直線的に屈曲して、突出する基部が作出される一群。これを、凸基鏃とする。基部の形状・大きさから以下の 2類に細分される。本群は、他遺跡の類例から縄文時代中期中葉から末葉を主とした時期に属すると考えられる。

II-1類 基部の形状が直線的なものを一括する。いわゆる「菱形鏃」で、写真 6-12～20 が該当す

る。鏃身の形状には、

側辺が丸みを帯びるもの、直線的な二等辺三角形を呈するもの、外反するものなどの違いが認められる。写真 6-15 には被熱によるとみられるハジケが観察される。

表2 器種別点数

器種名	点数	(%)
尖頭器・石槍	3	1.2%
石鏃	197	76.4%
石匙	1	0.4%
石錐	26	10.1%
搔器	17	6.6%
削器	5	1.9%
微細剥離のある剥片	3	1.2%
磨製石斧	3	1.2%
石錘	1	0.4%
石刀	1	0.4%
玦状耳飾	1	0.4%
計	258	

II-2類 基部の形状

が円形を呈する、「円形鏃」で、写真 6-22・23、写真 10-6・7 が該当し、比較的小型の部類である。このうち、基部の突出し丸みをもっていたため、全体の形状は水滴状を呈する。基部側は、急斜で断ち切るような整形である。

【III 群】 「平基鏃」で 2類に細分できる。詳細な時期を特定することは難しいが、縄文時代中期を中心とする時期に比定される可能性が高い。

III-1類 鏃身部が二等辺三角形を呈するもので、写真 6-24～29、写真 10-8 がこれにあてはまる。側辺が直線的な例が主体を占める。写真 6-25 の尖頭部周辺は光沢が著しく、加熱処理された可能性がある。また、写真 6-27 の正面右側の基部には欠損面があり、この面よりも新しい剥離が観察される。

III-2類 鏃身部が正三角形に近いもので、写真 6-30～34 があてはまる。いずれも小型品である。このうち、対称形をなさない写真 6-31 には黒色付着物が観察できることから、完成品として使用されたと考えられる。この先端部には特に細かい調整が施されており、再加工の可能性が指摘できる。

【IV 群】 「凹基鏃」で、数的に今回の資料で最も主体を占める。これらは、全体的な形状や大きさが多様性に富んでいる。本群は、縄文時代を通じて一般的にみられる形態である。9類に分けた。

IV-1類 基部が一方にのみ作出された「片脚鏃」とよばれるもので、2点が採集されている（写真 7-1・2）。基部の形状には差異が認められ、写真 7-1 で薄く先端が尖っているが、2 では丸みがあり比較的厚みもある。

IV-2類 鏃身部が二等辺三角形を呈し、基部側が緩やかに内湾するもの（写真 7-3～14、写真 10

— 9 ~ 15)。側辺の形状は直線的なものが主体であるが、内湾するものと外湾するものもある。

IV-3類 鏃身部が二等辺三角形で、基部側が逆U字形をなす一群（写真6-15~19、写真10-16~18）。基部末端の形状は尖鋭なものが多い。また、鏃身は長身で、先端部を特に尖锐的に仕上げたものが多い。

IV-4類 中型・大型で基部の脚部が長く、深い抉りの形状が「コ」字状を呈するもの（写真7-20~23、写真10-19・20）。並行する調整剥離が特徴的な一群である。

IV-5類 最大長が2cmにも満たない小型の一群で、側辺が先端部近くで丸みを帯びるもの（写真7-24~27、写真10-21~23）。器面に剥片の素材面を残す例が多く、薄手の剥片の側縁部のみを調整して製作された可能性が高い。

IV-6類 側辺の中位から尖頭部近くに最大幅をもつ小型の一群で、細身の尖頭部を特徴とする。側辺が段状に屈曲するので、「五角形」状を呈している（写真7-28~32、写真11-1~3）。本遺跡の発掘調査では、本類の石鏃は縄文時代中期末葉の遺構を中心に出土している。

IV-7類 側辺の丸みが強く、鏃身部が短く、全体的な形状が「三日月」を呈する一群（写真7-33~36）。長い脚部を有し、その末端は尖鋭である。

IV-8類 鏃身部が短身で、全体的な形状が「ブーメラン」状を呈する一群である（写真8-1~4）。先端部がつまみ出すように尖るものもある。

IV-9類 鏃身部が短身幅広で、7・8類に比べ基部の抉りが比較的浅い一群（写真8-5~13）。写真8-12は左右非対称形で、いわゆる「鮫歯形石器」に類似する。

【V群】 未成品を一括する。推定される完成品の形態から、以下の3類に細分される。

V-1類 比較的整った形状をなし、細部調整を加えれば完成品となるもの。これらの一群は石鏃製作の最終段階での廃棄品または失敗品とみられる。側辺が整っておらず対称形をなさない点や、厚みを除去しきれていない点を特徴とする。写真8-14~16、写真11-6~9は、I・II群の未成品とみられる例である。写真8-21~33、写真9-1~6、写真11-10~21はIII・IV群の未成品である。

V-2類 基部や尖頭部の作出

が不十分な一群（写真8-17~

20、写真9-8~16、写真11-22）。いずれも目的とする形状に整えた程度で1類と比較すると粗い調整加工にとどまっている。

V-3類 基部ないし先端部の

いずれかが作出されているのみで、完成品の形状が推定困難なもの（写真9-17~20）。本類は、目的とする大きさに整えた段階の資料と考えられ、素材剥片の形状と剥離面を多く残す点が特徴である。

③石錐（写真12・13）

27点を写真12・13に掲載した。

表3 石鏃分類別
点数

分類	点数	(%)
I-1	3	1.5%
I-2	5	2.5%
I-3	2	1.0%
I-4	5	2.5%
II-1	10	5.1%
II-2	8	4.1%
III-1	8	4.1%
III-2	6	3.0%
IV-1	2	1.0%
IV-2	22	11.2%
IV-3	9	4.6%
IV-4	13	6.6%
IV-5	9	4.6%
IV-6	8	4.1%
IV-7	5	2.5%
IV-8	6	3.0%
IV-9	10	5.1%
V-1	40	20.3%
V-2	21	10.7%
V-3	5	2.5%
		197

写真12-2・3・10は、基部に円形状のつまみ部が作出され、その一端に錐部を設けている。3は、上端部と下端部の2か所に錐部の痕跡が残るが、両方とも折れている。4・5は珪質頁岩を素材とした石錐で、上・下端部に錐部が作出されている。6は大型の縦形剥片を素材とし、縁辺部に調整剥離を加えて、断面三角形の錐部を作出している。

写真12-7~9は棒状の石錐で、器面の全面に調整剥離を加え、断面菱形の錐部を有する。11~20はT字形もしくは逆凸字形のつまみ部をもつ石錐で、その多くは長身の錐部を有する。15の下端部は摩耗し、丸みを帯びる。16は器面にポットリッド状の剥離があり、熱を受けた可能性がある。

写真12-21~27は素材剥片の一端に錐部を作出したもので、錐部の断面形は菱形のものと、三角形のものとがある。つまみ部は簡素なつくりで、素材の剥離痕を大きく残す。

写真13-1は、流紋岩製の石錐で、横断面形が丸みを帯びた菱形をなす。下端部の錐部は摩耗により、やや丸みを帯びる。上端部は折断面だが、その面に対して微細な再調整を加えている。

④その他の石器・石製品など（写真13・14）

写真13-3・4は、素材剥片の一端に刃部を設けた両刃削器である。5は上端部のつまみ部を設けた小型の石匙である。小型ではあるが、下端部を右下がりに断ち切るように調整する点は、松原型石匙

の特徴と一致する。

写真 13 - 6・7・11・24・25 は、剥片の一端に刃部を設けた搔器である。比較的急斜な角度で刃部を整形している。8・9・12・22 は不定形な刃部を設けた削器で、10・23 は剥片の側縁に内湾する刃部を設けた抉入搔器である。13 は裏面に円礫面を備える搔器で、平面形状はヘラ形に調整されている。

写真 13 - 14・15 は剥片の一端に急斜な刃部を設けた爪形の搔器である。16～20 は 1 cm にも満たない小型の剥片を素材に、一端に刃部を設けた搔器である。黒曜石やチャートなど良質の石材を用いている。21 は両面がポジ面の剥片の打面部に、刃部調整を加えた削器である。

写真 13 - 26 は小型の磨製石斧で、両刃の刃部を有する。27 は珪質岩を素材とする磨製石斧で、刃部の角度は 65 度である。

写真 14 - 1 は砂岩製の磨製石斧の基部片であるが、折れ面にも敲打痕が観察できることから、敲石に転用されていた可能性がある。2・3 は珪質頁岩製で、微細剥離がある剥片である。4 は珪質頁岩製の剥片であるが、風化が進んでいるため、旧石器時代の所産の可能性がある。5 は粘板岩製の石錘で、上下端に擦切りを入れている。6 は透緑閃石製の玦状耳飾と考えられ、縦方向に擦り切り面がある。割れ面の一部にも研磨が行われていることから、再加工を行ったようである。7 は粘板岩製の石刀で、粗目の研磨痕が観察できる。8・10 は土器片を素材とした錘である。上下と両側面に紐かけ用の浅い切り込みが付けられている。

写真 14 - 9 は土製の耳栓の破片である。外径が推定 2.8 cm、内径が推定 1.3 cm を測る。側面の抉りは浅い。表裏面には、細い棒状工具によって 2 列の刺突文が施されている。11 は縄文時代中期中葉頃の深鉢形土器の胴部破片である。地文は条が縦方向に走る撚糸文で、その上に 3 本の沈線によって懸垂文が描出されている。

(3) まとめ

馬場前遺跡で採集された石器の大半を占める石鏃には、完成品の他、多数の未成品（または失敗品）が含まれている。これらの資料は発掘資料ではない

ため共伴関係を証明することはできないが、石鏃の製作工程を示す資料群と考えられる。

石鏃の製作工程としては、以下の 5 段階が指摘できるが、第 1 段階と、第 2 段階については、今報告では該当する資料がないため、本遺跡の発掘調査資料も参考に考察する。

第 1 段階は、素材剥片を石核から剥離し、選別を行う段階である。素材となる剥片の形状は、縦長のもの・貝殻状を呈するのが認められる。さらに、86 号住居跡（縄文時代中期末葉）の石器集中部からは両極打法により作出された剥片が多数出土していることから、これらは石鏃の素材剥片の可能性がある（門脇 2003）。

第 2 段階では、剥片の分割や剥片の形状を大きく変える粗雑な調整を行っている。とくに初期段階の剥片は、背腹両面から挟み打ちにより分割され、整形されたものが多い。こうした広義の両極打法は、鋭角的な先端部を作出することで石鏃のかたちを決定する効果を果たしている。両極打法と同時に幅広な調整剥離により、全体的な形状を大まかに作り出し、同時に厚みを除去し始めた段階でもある。しかし、調整が全周することは少なく、素材剥片の形状や剥離痕を大部分に残している。本稿の石鏃 V - 3 類がこの段階の資料と考える。

第 3 段階では調整を器面の全周に行い、素材面をほとんど除去している。ただし周縁や基部の細部調整を行っていない。本稿の石鏃 V - 2 類がこの段階の資料と考える。

第 4 段階では形状の整形と厚みの除去を行っている。本稿の石鏃 V - 1 類に相当する。逆に完成品とならず未成品とした資料は、器面中央で階段状剥離が生じたために厚みの除去が困難なものや、周縁部で不規則な割れが生じたために対称性を維持できなかつたりしたために、製作の途中で廃棄されたものである。この段階で押圧剥離が多用され、厚みの除去が行われたと推察できる。

第 5 段階では先端部と基部に細部調整を行い、形状を整え、完成品への仕上げを行っている。

以上が、本資料からわかる石鏃製作の諸工程である。段階を経るごとに長さ・幅・厚み・重量などが減少し、同時に調整が中央部に及ぶことで素材面の割合が低くなつて、形状が整う傾向が看取できる。

このほか、山内が採集した石器類は、縄文時代中期中葉から末葉を中心としながら、後・晚期と考えられる資料、また玦状耳飾など縄文時代前期に比定される資料も含む。本遺跡の常磐自動車道関連の発掘調査では縄文時代中期中葉から末葉を中心とした時期の集落遺跡の様相は明らかになったが、前・後・晚期の集落の様相は、住居跡が少なく、分布が散在的であった。山内が採集した地点は、常磐自動車道の発掘調査区より東側が中心と考えられ、ちょうど、そこは馬場前遺跡が位置する台地の中央部にあたる。縄文時代前・後・晚期の集落が発掘調査区とは異なる別地点に存在する可能性を示唆する。

(門脇)

4 あとがき

山内は、このコレクションを檜葉町に寄贈したいと考えている。この報告が檜葉町民の方々に向けた活用の一助となれば幸いである。

この報告を発表するまでには、多くの方々のご助力があった。末筆ながら、ここにご芳名を記して感謝の意を表したい。(三浦)

協力機関・協力者（敬称略・順不同）

福島県立博物館 檜葉町教育員会

公益財団法人福島県文化振興財団

阿部まゆみ 阿部美子 五十嵐千加子 石川登美子

市川佐知子 宇佐見雅夫 加藤美和子 菅野祐子

菅野雪恵 菊池礼子 轉田克史 國井秀紀

小暮伸之 今野徹 斎藤恵美子 斎藤由美子

坂爪信子 坂本和也 佐藤啓 佐藤敏子

三瓶京子 鳴原由恵 嶋川勉 高木さつき

東条由美 永峰由美子 二階堂敬子 沼田恵美子

畠田玲子 藤井千賀 藤原妃敏 南口絹子

宮西明美 宮田安志 茂木美津枝 八巻まふみ

渡部賢子 渡辺文枝 渡邊由香 渡辺由美子

渡辺礼子

河西久子

【註】

註1 四倉史学館は、四倉史学会が管理運営し、1992年まで四倉小学校敷地内にあった資料館である。およそ5,000点にわたる資料は、化石標本や考古資料、民俗資料、生物資料、古文書など多岐にわたる。現在、これら資料は、いわき市教育委員会が寄贈を受け、管理している。

註2 湯澤陽一 2006「ヤブニッケイ」『ふくしまの滅びゆく植物たち』いわき自然塾

【引用参考文献】

財団法人福島県文化振興財団 2001「馬場前遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告25』

財団法人福島県文化振興財団 2002「馬場前遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告25』

財団法人福島県文化振興財団 2003「馬場前遺跡（2・3次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告34』

門脇秀典 2003「縄文土器に関する2・3の問題—檜葉町馬場前遺跡出土の石器について—」『福島県文化財センター白河館研究紀要2002』

門脇秀典 2019「第2節 遺跡周辺の環境 河床堆積物と段丘堆積物」『常磐自動車道遺跡調査報告74』

【図・写真】

図1 筆者が作図した。

写真1・6～14 当館職員が撮影。

写真2・3 山内幹夫氏撮影。

写真4 檜葉町コミュニティセンターの許可を得て、当館職員が撮

表4-1 馬場前遺跡採集の石器一覧（1）

単位：長・幅・厚はmm、重さはg。

写真枝No.	器種名	分類	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ
写6 1	石鏃	I-2 チャート	2.22	1.09	0.36	0.67	
写6 2	石鏃	I-2 硅質頁岩	(1.80)	1.20	0.30	0.49	
写6 3	石鏃	I-2 チャート	(2.20)	1.40	0.40	0.76	
写6 4	石鏃	I-2 チャート	1.96	(1.21)	0.28	0.50	
写6 5	石鏃	I-3 チャート	1.89	1.34	0.29	0.47	
写6 6	石鏃	I-3 チャート	1.96	(1.21)	0.40	0.74	
写6 7	石鏃	I-4 チャート	(1.89)	1.50	0.40	0.88	
写6 8	石鏃	I-4 蛇紋岩	(1.65)	1.34	0.36	0.65	
写6 9	石鏃	I-4 硅質頁岩	1.54	1.25	0.29	0.37	
写6 10	石鏃	I-4 硅質頁岩	(1.94)	1.47	0.40	0.81	
写6 11	石鏃	I-4 鉄石英	(1.80)	2.00	0.31	0.87	
写6 12	石鏃	II-1 鉄石英	1.97	1.31	0.30	0.69	
写6 13	石鏃	II-1 鉄石英	(2.23)	1.43	0.36	0.92	
写6 14	石鏃	II-1 鉄石英	1.87	1.09	0.33	0.54	
写6 15	石鏃	II-1 硅質頁岩	2.06	1.34	0.34	0.67	
写6 16	石鏃	II-1 チャート	2.00	1.30	0.30	0.65	
写6 17	石鏃	II-1 チャート	2.23	1.33	0.38	1.06	
写6 18	石鏃	II-1 鉄石英	2.17	1.17	0.35	0.71	
写6 19	石鏃	II-1 チャート	2.13	1.53	0.46	1.26	
写6 20	石鏃	II-1 鉄石英	1.85	1.20	0.41	0.83	
写6 21	石鏃	I-1 チャート	(2.25)	1.37	0.38	1.02	
写6 22	石鏃	II-2 鉄石英	2.07	1.16	0.51	1.18	
写6 23	石鏃	II-2 硅質頁岩	2.12	1.19	0.58	1.13	
写6 24	石鏃	III-1 硅質頁岩	2.22	1.58	0.53	1.55	
写6 25	石鏃	III-1 鉄石英	2.15	1.26	0.26	0.56	
写6 26	石鏃	III-1 チャート	1.95	1.25	0.34	0.71	
写6 27	石鏃	III-1 チャート	2.04	1.19	0.31	0.54	
写6 28	石鏃	III-1 鉄石英	1.72	1.21	0.30	0.56	
写6 29	石鏃	III-1 硅質頁岩	(1.57)	1.37	0.28	0.52	
写6 30	石鏃	III-2 硅質頁岩	1.67	(1.53)	0.28	0.57	
写6 31	石鏃	III-2 チャート	1.38	1.19	0.25	0.34	
写6 32	石鏃	III-2 チャート	1.36	1.33	0.29	0.47	
写6 33	石鏃	III-2 鉄石英	1.32	1.39	0.36	0.50	
写6 34	石鏃	III-2 鉄石英	1.01	1.15	0.22	0.30	
写7 1	石鏃	IV-1 チャート	1.93	1.24	0.26	0.45	
写7 2	石鏃	IV-1 チャート	(2.32)	(1.33)	0.37	0.80	
写7 3	石鏃	IV-2 鉄石英	(2.37)	(1.66)	0.51	1.59	
写7 4	石鏃	IV-2 鉄石英	1.97	1.40	0.30	0.61	
写7 5	石鏃	IV-2 鉄石英	(2.16)	1.32	0.36	0.85	
写7 6	石鏃	IV-2 安山岩	(1.58)	1.06	0.40	0.44	
写7 7	石鏃	IV-2 硅質頁岩	(1.91)	1.25	0.25	0.49	
写7 8	石鏃	IV-2 チャート	(1.76)	(1.51)	0.35	0.69	
写7 9	石鏃	IV-2 玉髓	(1.90)	1.40	0.30	0.54	
写7 10	石鏃	IV-2 鉄石英	(1.89)	(1.65)	0.45	1.16	
写7 11	石鏃	IV-2 チャート	2.05	1.35	0.29	0.61	
写7 12	石鏃	IV-2 チャート	(1.66)	1.10	0.34	0.51	
写7 13	石鏃	IV-2 チャート	(1.90)	(1.20)	0.20	0.35	
写7 14	石鏃	IV-2 チャート	(1.78)	1.43	0.29	0.44	
写7 15	石鏃	IV-3 チャート	(1.99)	(0.87)	0.28	0.29	
写7 16	石鏃	IV-3 鉄石英	(1.70)	(1.00)	0.30	0.33	
写7 17	石鏃	IV-3 鉄石英	1.55	1.06	0.17	0.23	
写7 18	石鏃	IV-3 鉄石英	(1.92)	1.20	0.25	0.38	
写7 19	石鏃	IV-3 黒曜石	(1.90)	(1.30)	0.20	0.34	
写7 20	石鏃	IV-4 チャート	(2.52)	(1.84)	0.30	0.92	
写7 21	石鏃	IV-4 鉄石英	(2.01)	(1.55)	0.33	0.64	
写7 22	石鏃	IV-4 硅質頁岩	2.10	1.80	0.30	0.78	
写7 23	石鏃	IV-4 鉄石英	(1.83)	(1.57)	0.32	0.51	
写7 24	石鏃	IV-5 チャート	1.58	1.04	0.21	0.23	
写7 25	石鏃	IV-5 鉄石英	1.48	1.12	0.20	0.32	
写7 26	石鏃	IV-5 チャート	1.30	0.90	0.29	0.35	
写7 27	石鏃	IV-5 硅質頁岩	1.60	1.20	0.30	0.61	
写7 28	石鏃	IV-6 チャート	(1.59)	1.20	0.28	0.46	
写7 29	石鏃	IV-6 チャート	(1.64)	1.05	0.23	0.39	
写7 30	石鏃	IV-6 チャート	1.70	1.32	0.42	0.93	
写7 31	石鏃	IV-6 チャート	1.68	1.47	0.51	1.13	

写真枝No.	器種名	分類	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ
写7 32	石鏃	IV-6 硅質頁岩	1.50	1.40	0.50	0.69	
写7 33	石鏃	IV-7 硅質頁岩	1.45	1.53	0.35	0.67	
写7 34	石鏃	IV-7 安山岩	1.50	1.40	0.20	0.49	
写7 35	石鏃	IV-7 安山岩	1.60	1.40	0.30	0.48	
写7 36	石鏃	IV-7 チャート	(1.41)	(1.14)	0.23	0.36	
写8 1	石鏃	IV-8 鉄石英	1.50	1.44	0.34	0.43	
写8 2	石鏃	IV-8 鉄石英	(1.60)	1.30	0.20	0.31	
写8 3	石鏃	IV-8 硅質頁岩	(1.71)	1.61	0.25	0.53	
写8 4	石鏃	IV-8 鉄石英	(1.48)	1.56	0.42	0.57	
写8 5	石鏃	IV-9 チャート	1.62	1.36	0.21	0.44	
写8 6	石鏃	IV-9 玉髓	(1.48)	(1.46)	0.32	0.54	
写8 7	石鏃	IV-9 鉄石英	(1.55)	(1.22)	0.27	0.42	
写8 8	石鏃	IV-9 チャート	1.54	1.41	0.20	0.34	
写8 9	石鏃	IV-9 チャート	(2.19)	1.81	0.55	1.53	
写8 10	石鏃	IV-9 鉄石英	1.44	1.27	0.24	0.31	
写8 11	石鏃	IV-9 鉄石英	1.30	1.40	0.30	0.39	
写8 12	石鏃	IV-9 鉄石英	(1.40)	1.10	0.27	0.35	
写8 13	石鏃	IV-9 チャート	1.20	1.02	0.26	0.30	
写8 14	石鏃	V-1 鉄石英	2.14	1.54	0.63	1.52	
写8 15	石鏃	V-1 鉄石英	1.70	1.40	0.40	0.65	
写8 16	石鏃	V-1 硅質頁岩	2.80	1.30	0.60	1.63	
写8 17	石鏃	V-2 チャート	2.30	1.00	0.40	0.94	
写8 18	石鏃	V-2 鉄石英	2.10	1.30	0.40	0.90	
写8 19	石鏃	V-2 硅質頁岩	2.10	0.90	0.30	0.51	
写8 20	石鏃	V-2 流紋岩	(2.10)	1.20	0.40	0.90	
写8 21	石鏃	V-1 チャート	1.97	1.35	0.28	0.79	
写8 22	石鏃	V-1 チャート	(2.21)	(1.51)	0.38	1.12	
写8 23	石鏃	V-1 チャート	1.73	1.22	0.40	0.66	
写8 24	石鏃	V-1 チャート	(2.10)	(1.30)	0.40	0.62	
写8 25	石鏃	V-1 チャート	1.74	1.65	0.65	1.47	
写8 26	石鏃	V-1 鉄石英	2.17	1.71	0.42	1.59	
写8 27	石鏃	V-1 鉄石英	(2.52)	1.88	0.85	2.83	
写8 28	石鏃	V-1 チャート	2.24	1.98	0.62	2.14	
写8 29	石鏃	V-1 鉄石英	2.22	1.73	0.60	2.10	
写8 30	石鏃	V-1 鉄石英	(2.00)	1.68	0.62	1.83	
写8 31	石鏃	V-1 チャート	2.51	1.87	0.70	2.79	
写8 32	石鏃	V-1 流紋岩	(2.80)	2.00	0.70	3.75	
写8 33	石鏃	V-1 チャート	1.90	1.00	0.30	0.54	
写9 1	石鏃	V-1 硅質頁岩	(2.10)	(1.70)	0.40	1.24	
写9 2	石鏃	V-1 鉄石英	1.90	1.70	0.50	1.71	
写9 3	石鏃	V-1 鉄石英	1.90	1.60	0.70	1.95	
写9 4	石鏃	V-1 鉄石英	2.49	1.75	0.47	2.01	
写9 5	石鏃	V-1 鉄石英	2.30	1.70	0.50	1.52	
写9 6	石鏃	V-1 硅質頁岩	2.11	1.77	0.45	1.56	
写9 7	石鏃	V-1 チャート	2.10	1.31	0.41	1.06	
写9 8	石鏃	V-2 鉄石英	2.60	1.70	0.70	2.64	
写9 9	石鏃	V-2 鉄石英	3.14	1.51	0.73	3.76	
写9 10	石鏃	V-2 チャート	2.31	1.73	0.55	1.81	
写9 11	石鏃	V-2 チャート	2.50	2.10	0.80	3.46	
写9 12	石鏃	V-2 チャート	2.30	1.60	0.60	2.07	
写9 13	石鏃	V-2 チャート	2.50	1.90	0.40	2.22	
写9 14	石鏃	V-2 チャート	2.40	2.10	0.70	3.48	
写9 15	石鏃	V-2 鉄石英	2.40	2.10	0.80	4.67	
写9 16	石鏃	V-2 鉄石英	2.50	2.30	0.70	4.37	
写9 17	石鏃	V-3 鉄石英	1.90	2.90	0.90	5.01	
写9 18	石鏃	V-3 チャート	2.40	1.80	0.70	2.53	
写9 19	石鏃	V-3 鉄石英	2.60	1.70	0.90	3.22	
写9 20	石鏃	V-3 硅質頁岩	2.44	1.62	0.78	2.82	
写10 1	石鏃	I-2 流紋岩	(2.80)	1.20	0.50	1.56	
写10 2	石鏃	I-1 硅質凝灰岩	2.80	1.50	0.40	1.22	
写10 3	石鏃	I-1 流紋岩	2.30	1.20	0.40	0.91	
写10 4	石鏃	I-2 流紋岩	2.21	1.27	0.45	0.73	
写10 5	石鏃	II-1 流紋岩	2.08	1.27	0.42	0.89	
写10 6	石鏃	II-2 流紋岩	2.00	1.30	0.40	0.91	
写10 7	石鏃	II-2 流紋岩	2.10	1.20	0.40	0.90	

表4-2 馬場前遺跡採集の石器一覧（2）

単位：長・幅・厚はmm、重さはg。

写真枝No.	器種名	分類	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ
写10 8	石鏃	III-1	流紋岩	(1.90)	1.60	0.60	1.22
写10 9	石鏃	IV-2	流紋岩	1.95	1.09	0.48	0.67
写10 10	石鏃	IV-2	流紋岩	(1.84)	1.35	0.42	0.73
写10 11	石鏃	IV-2	流紋岩	2.20	1.60	0.50	1.37
写10 12	石鏃	IV-2	流紋岩	2.08	1.51	0.31	0.61
写10 13	石鏃	IV-2	メノウ	1.93	1.42	0.25	0.55
写10 14	石鏃	IV-2	流紋岩	1.97	1.39	0.45	0.86
写10 15	石鏃	IV-2	流紋岩	2.01	(1.45)	0.42	0.77
写10 16	石鏃	IV-3	珪質頁岩	1.50	0.80	0.24	0.20
写10 17	石鏃	IV-3	流紋岩	(2.43)	1.12	0.31	0.60
写10 18	石鏃	IV-3	流紋岩	1.79	1.17	0.25	0.35
写10 19	石鏃	IV-4	珪質頁岩	(2.20)	2.00	0.40	0.97
写10 20	石鏃	IV-4	流紋岩	2.41	1.72	0.26	0.74
写10 21	石鏃	IV-5	珪質頁岩	1.80	1.34	0.28	0.62
写10 22	石鏃	IV-5	流紋岩	1.74	1.22	0.37	0.57
写10 23	石鏃	IV-5	流紋岩	(1.65)	1.28	0.20	0.45
写11 1	石鏃	IV-6	珪質頁岩	1.87	1.29	0.38	0.61
写11 2	石鏃	IV-6	流紋岩	(1.51)	1.39	0.39	0.48
写11 3	石鏃	IV-6	チャート	1.64	1.43	0.28	0.49
写11 4	石鏃	IV-8	流紋岩	1.21	1.09	0.21	0.19
写11 5	石鏃	IV-9	流紋岩	1.65	1.18	0.37	0.58
写11 6	石鏃	V-1	安山岩	2.64	1.80	0.41	1.09
写11 7	石鏃	V-1	流紋岩	1.99	1.41	0.47	0.89
写11 8	石鏃	V-1	流紋岩	(1.80)	1.30	0.50	0.84
写11 9	石鏃	V-1	石英	2.50	1.40	0.50	1.41
写11 10	石鏃	V-1	流紋岩	(1.80)	(1.20)	0.40	0.50
写11 11	石鏃	V-1	流紋岩	2.02	1.39	0.62	1.67
写11 12	石鏃	V-1	流紋岩	1.37	1.12	0.37	0.53
写11 13	石鏃	V-1	石英	(1.50)	1.20	0.30	0.40
写11 14	石鏃	V-1	チャート	(2.03)	1.44	0.42	1.14
写11 15	石鏃	V-1	流紋岩	2.25	1.72	0.37	1.00
写11 16	石鏃	V-1	流紋岩	2.50	1.40	0.60	1.08
写11 17	石鏃	V-1	流紋岩	2.22	1.82	0.55	1.59
写11 18	石鏃	V-1	流紋岩	(1.95)	1.85	0.59	1.51
写11 19	石鏃	V-1	石英	1.70	1.20	0.50	0.81
写11 20	石鏃	V-1	流紋岩	1.50	1.40	0.60	0.76
写11 21	石鏃	V-1	メノウ	2.30	1.70	0.80	2.46
写11 22	石鏃	V-2	流紋岩	2.90	1.40	0.50	1.93
写12 1	尖頭器		流紋岩	(2.20)	(2.40)	0.60	1.83
写12 2	石錐		チャート	(1.24)	1.09	0.34	0.44
写12 3	石錐		鉄石英	(1.30)	1.40	0.30	0.59
写12 4	石錐		珪質頁岩	(2.40)	(1.60)	0.70	2.54
写12 5	石錐		珪質頁岩	3.85	1.60	11.70	4.53
写12 6	石錐		珪質頁岩	(4.20)	1.50	0.80	4.66
写12 7	石錐		鉄石英	2.20	0.70	0.40	0.54
写12 8	石錐		鉄石英	1.60	0.60	0.30	0.30
写12 9	石錐		チャート	2.00	0.50	0.30	0.39
写12 10	石錐		チャート	2.00	(1.42)	0.57	1.05
写12 11	石錐		珪質頁岩	1.96	1.78	0.66	1.59
写12 12	石錐		鉄石英	1.58	1.49	0.38	0.61
写12 13	石錐		流紋岩	2.30	1.80	0.70	1.61
写12 14	石錐		チャート	(1.77)	1.83	0.49	0.93
写12 15	石錐		珪質頁岩	(1.60)	1.00	0.30	0.30
写12 16	石錐		珪質頁岩	(2.10)	1.30	0.40	0.68
写12 17	石錐		珪質頁岩	(1.61)	1.60	0.39	0.59
写12 18	石錐		石英	(1.60)	1.50	0.40	0.80
写12 19	石錐		チャート	(1.90)	2.10	0.60	1.63
写12 20	石錐		珪質頁岩	(2.10)	1.60	0.60	1.37
写12 21	石錐		チャート	3.10	1.80	0.50	1.81
写12 22	石錐		チャート	(2.80)	1.50	0.30	0.72
写12 23	石錐		流紋岩	1.60	1.50	0.30	0.56
写12 24	石錐		珪質頁岩	1.58	1.32	0.47	0.77
写12 25	石錐		メノウ	1.97	1.47	0.64	1.43
写12 26	石錐		鉄石英	(2.20)	1.60	0.90	2.57
写12 27	石錐		チャート	(2.32)	1.38	0.42	1.19

写真枝No.	器種名	分類	石質	最大長	最大幅	最大厚	重さ
写13 1	石槍		流紋岩	3.59	1.20	0.78	3.24
写13 2	石槍		珪質頁岩	5.10	1.50	0.90	7.26
写13 3	削器		鉄石英	2.70	3.20	0.90	8.50
写13 4	削器		珪質頁岩	3.50	2.80	0.70	7.32
写13 5	石匙		鉄石英	2.60	1.90	0.40	1.13
写13 6	搔器		チャート	2.80	2.70	1.10	8.48
写13 7	搔器		チャート	2.60	4.10	1.20	11.99
写13 8	搔器		鉄石英	3.30	2.70	1.00	10.04
写13 9	搔器		鉄石英	3.40	2.80	1.00	7.92
写13 10	搔器		チャート	3.10	3.50	0.90	10.31
写13 11	搔器		玉髓	3.90	3.40	1.20	16.59
写13 12	搔器		鉄石英	3.70	2.90	1.20	11.37
写13 13	搔器		チャート	4.00	2.50	1.20	10.65
写13 14	削器		チャート	2.20	1.50	0.50	2.15
写13 15	削器		チャート	2.40	1.70	0.90	3.82
写13 16	搔器		黒曜石	1.20	1.30	0.50	0.74
写13 17	搔器		鉄石英	1.30	1.00	0.40	0.49
写13 18	搔器		チャート	1.71	1.46	0.56	1.65
写13 19	搔器		黒曜石	1.50	1.30	0.50	0.73
写13 20	搔器		鉄石英	1.40	1.70	0.30	1.05
写13 21	削器		鉄石英	1.70	2.40	0.30	1.32
写13 22	搔器		鉄石英	4.37	2.68	1.46	14.90
写13 23	搔器		チャート	2.00	1.30	0.50	1.44
写13 24	搔器		メノウ	1.90	2.00	0.90	4.07
写13 25	搔器		珪質頁岩	2.30	2.00	0.80	3.53
写13 26	磨製石斧		蛇紋岩	(4.35)	2.67	1.13	24.72
写13 27	磨製石斧		珪質頁岩	(4.30)	(3.30)	1.20	18.89
写14 1	磨製石斧		砂岩	7.40	4.60	2.50	143.48
写14 2		M.F.	珪質頁岩	3.17	1.50	0.62	3.01
写14 3		M.F.	珪質頁岩	5.89	4.17	1.42	39.11
写14 4		M.F.	珪質頁岩	(3.39)	4.18	0.63	6.84
写14 5		石錐	粘板岩	2.90	2.10	0.90	6.79
写14 6		块状耳飾	透綠閃石	(3.51)	(1.83)	(1.03)	8.26
写14 7		石刀	粘板岩	(3.67)	(2.15)	1.38	18.20
未掲載	石鏃	II-2	鉄石英	(1.58)	1.45	0.34	0.76
未掲載	石鏃	II-2	珪質頁岩	(1.92)	1.17	0.32	0.70
未掲載	石鏃	II-2	チャート	1.67	1.04	0.34	0.57
未掲載	石鏃	III-1	珪質頁岩	(1.83)	1.60	0.30	0.83
未掲載	石鏃	III-2	チャート	(1.26)	1.37	0.33	0.42
未掲載	石鏃	IV-2	鉄石英	(1.96)	(1.57)	0.38	0.86
未掲載	石鏃	IV-2	鉄石英	(2.09)	(1.27)	0.32	0.56
未掲載	石鏃	IV-2	メノウ	(1.84)	1.26	0.22	0.49
未掲載	石鏃	IV-3	チャート	(1.98)	(1.89)	0.27	0.62
未掲載	石鏃	IV-4	チャート	(2.18)	(1.54)	0.32	0.96
未掲載	石鏃	IV-4	鉄石英	(1.69)	(1.31)	0.38	0.61
未掲載	石鏃	IV-4	チャート	(1.77)	(1.24)	0.29	0.49
未掲載	石鏃	IV-4	珪質頁岩	(1.87)	(1.65)	0.32	0.64
未掲載	石鏃	IV-4	珪質頁岩	(1.15)	(1.22)	0.37	0.34
未掲載	石鏃	IV-4	黒曜石	(1.69)	(0.96)	0.37	0.42
未掲載	石鏃	IV-4	チャート	(1.27)	0.83	0.29	0.23
未掲載	石鏃	IV-5	鉄石英	(1.47)	(1.09)	0.32	0.46
未掲載	石鏃	IV-5	チャート	(1.74)	(1.16)	0.34	0.53
未掲載	石鏃	IV-7	黒曜石	(1.40)	(1.10)	0.20	0.22
未掲載	石鏃	IV-8	チャート	(1.30)	(1.30)	0.20	0.27
未掲載	石鏃	V-1	珪質頁岩	1.51	1.47	0.56	1.01
未掲載	石鏃	V-1	鉄石英	(1.65)	1.34	0.31	0.71
未掲載	石鏃	V-2	チャート	(2.59)	1.50	0.50	1.49
未掲載	石鏃	V-2	チャート	(1.63)	1.36	0.52	1.05
未掲載	石鏃	V-2	チャート	3.00	2.20	1.00	5.74
未掲載	石鏃	V-2	鉄石英	2.60	2.50	0.80	5.83
未掲載	石鏃	V-2	珪質頁岩	1.80	1.10	0.30	0.58
未掲載	石鏃	V-2	鉄石英	(1.92)	1.84	0.60	2.32
未掲載	石鏃	V-3	鉄石英	2.30	1.90	0.80	3.43

略号：M.F.（微細剥離のある剝片）

計測値の内、() 付の値は、欠損しているため、現存値を示す。

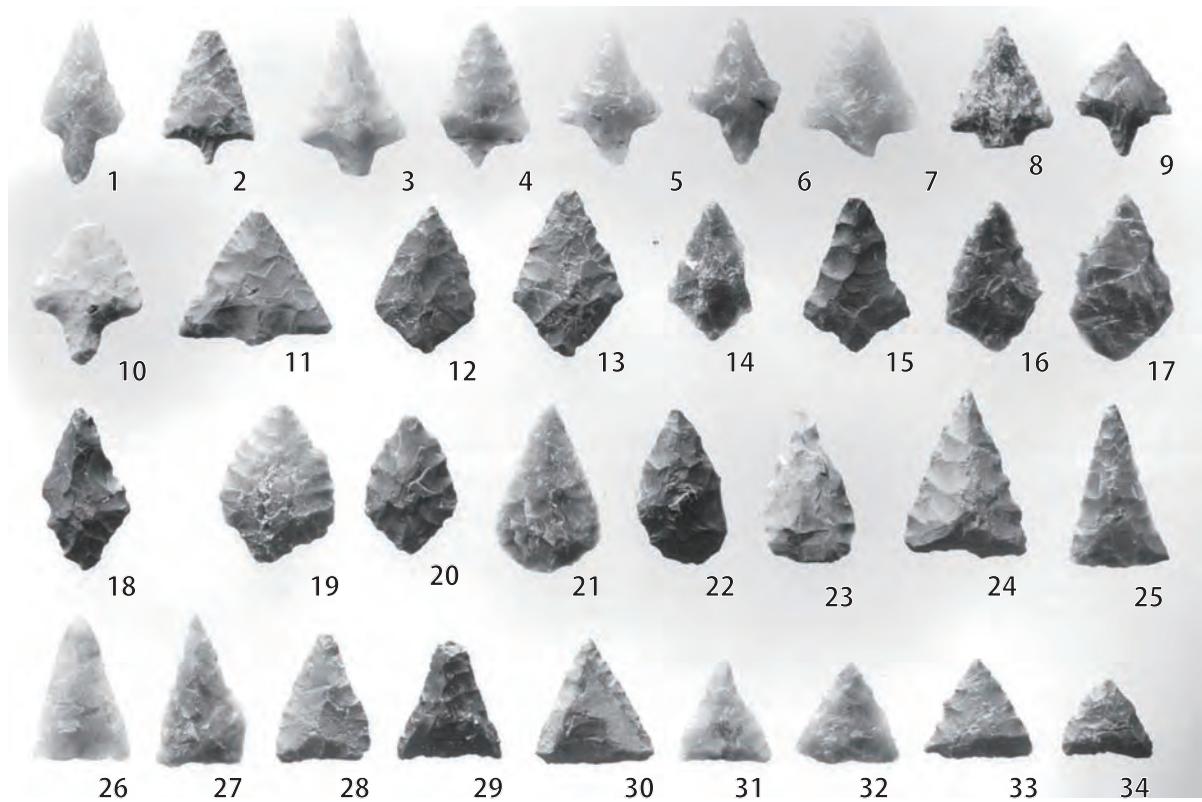


写真6 馬場前遺跡採集の石器（1）

（ほぼ実寸大）

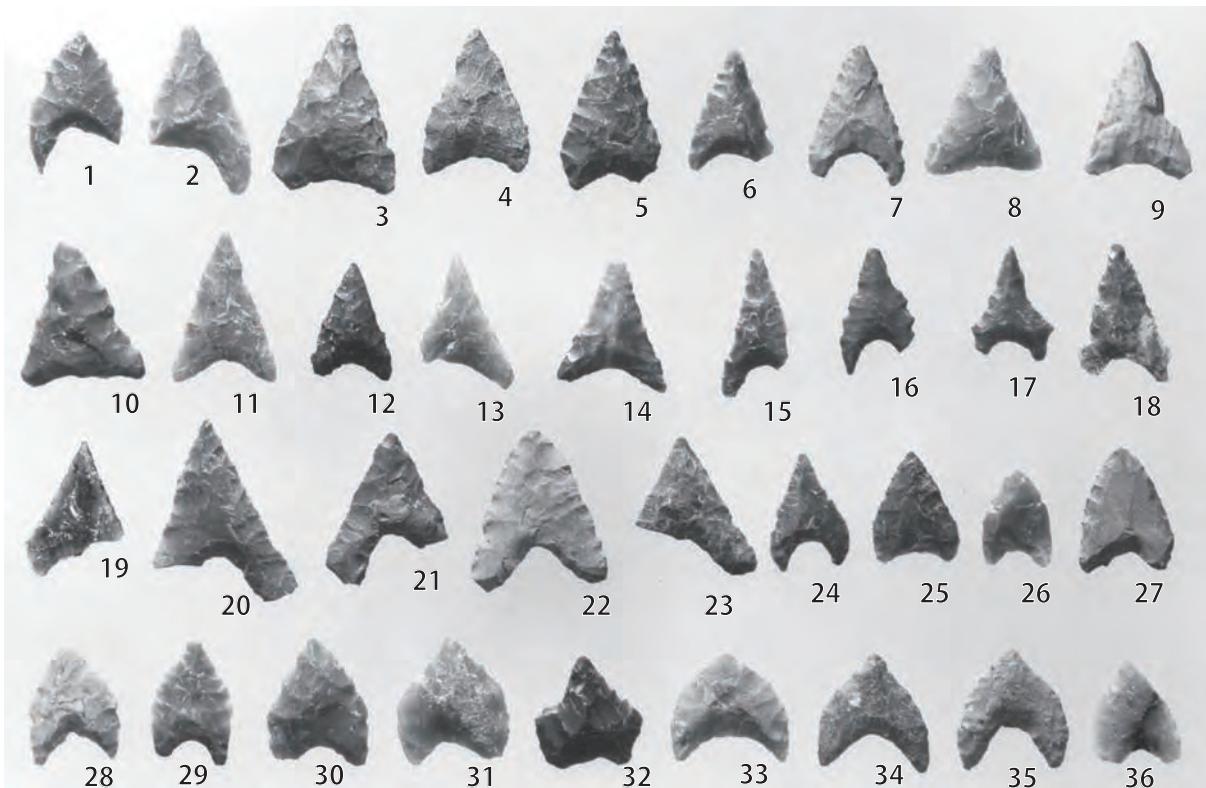


写真7 馬場前遺跡採集の石器（2）

（ほぼ実寸大）

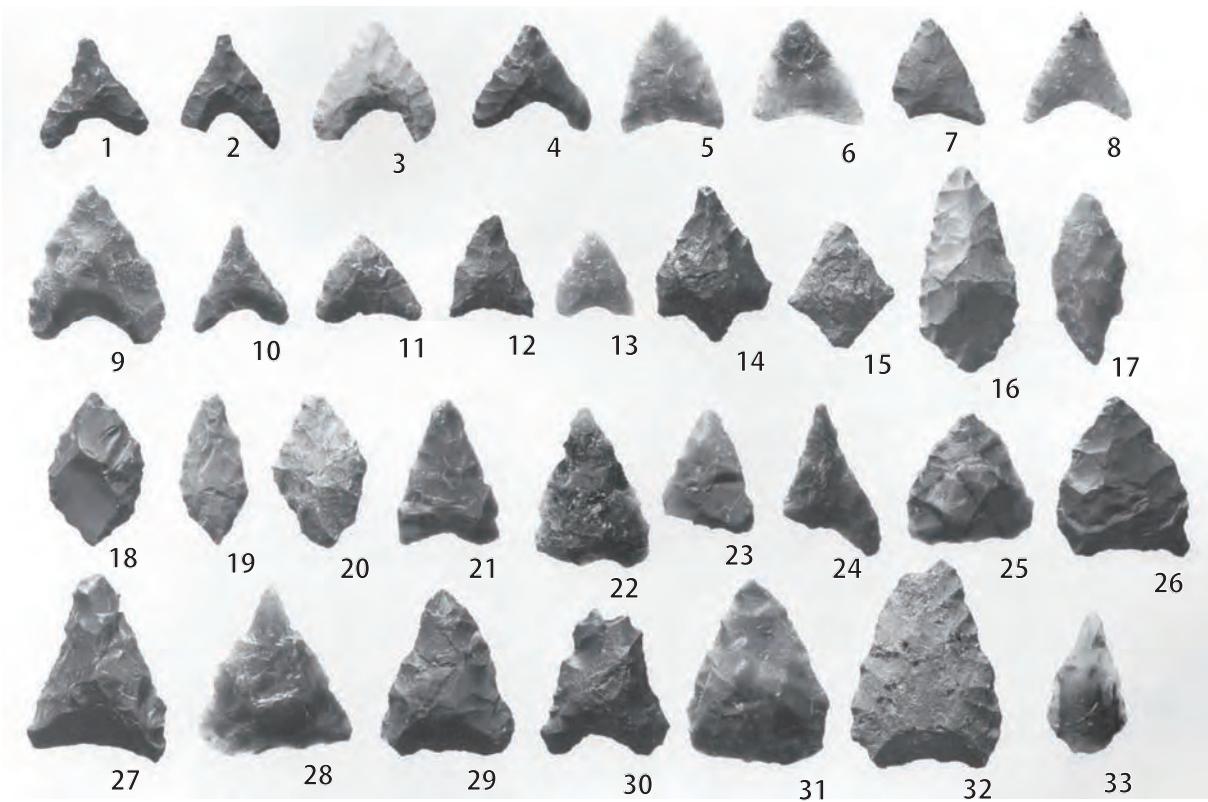


写真8 馬場前遺跡採集の石器（3）

（ほぼ実寸大）

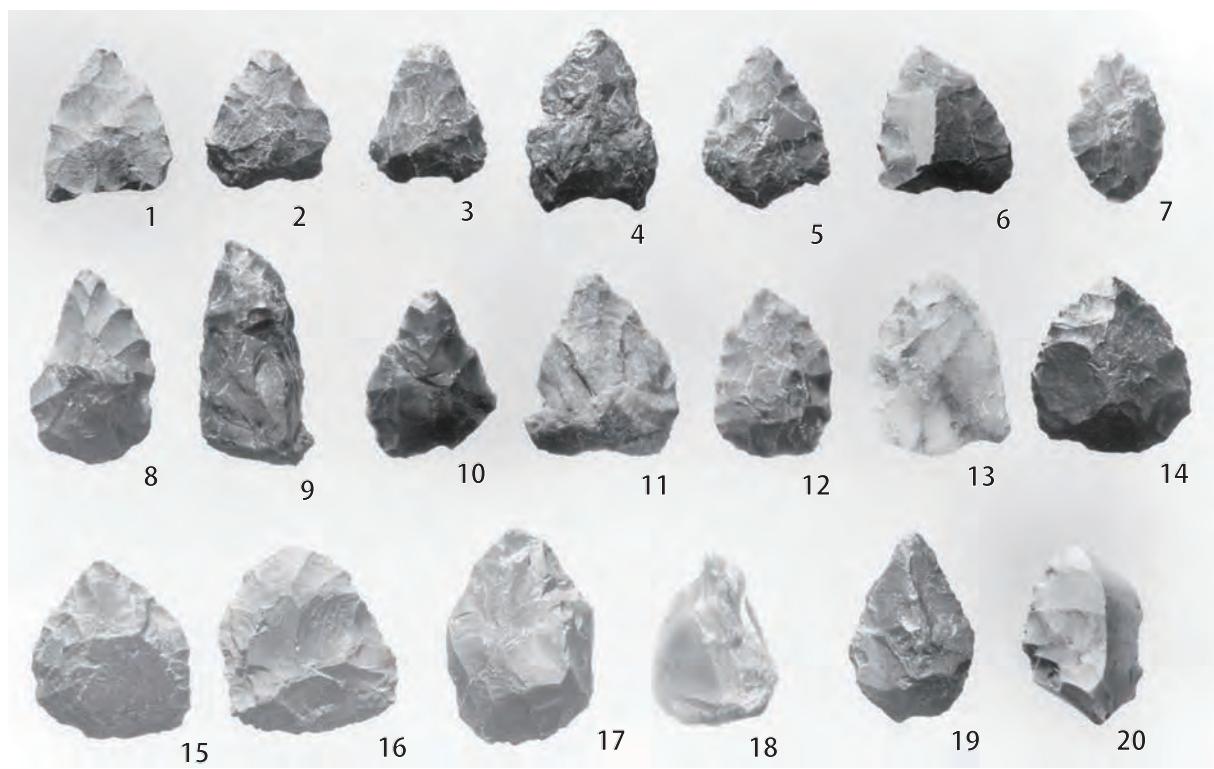


写真9 馬場前遺跡採集の石器（4）

（ほぼ実寸大）

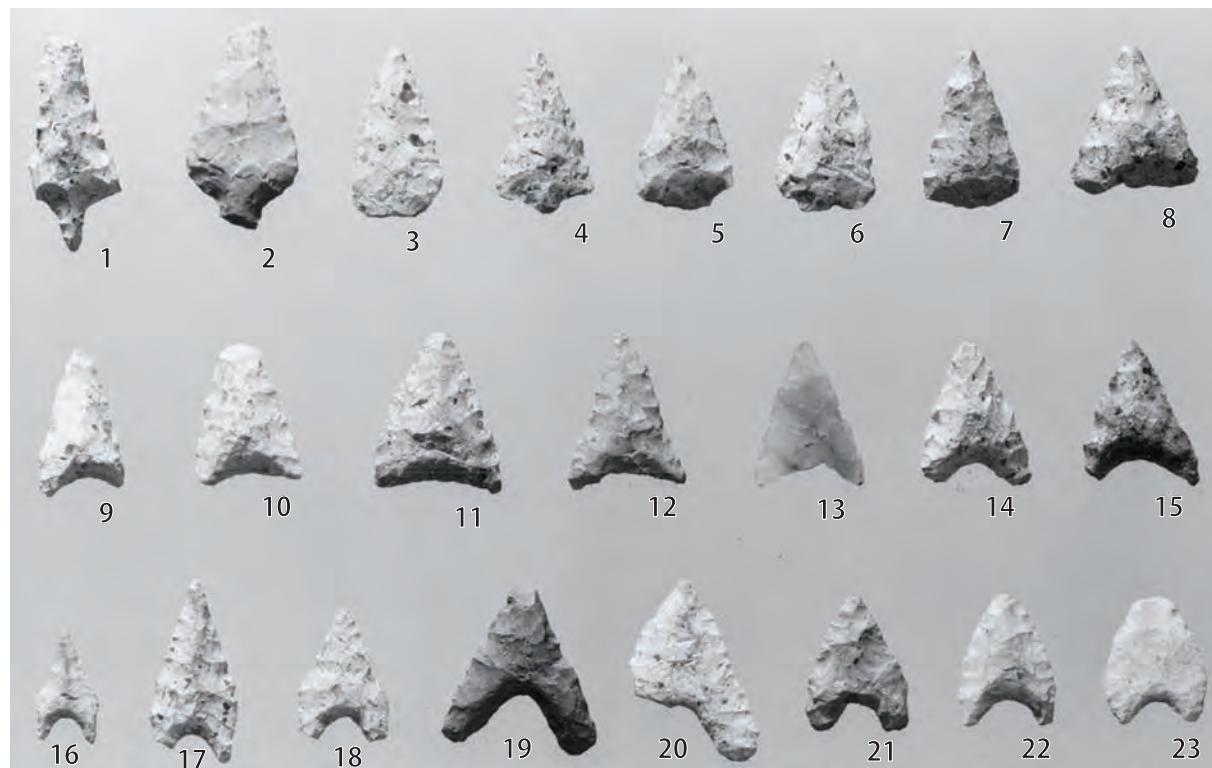


写真 10 馬場前遺跡採集の石器（5）

（ほぼ実寸大）

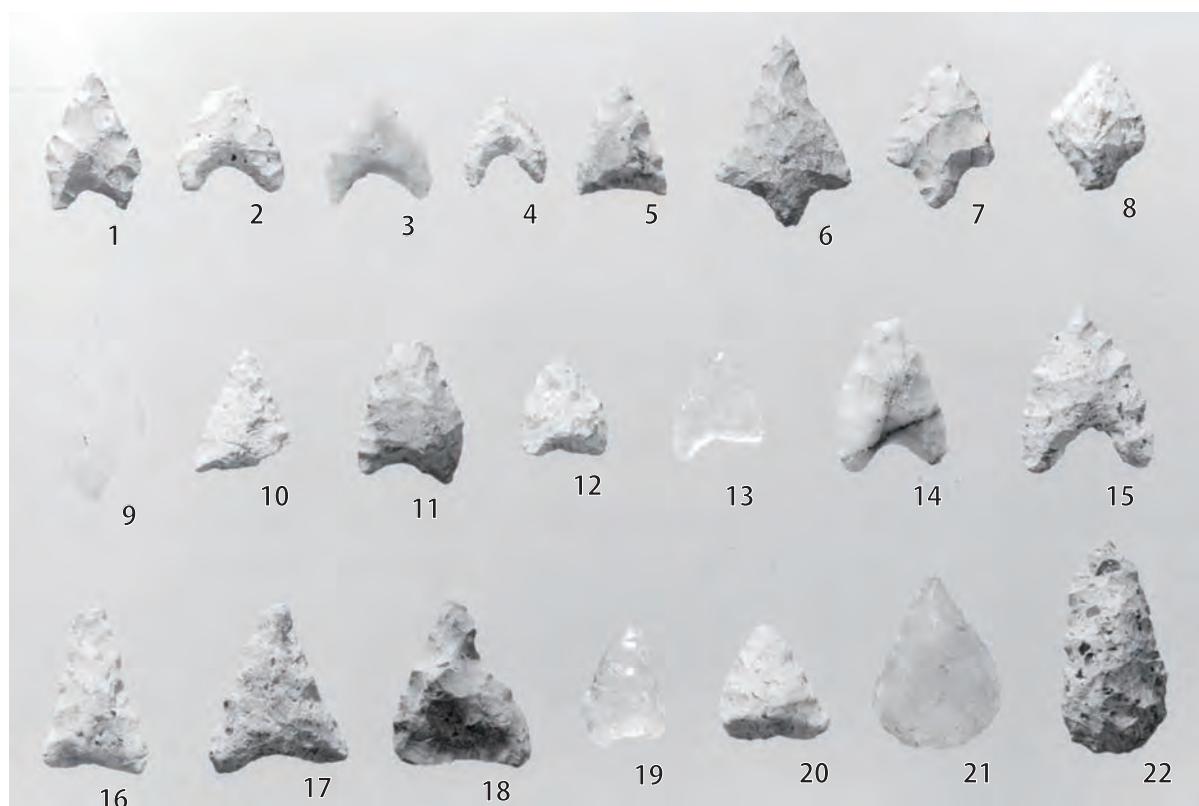


写真 11 馬場前遺跡採集の石器（6）

（ほぼ実寸大）

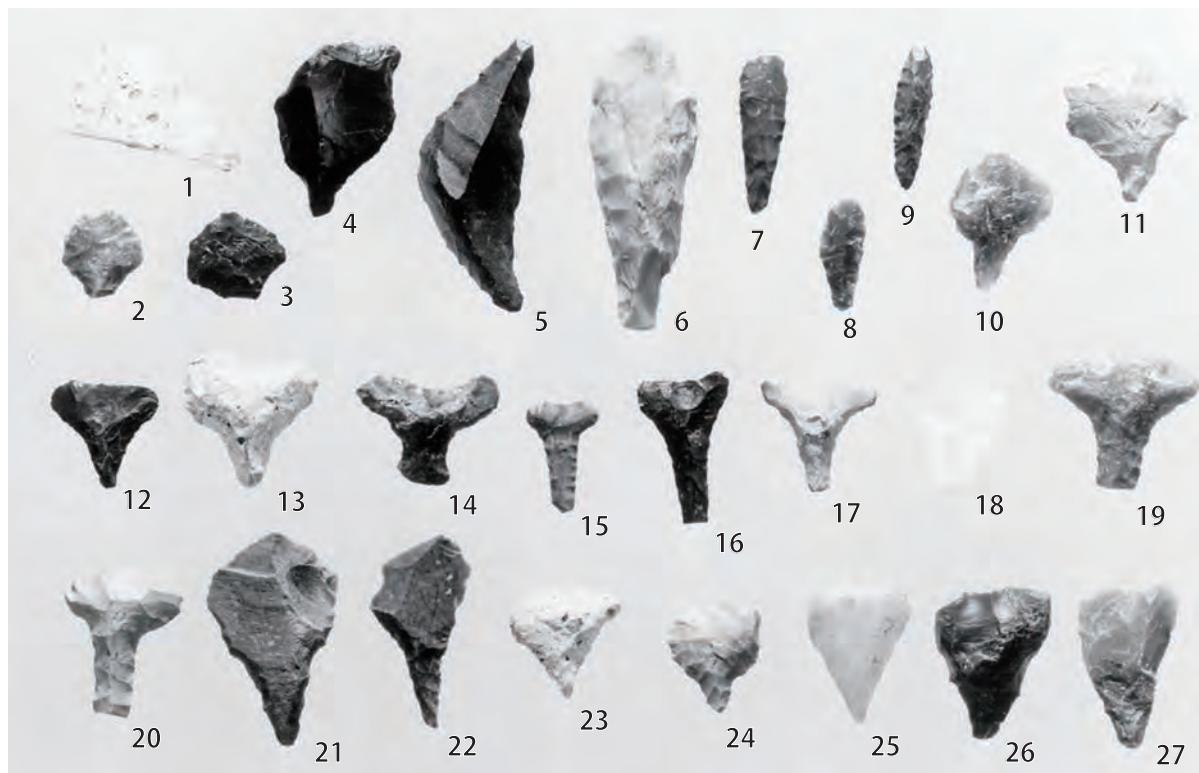


写真 12 馬場前遺跡採集の石器（7）

(ほぼ実寸大)

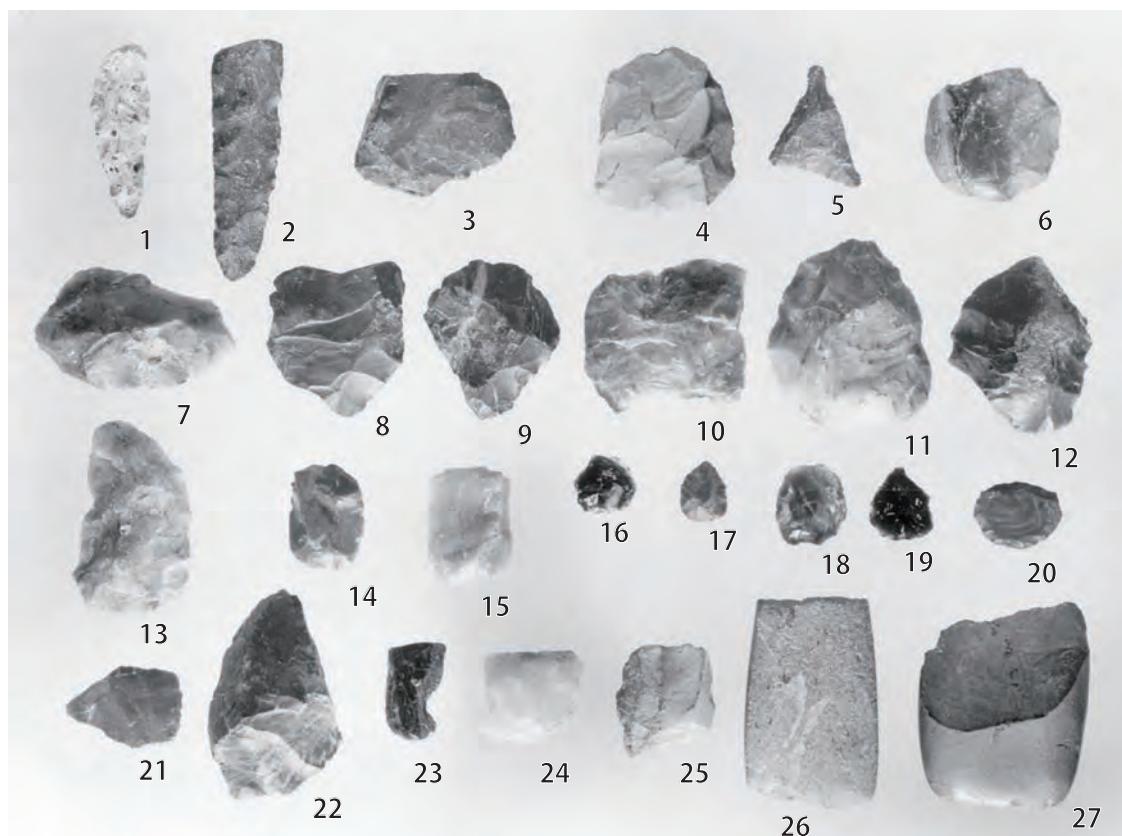


写真 13 馬場前遺跡採集の石器（8）

(S=約2/3)

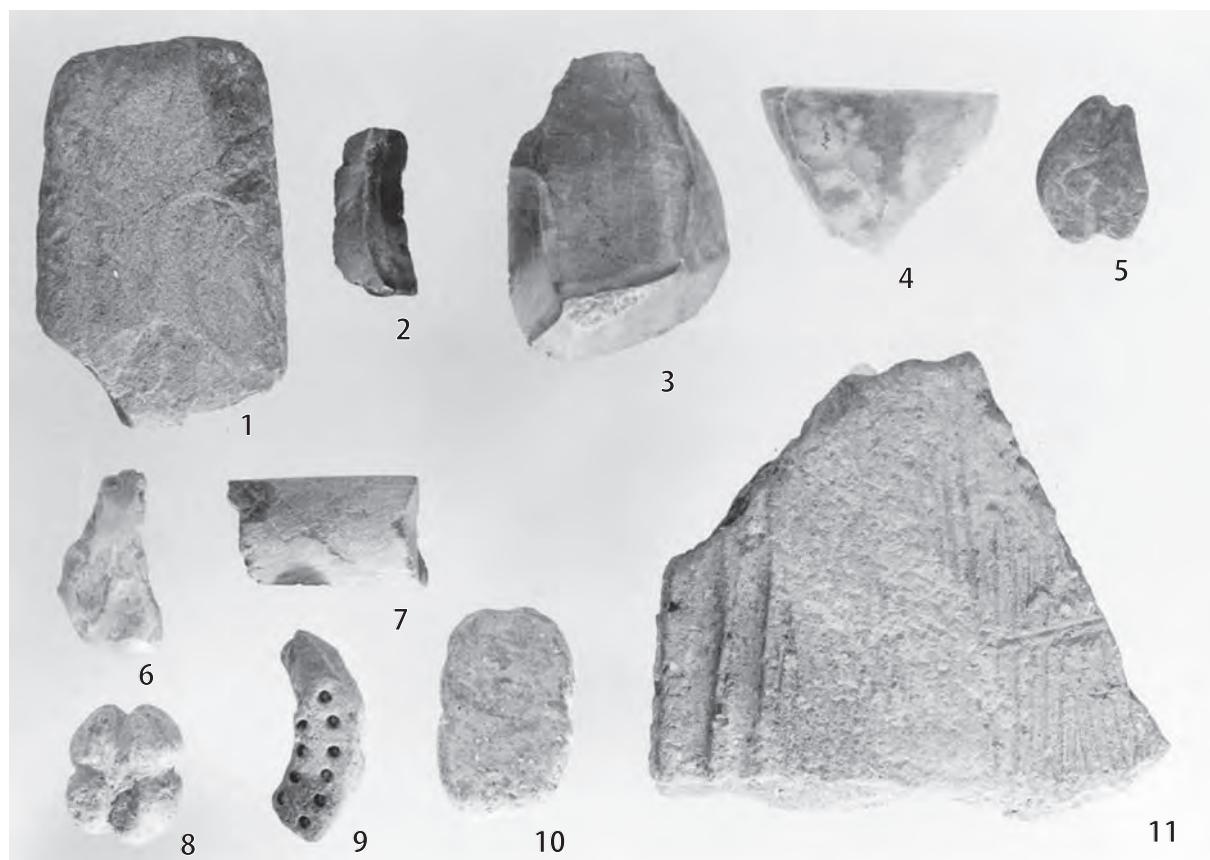


写真 14 馬場前遺跡採集の石器 (10)

(S=約2／3)

須賀川市高木遺跡の概要と出土金属製品について

鶴見 諒平

須賀川市高木遺跡は、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代、中世の複合遺跡で、各時代の居住域、耕作地、祭祀域などの景観を復元できる成果が得られている。平安時代の住居跡から出土した金属製品の一部に、保存処理後の形状と、保存処理前に作成された実測図の形状が異なっているものがあったため、再度実測を行った。

キーワード

須賀川市高木遺跡 平安時代 金属製品

1 はじめに

福島県文化財センター白河館（まほろん）は、福島県が主体となり発掘調査を行った遺跡の出土遺物を多く収蔵している。現在、その収蔵数は56,000箱を越え、その中には金属製品も多数含まれている。劣化が進行しないように保存処理が行われた木製品・金属製品等は特別収蔵庫で保管している。須賀川市高木遺跡から出土した金属製品等の出土遺物も2019年度に新たに白河館に収蔵された。

須賀川市高木遺跡の金属製品を確認したところ、報告書に掲載された保存処理が行われる前に作成された実測図と、保存処理後の資料の形状が異なるものがあることがわかった。

本報告は、高木遺跡の概要を紹介した上で、再実測を行った金属製品の写真・図および所見を速報するものである。

2 須賀川市高木遺跡について

高木遺跡は、須賀川市浜尾字高木に所在する。遺跡は、阿武隈川左岸の浜尾遊水地内に所在している。その浜尾遊水地の機能強化のための工事に先立ち、2015年～2017年の3年間にわたって発掘調査が行われた。発掘調査の成果をまとめた報告書は2019年に刊行され（福島県教育委員会ほか2019）、出土遺物は現在、福島県文化財センター白河館に収蔵されている。

遺跡からは、複数時期の遺構・遺物が確認された。各時代豊富な遺物が出土しており、報告書に図が掲載された遺物だけでも約 130 箱分に及ぶ。以下、遺跡を時期ごとに簡単にまとめて紹介する。

(1) 弥生時代後期

弥生時代では後期の遺構・遺物が確認されている。出土した遺物から、遺構は弥生時代後期終末頃のものが中心と考えられる。特筆されるのは、竪穴住居跡が34軒検出されたことである。福島県内では、弥生時代の竪穴住居跡がまとまって確認された事例は少なく、弥生時代の集落の様相がこれまでほとんど把握されていなかった。

竪穴住居跡から出土した多数の弥生土器の一部については、レプリカ法による種子圧痕分析を実施した。その結果、イネの圧痕が見つかっているが、調査区内からは同時期の水田や畑などは見つかっていない。

(2) 古墳時代前期

古墳時代前期は、最も多くの遺構が確認された時期である。確認した竪穴住居跡 112 軒という数字は、福島県の古墳時代前期集落の中でも多い方であ



第1図 高木遺跡の位置と周辺の遺跡

る。

遺構内外からは、古墳時代前期でも早い段階の土師器が大量に出土している。その中でも特徴的なのは甕で、東北地方南部ではほとんど出土しない台付甕が、平底甕に匹敵する数量出土している。また、「S」字口縁甕、結合器台、多孔の有孔鉢などが出士していて、こちらも東北地方南部ではあまり類例のない器種である。これらは関東地方の組成や技術の影響を受けた土器群と考えられている。今後、この土器群の研究の進展により、中通り地方の古墳時代開始期における地域間関係の理解が深化することが期待される。

また、レプリカ法による土器についての種子圧痕の分析では、多くのイネの圧痕が見つかっているほか、105号住居跡からは炭化したイネやオニグルミも出土している。

この他の特徴的な遺物では、鉄鎌、鉄鎌、刀子などの金属製品、横柾状の土製品などが出土している。

この時期には集落に隣接した場所に畑跡も確認されている。畑の傍からは、底部を穿孔した壺や合わせ口にした土器が置かれている箇所があり、畑の傍で何らかの祭祀が行われていた可能性が指摘されている。

(4) 古墳時代後期

古墳時代後期では、堅穴住居跡28軒のほか、畑跡や溝跡、祭祀跡が確認されている。住居跡から出土した土師器は後期前半の舞台式期に位置づけられ、その時期の集落であることが判明している。

堅穴住居跡の中には、カマドの廃絶時に祭祀行為が行われたと考えられるものも確認されている。特に、69号住居跡では鏃状の土製品が燃焼部に突き立てられた状態で見つかっている。この時期にも畑跡が確認されているが、居住域とは離れた場所で確認されている。何を耕作していたかは明らかになっていないが、レプリカ法による土器に残った種子圧痕の分析ではイネ・エゴマの痕跡が確認されている。

また、居住域から離れた箇所には土器を集積した祭祀跡が2か所あり、集落内における祭祀の痕跡と推定されている。

(5) 奈良時代

確認された奈良時代の主な遺構は、堅穴住居跡8軒、掘立柱建物跡7棟などである。掘立柱建物は小規模なものが多く、倉庫や作業小屋の機能が想定されている。

この時期の畑跡も確認されている。畑に沿うように柱列跡が確認されたため、畑の周りに柵や垣などが巡っていた可能性がある。畑で栽培した作物は不明であるものの、出土した土器の表面に残った圧痕の分析ではイネの痕跡が見つかっている。

(6) 平安時代

平安時代は、堅穴住居跡47軒、掘立柱建物跡8棟、畑跡などが確認されている。堅穴住居跡からは、9世紀前半代を中心とした土器類が多く出土している。奈良～平安時代と継続して集落が営まれていたとみられている。

金属製品も多く出土しており、鋳の下に糸の痕跡が残った紡錘車が出土したことは特筆される。

(7) 中世

中世では掘立柱建物跡、柱列、井戸跡、方形区画遺構などからなる集落跡が確認されている。出土した陶器から、集落跡は13～14世紀前後と、それ以後の時期に分かれる可能性が指摘されている。

集落跡では井戸跡と考えられる土坑が多く確認されていて、その中でも76号土坑からは多くの植物種子が出土している。種子には、スマモ、イネ他、多くの栽培植物や野生植物の種子が含まれており、周辺環境や食糧とした植物などの情報も得られている。

小結

以上のように、須賀川市高木遺跡では弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が確認された。

遺跡は、阿武隈川の氾濫による砂層で何層にも覆われていて、各時代の遺構の検出層は、異なる層である場合が多かった。そのため、層位の区別によって、ある程度明瞭に各時期の遺構を把握できる環境であった。それにより、各時代ごとの堅穴住居跡や

土器などの情報に加え、集落とそれに伴う耕作地、祭祀の場といった集落景観を復元し得るようになつたのは大きな成果だろう。

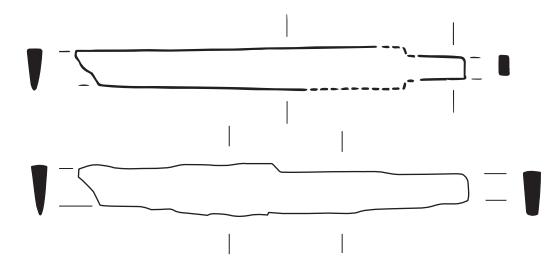
3 再実測を行つた遺物について

報告書には、計25点の金属製品の図が掲載されているが、それらの資料は全て保存処理が行われた状態で白河館に収蔵されている。

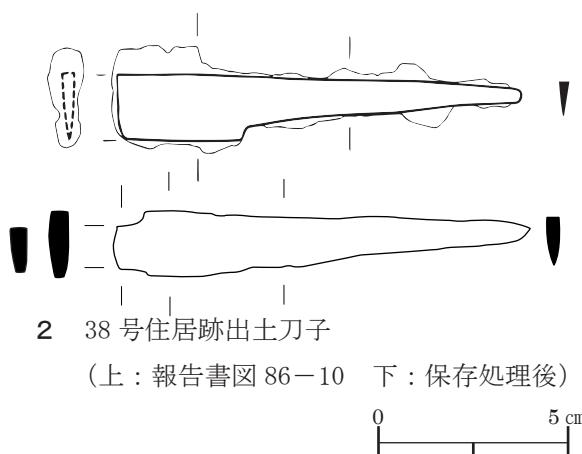
保存処理前の資料、特に鉄製品は鋳に覆われた状態であったため、もともとの資料の形状がわからぬいものが大半であった。そのため、実測に際しては、資料のX線写真を撮影し、その写真からもともとの形状が残っている部分を判断して、実測が行われた。資料の保存処理はその後に行われている。

保存処理は業者に委託して行われた。その際、再度X線写真撮影が行われ、X線写真から判明した形状になるように資料を覆っていた鋳が落とされ、その後、保存処理がなされている。

保存処理は、脱塩処理後、樹脂を含浸させ、欠損があるもの・接合が必要なものは、接合と樹脂の充填が行われるという工程で行われた。



1 37号住居跡出土刀子
(上：報告書図 83-4 下：保存処理後)



第2図 37・38号住居跡出土刀子

今回の再実測は、保存処理後の資料の形状と、保存処理時のX線写真の観察をもとに行っている。再実測を行つたのは、37号住居跡出土刀子(報告書83図4)と38号住居跡出土刀子(報告書86図10)の計2点である。

37・38号住居跡ともにカマドを持つ竪穴住居跡で、出土したロクロ成形の土師器杯などから、9世紀前半代の住居跡と考えられる。今回再実測を行つた刀子も同時代のものと考えられる。

(1) 37号住居跡刀子(第2図-1、写真1)

第2図-1は鉄製の刀子である。

本資料は2片に分かれて出土した。保存処理時に2片が接合され、剥がれ落ちた小片も可能な限り接合されている。

保存処理前の資料は鋳に覆われていて、刀身部と茎部の境にある区(まち)が肉眼では観察できない状態であった。報告書に掲載された図では、刀身部が長く、茎部は短い形状のものとして表現されている。

保存処理時に撮影されたX線写真を観察すると、報告書の図とは異なる位置に区が確認できる。保存処理時のX線写真では、資料の中央部付近に峰側の区が観察でき、刃側は破片の接点にあたる箇所のためわかりにくいが、同じ位置に区があることが確認できる。

資料は刀身部の先端、茎部の先端部が欠損している。残存長は10.3cm、刀身部の長さは5.7cm、幅は1.4cm、茎の残存長は4.6cm、幅は1.1cmである。

峰側の区は明瞭に観察できるが、刃側は峰側に比べ区が短い。これは使用後の砥ぎ減り等により刃先が減ったことによるものと推定する。

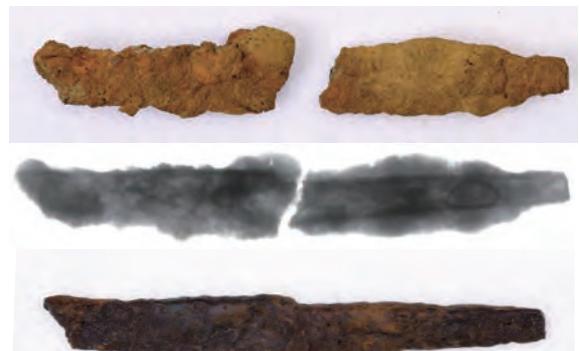


写真1 37号住居跡出土刀子

(上：保存処理前 中：X線写真 下：保存処理後)

(2) 38号住居跡出土刀子(図2-2、写真2)

図2-2は鉄製の刀子である。

本資料は2片に分かれて出土したため、保存処理時に接合されている。保存処理前は刃部と茎部の境目が特に厚く鏽で覆わっていたため、肉眼では区が観察できなかった。報告書に掲載された図では、細い箇所が刀子の柄とされている。一方で、保存処理時のX線写真を見ると、鏽が厚かった部分で区を観察することができた。また、保存処理後の資料の観察では、幅が狭く細い箇所の断面形が逆三角形であることから、その箇所が刃部であると判断できる。

資料は茎部の大半が欠損している。残存している長さは11.0cm、刃部長さ10.1cm、刃部幅最大1.8cmである。茎部から切っ先に近づくにつれて刃部幅が狭くなる。この形状は刃先が研ぎ減りしたことを反映したものと推定する。刃部と茎部の境には両側に区があり、茎の部分は幅が狭くなっている。茎部の残存している長さは0.9cm、幅は最大1.1cmである。



写真2 38号住居跡出土刀子

(上：保存処理前 中：X線写真 下：保存処理後)

4 おわりに

以上、須賀川市高木遺跡の概要と、出土した鉄製品の再実測成果を報告した。

今回報告したのは平安時代の竪穴住居跡から出土した鉄製品だが、前述したように、古墳時代前期や奈良・平安時代の鉄製品も出土している。特に古墳時代前期の住居跡である152号住居跡・216号住居跡から出した鉄鎌・鉄鎌は、福島県内では数少ない、

古墳以外から出土した前期の鉄製品である。また、平安時代の30号住居跡から出土した鉄製紡錘車には軸に鏽化した糸の痕跡が残存しているなど、新たな知見を得られたものも含まれている。

須賀川市高木遺跡は、様々な時期の遺構・遺物が見つかり、多くの成果が得られた遺跡である。しかし、報告書の刊行から日が浅く、その内容は、まだ広く知られているには至っていない。今後、その調査成果から多くのことが解明されることが期待される。

また、出土した弥生土器や土師器、特に古墳時代前期の土師器は今後の研究において重要な資料となりうるものである。

白河館においても、須賀川市高木遺跡の遺物は今後展示する機会も多くあると考えている。調査成果から様々なことを明らかにしていくことについては、その機会の課題としたい。

【引用参考文献】

福島県教育委員会ほか 2019「高木遺跡」『阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告』

福島県文化財センター白河館収蔵資料の紹介

—檜葉町鍛冶屋遺跡出土 和鏡—

阿部 知己

要旨

白河館に収蔵される資料のうち、双葉郡檜葉町鍛冶屋遺跡から出土した和鏡について紹介する。

キーワード

蓬萊鏡 室町時代前期

1 はじめに

福島県双葉郡楢葉町鍛冶屋遺跡出土の銅鏡は、2000年に実施された発掘調査後、和鏡の写真（X線写真を含む）、そして出土状況等が報告書に掲載されたのみであったため、今回鏡を実測し、改めて報告する。

2 遺跡紹介

鍛冶屋遺跡は、福島県檜葉町大字上小塙字鍛冶屋ほかに所在する。常磐自動車道の建設に伴い平成10～12(1998～2000)年の3か年にわたり、21,000m²を対象とする発掘調査がすすめられた。

鍛治屋遺跡は、東流する木戸川の南岸、標高約48 m前後の段丘上に位置している。東西に延びる段丘上には、今回紹介する鍛治屋遺跡と、その北側に隣接して縄文時代中期の集落跡が主体となった馬場前遺跡が位置する。さらに、鍛治屋遺跡の南側、谷を挟み別の段丘の先端部には、14～16世紀代に築かれた城館跡、小塙城跡がある。

鍛冶屋遺跡での3か年の発掘調査の結果、128軒の住居跡(大半が奈良・平安時代の住居跡)、51棟の建物跡(大半が平安時代)、6基の鍛冶遺構(平安時代、中世以降)、2基の水場遺構(古代・中世)、2,300基を超える柱穴群(古代、中世以降)などが確認された。

3 和鏡の詳細

名 称 蓬萊鏡

法量 直径10.2cm、厚さ5mm、重さ90g

時代 鏡背の文様、鏡の大きさなどから判断し、室町時代前期のものと考えられる。

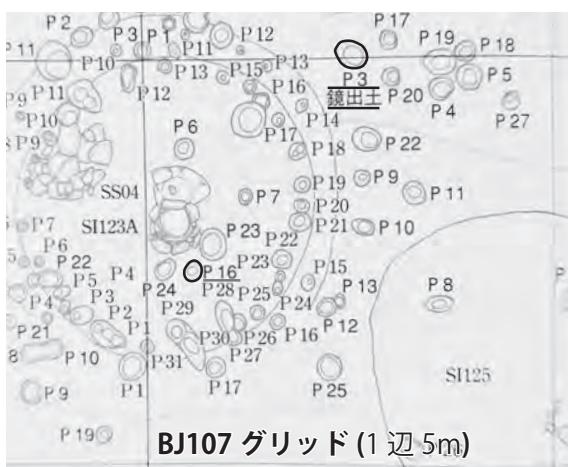
出土位置 遺跡南東側B J 107グリッド内の柱

穴(P 3)覆土内から出土している。柱穴(P 3)は、南側へ延びる緩い谷頭部に位置する。出土位置から南に小塙城跡を臨むことができる。ちなみに、鏡が出土した同じグリッド内で見つかった別の柱穴(P 16)の覆土からは13世紀後半から14世紀ごろの龍泉窯系青磁盤の小片が出土している。

出土遺構の規模等 平面形状は橢円形。規模は、長軸36cm、短軸35cm、深さ59cmを測る。



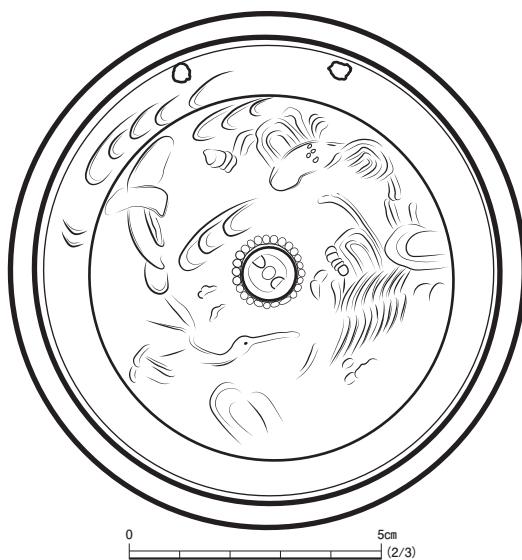
第1図 鍛冶屋遺跡と周辺遺跡



第2図 鏡出土位置



第3図 和鏡（1）



第4図 和鏡（2）

鏡出土状況 柱穴の底面から40cmほど上位から、鏡背を上に向けた状態で出土した。

鏡の特徴 鏡は、小型円形の銅鏡で、鏡背の文様は磨滅と腐食で判別が難しい。

第3図左の実測図を見ると、鈕(ちゅう)の右上部分、全体の5分の1ほどが約30度の角度で鏡背側に折れ曲がっている。

鈕の周りには、花芯を表現するように、小さな珠文を20数個配している。

縁の断面は、上端幅5mmほどの四角形。縁の内側は、低く細い線で区切られている。細線の外側の区画には、大きさの違う「し」字状の線を連続させ、

雲?を表現している。

外区の左上には、鏡製作後、3~4mmの不整形な穴を2個穿っている。このことから、鏡としての役割だけでなく、礼拝用などとして吊り下げられていた時期もあったことが分かる。

細線の内側の表現は、吊り下げ穴を上位にした状態(第4図)で見ると分かり易い。鏡の12時から3時までの間には、「匚」、「乚」などの線を複数用いて蓬莱山と見られる表現を施している。蓬莱山の真下には、「丨」、「し」字状の線を狭い間隔で連続させることで、水の流れと砂浜を表現している。鏡の6時から7時までの間には、一羽の鶴が右側の蓬莱山へと飛んでゆく姿が描かれている。

【引用参考文献】

財団法人福島県文化振興財団 2002「鍛冶屋遺跡（3次調査）」
『常磐自動車道遺跡調査報告28』

【図・写真】

図1・2 常磐自動車道遺跡調査報告28より抜粋。

図3・4 筆者が作図・撮影した。

材質調査の成果（I）

—資料の蛍光X線分析結果報告—

中尾 真梨子

要 旨

福島県文化財センター白河館では、適切な保管方法と保存処理方法を選定するため、資料の蛍光X線分析による材質調査を行っている。相馬市山田A遺跡出土取鍋3点、南相馬市割田H遺跡出土土師器1点、須賀川市早稲田古墳群出土鐸1点について蛍光X線分析を行ったところ、報告書に記載されていない事実等が判明した。山田A遺跡出土取鍋付着物3点からは、鉄と銅の元素が検出された。割田H遺跡出土土師器付着物は、定性分析の結果、鉄を多く含んだ物質であるとわかった。

本報告は、あくまで蛍光X線分析の結果を報告するものであり、資料の性格や製作技法については言及していない。

キーワード

蛍光X線分析 非破壊分析 材質調査

1 はじめに

福島県文化財センター白河館では、適切な保管方法と保存処理方法を選定するため、収蔵資料の蛍光X線分析による材質調査を行っている。

今回、相馬市山田A遺跡出土取鍋および南相馬市割田H遺跡出土土師器、須賀川市早稲田古墳群出土鐸について蛍光X線分析を行ったので、その結果を報告する。

2 調査資料

調査を行った資料は、相馬市山田A遺跡出土取鍋3点（挿図番号20図4、62図1、62図2）および南相馬市割田H遺跡出土土師器1点（挿図番号127図-1）、早稲田古墳群出土鐸1点（46図15墳17）である。いずれも、報告書作成時に蛍光X線分析による調査は行われなかった。以下、それぞれの資料について示す。

また、それぞれに試料番号を付けた（表1）。

(1) 山田A遺跡出土取鍋

山田A遺跡は、新地町から相馬市に広がる製鉄遺跡の一部で、獸脚鋳型等も出土しており、鉄物生産も行われていたと考えられている遺跡である。試料No.1は1号製鉄炉から、試料No.2、試料No.3は2号鋳造遺構から出土している。

今回分析を行った取鍋3点は、いずれも口縁部および内面に硬質黒色付着物が確認できる。これは、鉄を鋳型に流し込む際に付着したものではないかと報告書では推測されている。

付着物を顕微鏡で観察したところ、試料No.1および試料No.2において、緑青と推測される1mm～3mm程度の緑色付着物が確認できた。

今回の分析は、取鍋の硬質黒色付着物の測定を行った。

(2) 割田H遺跡出土土師器

割田H遺跡は、南相馬市割田地区に広がる8遺跡からなる平安時代の製鉄遺跡群のうちの一つである。

表1 試料番号

試料No.	報告書名	遺跡名	資料名	挿図番号
1	相馬開発関連遺跡調査報告V	山田A遺跡	取鍋	20図4
2	相馬開発関連遺跡調査報告V	山田A遺跡	取鍋	62図1
3	相馬開発関連遺跡調査報告V	山田A遺跡	取鍋	62図2
4	原町火力発電所関連遺跡調査報告10	割田H遺跡	土師器杯	127図1
5	母畠地区遺跡発掘調査IX	早稲田古墳群	鐸	46図15墳17

試料No.4の出土位置は堅穴住居跡のカマド左袖脇の底面であり、廃絶時に遺棄されたものとみられている。口縁部を下に伏せ、底面に密着した状態で発見されたため、祭祀の意味合いを持つのではないかと調査担当者の小暮氏は指摘している。

表面には無数の微細なひび割れが確認でき、内面のほぼ全体に黒色物質が付着している。この付着物は、報告書では樹脂状物質と記載されている。

今回の分析は、黒色付着物の測定を主に行った。

(3) 早稲田古墳出土鉄製鐸

早稲田古墳出土鉄製鐸は石室外の攪乱層から出土しており、平成14年の調査で象嵌技法が施されていることが判明した。調査の結果、鉄地有孔銀象嵌鐸であると報告されている（奥山2002）。

今回は、資料の現状を確認するため分析を行った。

3 分析条件

分析は、試料を採取せず、非破壊にて行った。分析に使用した機器は、文化財センター白河館に設置しているマイクロ蛍光X線分析装置(Bruker 製 TORNADO PLUS)である。

山田A遺跡出土取鍋および割田H遺跡出土土師器杯はいずれも碗状を呈しており、非破壊で分析が可能な口縁部の付着物を分析した。いずれの分析も表層の測定である。分析の条件は表1・2のとおり。

分析装置	“マイクロ蛍光X線分析装置 (Bruker 製 TORNADO PLUS)”
X線管球	Rh
測定雰囲気	大気
管電圧	50kv
管電流	300 μ A
測定時間	3.80 mm /s
フィルター	なし
スキャン回数	3回

表2 試料No.1～4分析条件

分析装置	“マイクロ蛍光X線分析装置 (Bruker 製 TORNADO PLUS)”
X線管球	Rh
測定雰囲気	真空
管電圧	50kv
管電流	300 μ A
測定時間	3.80 mm /s
フィルター	Al-12.5 μm
スキャン回数	3回

表3 試料No.5分析条件



写真1 蛍光X線分析装置

4 分析結果

(1) 山田A遺跡出土取鍋

試料No.1～3の蛍光X線スペクトル図を第2～4図に示す。各資料において測定が可能な口縁部2箇所を、約4～7mm四方の範囲でマッピング分析を行った。

分析の結果、主要な元素としてFe、Cuが検出された。これらの結果はあくまで分析箇所に限る。

(2) 割田H遺跡出土土師器

試料No.4は第6図のとおり、胎土と黒色付着物で明確に検出元素が異なる。測定可能な口縁部の黒色付着物の分析を行ったところ、黒色付着物からはFeが主に検出された(第7図)。

ただし、蛍光X線分析の結果だけで物質を特定することはできないため、今後調査を続ける方針である。

(3) 早稲田古墳出土鉄製鐸

試料No.5の蛍光X線スペクトル図を第7図に示す。

第8図のとおり、象嵌部分を避け約4mm×約4.5mmの範囲でマッピング分析を行った。O、S、Cl、Pb、Fe、Cuを指定し定量分析を行ったところ、Fe 68.0 wt%、O 25.1 wt%となり、他の元素はほぼ検出されなかった。

ただし、機器の検出限界以下の含有の可能性、および分析条件による検出の有無があるため、今後も調査を続ける方針である。

5 おわりに

今回の調査により、山田A遺跡出土取鍋3点の硬質黒色付着物は、鉄と銅の元素が検出された。また、割田H遺跡出土土師器付着物からは鉄が主に検出され、報告書記載時に想定していた有機質ではない可能性が高いことがわかった。

蛍光X線分析は、非破壊、非接触の元素分析が可能であり、考古資料の不明付着物の同定等に有意義な方法の一つであるといえる。

なお、本報告は蛍光X線分析による分析結果のみを示すものであり、今後製作技法や資料の性格等の検討を行う予定である。

【引用参考文献】

- 財団法人福島県文化センター 1982『国営総合農地開発事業母畠地区遺跡発掘調査報告9』
福島県教育委員会 1997『相馬開発関連遺跡調査報告V』
奥山誠義 2002「構造調査・クリーニングから得られた調査成果(Ⅰ)
- 金属質遺物の形状変更-」『福島県文化財センター白河館研究紀要』
財団法人福島県文化振興事業団 2007『原町火力発電所関連遺跡調査報告10』

（分析箇所をドットで示す）



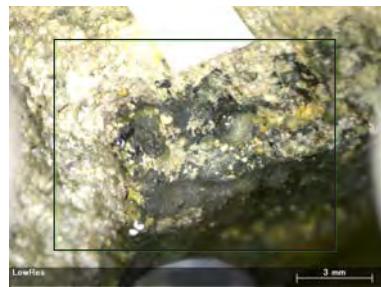
試料No.1



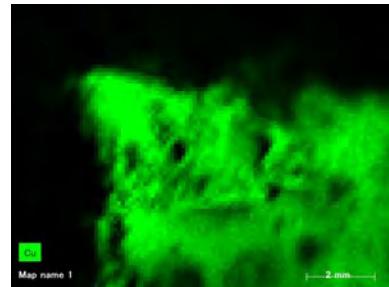
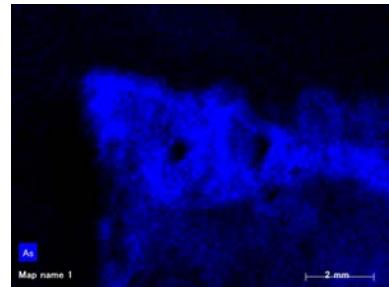
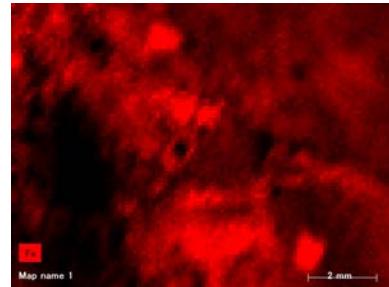
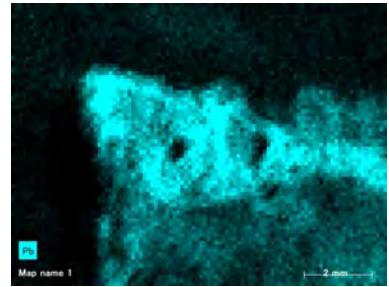
試料No.2



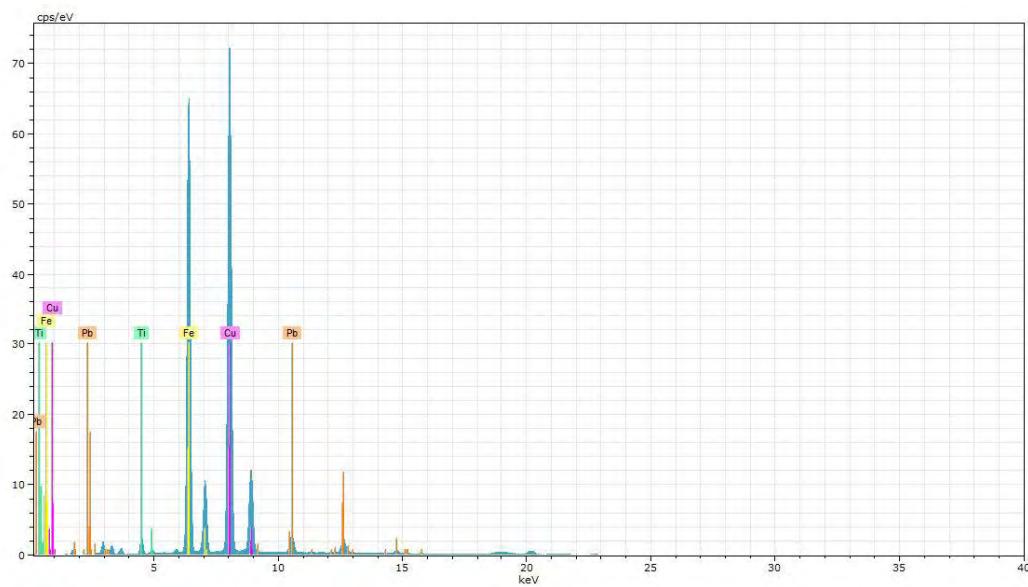
試料No.3



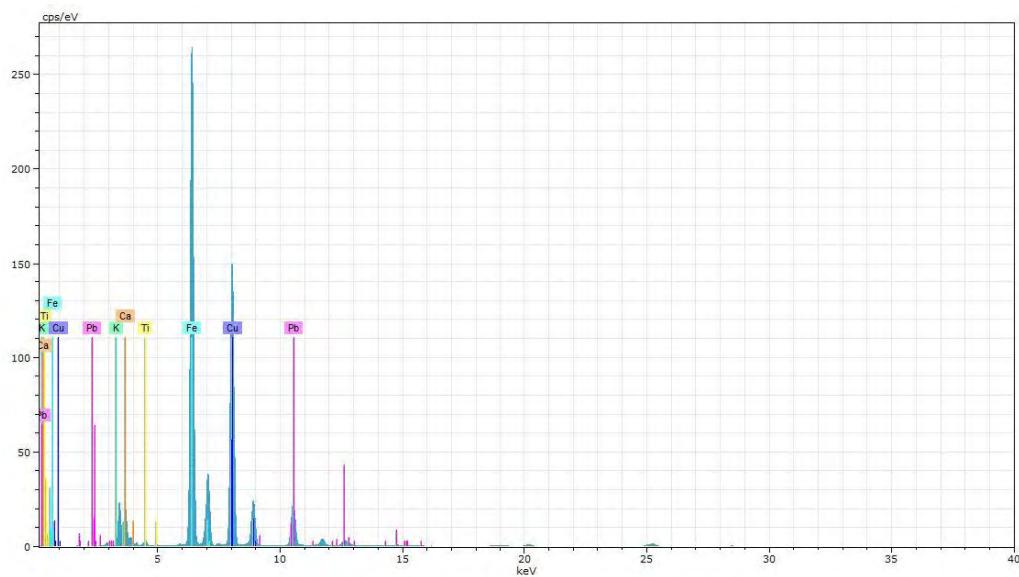
LowRes



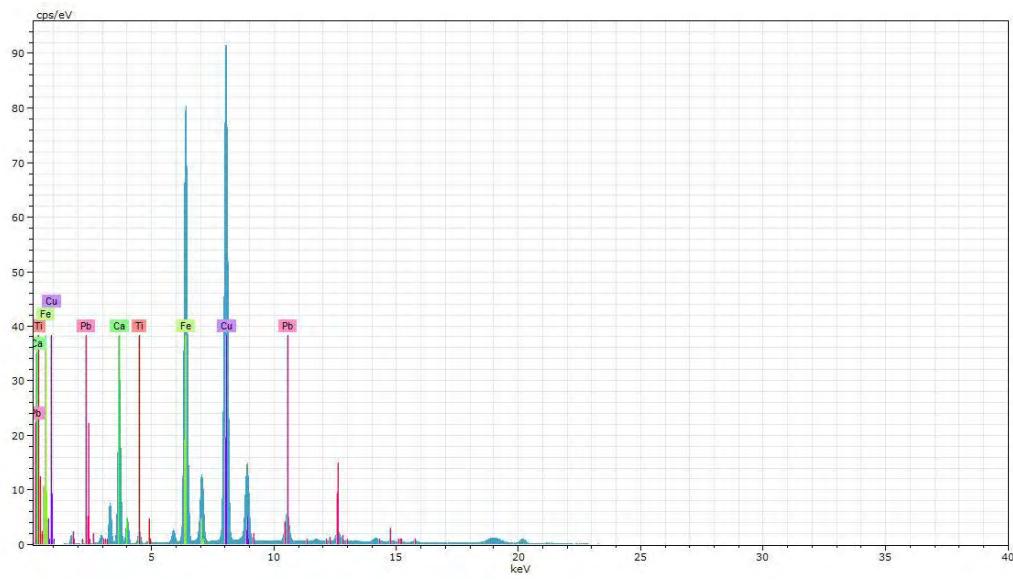
拡大写真



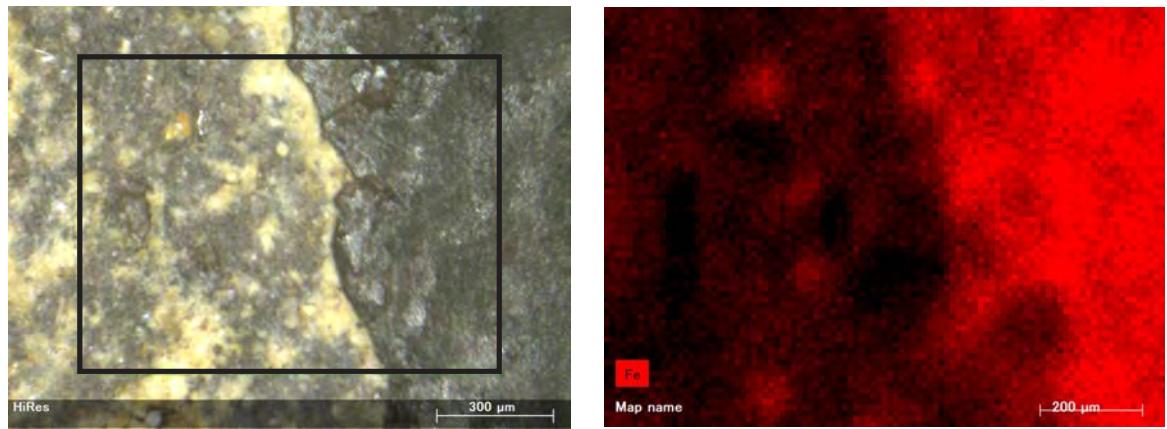
第2図 試料No. 1 蛍光X線スペクトル図



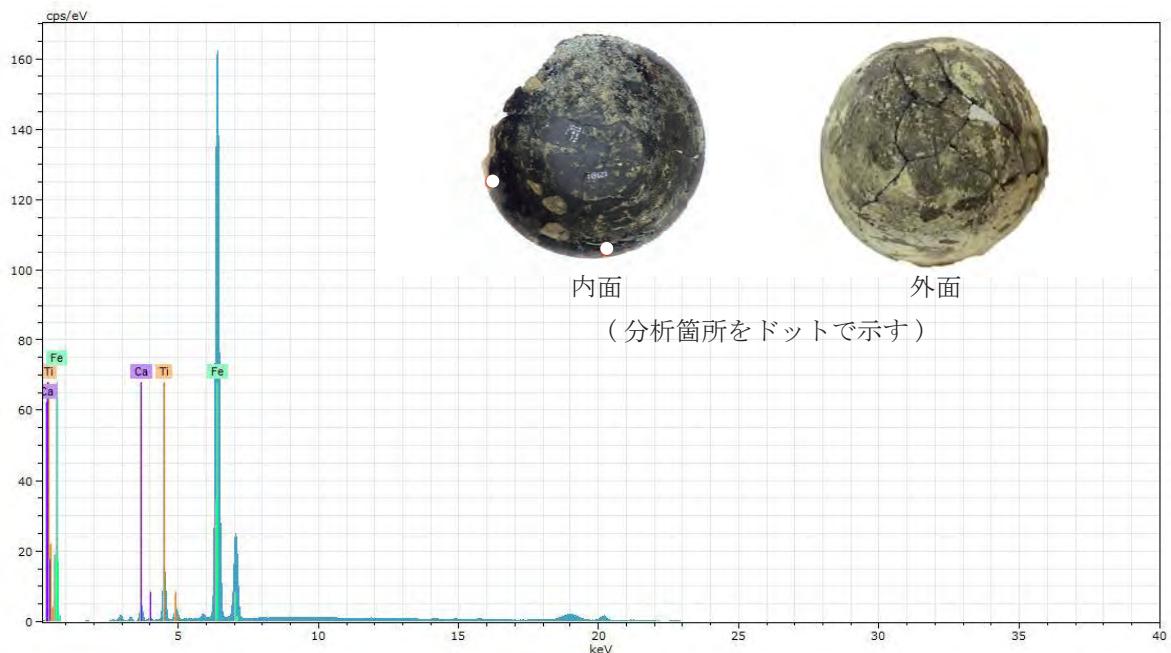
第3図 試料No. 2 蛍光X線スペクトル図



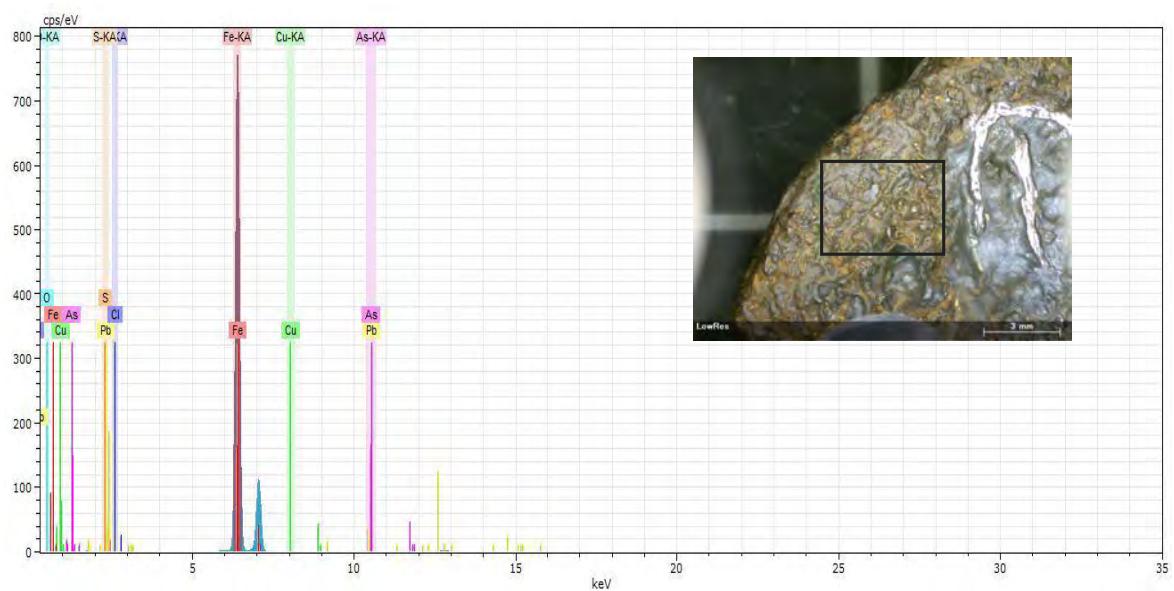
第4図 試料No. 3 蛍光X線スペクトル図



四角内がマッピング分析の範囲
第5図 試料No.4 マッピング画像



第6図 試料No.4 スペクトル図



第7図 試料No.5 蛍光X線スペクトル図